

史跡保存整備事業

史跡岡山城跡本丸中の段
発掘調査報告

1997年3月

岡山市教育委員会

『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』 正誤表

頁	行・位置	誤	正
21	29行目	西辺部の構造、	西辺部と判明、
49	第26図左上トーン注記	下部硬化部(灰褐色)	上層硬化部(灰褐色)
		下部硬化部(灰白色)	下層硬化部(灰白色)
108	第75図右上注記	大納戸櫓内造成土下地下	大納戸櫓内造成土地下
142	5行目	内側石組1	内側石組2
259	29行目	段石垣の東では	段石垣の西では
	31行目	西部は地盤	東部は地盤
265	4行目	走行	走向
270	15行目	岐阜教育委員会	岐阜市教育委員会
279	第182図注記	[追加]	第185図とほぼ同縮尺
280	第183図注記	[追加]	第185図とほぼ同縮尺
281	第184図注記	[追加]	第185図とほぼ同縮尺
		[追加]	名称は原図に準じる
283	第185図注記	名称は原図に準じる……	[削除]
285	30行目	貼り紙ほか	貼り紙後など
	32行目	造立と思えるが、	造立と思え、この頃の全国的な数寄屋造立ブームに呼応するが、
286	4行目	1920年代	1620年代
293	表注記	()は出土	V期以外の()は出土
		[追加]	V期の()は前掲番号の内訳説明。
304	23行目	大坂城3557が	大坂城3557と

カラー図版 1



1. 金箔おし軒瓦の組合せ



2. 金箔おし大形鳥衾



3. 各種の金箔おし瓦

カラー図版2



1 御城内御絵図（部分）
〔岡山大学池田家文庫蔵〕



2 上層出土の各種陶磁器

序

史跡岡山城跡は、東瀬戸内圏の中核都市として発展を続ける岡山市の礎であるとともに、岡山市の歴史的アイデンティティのシンボルでもあります。岡山城は、戦国乱世の余燐の残る天正18（1590）年に、豊臣秀吉の寵遇を受けて57万石余を領有していた宇喜多秀家が居城を築城したことに始まり、慶長2（1597）年の天守閣の竣工をもって完成をみました。つまり、本年は、宇喜多秀家の岡山城築城が完成してから400周年目の節目の年に当たり、市を挙げての記念行事が催されることになっています。

宇喜多秀家の築城後、城主は四家の交代をみており、江戸時代前期以降には岡山城は、岡山藩主池田家の治世の城府として明治維新を迎えるに至っています。岡山の町づくりの礎であり歴史的記念物の象徴である岡山城跡は、今日では鳥城公園として市民の安らぎと憩いの場となり、また観光地の中心施設の一つとなっていますが、明治維新以降の不断の近代社会への変貌に伴って、本丸と後楽園に当時の面影を残すだけとなっています。従って、史跡岡山城跡は、今日の我々の世代が守り、子孫達に伝えなければならない最小限の原点の姿と言って過言ではなく、これ以上の変質を許されないかけがえのない文化遺産であります。城跡を文化財として我々の世代が受け継いだ姿よりも、よりよい姿で後世に引き継いでいくことが、文化財行政を司る者の使命であり、責務と痛感しています。

史跡岡山城跡の史跡としての保存整備は、昭和62年に史跡指定がなされて以来の岡山市の課題であり、担当部局である教育委員会が取組み続けている施策であります。平成4年度に「史跡岡山城跡保存管理計画」の策定を図るとともに、国庫補助事業を受けて岡山城跡の歴史的景観の復元整備を実施する事前の発掘調査を実施する運びとなり、平成7年度までに本丸中の段全域の発掘調査を終えることができました。発掘調査で得られた成果を基に、中の段の歴史的環境の復元整備を実施する段階に至り、今後の取組みと致すところですが、その成果を報告書に取り纏めることができました。

こうした成果をあげることのできましたことは、文化庁と岡山県教育委員会のご支援や、発掘調査対策委員の先生方を始め関係者各位のご指導・ご助勢の賜物と存じ深謝申し上げます。殊に、調査の実施にご協力頂きました方々や関係機関、さらには発掘担当者に心から謝意を表する次第であります。

この報告書に纏めました調査成果については、ご検討・ご批判を頂き、今後の課題となる史跡岡山城跡保存整備事業に資するとともに、少しでも近世史の調査研究に寄与できますならば幸に存じます。

平成9年3月31日

岡山市教育委員会

教育長 戸村彰孝

例　言

1. 本書は、岡山市教育委員会が国庫補助事業として実施している史跡岡山城跡保存整備事業にかかり、平成4年度から7年度に行った発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査の対象地は、岡山市丸の内二丁目3-902、3-906、3-908、3-909の「史跡　岡山城跡」地内で、本丸中の段に相当する。
3. 発掘調査と報告書作成は、岡山市教育委員会社会教育部文化課が行い、現場実務は乗岡実が担当した。
4. 本書の編集は乗岡が行い、執筆は第Ⅰ章、第Ⅱ章第1節・第2節、第V章第7節を出宮徳尚が、第IV章第1節・第2節-1、第V章第4節を仲井光代が、第V章第6節を岡嶋隆司が、第Ⅱ章第3節、第Ⅲ章、第IV章第2節-2～7・第3～6節、第V章第1・2・3・5節を乗岡が行った。
また、付章第1節には村上隆氏（奈良国立文化財研究所）に依頼した漆喰の分析成果を、付章第2節には松井章氏（奈良国立文化財研究所）に依頼した魚骨・獸骨類の分析成果を掲載した。
5. 遺構の実測・写真撮影・浄写は乗岡が行った。遺物のうち、土器・陶磁器類については実測・浄写を仲井が行い、瓦をはじめとするその他については、実測・拓本を谷口光子・八木留利子・山元尚子・大西千鶴・安川満・乗岡が行った。遺物の写真撮影と土器・陶磁器類以外の浄写は主に安川が行った。なお、第Ⅰ章、第Ⅱ章、第V章、付章の図表類は原則として各執筆者が作成した。
6. この報告書に用いている高度値は標準海拔高度である。また、方位は磁北である。
7. この報告書にかかる出土遺物、実測図・写真などは、岡山市教育委員会にて保管している。



目 次

第 I 章	歴史的環境	
第 1 節	前史	1
第 2 節	岡山城の歴史	7
第 3 節	岡山城の城郭構造	9
第 II 章	調査経過	
第 1 節	調査に至る経過	13
第 2 節	調査の体制	16
第 3 節	発掘調査の方針と経過	18
第 III 章	遺構	
第 1 節	基本層序	23
第 2 節	近現代の遺構	27
第 3 節	上層遺構	29
第 4 節	下層遺構	101
第 5 節	最下層遺構	142
第 6 節	中の段の現役石垣	149
第 IV 章	遺物	
第 1 節	岡山城以前の遺物	152
第 2 節	土器・陶磁器類	154
第 3 節	瓦類	186
第 4 節	金属器・貝製品・石製品ほか	245
第 5 節	食物残滓類	253
第 6 節	旧制中学に伴う近代の遺物	254
第 V 章	調査成果の整理と展望	
第 1 節	郭の構造と変遷について	255
第 2 節	石垣について	271
第 3 節	上層期（第V期）の中の段	278
第 4 節	土師質土器皿について	287
第 5 節	瓦について	291
第 6 節	表書院での食生活について	305
第 7 節	歴史的環境復元整備に向けて	311
付 章		
第 1 節	岡山城の建物と庭に用いられた「漆喰」について	316
第 2 節	岡山城本丸中の段出土の動物遺存体	323

第Ⅰ章 歴史的環境

第1節 前 史

岡山藩の城府をなして今日の岡山市街地の礎となった岡山城と城下町は、寛永年間に完成をみたとはいえ、豊臣政権下で築城された城郭が幕藩体制下に踏襲されたもので、全国的にみて幕藩体制成立期前の近世城郭形成期の嚆矢の部類に入る大型城郭の一つである。岡山城の所在地は、岡山県南部に広がる沖積平野（広義の岡山平野）の中心部に位置し、単位的地形でみれば旭川下流沖積平野（狭義の岡山平野）の中央を占め、幕藩体制より前の行政区画でみれば備前国御野郡出石郷である。狭義の岡山平野は、中国地方の脊梁をなす中国山地に源を発して、岡山県の中央部を南下して児島湾に注ぐ旭川の河口に形成された広大な沖積平野で、江戸時代初期の生産高でみれば約65,000万の検地高があり、備前国の総生産高の22%を占めている。備前国での位置は、平野の西辺の丘陵から平地の内を西隣国の備中國との国境が通り、本土側の南西端を占め、国域全体からみれば南西に偏っている。従って、この平野でも右岸域の御野郡を占地する岡山城は、一国を一円的に統治する所謂国堅固の城としては南西端に偏った所在性にあり、事実備中國境までは直線距離で7km、西国街道沿いで8km（2里）しかない。現在の城地は、旭川が北側から東側の山下を流れ天然の外堀をなす地形となっているが、この流路は城地の邊か北東に隔たって蛇行していた自然河道を、岡山城の築城にあたって城地の山下際に開削したもので、戦術的治水事業の結果である。

狭義の岡山平野が備前国歴史的展開で重要性を担ったのは、何も岡山城の出現からではなく、有史以前からそうであった。旭川の冲積作用で形成され続けた河口域の平野とその背後や周辺の丘陵上には、旧石器時代から現在に至るまでの不断の遺跡形成が認められ、その形成状況は広義の岡山平野の内でも有数地の一つであり、右岸の御野郡域もそうである。狭義の岡山平野の内、律令制下で御野郡とされた旭川右岸域は、河口に連なる沖積平野と背後の丘陵から成立つ格好の自然地形面での単位的な小地域をなし、平野背後の山麓前面で縄文時代後期・晚期の種子食料貯蔵穴跡（岡山大学構内遺跡⁽¹⁾）や晩期末の水田遺構（津島江道遺跡⁽²⁾）が発見されている。この平野で本格的な生産活動の継承発展をみて、今日に繋がる遺跡の展開を示すのは弥生時代前期からで、津島遺跡はその代表例であり、中期に至ると南方遺跡が拠点遺跡としての展開を示し、後期に至ると津島遺跡や上伊福遺跡等の平野北部の拠点遺跡とともに、当時の平野南辺部に天瀬遺跡や鹿田遺跡等の臨海性の様相を示す遺跡も展開しており、一層の遺跡拡大と地形に即する様相との多様的な形成状況となっている。弥生時代後期の平野部における濃密な遺跡形成状況を反映して、背後の丘陵上には後期末の墳丘墓やそれとの系列的展開を示す複数の前方後方墳の形成をみている。

古墳時代前半期の平野部における拠点遺跡は、前代のそれほどには判明していないが、当然に継承発展的な展開を遂げていたと推断でき、また、背後の丘陵上の前方後円墳や前方後方墳の形成状況もそのことを物語っている。御野郡域に伴う前半期古墳は、10基の前方後円墳・前方後方墳を始めとして総数38基が確認されており、前方後円墳・前方後方墳の大部分が小型の規模観であるが、前II期末

の神宮寺山古墳は全長150mで、全くの沖積地に立地し、全国レベルの内容と規模を達成していると評価される。御野郡域における弥生時代後期から古墳時代前半期までの遺跡の形成と展開の状況は、この時期の広義の岡山平野の中心地の一つの単位的地域に挙げることができ、所謂吉備国の中核地を構成していたと考えられている。古墳時代後半期に至る前時期までの遺跡形成状況が一変し、この平野に直接的な共伴性を示す横穴式石室墳が全く確認されていない。この郡域における横穴式石室墳の形成状況は、背後の丘陵の旭川に沿った山間部での小古墳群の散発的な築造と、南西縁辺の小山塊での当時の海浜（干潟）に臨む小型群集墳や小古墳群の散発的な築造が確認されているだけであり、巨石墳は無論のこと大型横穴式石室墳や大型古墳群さらには本格的な群集墳を欠き、広義の岡山平野の内で後に郡域の設定をみた単位的小地域において、平野との共伴性を示す本格的な横穴式石室墳の形成と展開を欠く唯一の小地域といえる。

御野郡域における古墳時代後期に至っての遺跡形成の前段に較べて極端な落差は、白鳳時代から奈良時代にかけても同様であり、在地豪族層の自生を示す地方寺院（所謂氏寺）の遺跡が郡内では全く確認されていない。旭川下流右岸域が地形上の恰好の単位性をもって「御野郡」の設定をみた時期に、単位的小地域としての在地的主体性を反映する時代的表徴性の遺跡を、その前時期から完全に欠くという異常な状況を呈している。御野郡は、郡の設定をみた頃には東西6.5km・南北12km（想定海岸線迄）の、旭川に沿って南北に延びた領域であり、郡としての広さが周辺の他の郡に較べて狭隘であるが、郡域の三分の二程を沖積平野が占め、枚（牧）石・御（三）野・津島・弘西・出石・伊福の6郷よりなり立ち、構成する郷数からみれば他の郡に遜色ない。白鳳時代から奈良時代にかけての御野郡域における遺跡の形成状況は、時代的表徴遺跡を欠き、郡衙所在地も不明であるが、6郷の設置からみて農業生産地としては安定しており、古墳時代前半期以前と同様な繼承的発展を遂げていたことは確実であり、吉備国の中核地の郡としては異常状況の背後に、古墳時代後半期から奈良時代にかけて在地勢力（自生の氏族）の辿った政治的動静が示されていよう。一方、氏寺ということから宗教面でみれば、所謂式内社がこの郡域には8社8座と異常ともいえる集中性を示しており、吉備国南部中心域の他の郡では類例をみない集中性である。式内社が氏寺の時期まで遡及するか否かの問題があるものの、御野郡域での氏寺と式内社の所在状況は、反比例的な好対照をなし、後者は律令体制による在地の伝統的祭祀権の直接掌握と理解すれば、旭川下流右岸域の単位的小地域が律令体制に組込まれる過程で、在地勢力の置かれた政治的状況も窺い知れよう。また、御野郡は、郡名が三野臣国造と同一訓読のことから、所謂吉備氏一族とされて国造層から郡司層に転化した三野臣氏の本貫地とみる向きが通説となっているが、この郡域には国造層及び郡司層の自生を示す時代的表徴遺跡を欠いているので、語呂合せだけで三野臣氏の本貫地に比定することは妥当性を欠く。三野臣氏の自生地ではなく、中央政権の支配力が直接に及んでいた単位的小地域と理解するのが妥当であろう。

奈良時代後半にはこの郡域の南西縁辺部（干潟地）に都の大安寺の長江葦原や中央官人層の系脈に繋がる丹比真人墾田の自墾地系莊園が早くも開発されており、さらに平安時代初期には藤原氏の殿下渡領の莊園となっていた鹿田莊も、この時期に南縁辺部の河口の背後一帯に開発をみていたと推測できる。御野郡では墾田永代私有令施行後の早い時点で、郷域（公領）の縁辺部の干潟地帯における新開地が中央の權門勢家の手により積極的に開発されていたと考えられる。こうしたことでも、この郡域を基盤とする在地勢力の自立的活動を止揚し、律令体制を形成した畿内中央勢力による地域支配の貫徹を物語っているのではなかろうか。

平安時代に入ってからもこの時代を表徵する遺跡の形成は、御野郡の平野域では確認されていないが、国衙領域が安定した農業生産の継承的発展を遂げていたと見做せ、その一方で、平野背後の丘陵上には山上寺院の形成と展開が認められる。この郡域の山上寺院は、中世への発展的継承を遂げており、その一つである金山寺は、平安時代後半から中世前半にかけて備前国南部の仏教界における地方的中核（所謂根本道場）となり、現在まで継続している。御野郡域における山上寺院の展開は、氏寺の達成を図れなかった地域で、氏寺の衰退期に符合して本格的な造寺と宗教の活動をなすもので、この郡域の歴史的動静を反映する現象と指摘できるが、その実態の要因の検討にまでは及んでいない。一方、公領縁辺部の莊園經營は大幅に拡大していき、この時代の後葉には郡域の海浜部一帯に、一郷を凌ぐ莊域に成長した鹿田荘を始め、新堤保・円覚寺荘・野田保・西野田保・市久保・大安寺荘等が公領を取囲む状態で展開しており、旧来地と新開地が地勢的に明瞭に分離している。こうした莊園の拡大的な展開状況の内で、鹿田荘では国司と庄司との紛争や国司側による掠奪事件も発生しており、莊園の生産活動が国司側に目を付けられるだけの成果を挙げていたことを物語っている。

古代を通して御野郡に関わる最大の歴史的問題点は、備前国の大府所在の記録の残ることである。備前國府の所在地は、御野郡の旭川を隔てた東隣りの上道郡國府市場村（江戸時代）を中心とする一帯に想定をみているが、和名類聚鈔には備前國府を「國府在御野郡」と明記しており、現実の國府関連地名継承地とこの記録では郡を異にしている。御野郡内で國府関連地名を抽出するのが困難な実情にあり、さらにそうした大規模な官衙関係の遺跡も未発見である。その解決は発掘調査で國府の遺構遺物を検出する以外にはないが、上道郡内で國府遺構が検証されたとしても、和名類聚鈔の記録の要因は課題として残るであろう。また、古代山陽道は、御野郡域の北東部の旭川沿いを南下し、平野背後の丘陵山麓を西に進み、峠越えて西隣の津高郡に通じる経路が通説となっている。御野郡は山陽道の経由地であるが、駅家の設置がなく、その設置には里程の要素もあるが、備前國に限ってみれば山陽道の通過する郡で駅家の設置がないのはこの郡だけである。

平安時代末期から鎌倉時代に至る変動期に、御野郡自身ではその時代的動向に沿った事態の展開がみられず、山陽道沿いの郡域北西端で、備中国南東部に勢力を持った平家の御家人と木曾義仲軍との一過性の戦闘があった程度である。鎌倉時代の初期に東大寺再興の任に就いた重源は、備前國を造営料の知行国に与えられて下向し、国城にその施策や治績の跡を多く残しており、西隣の津高郡には常行堂を、東隣りの上道郡には大湯屋（施薬所）を設置しているが、御野郡では野田保を東大寺の莊園としたことが知れているものの、施設の設置には及んでいない。

鎌倉時代の御野郡の動向は、公領・莊園とも史料的に詳しく述べられないが、一つの動きは金山寺の経済活動への進出で、この時代の初期には将軍家御祈禱所となっており、この時代を通して郷域の田畠の寄進あるいは購入による取得を盛んに行い、この郡域における一大土地領有者に成長している。また、郡内の在地武士層の動向も史料にみられるようになり、後の戦国時代に小規模な国人層に成長した須々木（丹治）氏はその代表例である。

鎌倉時代末期から南北朝争乱期には御野郡出自の武士の活動が史書に残るとともに、郡内でも局地的な戦闘が展開されている。鎌倉幕府の追討に軍功を挙げた相模国の在地武士の松田氏は、その功績で御野郡伊福郷の地頭職を得て移住して来ており、室町幕府の成立期には備前國守護職を務め、守護職を免ぜられた後も代々に亘って御野郡域から津高郡域を蚕食していき、やがて有力国人となって津高郡金川に居城を構えて備前國西部を傘下に收め、守護代的立場を経た後に小戦国大名にまで成長す

る。ちなみに、松田氏家伝⁽³⁾によれば、御野郡西端の要衝の地である矢坂山に富山城を築いたのは、移住してきて備前松田氏初代となった松田元国のことである。また、鹿田荘の名主層から在地武士層に転化していた多田氏（頼貞）は、南朝方に与して鹿田荘の一画で北朝方の赤松氏勢と小競合を演じた末に敗死している。一方、この時期に京都妙顯寺の僧妙実（大覚）が備前國から備中国にかけて日蓮法華宗の布教活動を行い、松田氏や多田氏を始め在地武士層の帰依を受け、やがてこの宗派は後に備前法華といわれるようになるまでにこの地方で受容され、御野郡も中心地の一地域となった。

室町時代の14世紀後葉以降は東隣国の播磨国西部を本拠地とする赤松氏が、代々に亘って備前國守護職を保持して領国支配体制を整えていき、松田氏はその麾下で居城の金川城と支城の富山城を拠点にして御野郡域と津高郡域の掌握を図って、この地域の在地小領主（地侍）層を傘下に収めて実質的な領団形成を図っていった。鹿田荘は、この頃も藤原（関白）氏の殿下渡領として存続はしていたが、松田氏の勢力下に組込まれて蚕食を蒙り、荘内の武士層の在地小領主化が進行していった。鎌倉時代から室町時代前期の御野郡における荘園經營の状況は、平安時代後葉以来の郷域と荘園域の地域区分状態がそのまま踏襲されており、近隣の他郡にみられる公領を押領しての立荘が及んでいない。このことは、律令体制によるこの郡の土地支配が強固なことを物語り、公領・荘園領を問わず、生産地に対する在地勢力の潜在的主権の主張が、中央の権力に止揚されていたと考えられ、御野郡での地頭職の設置と関東武士の入部が確実なのは松田氏だけで、武家政権の侵入を阻んだ状況といえよう。

嘉吉の乱（1441）により赤松氏が滅亡すると、備前國守護職は山名氏が掌中に收め、同氏の代官が上道郡東部の福岡荘の一画に守護所を構えて領国支配に当たっていたが、応仁の乱の勃発に伴って先年に再興を許されていた赤松氏（政則）が細川氏陣営に与して備前國守護職に復帰し、応仁元（1467）年に備前國の再掌握を果した。この際に、山名氏の代官の籠城する福岡城で合戦となり、赤松氏は在地武士層の従属を得て福岡城を攻略し、松田氏も赤松氏方の部将として出陣しており、また鹿田氏一族が反山名氏の武力蜂起をした。この鹿田氏は鹿田荘内の地侍と解釈されている。松田氏は、この後赤松氏の被官となって備前國西部を実質的に支配して守護代の職責を果すようになり、旭川中流から下流以西一帯（旧赤坂郡と上道郡の西半）に勢力圏の拡大を図った。この結果、備前國の実効支配を巡って有力国人対守護職との角逐が顕在化し、文明15（1483）年に赤松氏の守護代の浦上氏が守護方の軍勢を守護所の福岡城に集結させて松田氏の押圧をなしたが、松田氏はこれに対抗して備中國の国人衆や備後國守護職山名氏の支援を受けて逆に福岡城を攻めた。この福岡合戦は、赤松氏と浦上氏が本拠地の播磨国で反目する事態となつたため、守護方が分裂して落城したが、松田氏（当主）も深追して討死にし、曖昧な状態で終息した。この合戦の実態は、守護職に対する有力国人の下剋上と誘発された守護代の下剋上であり、結果として守護職の権限が拝式され、在地の実質的統治者である守護代段階が実効支配権を確立したもので、以後、浦上氏が備前國の東半（吉井川水系）を、松田氏が西半（旭川水系）を支配する二極体制となつた。両者は各々の掌握地の領國化を図って戦国大名へと成長し、備前國はこの合戦以降に戦国時代へと転換した。また、鹿田荘はこの合戦の前までは藤原氏の殿下渡領として存続していたことが史料的に認められるが⁽⁴⁾、以後は史料を欠き、名実ともに松田氏の領國の一画に併合されたものであろう。

戦国時代前半の備前國の西部は、小型戦国大名の松田氏の領國形成に基づいて展開し、御野郡では北部の旭川沿いの山間部に小振りの国人層の須々木氏、平野北部に在地小領主の金萬（馬）氏、南東部に小振りの国人層の金光氏、西部に松田氏の家臣化した中村氏、南西部に在地小領主の中島氏や前



第1図 御野郡行政区画及び城跡等分布図

田氏や能勢氏等々が割拠状態で在地経営に当たっており、各自が自己の裁量に見合った城砦や居館を構えた。松田氏の領国支配下に置かれたとはいえ、旭川下流右岸という地形的単位性に恵まれながらもこの郡域自生の国人層が成育しておらず、この状況は律令体制以来の在地勢力止揚の支配形態が潜在的に引継がれていたとも解釈されよう。こうした状況の内、金光氏は、出石郷から鹿田荘の大半を押領して小振りの国人層の城に達していたと評価でき、江戸時代の地誌類⁽⁶⁾によれば、松田氏に従属した金光備前が大永年間（1521～27）に出石郷に所在する小山の石山に城砦を構えたとのことであり、岡山城の起源となる城郭がこの頃に所謂城堅固の城程度の規模で出現していたと推測される。この伝承が岡山城の起源の通説となっているが、金光備前の築城伝承とは別に、松田氏家伝によれば備前松田氏第6代当主の次男の松田元斎が応仁元（1467）年に岡山城に移り住むとの記載⁽⁶⁾があり、松田氏が富山城を拠点にして出石郷から鹿田荘を蚕食する過程で、出石郷の石山か岡山に戦術拠点の出城的城砦を構えて一族の者が居住した可能性もある。家伝の松田元斎の記録自体は信憑性を欠くが、応仁元年末の京都相国寺合戦で細川氏方の部将として松田元斎の討死が史料的に定かである⁽⁷⁾ので、応仁元年の赤松勢の福岡城攻めに際して松田元斎の参陣→赤松勢の勝利に伴う松田氏の御野郡支配の安堵→松田氏一族の元斎の出石郷における築城と移住→守護職赤松氏を介しての元斎の細川氏方への加勢出陣と討死、という動静の再構成も可能である。また、家伝では元斎の妹が金光備中の室と記載しているので、元斎と金光備中とは義理の兄弟となり、石山の城の築城伝承を持つ金光備前と元斎が極めて近い関係となるので、石山の城を築城しても無く討死にした元斎の後を繼いで義弟の金光備前が城主になって長年に亘って居城としたため、金光備前に石山の城の築城伝承が仮託された可能性を指摘できる。従って、松田元斎の石山の城築城觀は可能性が高いといえる。

備前国での戦国時代後半の指標は、後に松田氏と浦上氏を倒して備前国を統一した宇喜多直家の領国形成の開始期に求めるのが妥当であろう。直家は、備前国邑久郡の千町平野の有力在地小領主の家系に生まれたが、父の代に没落して流浪の幼少期の後に15才で、当時備前国の大半を掌握していた戦国大名の浦上宗景に仕官し、やがて頭角を現して有力武将に成長した後に、上道郡中央部を本拠地にして宗景に従属する国人であって直家の舅となっていた中山正信を、永禄2（1559）年にその居城の亀山城で寝首を掻いて領地と居城を奪い、以後、亀山城を居城にして自立化を図って周辺の松田氏や主君の領国を積極的に侵攻していった。新興勢力として領地の拡大を図っていった直家は、備中国で戦国大名への成長過程にあった三村氏が、永禄10（1567）年に打倒直家を掲げて攻め込んで来たものを迎撃って完勝（明禅寺合戦）して、備前国南西部の禦権を確立し、その翌年に姻戚関係を結んでいた松田氏を滅亡させ、備前国西半を領国とする戦国大名に成長した。直家の領国支配は、従来の戦国大名達が在地の直接掌握者である小領主層や国人層の従属に基づく間接的な支配体質であったものを攻略地には直臣を宛がって直接的な在地支配を図って旧来からの在地勢力を解体しており、明禅寺合戦の後に従属した狭義の岡山平野の在地小領主や小振りの国人層の大半を、没収闕所にして居城の城割りを行うとともに彼等を直轄家臣團の内に組込んでいった。松田氏を滅亡させた後、富山城を直轄の支城にして御野郡域の直接的な支配体質の貫徹を図った。

こうした情勢の下で、金光備前の子の宗高は小振りの国人層としての命脈を保ち、石山の城を居城にして直家に従属していたが、直家は元亀元（1570）年に宗高を謀殺して領地と居城を接収し、石山の城を大改築して居城にし、天正元（1573）年に入城して狭義の岡山平野への進出を遂げた。以後、直家は、石山の城（前岡山城）を居城にして狭義の岡山平野を本拠地とし、備前国の一国支配を志向

して、天正5（1577）年には旧主君の浦上宗景を攻め滅ぼし、翌々年には従属していた最後の有力国人の伊賀氏をも肅清して、領国の一元的支配統治体制を完遂させ、名実ともに備前國の霸者となった。この時期の直家の領国は、備前國の外に美作國南部と播磨國西辺に及んでおり、40万石前後の知行高となり、狭義の岡山平野では富山城を除いて城割りが行われている。

第2節 岡山城の歴史

現在の岡山城跡に系譜的に繋がり起源となる城郭は、御野郡出石郷の東部に三つ並んだ標高十数mの小山の中央の石山に築かれた城砦で、南北朝期の築城伝承や、松田氏一族が応仁元（1467）年に築城した可能性を指摘できるが、史料面で定かでない。通説は江戸時代の地誌の記述する大永年間に金光備前が築いた城砦を原起とし、この城砦は、近世岡山城の築城に際して二の丸内屋敷の郭が繩張られて知る由もないが、石山の山麓に構えられていた居館の背後の頂部一帯に築かれた逃げ込み用の有事籠城型の城郭で、城名が石山城であったのか岡山城であったのか判然としない。その子の金光宗高も石山の城を引継いで居城としているが、この時期は当方でも本格的な戦国乱世の様相に至っているので、頂部一帯の逃げ込み城も恒久的な城郭施設の整備が図られていたと推定される。

宇喜多直家が天正元年に入城した石山の城は、足掛け2年の歳月を費やして金光宗高の時の城郭を取り壊して築城した、戦国大名の居城にふさわしい大城郭であり、現在旧本丸跡と伝えられる石山東端の山頂を本丸にして、丘陵の頂部から山腹及び山麓の一帯に幅広に拡張した郭を構えた山城と推定される。直家の居城の名称が石山城であったか岡山城であったかは史料的には不明であるが、後世の史書や地誌類の大多数が岡山城としているので、通説的に岡山城としておく。この岡山城は、近世岡山城の二の丸内屋敷の郭に埋没して繩張りや城郭構造が判然としないが、龜山城跡の繩張りや富山城跡の発掘調査の知見⁽⁸⁾から、東西に延びた丘陵の東部の山頂に設けた本丸を中心にして、尾根筋に従って西へ大手曲輪・二の丸、東側面に三の丸の中心郭を構え、その周辺に付属の郭を配した連郭式の繩張りが想定される。城郭構造は地形部分が石垣築城であり、上部施設が土蔵造りの建物と土塀による近世城郭建築物と同様な状態にあり、居館（御殿）も中心郭内に伴っていたと推定されるが、本格的な天守を備えていたかどうかは不明である。また、山麓一帯に家臣団の屋敷や商人・職人の家屋を集めた本格的な城下町をも伴っており、その一部が建設工事に伴う発掘調査で検出されており⁽⁹⁾、この城下町は今日の市街地の礎をなすものである。石山の東隣りの岡山は、金光氏の時代には城郭外で南山麓から地続きの平地一帯に岡山寺、蓮昌寺の古刹や三社明神の社が所在していたが、直家の岡山城整備に伴って移転させられて出丸等の外郭に組込まれている。いずれにしても、直家の居城の築城により、近世岡山城の原形が構築されたものであり、この居城の城地の選定は難攻不落の峻険な山上立地を避け、沖積平野の真只中の低丘陵に名ばかりの山城立地をなすもので、戦術・戦略の要因よりも領国統治の政治的・経済的な要因を反映しており、近世城郭の占地要因の系譜に繋がるものである。さらに、知行地を与えた有力家臣の城下への常駐や中世西国街（山陽）道が城下を通過するようにした路線変更と商人職人町の設置など、城下町形成の施策にも領主への中央集権化が示されており、戦国大名とはいえ直家の政治的体質の先進性が窺える。

直家の息子の宇喜多秀家は、幼少で直家の跡目を継ぎ、天正10（1582）年に中国の役で備中國東部に出陣した羽柴（後の豊臣）秀吉の寵臣となり、秀吉の全国制覇に従い、秀吉が天下を制すると備前

国・美作国・備中国東半を領国にして57万4千石を知行する大身となり、後に豊臣家五大老の一人となった。領国の拡張に伴って直家の築城した岡山城（以下旧岡山城）では手狭になり、秀吉の国内統一が一段落した天正18（1590）年に、天守を中心とした近世城郭の築城に着手し、途中に文様の役による中断を含めて8年の歳月を費して、慶長2（1597）年に竣工をみた。秀家の築城した岡山城は、基本的には現存する岡山城跡そのものであり、旧岡山城の本丸の東の岡山に新たに本丸を設け、直家時代の本丸及び中心郭群から岡山の南側を二の丸内屋敷の郭として、その南に広大な二の丸を配し、二の丸の北西から西側及び南側を三の曲輪が取り囲む縄張りである。城地の北側から東側は、旭川の川筋を石山の北山麓から岡山の北及び東の山麓を迂回して南に流れるように付け替え、この大川を自然の外堀としている。秀家の築城に当っては、秀吉の指導の下に設計施工がされたと伝えられている。城郭配置は、旧岡山城の大手筋が西向きであったのを、二の丸南側に大手門を構えて南向きの大手筋とし、三の曲輪を町屋域とし、西国街道が町屋域を通過するように道筋を改め、城下町を交通や経済活動の要にしている。秀家の造った城下町は今日の市街地の祖形をなしている。

慶長5（1600）年の関ヶ原の合戦で宇喜多秀家は西軍の統帥を務めて敗没し、代って小早川秀秋が備前・美作二箇国を領有して岡山城主となった。小早川秀秋は、領国内の城割りと居城の整備に努め、岡山城の整備と拡充にあたっては廃城とした城の建築資材を活用しており、本丸中の段南西角の三層の大納戸櫓は亀山城の天守（中心橹？）を、二の丸屋敷の郭の南西部（旧岡山城大手筋）を堅める渡櫓門の石山門（戦災で焼失）は富山城の大手門を、各々移築したものと伝えられている。秀秋の城普請は城下町の拡張にも及び、三の曲輪の外堀の外側に三の外曲輪を増設し、その外側に新たに外堀を掘削して城域の確定と西側外郭の防備の強化を図っている。新設の外堀は掘削工事に領内の労働者だけでなく、家臣をも使った大動員による実質工事であり、僅か20日間で完成したために二十日堀と呼ばれ、その埋め残しが昭和初年まで残存していた。

慶長7（1602）年に小早川秀秋が在城僅か2年にして病死し、継嗣がいなかったためお家断絶となり、翌年に姫路城主の池田輝政の五男の忠雄が備前国一箇国を知行して岡山城主となった。しかし、池田忠雄は幼少だったので、兄の池田利隆が忠雄に代って岡山城に赴き、領国の治世を代行して池田家による岡山藩政の創設者となり、居城の改築と整備にも努めている。利隆の施工した城郭改修の主要箇所は、二の丸内屋敷の郭の西部を占める西の丸の一帯で、石垣の再構築や隅櫓の増設を図って防禦施設の強化策を実施した。現存する西丸西手櫓は利隆の城普請によるものである。慶長19（1614）年に池田忠雄が藩主として在城し、治世を始めたが、翌年に17才で夭折したため、忠雄の実弟忠雄が岡山藩主となった。

池田忠雄は、藩政の確立や治世の充実に努めるとともに城府の整備に果敢に取組み、城郭全城の増改築を実施して岡山城を近世城郭として完成させた。忠雄の城普請は、本丸では中の段を北西に拡張して三棟の櫓を増設し、搦手方向の防禦力の強化を図っており、この時に建築されて現存する北西隅櫓の月見櫓と両側の石垣上端部には石狭間が設置しており、この拡張箇所が城郭内で最も進んだ防禦施設の施された所である。また、二の丸では、従来の大手門が石垣を仕切って城門を構えただけの開放式の単純な構造であったのを、外側に高麗門を構えたうえに内側に新たに石垣築成の樹形を設け、樹形の東（城内）側に渡櫓門を備えた二重構えの樹形式の堅固城門構造に改造し、近世城郭に即した大手筋の構えとした。

寛永9（1632）年に忠雄が江戸の藩邸で急死し、長男の光仲が跡目を継いだが、幕府は鳥取藩主池

田光政（光仲と従兄弟関係）との国替えを行い、この年に光政が備前国と備中国の一部で31万5千石を知行して岡山藩主となった。光政が岡山城主となった頃以降は幕府の諸大名、特に外様大名に対する統制が厳しくなり、殊に城普請に関しては厳重を極めたため、光政以降の岡山城は軍事施設面の繩張りの改造や城郭施設の増改築が一切行なわれず、明治維新に至っている。しかし、城主の生活の場である御殿や政務を執る政府である表書院等の、非軍事施設の建物は増改築が施工されている。

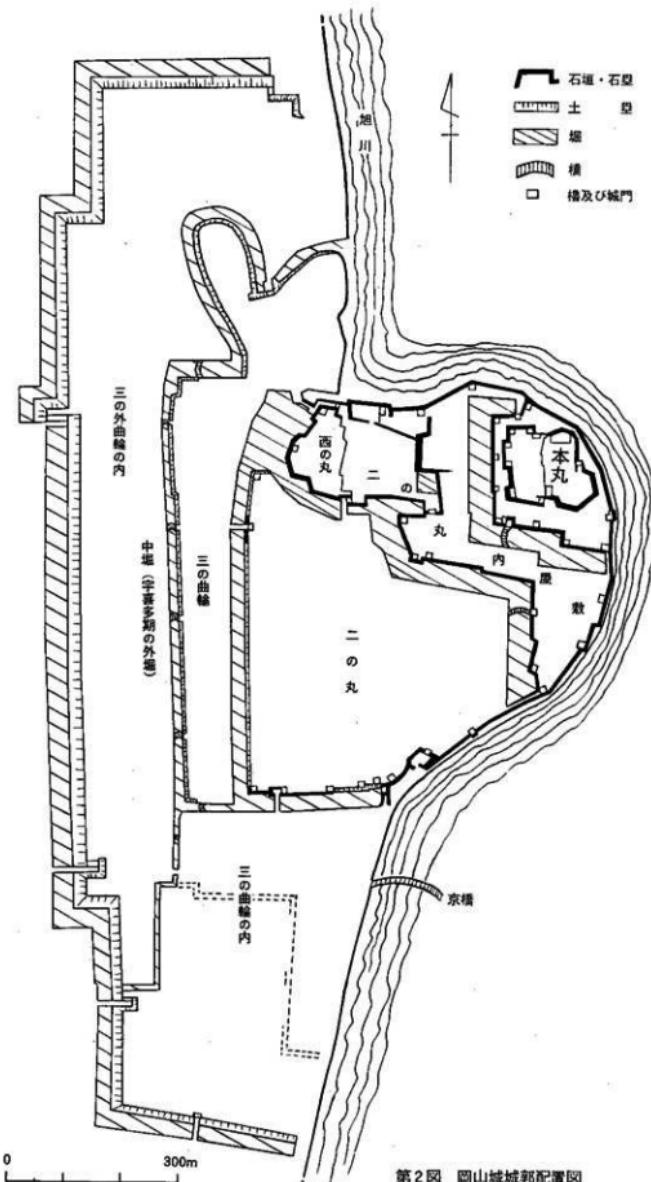
明治維新に伴って時の岡山藩主池田章政は、明治2（1869）年に版籍奉還を行い、岡山城の二の丸より内側は国有化されて兵部省（後に陸軍省）の所管となり、明治15（1882）年までに天守（塙蔵付き）・月見櫓・西丸西手櫓・石山門を除く城郭建築物が廃棄されてしまった。明治16（1883）年には西の丸に岡山県の医学校が建設され、明治十年代の末からは外堀や中堀の埋立て土地造成もなされ、明治23（1890）年に二の丸跡より内部が旧藩主の池田家に払い下げられ、明治29（1896）年には天守や月見櫓（池田家所有）を除く本丸の大部分が池田家所有地のままで県立岡山中学校用地となり、岡山城の姿はほとんどなくなってしまった。その後、二の丸一帯は岡山県病院や県立商業学校等の用地や一般住宅地となり、明治30年代から大正初年にかけて中堀の埋立て土地造成が施策的に実施され、岡山城跡は昭和初期には上記の4棟の建物と内堀を残すだけとなってしまった。

昭和20年6月の岡山大空襲により、天守と石山門が焼失し、岡山城の城郭建築物は月見櫓と西丸西手櫓を残すのみとなり、また、昭和9年の岡山大洪水に伴う河川改修により二の丸内屋敷の郭の北側（旭川沿）一帯の城郭石垣遺構及び内堀北端の形状が失われた。昭和23年に岡山市が池田家から本丸内用地の譲渡を受け、本丸内に所在した岡山県立岡山第一中学校（後に岡山県立岡山朝日高等学校）が昭和29年に移転し、以後、岡山市の鳥城公園として催事場などにも使用され、昭和35年4月からは都市公園として本格的な整備がなされ、昭和39年から3箇年をかけて天守と不明門・廊下門・六十一雁木上門及び本段周囲の土壠等が現代の資材と工法で復元されている。

第3節 岡山城の城郭構造

寛永年間（1630年代）に完成をみた岡山城は、城地の北東隅の本丸を中心にして内堀で隔てられた2つの郭から成り立っている二の丸、内堀で区切られた南北2つの郭からなる三の曲輪、その西外側の單一郭の三の外曲輪と、6つの郭群で構成されている。城郭の立地は、本丸生活面が海拔20m（比高15m）と低いことから江戸時代には平城と見做されていたが、「岡山」という小山に立地したとする伝承や現在の天守再建に際してのボーリング調査の結果、天守の位置を山頂とする小山塊が確認されていること、さらに、二の丸内屋敷の西の郭が石山の小山塊を占地していることなどのことから、低いながらも平山城と評価するのが今日の見解である。城郭の繩張りは、本丸を中心にして、二の丸・三の曲輪（所謂三の丸）・三の外曲輪（所謂惣構え）が南西の一方方向だけに拡張する配置構成であり、まさに梯郭式の典型をなしている。

本丸は、本段、その西の中（表書院）の段、これらの南から西を中心に周囲を取り囲む下の段と、平山城特有の二三の段の三段構えで構成され、各段とも總石垣で築城されており、面積が41,000 m²である。本丸の北端に近世城郭の象徴である天守が聳え立つ。この天守は、三重六階の建物で、外壁の大部分に黒塗りの下見板を張り巡らせていたため外観が屋根瓦と相俟って黒ずんで見え、鳥城と呼ばれた。天守の構造とたたずまいは、古式の天守の建築様相を伝え、城郭史の面からも注目されていた



第2図 岡山城城郭配置図

が、昭和20（1945）年のアメリカ空軍の空襲で焼失した。本段には櫓の付随した天守を始め、櫓3棟・多門櫓2棟・櫓門2棟・平門1棟・御殿（居館＝城主の居間・屋敷・寝所・仏間・長局・女中部屋・台所・番所等）、小庭園、多門長屋、下男部屋、蔵の建物が林立していた。また、中の段には櫓5棟・多門櫓3棟・櫓門2棟を始め、表書院の殿舎群（行政所＝執務部屋・小御殿の招雲閣・座敷・数寄屋・台所・湯殿・便所・式台・番所等）、小庭園、平門1棟が林立していた。下の段には櫓10棟・多門櫓3棟・櫓門2棟・長屋門1棟・花畠殿舎・多門屋敷・番所・金蔵・鉄砲蔵・土蔵・厩・平門が立ち並んでいた。本丸の正面入口は下の段南面西側の内下馬門であり、裏筋が下の段北面西側の馬場口である。

二の丸は、本丸と内堀で隔てられて南から西手に鉤手状に東西細長く延びる内屋敷郭と、その南外側に二段目の内堀を隔てて方形の広い郭から構成されており、内堀を含む面積が約274,000m²である。内屋敷の郭は本丸の外側を固める帶曲輪にあたり、前掲の旧石山の城の西の郭と本丸南側の東の郭の二区画に区分されており、櫓11棟・櫓門4棟・平門1棟のほか隠居所や祖廟や殿舎と家老クラスの屋敷があり、外側面を石垣で築成している。二の丸の南郭は櫓7棟・櫓門3棟・平門1棟をはじめ評定所・勘定所等の役所や家老クラスや重臣達の屋敷等の建物が整然と区画されて家中屋敷をなし、南側西手に樹形門構造の大手門を構え、外側面の東側（旭川護岸）と南側が石垣築成であるものの西側の内堀法面が土居築成となっている。

三の曲輪は、内屋敷の西の郭の北西から南に延びて二の丸南の郭を「L」状に取り囲む三段目の内堀を隔てた外側の、西側の南北に細長い郭と、南側の方形の広い郭で構成されており、内堀を含む面積が約278,000m²である。この曲輪は町人町にあてられており、東側の京橋御門と南側の郭の外堀沿に設けられた平門2棟と木戸9棟の外には櫓や土塹等の城郭施設を欠き、外周側面が土塁築成だけであり、外側を宇喜多直家時代に外堀であった中堀が取り囲んでいるが、南側で外堀と一体となっている。西国街道は三の曲輪を通過している。

三の曲輪の西外側に四段目の中堀門を隔てて、南北に細長い鉤形の平面形をした三の外曲輪が広がり、中堀を含む面積が約815,000m²あり、この曲輪の外側の堀が外堀となって城域を区画している。三の外曲輪は、内郭寄りに町人町域を設け、周辺部に下級武士の屋敷を配置した典型的な城下町外周郭の構成をなし、二箇所の樹形構造の城門を含む平門3棟が設けられている程度で、外周側面が土塁築成であって、城域の外周部分としては城郭施設の整備や配備に欠けている。

岡山城の城郭構成を繩張りと城郭施設とを勘案してみると、武家方領分の二の丸から内側が石垣と土塁で堅めた外郭施設の要所要所に隅櫓と櫓門を配置して、厳重な防禦の軍事施設を構えているが、町人方領の三の曲輪から外側は外周を土塁と堀で区画する程度の、単純な防禦施設の整備で済ませている。こうした城郭軍事施設の配備状態は、岡山城にとっての絶対的な防禦ラインと二次的な防禦ラインとの二段構えの防禦施設を示し、武家社会の構造的本質を如実に示している。

外堀の外沿いには有事に際して城郭外の戦闘拠点に利用できる寺町や重臣の下屋が、町屋敷を取り囲んでいたり要衝に配置しており、城下町の構成の定形に沿っている。城郭の北東側背後は、城地の通か北東を流れていた旭川を、二の丸の北側から本丸の東にかけて城地の足下をえぐって、さらに二の丸及び三の曲輪の東外郭に沿って南に流れる現在の河道のように流路を付け替え、天然の外堀をしている。旭川の対岸域にも家老や重臣の下屋敷を配置して城郭外の郭としての活用を意図しているとはいえ、本丸背後の備えが天然の大河一流だけというのでは手薄な城郭構成であることが明白であり、背後の防禦力の改善が城郭完成後に城主となった藩主の潜在的な課題であった。池田光政の子の綱政

が藩主の時の貞享3（1686）年に至って、旭川を隔てて本丸を巴の水玉状に取り囲み、非城郭施設ながらも出丸の役目も果たすことのできる曲輪が庭園として合法的に造成され、一応3箇年の歳月を費して完成した。この庭園は後園（後に後楽園）と称され、本丸を凌ぐ広さ（約58,000m²）であった。完成の翌年にはさらに17,000m²の拡張を行い、元禄13（1700）年には、広大な（約136,000m²）池泉廻遊式の大庭園が完成した。園内には有事に際しての利用も考慮（馬場・矢竹・砥石の庭石・築山や池の配置等）されていることが窺え、岡山城全体の配置からみればこの庭園の設置は、梯郭式から輪郭式への改修とも見ることができ、背後の備えが図られたことになる。

（出宮徳尚）

- (1) 山本悦世他『津島岡大遺跡3』1992・山本悦世他『津島岡大遺跡4』1994・山本悦世他『津島岡大遺跡6』1995、いずれも岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
(2) 岡山市教育委員会が1986・87（昭和61・62）年度に発掘した津島江道（岡北中）遺跡発掘調査の成果に依る。
(3) 永山卯三郎編著『岡山市史第二』岡山市役所 1936
(4) 藤井 駿『殿下御領の備前国鹿田荘』『吉備地方史の研究』山陽新聞社 1980
(5) 大澤惟貞編『吉備温故秘録卷之十一』（『吉備群書集成』＝1921（大正10）年による）
(6) 注(3)
(7) 注(3)
(8) 嶽津政右衛門・水内昌康・出宮徳尚『富山城跡第2次調査報告』岡山市教育委員会 1969
(9) 岡山市教育委員会の主宰する表町一丁目地区再開発事業埋蔵文化財発掘調査委員会が1989年に実施した旧岡山城（音楽ホール）三の曲輪遺構発掘調査の成果、及び同じく中国銀行本店建設事業埋蔵文化財発掘調査委員会が1990年に実施した旧岡山城（中国銀行本店）二の丸遺構発掘調査の成果

参考文献

- 木畠道夫『岡山城誌』1889
二科章夫『岡山城に就て』『建築雑誌』502号 1927
嶽津政右衛門ほか『岡山城史』山陽新聞社 1983

第二章 調査経過

第1節 調査に至る経過

文明開化の象徴として城郭施設を廃棄して城地の都市整備が図られていた岡山城跡が、文化財として見直されたのは国宝保存法の制定後であり、当時残存していた天守が1931（昭和6）年に、次いで1933（昭和8）年に残る月見櫓・西丸西手櫓・石山門が国宝に指定されたが、建造物に限った文化財観であり、城跡は本丸さえ岡山県立中学校用地に使用され続けていた。1945（昭和20）年の空襲で天守と石山門が焼失し、残存した月見櫓と西手櫓は1950（昭和25）年の文化財保護法の制定に伴って、重要文化財の位置付けとなった。岡山城本丸跡が広い意味での史跡的扱いを受けるようになるのは、県立中学校の移転に伴って、土地所有者の旧藩主池田家から岡山市が本丸跡を買収した1948（昭和23）年以降であり、学校の移転の完了した1953（昭和28）年から鳥城公園として都市公園の觀点での本格的な整備が施行されるようになった。1960（昭和35）年以降は城跡を基調とした公園整備が施行されるようになるが、文化財的觀点での城跡を基調とする整備ではなく、重要文化財所在地として月見櫓の一画だけは文化財行政の所管下に置かれたのが実態であった。この頃から天守の再建の市民的要望が高まって、1966（昭和41）年、天守と櫓門2棟・平門1棟及び土塀の一部が外姿再生を主眼としてコンクリート工法で再建された。この時限では事前の考古学的調査がまだ採られる情勢になく、築城時の天守台を始め二つの櫓門（不明門と廊下門）部分が破壊状態となつた。天守の再建後、本丸跡は岡山市の観光行政の中心地となり、荒涼觀の漂う城跡を立地とした城跡公園のイメージから、色彩感と雰囲気のある観光地的な都市公園へと変貌した。

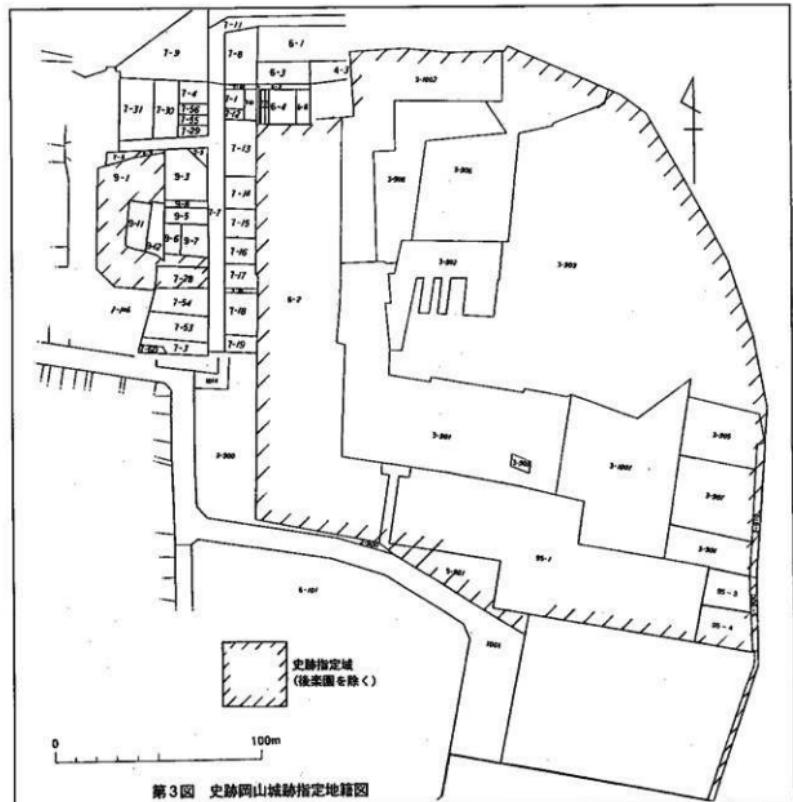
一方、岡山城本丸跡の文化財即ち史跡としての位置付けは、1960年頃から史跡指定が行政的に志向されるようになり、以後何度かの周期をもって史跡指定への行政的取組みがなされたが、本丸跡が鳥城公園として整備が施行された傍らで、「岡山市都市計画岡山地区復興土地区画整理事業（所謂戦災復興事業）」の施策地として換地用當て地に活用されていたために、多数の名目所有者と細分筆状態にあり実現に至らなかった。1980年頃に精算事業の整理ができ、本丸跡全体が名実ともに岡山市有地となり、さらに1983（昭和58）年に地場産業の所有地となっていた内堀が企業から岡山市へ寄贈され、一部に民有地を含むとはいえ岡山城本丸跡の一体的市有化が遂げられた。

こうした状況を受けて、岡山市教育委員会文化課は文化庁記念物課の行政指導に基づき、史跡指定の行政的対応に入り、1984（昭和59）年1月に内堀以内の岡山城本丸跡と二の丸内の旧本丸跡とを指定域とする岡山城跡の史跡指定申請を岡山市長名で行った。同年3月9日に国の文化財保護審議会から岡山城跡の答申が出されたが、指定域が申請地に特別名勝の岡山後楽園を含めた範囲であったため、関係資料の整備を図った後の1986（昭和61）年に岡山市長から再度の岡山城跡史跡指定申請がなされた。その結果、1987（昭和62）年5月30日付けの文部省告示第65号をもって、本丸跡と旧本丸跡と後楽園を指定域とする岡山城跡が史跡に指定された。指定面積は176,880.102m²で、その詳細は表I・史跡岡山城跡指定地地籍一覧表のとおりである。

町名	地番	地目	地籍(台帳)㎡	指定面積㎡	所有者住所・氏名	備考
丸の内二丁目	3番901	公園	5,492	5,492	岡山市大供一丁目1番1号 岡山市	本丸跡
同上	3番902	公園	1,650	1,650	同上	本丸跡
同上	3番903	公園	49	49	同上	本丸跡
同上	3番904	公園	734	734	同上	本丸跡
同上	3番905	公園	1,137	1,137	同上	本丸跡
同上	3番906	公園	3,878	3,878	同上	本丸跡
同上	3番907	公園	1,436	1,436	同上	本丸跡
同上	3番908	公園	2,154	2,154	同上	本丸跡
同上	3番909	公園	16,565	16,565	同上	本丸跡
同上	3番910	公園	243	243	同上	本丸跡
同上	3番1001	公園	4,112	4,112	同上	本丸跡
同上	3番1002	公園	3,134	3,134	同上	本丸跡
同上	5番900	公園	303	303	同上	本丸跡
同上	5番901	公園	1,227	1,227	同上	本丸跡
同上	6番2	井溝	6,876	6,876	同上	内堀
同上	95番1	井溝	6,710	6,710	同上	内堀
同上	95番3	宅地	350.94	350.94	岡山市南方二丁目3番21号 守分勉	内堀埋立地
同上	95番4	宅地	529.98	529.98	同上	内堀埋立地
同上	7番28	宅地	183.57	183.57	岡山市丸の内二丁目1番10号 医療法人社団全会	二の丸(日本丸)跡
同上	9番1	宅地	2,142.35	2,142.35	同上	二の丸(日本丸)跡
後楽園	278番地	公園	(実測) 117,973.352	(実測) 117,973.352	岡山市内山下二丁目4番6号 岡山県	後楽園
合計			176,880.192	176,880.192		

表1 史跡岡山城跡指定地地籍一覧表（所在市名は岡山市）

史跡指定を契機に、岡山城跡は指定地の主体部分である鳥城公園の史跡本来の形態に依る保存整備が内外から要請され出し、岡山市は担当部局である教育委員会文化課が本丸跡の史跡整備のあり方を検討することになり、文化課は史跡整備を国庫補助事業に依り施行する方針を立て、平成元年度に文化庁の狩野久主任調査官の現地指導と岡山県教育委員会の加原耕作文化課長補佐の指導を受けて、史跡岡山城跡保存整備事業の素案を策定した。岡山市教育委員会（所管＝文化課）では、平成2年度からはこの素案を基にして文化庁記念物課の加藤允彦調査官と岡山県教育委員会文化課の加原課長補佐の指導を得て、保存整備事業の検討を進め、国庫補助事業の前提作業となる「史跡岡山城跡保存管理計画」の策定に取組み、平成3年度には文化庁の田中哲雄主任調査官の現地指導と岡山県教育委員会の担当者の指導を受けて、同計画の素案を作成した。同時に関連資料の作成と収集にも努め、1/500の現況測量図を作成した。平成4年6月に「史跡岡山城跡保存管理計画検討委員会」を設置して、「史跡岡山城跡保存管理計画」素案の検討協議を踏った後に、「計画」を策定し、年度末に刊行に至った。その内で、歴史的環境の復元整備は、鳥城公園の観光及び公園の施設整備状況との勘案から、当面の対象地を岡山城跡本丸中の段に設定した。



第3図 史跡岡山城跡指定地籍図

こうした岡山市教育委員会の準備状況を受けて、文化庁は平成4年度事業において、中の段の史跡整備事前調査の発掘調査と同所の石墨破損箇所の実測及び復元図作成を国庫補助事業として施行することとし、500万円を補助対象額とした。文化庁の史跡岡山城跡に対する国庫補助事業採択の決定を受け、岡山市教育委員会文化課は、上記の補助対象事業の実施に取組むとともに関連事業として不用物の整理を行う「史跡岡山城跡保存整備事業」の本格的施行を開始した。以後、中の段の発掘調査は、平成7年度まで4箇年に亘って国庫補助事業で継続して実施され、平成7年度には中の段中央に所在していた1954(昭和29)年の岡山産業文化博覧会主要会場跡のコンクリート建物も撤去をみるに至り、中の段のほぼ全域の発掘を終えることができ、補助事業で平成8年度に報告書作成の運びとなった。

発掘調査は岡山市教育委員会が直接に施行し、社会教育部文化課が所管課となって、文化財係が担当し、実施にあたっては岡山市教育委員会が「史跡岡山城跡保存整備発掘調査対策委員会」を専門研究者に委嘱して、委員の指導と教示を仰いで万全を期している。発掘調査に先立ち、平成4(初)年度に

は文化財保護法98条の2第1項の「埋蔵文化財発掘調査の通知」が岡山市教育委員会教育長から文化庁長官宛に提出されたが、その後の指導により年度毎に岡山市長から文化庁長官宛てに史跡現状変更許可申請書を提出し、その許可を受けて実施するとともに、完了後に史跡現状変更完了届と埋蔵（文化財）発見届と埋蔵文化財保管証も年度毎に提出することになり、そのように対処した。従って、平成5年度以降には「埋蔵文化財発掘調査の通知」の提出がなくなっている。

- ちなみに、国庫補助の史跡岡山城跡保存修理事業の内容と経費は、次のとおりである。
- 平成4年度 経費5,000千円（国補助2,500千円・県補助833千円・市費1,867千円）
 - ・発掘面積411m² 中の段西側北部石墨破損箇所の実測と復元図作成
 - 平成5年度 経費14,000千円（国補助7,000千円・県補助2,333千円・市費4,667千円）
 - ・発掘面積2,009m²
 - 平成6年度 経費15,000千円（国補助7,500千円・県補助2,500千円・市費5,000千円）
 - ・発掘面積1,500m² 中の段の歴史的環境の復元整備計画策定
 - 平成7年度 経費15,000千円（国補助7,500千円・県補助2,500千円・市費5,000千円）
 - ・発掘面積1,000m² 中の段の歴史的環境の復元整備実施設計策定
 - 平成8年度 経費21,122千円（国補助10,561千円・県補助3,520千円・市費7,041千円）
 - ・発掘調査報告書 中の段石墨破損箇所の復元修理と北部の地盤造成
- (出宮)

第2節 調査の体制

〔史跡岡山城跡保存管理計画の策定〕

◎史跡岡山城跡保存管理計画検討委員（平成4年度 五十音順）

- 狩野 久 岡山大学文学部教授 岡山市文化財保護審議会委員
- 加原 耕作 岡山県立博物館総括学芸員
- 谷口 澄夫 岡山市文化財保護審議会委員
- 西原礼之助 岡山市文化財保護審議会会长
- 水内 昌康 岡山市文化財保護審議会副会長

〔発掘調査〕

- 発掘調査主体者 岡山市教育委員会教育長 奥山 桂（平成7年3月迄）
戸村 彰孝（平成7年4月から）

- 発掘調査対策委員 稲田 孝司 岡山大学文学部教授
狩野 久 岡山大学文学部教授・岡山市文化財保護審議会委員
加原 耕作 岡山県立博物館総括学芸員（平成6年度から）
鎌木 義昌 岡山理科大学教授（平成4年度迄）
工渠 善通 奈良国立文化財研究所
西川 宏 山陽学園教諭
西原礼之助 岡山市文化財保護審議会会长（平成5年度迄）

細見 啓三 奈良国立文化財研究所・岡山市文化財保護審議会委員
 間壁 忠彦 倉敷考古館館長
 水内 昌康 岡山市文化財保護審議会副会長（現会長）

(調査員)	発掘調査担当者	岡山市教育委員会文化課課長	青山 淳（平成5年度迄）
		富岡 博司（平成6年度から）	出宮 徳尚（平成6年度から）
	岡山市教育委員会文化課文化財専門監	岡山市教育委員会文化課課長補佐	出宮 徳尚（平成5年度迄）
		岡山市教育委員会文化課文化財係長	根木 修（平成5年度から）
		岡山市教育委員会文化課主任	根木 修（平成4年度迄）
	岡山市教育委員会文化課文化財保護主事	岡山市教育委員会文化課主事（庶務）	神谷 正義
			乗岡 実
			沼 智恵（平成7年度迄）
			羅久井和恵（平成8年度から）

(全調査期間中)	発掘調査作業員	青木敏夫	阿部志真子	石井 基	板野輝男	枝松尚志	榎 顯司
		大橋富子	大溝 神	岡沢徳江	岡嶋隆司	片山孝一	小谷真智子
		小西 恵	小林孝臣	齊藤伸一	佐々木龍彦	佐藤 保	波銀喜代子
		谷川正和	榎田日出夫	長石 誠	長門卓正	中山政太郎	難波俊一
		難波 稔	則武福市	蜂谷由太郎	藤田光子	堀本浩史	牧野須美子
		松本 晃	松本包房	水内汲子	三宅信雄	山口正康	横田順一
		湯浅晋一					
(含報告書作成)	出土物整理作業員	大西千鶴	古南太基	谷口光子	仲井光代	難波良美	信江清美
	発掘調査事務員	乗岡美佐子	八木留利子	山元尚子			
	柘植貞美	名座和枝	藤原 薫	水田康子	吉田万里子		

調査にあたり、文化庁記念物課の加藤允彦調査官（平成4年度）・本中 真調査官（平成6・7・8年度）には現地視察のうえ、多大のご指導・ご助言を頂いた。また、岡山県教育委員会文化課の文化財担当職員の方々や、岡山県内外の多くの研究者の方々も現地にお越し下さり、諸々のご教示・ご助言を頂いた。記して深謝いたします。

なお、発掘調査地が鳥城公園として整備管理されているため、所管である岡山市建設局（現都市整備局）公園緑地部公園緑地管理課（現公園整備課）及び公園管理事務所の各職員の方々には多大なお世話とご支援を頂いた。さらに、岡山市経済局商工部観光物産課岡山城事務所の職員の方々にも施設使用や諸々の面で多大な便宜供与とご協力を頂いた。こうした岡山市の鳥城公園に直接的に携わる各関係機関の方々にも深謝いたします。

史跡岡山城跡保存整備に係る発掘調査（中の段を対象とした第1次）の報告書を作成するのに当たって、発掘調査にご指導・ご教示とご協力・ご支援を頂いた多くの方々に更めて厚くお礼申し上げます。

（出宮）

第3節 発掘調査の方針と経過

○発掘位置と調査の方針

本丸のうち、発掘を行った中の段は、現況では復元天守の建つ本段から高さ5mほどの石垣を隔て西に一段低い位置を占め、直角状の折れをなして連なる高さ10m内外の高石垣によって南・西・北を画されている。概して南北130m、東西60mと南北に細長く、面積にして約7300m²の広がりをもつ。いまは北西隅に、国の重要文化財（建造物）に指定されている月見櫓だけが残るが、江戸時代には他の櫓や岡山藩庁である表書院の御殿群が高い建ぺい率で建っていた。中の段に対して大手筋は南東で、下の段から中の段に至る雁木には鉄門、中の段から本段への境には不明門（戦後復元）があった。一方、北東部は搦手で廊下門（戦後復元）を経て下の段に通じ、陰路を経て本段天守脇に出られる。

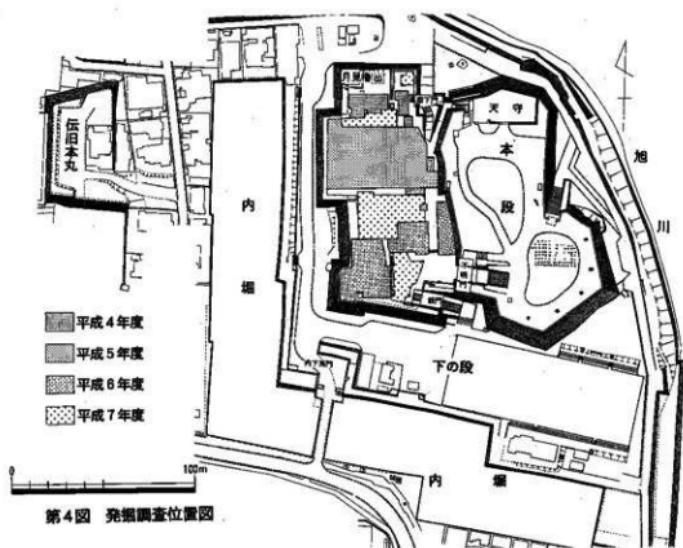
発掘の目的は、いうまでもなく史跡整備を前提とした、地下の遺構の有無とその内容の確認である。対象範囲には中の段の全域を据えたが、予算や調査の体制、それに排土置き場の確保や公園・観光施設としての利用への配慮、作業員の人員確保、野外作業の季節的効率性なども勘案して、発掘後の埋め戻しを含めて、各々の年度ごとに現場作業は冬場を中心としたサイクルで完結させる形をとった。

中の段の全域を調査対象地として発掘区の最大限の確保に努めたとはいえ、4ヶ年度の発掘延べ面積は4970m²にとどまっている。これは予算規模と日程、それに該当部に発掘区を設定することの考古学的有効性との兼ね合い、月見櫓や現役石垣の保安、IV次調査の途中まで機能していたコンクリート建物や本段の復元天守などに関わる高压電線・水道管・火災報知器配線ほかの現役構造を含め、除去や周囲の掘り下げが物理的に困難な障害物の存在、公園の構成体として位置づけられている大小の樹木や礎石の保全、観光客の歩道の確保などの問題のためで、各年度ごとでも単一の発掘区という形態はとれず、事実上は大小不定形の複数トレンチに分割して調査を行なわざるを得なかった。

明治時代以降のものは別として、原則的にその地点で確認された最初の遺構の保存と理解を最優先として、以深の掘り下げは行わなかった。ただ場所によっては、近現代の構造や地盤の削平がかなり広範に、また深くにまで及んでおり、江戸時代前期以降の遺構面は既に損なわれていた。そうした地点を中心に、さらに掘り下げを行い、江戸前期前半以前にまで遡る下層・最下層の遺構を重層的に確認した。上位の遺構の保存に反しない限り、中の段の総合的な考古学的理解を目指して、そうした古い時期の層位の遺構追求にも積極的に取り組んだのである。その際、例えば近現代の建物基礎用溝やゴミ穴を土層観察用のサブトレンチに整備・活用するなどの方策をとったのはいうまでもない。こうした結果、各トレンチ、また各部分で発掘終了時に到達した深さや層位はかなりばらつきがある。

○平成4年度（第1次）発掘の経過 [発掘面積411m²]

発掘初年度は、中の段の北西部の石塀内側石垣の写真測量などにも予算を割り振ったため、発掘面積も狭く、試掘調査的色彩が強い。対象は当教育委員会が管理する月見櫓の周辺、中の段の北辺部である。現場作業は平成4年11月10日に着手した。先ず月見櫓南隣に設定した第1トレンチでは、早くも現表土の直下で敷石や瓦列が確認され、江戸時代の遺構との期待が高まったが、戦災による廃棄物を含む造成土の上に構築された公園施設であることが判明し、逆に不動のはずの月見櫓床面の高さとの関係から、江戸時代の遺構は既に削平されているのではないかとの疑惑が高まった。11月13日に至



第4図 発掘調査位置図

り、トレンチの南西部で倒立する塁の上部に漆喰を施す水琴窟様の遺構が確認され、たとえ部分的であるにせよ、ここに表書院が建っていた時期の構造が遺存していることがはじめて明らかとなった。さらに文化庁の加藤調査官の現地指導を仰いだ11月17日までは、円礫を敷きつめた軒先雨落ちとみられる溝とこれに重複する位置で先行する時期とみられる礎石列が確認された。以後の調査で判明する遺構の複雑な重層関係は、早くもこの時点でその一端を見せていたのである。その一方、トレンチの東半部では旧制中学の戦災廃材類を埋め込んだ巨大なゴミ穴が確認され、元来は連続するはずの構造はすでに存在しない。以後、東と南に新たな発掘区を設定したり、トレンチの拡大を図った結果、11月24日には第1トレンチの西拡張部で絵図に描かれた穴藏が、12月3日には北東部の第3トレンチで井戸と豊島石の溝、それに多門櫓の基礎石組が、12月11日には井戸から延びる水道施設、12月17日には北の第5トレンチの多門櫓に続く底下部の地覆の石組と側溝など、あいついで遺構が検出された。第1トレンチを除いて、江戸時代の遺構面は現地表面から予想以上に深く、基本的に遺構は残りが良かったのである。第3トレンチ拡張部で便所とみられる木箱を掘えた土壌が確認された12月25日で年内の作業は終了し、翌1月5日から再開した。1ヶ月半は、埋甕や便所ほかの、これまでに確認できた遺構の細部検討を進める一方、遺構の残りが悪いと見込んでいた南の第2トレンチでも敷瓦や漆喰の床面、新たな穴藏などを確認した。1月14日は小雨をおして第1回目の対策委員会を開催、絵図に示された遺構の遺存の事実、さらに土蔵の穴藏の構造や活用の途などについて、議論がなされた。1月20日から2月23日までは作業員を休みとしたうえで、検出遺構の実測作業に専念した。2月24日からは作業員を再動員して埋め戻し作業を進め、3月4日に総ての現場作業を完了した。

○平成5年度（第Ⅱ次）発掘の経過〔発掘面積2009m²〕

第Ⅰ次調査区以南の中の段北半部を対象とした。絵図によれば、ここは表書院内でも奥むきで、中庭や台所、それに座敷があった場所に相当する。現場作業は平成5年10月4日に着手した。本年度は比較的まとまった範囲を連続面で発掘することになるので、排土を考えて西側奥から発掘を開始した。間もなく旧制中学のコンクリート張床が広範に現れて頭を悩ましたが、これを突破、10月20日に至りようやく江戸時代の遺構が検出され始めた。隅櫓のものとみられる礎石列、それに多門櫓の壁が載るとみられる列石やこれに沿う石組み溝である。絵図にみる隅櫓や多門櫓の幅が、現況の石壁の幅より広そうなことは調査前からの疑問であったが、検出遺構からすれば幅はいま見える石壁を覆い隠して、跨がって建っていたことになる。10月はこの第1トレントで櫓の下部構造や石組溝の検出に費やした。11月に入りようやく東の第2トレントを設定、同15日には白色の漆喰を底張りにした泉水が確認できた。南部に設定した第3トレントでは22日の豊島石の溝に統いて、23日には戦後の攢乱壙の下部で埋没高石垣を確認した。ここに下層遺構の存在事実のみならず、いまの中の段の広がりが初期からのものでないことがはじめて明らかとなったのである。第1回目の対策委員会が開かれた12月1日からは、南西端部に第4トレント、中部に第5トレントを設定し、旧制中学の延石などの障害物に悩まされながらも、同15日には泉水の延長部、同17日には元様絵図に示された舞台のものとみられる礎石列とその下方に漆喰張りを確認した。この漆喰張りは最終的には舞台また元様絵図に先行する泉水と判断されたが、この時点では舞台の音響効果を高めるための下部構造の可能性も考えた。一方、南の第3トレント東部では江戸初期頃とみられる瓦を多量に含む造成土に到達、逆に上層遺構は既に損なわれた状況が判明した。12月27日には年内の作業を完了、翌1月5日に再開した。第3トレントでは10日までに花崗岩バイラン土による明確な生活面に到達、壁面観察も踏まえれば、この上部に複数の遺構面が存在する可能性が考えられた。12日には第5トレント南東部でこのバイラン面に据えられて郭内側に向く低石垣を確認、埋没高石垣と平行して石壁構造をなしていた。1月末頃には第5トレントの掘り下げも進み、舞台礎石周辺の土壤群や1次調査で確認された円礎敷溝の延長なども確認できた。2月に入って発掘区をさらに北と東に展開した。東の第7トレントでは表書院台所のカマドや、戦災廃棄物を埋める大土壤のなかで埋没高石垣の延長を確認、7日には鋭角に折れるその角部が明らかとなって、城門の存在が予想された。また8日には南部の第6トレントで下層造成土から初の金箔おし瓦が出土した。その後、城門予想部一帯では、礎石列、敷石、低石垣が重層的に確認され、下層期の複雑な遺構変遷を追求する一方、第5トレントの舞台礎石下の漆喰の広がりの追求をはじめ、上層期の遺構の確認作業を続けた。3月初めの10日ほどは実測作業に専念するため作業員を休みとした後、3月12日には午前中の対策委員会に引き続き、午後には市民を対象とした説明会を開催、雨天にもかかわらず約80名の参加者を得た。以後、引き続き細部の確認と実測を行い、並行して3月22日からは埋め戻し作業を行い、3月31日をもって総ての現場作業を完了した。

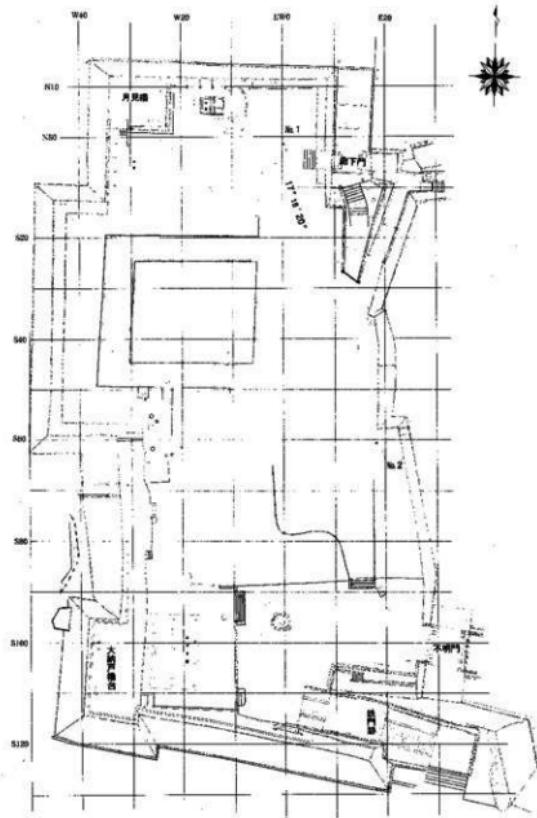
○平成6年度（第Ⅲ次）の発掘経過〔発掘面積1500m²〕

中の段の南部が対象地で、絵図によれば表書院の玄関や広間など表向き、それに大納戸櫓があった場所である。現場作業は、平成6年10月3日に開始した。大納戸櫓の櫓台上は後世の攢乱が著しいが、10月12日には櫓の礎石とみられる石材を3個確認した。続けて櫓台の東側でも掘り下げを進めたところ、現役低石垣の根は予想以上に深く、櫓台構築当時の景観は表書院の時期に対して大きく異なって

いたことが判明した。12月中旬にかけ、先行する石塁の内側石垣が檜台の構築で埋められた事や、当初は中の段南東部の現役石塁が檜台に直接取りついていた状況がしだいに明らかとなった。この時点では、先行石塁は宇喜多秀家期のもの、遅れてできた大納戸檜は伝承通りの小早川秀秋期で矛盾ないと思われた。12月8日には大納戸檜の北方で大形の金箔おし鳥食も出土した。一方、東に移って表書院周辺部でも掘り下げを開始し、11月下旬までに西側段石垣上の庭の砂利敷きと礎石、12月中旬までは明治に埋め込まれた北の段石垣や表書院南西棟に相当する礎石群と敷石通路が姿を現した。12月28日から1月4日にかけては正月休みとし、確認遺構の面的追求や精査を進める一方、1月10日以降からは東端の本段石垣そばのトレーナーでも石組溝や敷石が確認され始めた。1月下旬から3月上旬にかけては、上層遺構検出の面的拡大を進める一方、下層期の礎石や段石垣、最終的には最下層に分離した土塁と低石垣などを確認した。特に2月末からは、第Ⅱ次調査で掘り残した北の下層期城門部にも着手し、可能な限り構造を追求して3月15日によく掘り終えた。この間2月25日には約300人の参加を得た市民対象の現地説明会を開催し、3月9日には阪神淡路大震災の影響で延期になっていた文化庁の本中調査官の現地指導を仰ぐことができた。検出遺構の量と複雑さも手伝って、実測作業が思うようにはかどらず、3月は日程的にかなりハードなものがあった。3月16日から25日までは直営の作業員を休みとして実測作業に専念する一方、20日からは一部別仕立ての業者受けによる埋め戻し作業を開始し、ようやく3月31日に一応の現場作業を完了した。

○平成7年度（第IV次）の発掘経過 [発掘面積 1050m²]

飛地として残った未掘の4か所を対象としたが、重点は中の段中央にあるコンクリート建物部で、その撤去計画の進行を前提にはじめて事業化できた調査年度であった。平成7年11月6日に、先ず北部の発掘から着手した。予想通り敷瓦敷きや円礎敷溝の延長を確認し11月24日には掘り終えた。前後して、南方の発掘区を設定、11月27日に第2トレーナーで便所とみられる据置ほかを確認したのに続き、12月13日までに不明門前の各トレーナーで下層期とみられる敷石や列石などをあいついで確認した。翌日からは、中の段北東隅にかえって、小納戸檜部の掘り下げを開始し、まもなく礎石の一部が検出できたが、建物解体が進まず、調査計画と予算残のバランスを考え、12月21日から作業員を原則休みとし、検出遺構の実測などを行った。作業員を再召集し、建物撤去部一帯の発掘に着手できたのは2月8日の事であった。建物跡は必然的に上層遺構が損なわれており、直ちに下層が調査対象となり、早くも金箔瓦の出土があいついだ。2月19日には先ず城内を向く低石垣を検出し、評価に頭を悩ませていたところ、22日には組み合の高石垣を確認し、下層期初期の郭の西辺部の構造、また第Ⅲ次調査で検出された西の新旧2段階の石塁内側石垣は思ったより遅れる段階のものであることが確定していった。並行して、郭内の礎石や土壤の検出も進む一方、コンクリート建物外であった西縁部では上層期の礎石列も確認できた。3月初めからは、埋没高石垣や各期の低石垣の延長を確認する作業を進め、3月14日には第Ⅱ次調査で確認済の下層北辺の高石垣との接合関係も確認できた。また、最下層でも3月6日には旧制中学基礎溝の壁面観察で土塁の延長を確認、おし迫った3月下旬の共伴低石垣の確認につながっていく。また3月16日には現地説明会を開催し市民約300人の参加をえた。2月・3月は、作業員を含めて休日返上の極めてきつい調査となつたが、この期に複雑な下層期の遺構変遷の理解は飛躍的に深まつたといえる。3月29日をもって発掘調査事業は完了し、別仕立てでの事後整備を急いだ。



第5図 中の段の現況とグリッド割り

○検出遺機の記録

検出遺構の記録は、原則的には、 $1/20$ スケールの造り方による手書きとし、必要に応じて、 $1/10$ の部分図や平板測量による小スケール図を作成した。平面図の作成のため、中の段全域にわたるグリッド割りを設定し、年度ごとの発掘区の設定に応じて任意に杭などを打って、これを基準とした。

グリッド割りは、第5図に示した通りで、この原点は岡山市教育委員会が平成4年度に本丸の現況図を作成した際に設置した基準点のうち中の段の北西部にあるNO.1(銅製・コンクリート固め)とし、軸は中の段の現況を勘案して任意に設定した。グリッドの南北軸は中東部にあるNO.2との直線に対し、 $17^{\circ} 18' 20''$ 西に振り、真北に対し $2^{\circ} 10'$ ほど西に振っている。発掘グリッド座標は、国土地標への変換を行っていないが、計算可能なように両者の関係を次に示しておく。

基準点NO.1 発掘グリッド：NS = 0.0 m, EW = 0.0 m

国土座标：X = -148341.004

$$Y = -36218.552$$

基準点NO.2 発掘グリッド：S = 63.77 m, E = 19.88 m

国土座標：X = - 148403.961

$$Y = -36196.224$$

レベルはNO.1の測値=海拔絶対高14.19mを基準とした。

(乗岡 実)

第三章 遺構

4ヶ年度にわたる調査で確認された遺構は、複雑多岐な構造を呈し、遺構間の諸関係について容易に理解を下しにくい部分が多数ある。これは、城郭という遺跡の特性そのものによるとも言えるが、予想を越える数の遺構・遺構面が重層的に重なっている事実に加え、そうした遺構が古い時期での郭改造時に意図的に破却され、古い構造が常にそのまま埋め込まれて残っているとは限らないこと、保存を前提とする調査の性格から深い層位のものほど狭い範囲でしか遺構追求をなし得ない事にも一因がある。したがって細部においては不確定な部分が多いが、諸構造の変遷過程や層位に対する基本認識は、一定の客觀性をもって記述することができる。

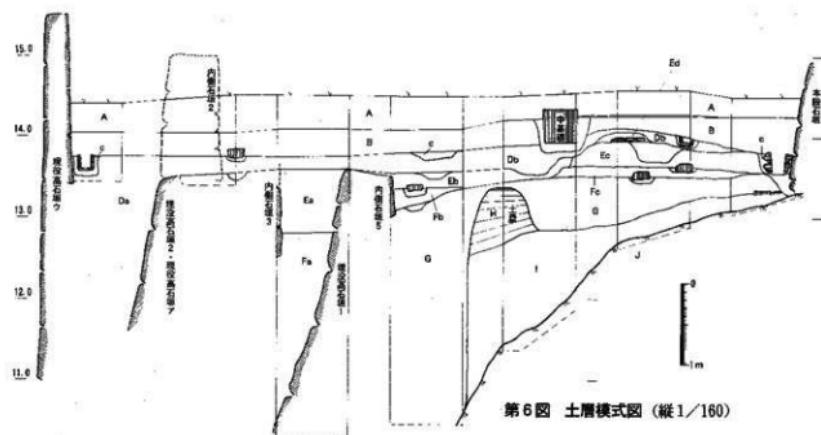
まず基本層序を示したうえで、大別層位ごとに個別遺構を記述する。層位によっては、任意に場所を区切り、これを単位に記述を進める。したがって、遺構の検出年度などは記述の順序には反映されない。大別層を越える遺構間の直接的切り合いなどは、そのつど言及するよう努めた。また個別トレンチを呼称する際は、調査時の名称(年度ごとの設定順番号)に調査の次数(I~IV)を冠したが、異年度の発掘の累積などの結果、図面上では單一トレンチにみえても、部分によって異なる名称が与えられる場合がある。逆に、上層では單一のトレンチであって内部に複数のサブトレンチを設定した結果、下層では離れた部分が同じ名称のトレンチとなる場合もある。トレンチ名から記述区名を検索するための表は184頁に掲載している。遺構図で用いた細い一点鎖線(類破線)は、対応する遺構の検出限界ないしは遺構面精査の範囲の限界を示した。したがって、一般的には、立面・断面図では任意の掘り底、平面図ではトレンチの下ば線を示すが、トレンチ内にあっては擾乱壆の輪郭、またサブトレンチなど周囲と異なる層位での遺構などの検出限界などを示すこともある。なお、平面図でこの線がアーバ形に走行する場合、たいていは保全を図った公園樹木が存在する箇所である。

第1節 基本層序

基本層序を模式化して示せば、第6図の様になる。複数の埋没石垣の存在に端的に示されるように、中の段もしくはこれに相当する郭を縁取る壆構造は、大別して5つの段階のものが別個にあり、基本的には古い構造を上方、また平面的には南・西・北方向に埋め込みが行われ、郭がしだいに拡大していくことが確認できる。むろん現状の中の段はその最後の段階に位置づけられる。基本層序はこの郭の拡大過程との関係で理解するのが適当と思われる。

A層は鮮黃灰色の花崗岩質バイラン土や暗褐色細砂ほかの互層で、公園地盤を形成する現代の造成土である。ガラス片やアルミ缶など戦後の遺物を含むが、下部に焼土・炭・灰、それに溶けたガラスほかを顕著に含む場所があり、焼失した中學の後片付けによる戦争直後の整地層を含んでいる。

B層は、暗褐黒灰色細砂ほか、瓦や陶磁器、白色の漆喰壁細片など幕末ないしは明治はじめまでの遺物を多量に含み、表書院破却時ないしは僅かに遅れる旧制中学校地形成のための造成層と判断される。場所によるばらつきはあるが平均的な厚さは30cm、ただし南部でこの時並行して造られたと判断してよい石垣の裏側では厚さ約1m、逆にその南の不明門前ではほとんど存在しない。この上面には戦



第6図 土層模式図（縮1/160）

争で焼けた校舎のコンクリート基礎や敷石通路などが構築されている。

B層下面からD層上面の間に展開する造構を上層造構としてとらえた。建物礎石や石組溝が広範にあり、その位置や内容は、江戸時代にここにあった表書院ほかを描く絵図とよく一致する。C層はこの生活面形成に対応する地表層や薄く局部的な整地層、またB層形成に先立って埋まつた造構の埋土をあてる。したがつてC層の様相は千差万別であるが、主体は暗褐色（黒）色系の細砂微砂類で、D層以下に比べ花崗岩バイラン土由来の細礫が少ない。江戸時代前期以降、幕末に至る陶磁器や瓦片、それに鮮色の各種漆喰片をしばしば含むことも特徴的であるが、上層造構破却時に擾乱を受けた度合いの大きい中の段の中央部などでは、上のB層と一体化して、容易に弁別できない場合もある。

D層は、中の段の前身郭の北部高石垣を大きく埋め立て、表書院や月見櫓ほかの建つ地盤を形成するもので、下層期の内で最後の造成土に位置づけうる。中の段北半部では、現役の高石垣が寄り掛かる数メートルの厚さをもち、淡黄～淡褐色系の細～微砂を主体に、鮮黃褐色ほかの花崗岩バイラン土を互層状に挟む。細かく観察すると、盛土の単位は細かい。これをDa層とする。このDa層は北部では以前から郭の内であった個所にもそのままの土質で薄くなりながらも僅かに続く状況が観察できるが、中部ではかなり薄く、暗褐色（黒）色系の花崗岩バイラン疊混入の細砂系統で、以深の下層造成土との分離は土壤構造の上では容易でない。これをDb層とする。また、南西部の段石垣上で北部から整合性をもつて続く上層造構面を形成する最後の造成土は褐黃褐色系の花崗岩バイラン質土でDc層と位置づけておきたい。さらに、不明門前の一帯では、下の層位の生活面を埋めて最後の近世生活を形成する造成土は厚さ数センチの暗黃灰色花崗岩バイラン質土で、Dd層と呼ぶ。厳密に言えばDa層と、Db・Dc・Dd層が同時であることや、逆に後者がDa層より時期的に遅れるC層対応などではないことが、連続する土層壁面などで直接証明できた訳ではないが、状況からは一括できよう。D層には多数の瓦片ほかの造物を伴うが、その年代観は江戸時代初期以前のもので、この点でもC層以上とは分離できる。以上のD層上面、つまり上層造構形成面の絶対高は、中の段の中部・北部が14.0

~13.8mではほぼ一定し、内では中東部が微妙に高いといえる。南は低く、その西部の低石垣上でも13.5m内外、東部の不明面前では12.5m内外である。

Ea層は郭の西辺にあって、先行する石壘の内側石垣3を埋め、上部はいまも現役の内側石垣2を構築した時の造成土で、暗黄褐色系のバイラン土のほか、下部には淡灰色の中粗砂、破却された石壘の内側石垣の裏込めに由来するとみられる円礫、少量の金箔瓦を含めて瓦片などを含む。むろんこの上面は、生活面となる。なおこのEa層は、南西部の大納戸構付近では分厚く堆積し、郭内向きの石垣との関係から、最低2時期に細分される可能性がある。

Fa層は、Ea層の下位にあって、先行する埋没高石垣1を大きく埋め込み、西に新たな埋没高石垣2及び組み合う内側石垣3を構築した時の造成土で、暗褐色系の細砂、暗灰色の微細砂、褐黄色バイラン質土などで構成されるが、その最上部は明褐色のバイラン土で生活面を造り出す。

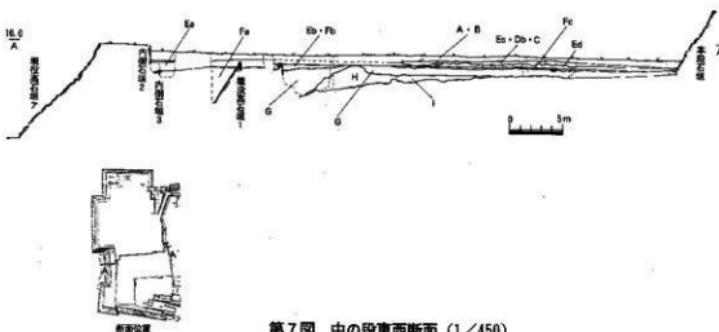
G層は、先行する土壘ほかの構造を埋め込み、最古の埋没高石垣1および組み合う内側石垣5を構築した時の造成土で、やはり暗褐色系の細砂や褐黄色系のバイラン質土からなるが、E層、F層に対して含まれる瓦片の量が激減する一方、その最上層は鮮明褐色ほかのバイラン土で、上面に生活面を形成する。この上面は丁寧に整えられ、例えば北半部では石壘の内側石垣5のすぐ東脇部を除き13.5mで見事に水平である。

以上のEa・Fa・G層の関係は明確であるが、これらと郭内側の各下層造成土の関係は微妙である。Fa層が埋没高石垣1を完全に埋めつくさず、Ea層を待つまでは高石垣1・内側石垣5に関わる石壘構造が残っていることもあって、直接的に土層連続を確認することに困難を伴うのである。D層の細分に問題は残るとしても、その下面の遺構面の同時代性はやはり一定の蓋然性がある一方、G層の上面はそのまま郭内の生活面を形成しているから、郭内の各造成土層をFa層・Ea層との関係でどう理解するかが鍵になる。この点はむしろ次節以降の個別記述を経ての評価の問題であるが、ここでは結論的な展望を踏まえて名称を割り振り、記述をしておく。Eb層は石壘内側石垣5の間にあってEa層と同じ高さまで石壘を覆い隠す造成土で暗褐色系の細砂・バイラン質土。Ec層は暗褐色の細砂バイラン質土でFc層上面の遺構面を埋め込む。Ed層は下層期の郭の中東部にあって暗褐色緑色の微砂などで、Ec層より新しく敷石などの明確な遺構面を埋め込み上面にはDa層に埋められる遺構面を形成する。いずれも瓦片などを多量に含む。全体としてE層は郭内を大きくかさ上げし起伏を平坦化するものであるが、複数の時期に跨がる事は明らかである。Fb層は石壘内側石垣5の内側、Fc層は郭内北半部にあって、ともにG層を覆う最初の造成土で暗褐色系の細砂バイラン質土を主体に金箔瓦ほかの瓦を含み、最上部には褐黄色の花崗岩バイラン土が薄くあって、礫石などの伴う生活面を造り出す。なお、南東部にもEb・Ed層やFb・Fc層の対応層が所在するが非常に薄い。

以上、G層上面からE層上面にかけて展開する遺構を、下層遺構と呼ぶが、実体は複数の時期のものが複雑に絡み合っている。

H層は、G層によって埋め込まれた土壘の盛土である。鮮褐色～黄褐色系の花崗岩バイラン土や暗褐色～緑灰色の細砂微砂などからなり、非常に単位が細かい。

I層は、土壘や郭内遺構の載る生活面を造り出し、上面には黒色の旧地表層を伴い、やはり花崗岩バイラン土系統が主体である。H層・I層はG層と同じく含まれる城郭期の遺物が少なく、特に瓦片は存在するが極めて少量で、下層期の各造成土と対照的である。土壘ほかI層上面に展開する遺構が最下層遺構の主体であるが、I層中やJ層上面にある若干の人的な構造も含めておく。



第7図 中の段東西断面 (1/450)

J層は、花崗岩～流紋岩風化岩盤で、地山である。花崗岩の鉱物構造をそのまま残し、パイラン質の造成土とは容易に区別できる。中の段中部の東端で最も高く、13.4mを測り、南・西・北に向かって急激にレベルを減じていく。むろん東方の本段部には、さらに高所が想定される。

以上、基本層序の概要を述べたが、実体はさらに複雑で、小規模なトレンチでは層の比定が困難な部分も多い。なお第7図に実際の土層断面の編集図を掲げた。調査の制約上、單一面で連続する土層観察壁は設定できなかったが、おむね中の段中央部の東西横断といえ、北部にしかない現役高石垣を除き、第6図の模式図の原形とも言えるもので、注記を対応させている。なお第7図の拡大図は、分割する格好で、次節以降に掲載している。

検出遺構の変遷過程の整理は第V章で行うが、その時期設定は基本層序の問題だけでなく、遺構の切り合い関係や配置、あるいは遺構の構造的特徴や走向からの同一性や同時代性の認定など、個別遺構の客観的記述や評価も踏まえた上で議論が前提であるが、特に下層期の複雑な遺構の記述にさいしては、編年的な位置づけを参照できる方法が適切と考え、括弧でくくる条件で比定時期を記す場合がある。むしろ、本章の遺構の記述は、この時期区分の是非の検証過程として位置づけられる。

具体的には、中の段で検出された城郭関連の遺構は5つの時期～段階に大別できると判断した。その時期区分と基本層序との関係を最後に記しておく。

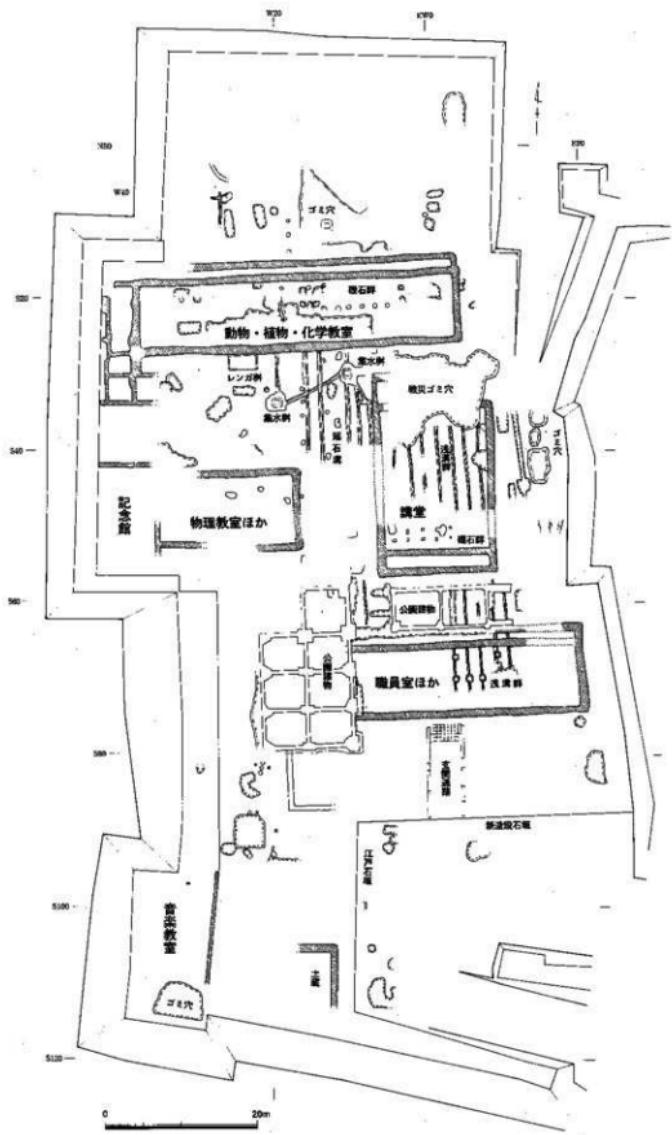
第I期の遺構はI層の形成から、G層の造成までに営まれた最下層遺構で、複数の小期からなっている。第I期に共伴の遺物とはI層上面やH層中のものをおてる。下層遺構は第II期から第IV期に分類する。第II期の遺構はG層形成時以後F層形成以前のもので、埋没高石垣1などのほか、Fb層・Fc層遺存部でのG層上面のもの。第II期の遺物は遺構外ではFa層中のほか、郭内Fb層・Fc層中出土を軸に考える。第III期の遺構はFa層と内側石垣3形成時以後のもので、郭内ではFb層・Fc層上面のものをあてたいが、不確定要素があるので厳密な限定はしない。第IV期の遺構は、第4節で述べる大納戸櫓台東側石垣の構築以後の遺構として位置づける。Ea・Eb・Ec層の全体形成と石壁内側石垣2の構築はそれと同時とするよりも、遅れる段階の可能性があり、これを基準に新段階をIVb期に分離する。Ea・Eb・Ec層中の遺物は第III期～IVa期に、Ed層中の遺物は第IVb期に含める。また、D層中の遺物は第IVb期末に位置づけられる。なお、郭内造成土の出土遺物は不確定要素が大きいため、時期区分は常に幅をもって考える。第V期は現役高石垣7ほかC層に関わる全上層遺構をあてる。遺物はC層出土品の外では、B層中のものが第V期末に帰属することになる。

第2節 近現代の遺構

B層形成後の近現代の遺構は、直接の調査対象としては取り扱わなかったが、明治維新以後の学校教育の場を実体として示すだけでなく、いわゆる戦災遺跡としての側面を多分にもっている旧制中学の遺構を中心に記述する。なお、本丸内の旧制中学は明治29年に成立、昭和20年6月に空襲で焼失したが、学校は再建されて昭和29年まで後身の朝日高校がここにあった。

第8図で斜線を施したのは、検出された校舎の基礎である。平均的には幅1m足らず、深さ1m余りの溝を掘り、下部に握りこぶし大の円礫を充填し、この上に幅0.7m、厚さ0.4mほどの細長い箱形にコンクリートを流し込み、平坦な上面を造り出している。この構造はかなり手のこんだ工程を経ているが、コンクリート自体は長辺5cm以下の礫が混ぜられるが鉄筋は施されず、比較的軟質で、現代品よりもむしろ後述の表書院中庭の泉水の最新段階の漆喰に近い。基礎は長方形に完結して走行し、校舎の一棟一棟に対応している。また一部では礫石列も確認された。基礎や礫石の上では戦災による炭や焼土がオリジナルな状態で残る個所もある。南の不明門前には、高さ1.0mに間知石を3~4段積んだ東西に延びる石垣がある。校地を造成する際に上層期の東西に延びる段石垣1を埋め立てて5~6mほど南に段をひろげるために構築されたもので、背後に埋まる遺物の年代観から、明治29年当初からのものと考えて矛盾ない。石垣の西部は江戸時代からの南北に延びる段石垣に当て終わっており、西側段は江戸の石垣をそのまま利用した。東西石垣の西寄り上方では、両側に花崗岩延石を施す、幅約5mの敷石通路が検出された。敷石も花崗岩製、方形で表面は磨かれ、厚さ3cm内外と見かけの割りに薄い。どの石材も戦災で赤く焼けて劣化が著しい。南西部の大納戸櫓部もその内側石垣の頂部には直接コンクリートが線状に張られて校舎の基礎となっていた。こうした遺構配置は、戦前の校地図⁽¹⁾とよく一致する。すなわち敷石玄関の奥には職員室ほかの管理棟、北には講堂、その北東と西には各種理科教室、西には高石垣にせり出す格好で記念館（尚志会館）、南西の大納戸櫓部は音楽教室である。そのほか、講堂の西の中庭には校地図に示された通路の延石設置溝、北の理科教室に接してレンガ積みの長方形池、またこの一帯から北にかけては集水樹3基と取りつく土管が縦横に残っていた。土管は備前焼で、上層遺構に伴う江戸時代の土管は接合部の外形が無頸式で隙間に漆喰を施すのに対し、有頸式で隙間にしばしばコンクリートを施す。また一帯はB層で江戸時代の排水溝が既に埋まつたこともあって、西部でも東流させ、排水体系を違えている。講堂の基礎を切る長辺10m以上、深さ2m余りの土壤は、戦災の廃材を集中的に埋め込んだゴミ穴である。これ以外にも大納戸櫓南や北の理科教室周辺など、旧制中学廃絶時とみられる大きなゴミ穴が点在し、教材や茶碗その他の遺物が多数出土している。新しくは、戦前校舎の基礎を切って等間隔で並ぶ柱穴状列などもある。戦後の学校に関わる遺構かもしれない。また公園時代のゴミ穴類も大小数多く、月見櫓解体修理時に降ろされとみられる瓦を整然と積む大形土壤などもあった。また、昭和30年代のコンクリート建物も建築時に大きな掘り方を伴っている。一方、古い時期で注目されるのは、東部にあって戦前校舎に切られる平行浅溝群（B層中～B層下面）である。沖積地でしばしば確認される畝状遺構に近似し、あるいは表書院廃絶後の間もない時期に、畝となつたことがあったのかもしれない。

注(1) 岡山県第一岡山中学校校友會『創立六拾周年記念会報』1934.11.ほか



第8図 近現代の遺構（1／640）

第3節 上層遺構

上層遺構の時期は、いまみる中の段が完成（V期上限）し月見櫓などが建てられた江戸前期前半から幕末まで、厳密には明治10年代頃の建物群の破却ないしは明治29年の旧制中学開校に伴う校地造成時（V期下限）まで、250年あまりもの時間幅をもつ。この時期については、幸いなことに、岡山藩の正式絵図が残っている。絵図には、高石垣べりにあった多数の櫓や城門、郭内にあって表書院と総称されて藩の政治や儀式が行われた御殿建築群や付属施設の存在状況が詳細に描かれている。絵図と検出遺構の内容や位置は基本的によく一致し、逆に遺構の理解には絵図との対比が不可欠となる。ここでは、個別遺構の考古学的な記述につづき、そのつど絵図との対比にも努めた。元禄一三（1700）年の『御城内御會図』（岡山大学池田家文庫蔵）を元禄絵図、寛保四（1744）年の『御書院御絵図』（岡山大学池田家文庫蔵）を寛保絵図、明治二四（1891）年の木畠道夫著『岡山城誌』に掲載の絵図を幕末絵図と呼び、単に絵図という場合は三者共通の事がらを指す。なお、大納戸櫓のあった南西隅部は、下層期からの継続性が強い構造が多く、記述を下層2区に集約した。

1. 上層1区（第9図）

大手筋に面する中の段の南東部で、絵図によれば表書院の玄関と北奥に続く通路的部分を占める。
基礎石組1・2〔表書院玄関棟〕（第10・11図）

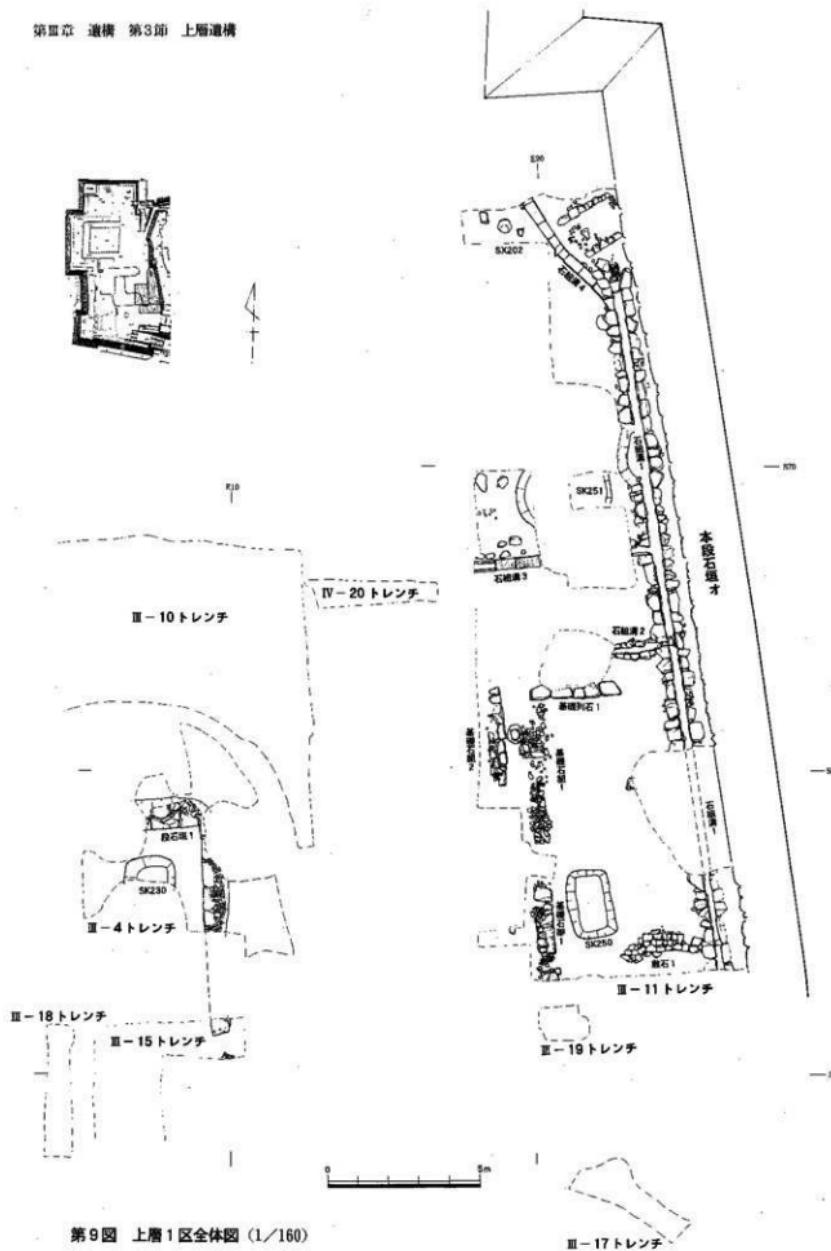
基礎石組1は幅約0.6mの南北に延びる石組で、北側が本来は基礎列石1に接していた可能性が強い。長さ9m余りを確認したが、旧制中学の段石垣を境に南は削平を受けて残っていない。北側では基部の長辺20cm以下の円錐や花崗岩割石が遺存するのみであるが、南は根が深く長辺1m級の花崗岩を、東に向かって低い石垣状に積んでいる。この石材は各所に割石面をみせ、幅7cm内外の矢穴を残すものもある。遺存部上端の最高所は13.75mで、南側基部のレベル低下にもかかわらず、構築物がのる上部に水平を造りだす構造とみられる。基礎石組2は石組1に対し約0.8m隔てて平行する類似の石組で、確認部での東隣石組1より基部が深く、低石垣状を呈す。東面がよく整えられているが、西にもやや小さい石材で面を整え、幅0.55mを画している。絵図との対比では、表書院玄関から南北に続く部屋のうち「徒士番所」の東側の長床の西縁と東縁の仕切線の下部に比定でき、壁など、基礎地形のための地覆状の石組と考えられる。この一帯は、元禄絵図では青色彩色。

基礎列石1〔表書院玄関棟〕（第10・11図）

基礎石組1の北を起点に東に延びるもので、最大70cmの長辺を東西にとって緻密に並べた石材が5個、長さにして2.95m（1間6.5尺なら1.5間）を検出した。南に面をなして配置され、石材は花崗岩であるが、割面はあまりみえない。この列石からは石組構1にかけての旧地表には明褐色（橙）色の漆喰が張られて残っており、東端石の一部に貼りついている。列石上面の高さは13.6mから13.5m。絵図では、母屋から東につきだす格好の「供こしかけ」の北辺壁に比定できる。

S K 250〔表書院玄関棟便所〕（第10・11図）

基礎石組1の東にある、南北2.2m、東西1.4mの長方形の土壇で、確認できた深さは0.5mを測る。第11図の断面図に示されるように、掘り方の底面は不整形であるが、暗褐色の細砂バイラン土で埋めて、水平面を造り出している。この上面には部分的に木質が遺存し、幅1.0mほどの木箱か樽などが



第9図 上層1区全体図 (1/160)

置かれていた可能性があり、その一部内底面には白色物質が残っていた。木箱想定部の側部には、混入物の少ない暗褐色のバイラン質細砂があって、固定のための置土の可能性が考えられる。木箱想定部の埋土は暗褐色の細砂主体で、汚染の少ない箱側の埋土に対し明褐色の漆喰や瓦片を含むことが対照的で、本造構造後からの埋土と判断される。この遺構は、絵図にみえる玄関棟裏から東に張り出す「供奉所」の南にあり、2基一連となった便所に比定できる。想定できる木箱ないし構は便槽であろう。便槽が单一で2基分共通か、それぞれ単独かは、特定できなかった。

敷石1ほか（第10・11図）

SK250の南東にあって、石組溝1の西から延びる長さ3mを確認した。石組溝1の最上部石材の隙間を埋める石材に端を発し、明らかに溝の構築に遡るものである。石材は明瞭な割面を伴う最大長辺30cmの花崗岩で、溝から2.3m分はやや北に張り出す傾向をみせながらも南北の縁を整えた幅0.6mの敷石としての感があるのに対し、以西は幅や走行、それに端辺の筋の通し方が乱れ、二次的な補修か改造を受けている可能性がある。敷石面の高さは東端の13.0mに対し、西が10cm高くなっている。絵図ではこの場所は空き地となっている。この敷石の特に東側の状況は、例えば土壌の基礎に類似するものがあり、不明門前から表書院玄関部東裏を空間的に遮蔽する塀などがあったかもしれない。この敷石の北の旧地表面には2cm内外の円礫が少量認められるほか、敷石の一部にもかかる格好で、漆喰が遺存していた。漆喰は明褐色（橙）色が主体であるが、黄灰色のものがブロック的に認められる。大きな擾乱塊の東にみえる石材1個は、一見礎石状であるが、この漆喰に覆われる。絵図では礎石状石材に対応する構築物はなく、下層期のものである可能性もある。

S K 251 [表書院南東便所]（第10図）

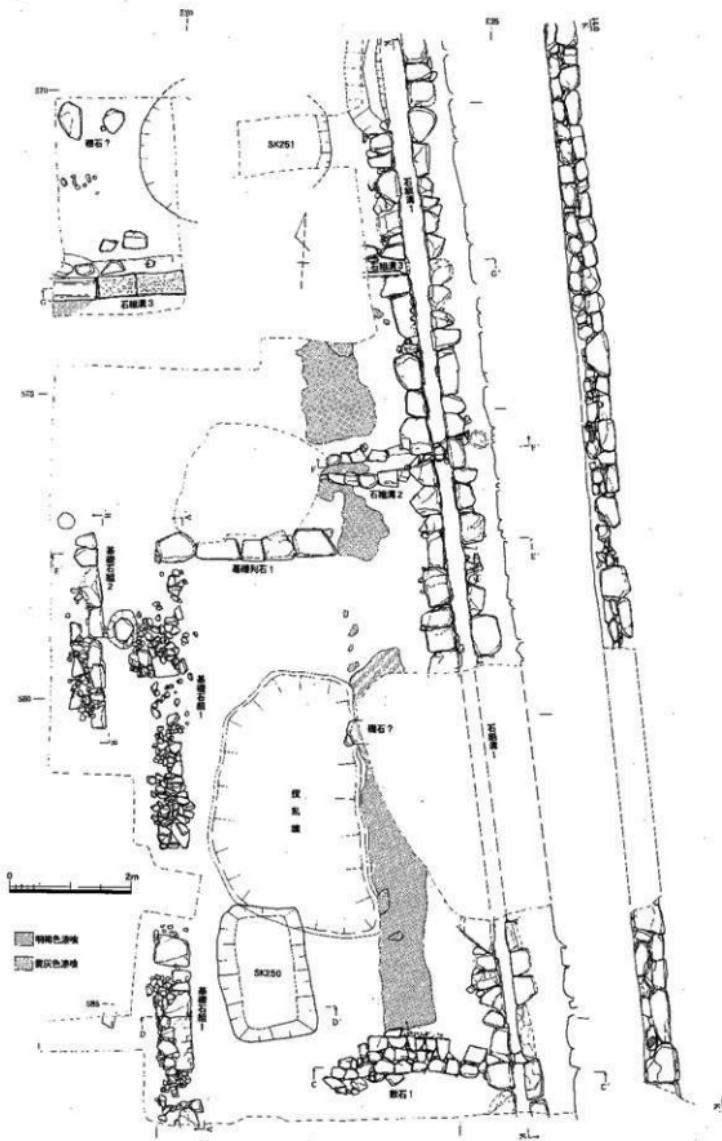
III-11トレーナーの中部にある直径3mあまりの円形土壌である。深さは0.7mで、埋土は暗褐色系の細砂バイラン土で、幕末を下限とする瓦や明褐色系の漆喰片を多量に含んでいた。絵図ではこの土壌の西部にかかる3つ目続の便所があり、恐らく表書院破却時に便槽部が擾乱された上、ゴミ投棄壙になったものであろう。この土壌の西には礎石状の石材が2~3個所在する。上面の高さは13.9m内外で、幕末絵図でいう裡玄関北の板張部に相当するが、柱の特定までは困難である。

S X 202 [表書院南東便所]（第12図）

III-11トレーナーの北端で確認されたもので、直径43cm、高さ45cmの土師質無頭甕を正位に掘えたものであるが、現状では垂直にたいし20°ほど北に傾いている。口縁は肥厚するが内面は体部から変化がない。その上縁の高さは13.85mで、これがほぼ対応する生活面レベルである。関連するとみられる礎石状石材を2個伴う。甕内部にはカルシウム分などの付着は観察できないが、絵図の玄関奥の棟の北東角にある便所にあたり、その便槽と上屋の礎石の一部と判断してよいだろう。

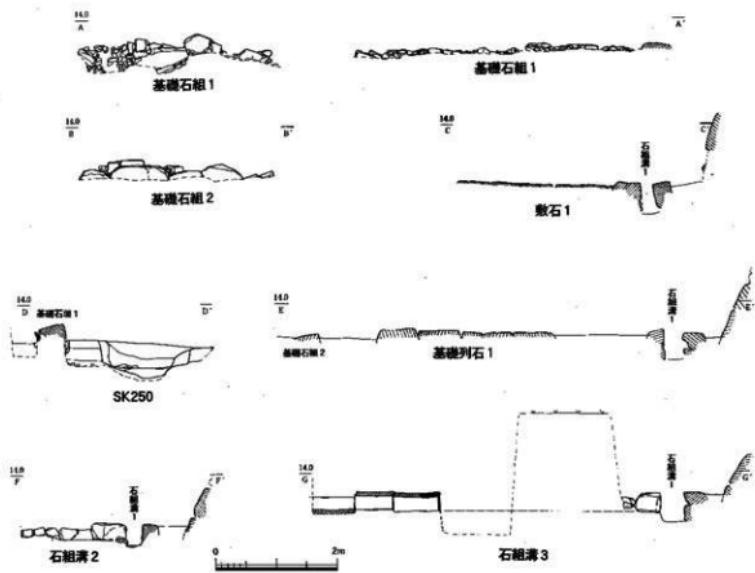
石組溝1・2・3・4（第10・11・12図）

石組溝1は木段石垣の根に沿って南北に延びる幹線排水溝で、側壁は平均的に40cm内外の花崗岩石材の長辺を横にとって2段積みしたものである。石材の基本はあまり割石面をみせず自然石的であるが、溝3の合流部南側などでは矢穴を伴うものもあって、補修や改造があったことを示している。構築時の掘り方は幅1.3m、深さ0.5mで、裏込石材はほとんど施されていない（第107図参照）。溝の内法は0.3m内外、側壁高は0.5mで、底面は暗褐色微砂バイラン土の置土で、敷石などは伴っていない。底面の高さは北縁の13.3mに対し、確認部南端が12.8mと南に流す構造である。ただ、溝内の埋土は大別2層となっており、上層は大形の瓦片などを含み表書院破却時のもの（=B層）と判断される

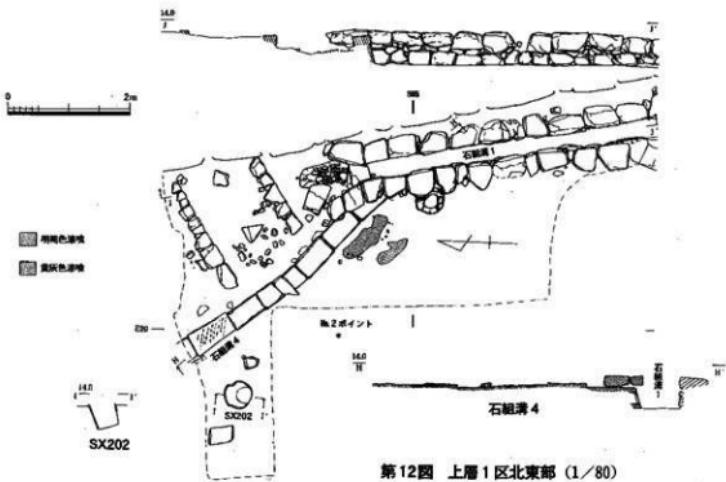


第10図 上層1区南東部 (1/80)

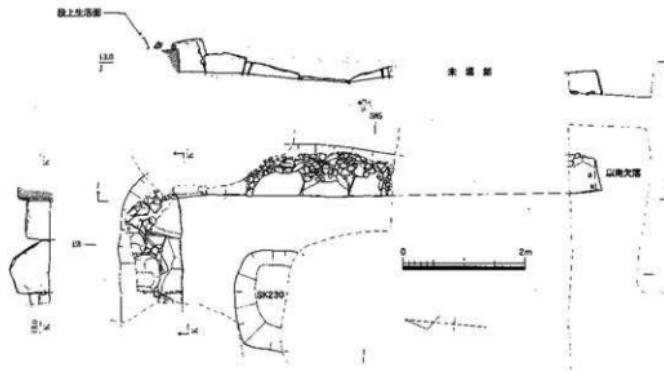
1. 上層1区



第11図 上層第1区南東部造構立面・断面 (1/80)



第12図 上層1区北東部 (1/80)



第13図 上層1区段石垣1(1/80)

のに対し、下層は遺物が少なく堅致であることから、およそ一段目石材の上端の高さといえる下層上面を底として機能していた時期があったようである。なおこの溝の延長は不明門の南からは、いまも現役である。石組溝2は長辺30cmの石材を一段に組む枝溝で、合流部の溝1内には石材が施され、そのレベルから石組溝1を半分埋めて使った段階に対応している。西側の底部は明褐色の漆喰張り。西から延びる石組溝3は専用の豊島石材を正位、あるいは逆さまに置き、土面を底とした暗渠で、溝1との合流部では花崗岩材と割れた豊島石材を左右ちぐはぐに用いるなど、場当り的な変則構造である。石組溝4は溝用に作られたくりぬき式でホゾ付きの豊島石側底部材に専用の板状蓋を渡すという正規構造を保った暗渠で、溝1に合流する。暗渠を覆う石組溝1の西側石材2つも豊島石で、石組溝4が石組溝1構築当初よりも遅れて付加された可能性がある。この合流部北縁に面をそろえ、3段の石積が石組溝1を塞ぐ。これが廃絶直前の溝端となるが、古くは、その背後に5cm内外の円礫溜り、さらに北には石段状に列石が最低2条あり、溝1の両側壁自身もこの円礫や列石の伸展に応じるようにハ字に開いて終わる。判然とはしないが、石組溝1への集水を意図した構造とみられ、北方は本段石垣の鉤折部となることも関連し、石組溝1は本段からの落水排水も念頭においたものかも知れない。なお、絵図では、こうした排水体系についての記載は完全に削愛されている。

段石垣1(第13図)

本区内では、上層2区から直角に折れる南北部の長さ3.5mを確認した。表書院破却時に上部が潰されたようで、最下段のみが遺存していた。南はさらに続いているように観察されるが、近代以後の削平で失われている。石垣前面は高さ12.8mの対応生活面までしか掘り下げていないが、石材の根はさらに深くまで及ぶ。最大検出高は0.7m。石は花崗岩で表面をノミで平滑に整えたいわゆるキリイシであるが、横メジがかなり乱れる積み方である。裏込はこぶし大の円礫が主体で、大きめのものは割石礫である。絵図では、この段石垣の東西部は線表現で、上に載る壠を示すとみられるが、南北部は表書院玄関棟の西側外壁が載ることになる。石垣前のSK230は幕末頃までの瓦片などを埋める土壤で、表書院破却時のゴミ穴の可能性が強い。

2. 上層2区（第14図）

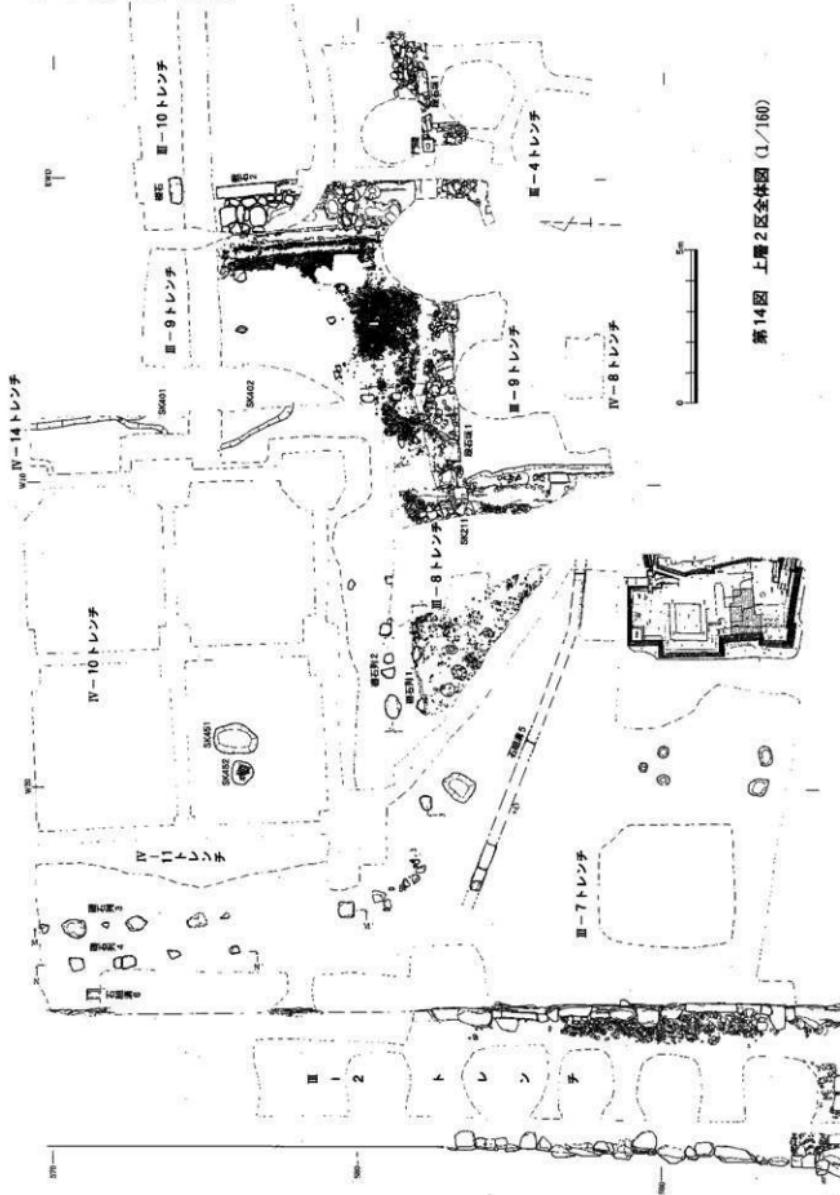
段石垣1（第15・16図）

石垣は、前述の1区の角を起点に18.7mは東西に延び、ここで再び南に折れる。東西部の軸は、恐らく1区付近での本段石垣の軸に規定されて、これと直交する。また南北部は、上層6区の中の段西縁の石壘と平行するといえ、両者の内角は95°になる。表書院破却時に破壊されているため、最下段石材すら失われ、裏込石材や破却時の掘り方が段として確認できるに過ぎない箇所もある。東西部は実際には單一直線でなく、半ばに張出部をもつ。つまり1区の角から8.8mで南に直角に折れ、西の未掘部にも組み合う角が予想され、後述の通路の敷石2ほかの位置から割りだして、東西5.0m、南北2m内外の張出が想定できる。この上面は、南が3cm内外の円礫が散布する石垣前面の生活面まで下がるのに対し、北が本体石垣上の生活面向かって高くなり、最大長辺25cmの角礫や円礫が検出されるから、階段が存在した可能性が高い。西の張出部内角予想部から東西部西端までは、6.5m。張出部東の本体石垣部は、最大2段、前面生活面からの高さ0.5mが遺存し、最大長辺90cmの直方体状の花崗岩割石材を横に積み間詰石も伴う。裏込は長辺50cm以下の角礫主体で、こぶし大の円礫も混じる。これに対し張出部東面は、石垣面がノミできれいに面取りされた方形のキリイシで、1区の状況に近似する。また張出部の西では、前面が割れて欠損する東西部西端角の石材の西に、面を揃える控えの石材がもう1石だけあり、両者とも最大長を縦にとる荒割石材である一方、角を上に向け方に水平を作り出さない石材もある。南北部は、最大長辺1mほどの直方体形の割石で、幅8cm内外の矢穴をもつものがあり、横に積む。このように石垣は、部位による偏差がかなりあって、何度か補修・改造を受けた可能性が高い。なお西角部付近では、石垣構築に先立つ溝状掘り方があり、上面で最下段の石材を受けるための長辺20cm内外の割石群が検出された。

門礎と敷石2〔平重門と通路〕（第15・16図）

段石垣の上、高さ13.8m付近の上層期生活面では、遺構が良好に遺存していた。張出部の付け根では、本体石垣面の延長に南面を揃えて、門礎とみられる花崗岩加工石（ビシャンウチ）材が1個が確認された。東西2個一組の内の東側と判断される。上面は東西40cm、南北36cmで、石垣と張り出しに軸をきっちり合わせた長方形で、その西辺は張出部の東側面から通路側0.5mの位置となる。礎石の高さは36cm、断面形は下腰れとなり、下には厚さ12cmの盤石をかましている。礎石上面のくり込みは、東西15cm、南北10cm、深さ5cmで、中央から通路側にやや偏っている。西門礎は公園植栽の関係で確認できなかったが、北の敷石中心線から算出すれば、門柱の心々は3.6m（1間6尺で2間？）に想定できる。二つの門礎を結ぶ線以北では確認された敷石2は、かなり破壊されているが、北東部では長さ194cm、幅40cmの花崗岩のノミキリ延石が遺存し、他部でも、底面側部に長辺20cm内外の割石材を伴う延石抜取痕とみられる溝がある、敷石の全体幅2.0mが計測できる。南北確認長は6.5m。延石間の幅1.2mには、最大長辺66cmで割面を伴わず丸みをもった花崗岩石材が延石と高さを合わせて敷きつめられ、特に北部では中央石材が両側より大形で長軸を横にとっていかにも通路らしい。石の隙間に明褐色の漆喰が充填されているが、石材下には及ばず、敷石構築に遅れる所産の可能性がある。敷石上面は、南に向かって2°ほど傾斜する。

絵図では、段石垣上の堀が切れて「平重門」やその門礎、前面の階段、また通路が、遺構の位置に描かれている。特に、元禄絵図や幕末絵図では模式化されてはいるが延石間の敷石表現まである。



第14図 上層2区全体図 (1/160)

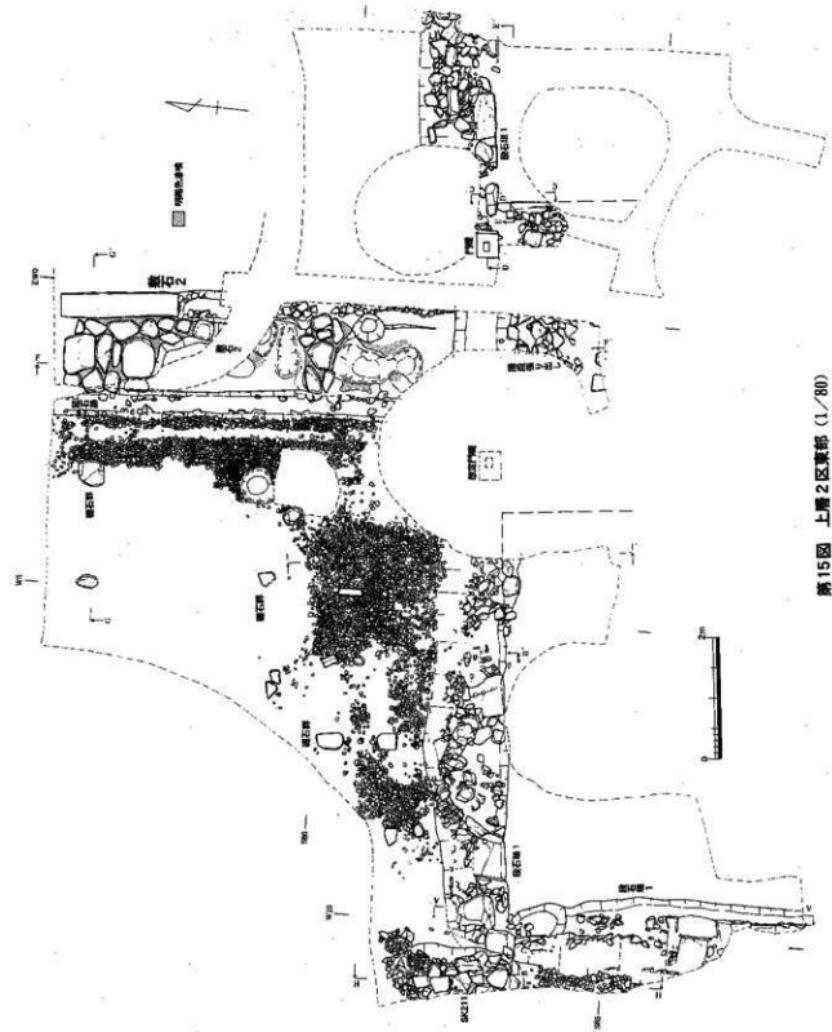
玉砂利敷きと礎石群【表書院南西棟と庭】(第14・15・16・17図)

段上部では、玉砂利敷と礎石群が広範に確認された。玉砂利は敷石2西縁から、礎石列1以南で検出された。砂利は総じて、火成岩の円錐で、長辺最大8cm、平均4~5cm、遠目には黒を呈すが、個別は角味を残す不定形のものや濃暗青灰色のもの、堆積岩も混じる。残りの良い場所では、折り重なって最大10cmほどの層を成す。及ぶ範囲は礎石群と住み分け、Ⅲ-8トレンチでは礎石縁に対して微妙な段をなして深い位置から砂利敷が始まる状況が観察できた。そこでは、礎石上面に対し砂利層下面は0.15m低い。砂利敷は屋外に限られたといえよう。礎石とみられる石材は合計25個ほどで、ほとんどは花崗岩である。大きめの石材は野面傾向が強く、小さなものは割石の傾向をもつ。東では敷石2東辺に軸を合わせて1m程北に長辺85cmの大きなものが1個ある。敷石2の東では、抜取穴とみられる土壌を入れて5~6柱分とみられるやや不規則なまとまりがある。その南の礎石列1の東の2石は心々で1.55m離れ、西部で確認の3石は心々で1.65m、3.3mの配置となる。この西3.3mを分かつ1石が、未掘部に予想され、1間 = 1.65mの数値が読み取れる。その北で軸心0.9m離れて平行する北の礎石列2は、礎石列1より一回り大きな花崗岩石材を用い、最大のものは長辺75cmにおよぶ。東から順に心々で7.5m、1m、0.4m、1.1mと不規則な間隔でならぶ。一方、西側で石墨に平行して南北にならぶ礎石列3は、特に北側で長辺80cm級と20cm級の石材が交互に配列、北から順に心々1.0m、0.98m、0.97m、1.94m、0.97m、3.92mとなる。擾乱による石材の欠落を見越せば、一間1.96m(6.5尺)の等間隔にならぶ5間分の大石と、大石間に半間に割る小石が整然と配置されていた様である。その西に軸心で1.1~1.2m離れてほぼ平行する礎石列4は、礎石列3より石材が小さく、北から心々で1.33m、0.34m、1.5m、2.0mとやや不規則に配列される。北から2石目と3石目は接し合い、唯一4石目は豊島石である。なお、敷石2の西南部砂利敷内に、幅15cm、長さ38cmで上面が平坦な豊島石材が据えられているが、これが礎石であるか否かの特定はできない。

絵図と対比して、敷石北東の礎石は、敷石から表書院に上がる木製階段脇にある本柱に相当する。ちなみに、階段上の「拭板」を横切れば、幕末絵図で「梅の間」と注記された三十六疊敷きの大広間があった。その他の礎石は、表書院の南西棟に関わるもので、敷石2西側のまとまりは微妙なところでの柱の対比は不確定であるが、幕末絵図に「横の間」と注記された南東角の二十疊の部屋と南に付く縁の東柱、列石2は東西に延びる「南内椽」があった母屋南縁の柱列、列石1の西部はそれから南に張り出す瀬縁の東柱に対照できる。礎石列3は、幕末絵図で「藤の間」・「松の間」と注記された部屋のある母屋西縁での本柱と東柱の交互柱列、列石4は西に張り出す瀬縁の東ほかとなる。

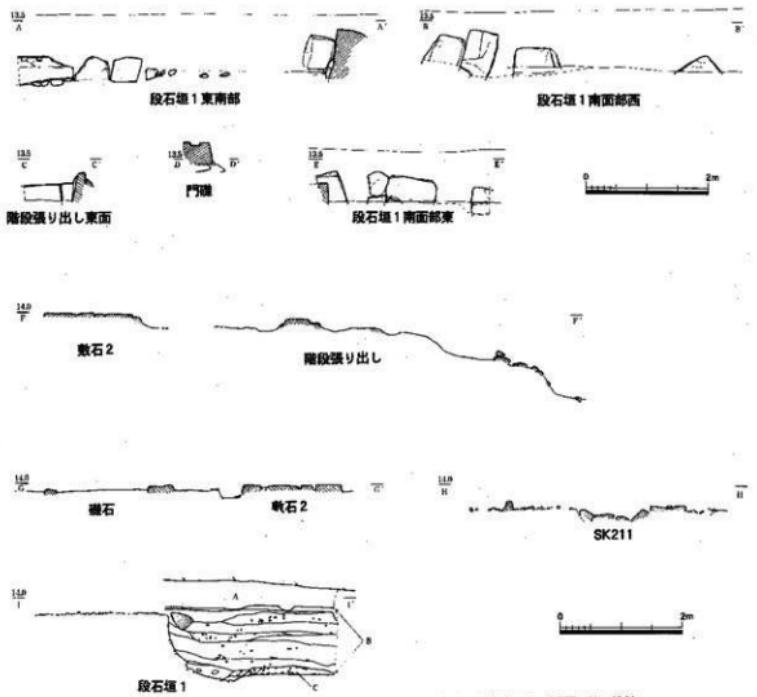
S K 211・石組溝5・石組溝6ほか(第14・15図)

SK211は南北2.0mの土壌で、長辺40cm級割石を玉砂利に面を揃えて埋め戻すが、意味不詳。埋土に棧瓦はかを含み幕末のものであろう。石組溝5は豊島石くり抜の専用側底部材に蓋板材を架け、地中に埋め込んだもので、確認の東部と西部間に折れが予想される。東部での蓋石上面の高さは、生活面から0.3m内外の深さにあって、西部に対し0.3m低く、東に流れて段石垣1の南北部に接げていたとみられる。この溝5の暗渠には漆喰は伴っていない。北西部で石壁内側石垣6に平行する石組溝6は、やはり豊島石の専用材を用いるが明渠の可能性が高く、両側部を黄灰色の漆喰で固定する。走行からして石組溝5に続くものであろう。SK452は円錐を伴い、SK451は長辺1.5mの土壌。後者は幕末絵図にいう「藤の間」と「千鳥の間」を分かつ最南の本柱付近にあたる。



第15図 上層2区東部 (1/80)

2. 上層2区



第16図 上層2区東部遺構立面・断面 (1/80)



第17図 上層2区建物礎石断面 (1/80)

3. 上層3区（第18図）

本区は2区の南にあって、大手から鉄門を通って中の段に上がった際の、正面部にある。

段石垣1（第19図）

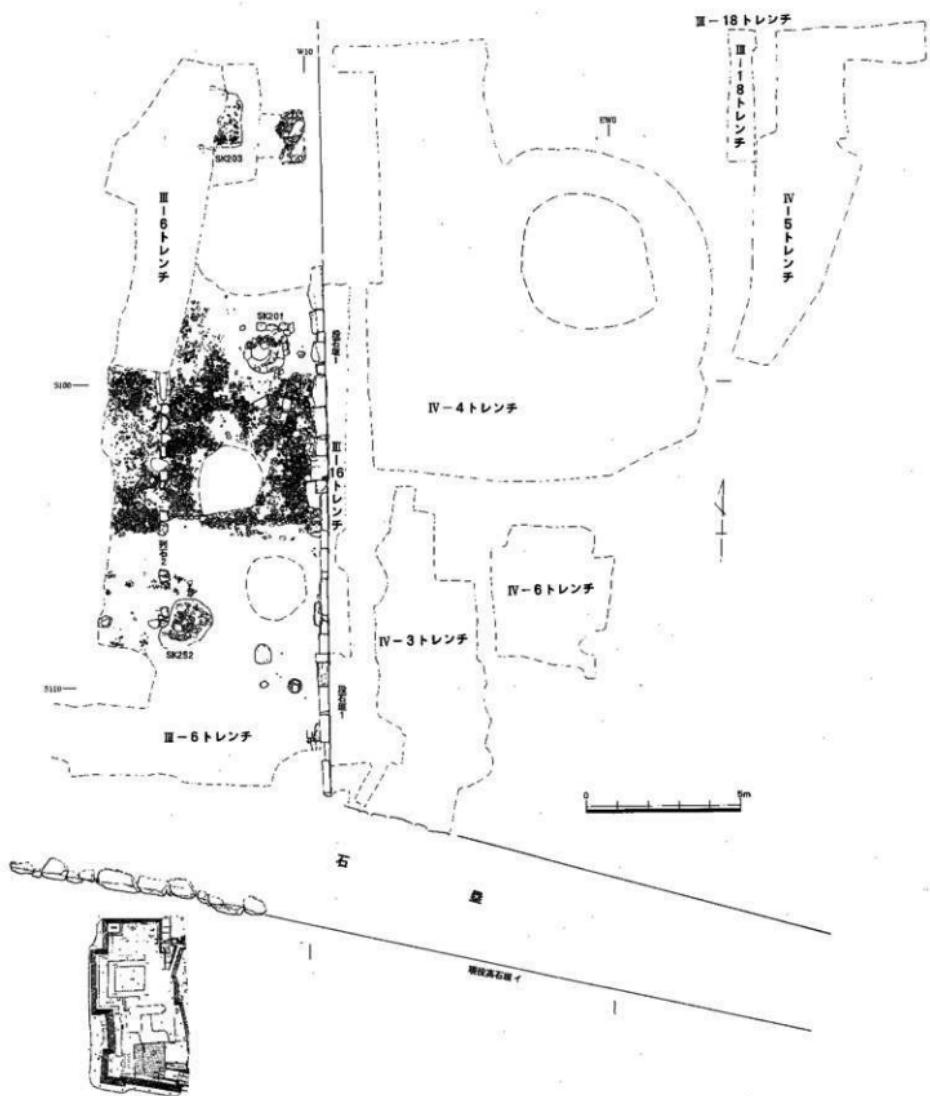
2区では埋め込まれていた段石垣1の南北部は、明治期の段石垣を境に大部分が今なお現役である。IV-3トレンチで追求した南端は、石墨の内側石垣に当てて終っており、他の部分と合わせれば、この段石垣は本段に通じる不明門前の樹形を画するものといえる。III-16トレンチでは、この石垣の前面を掘り下げ、根石を確認した。以下は、この第19図に掲げた部位について記す。石垣自体の高さは1.3mであるが、東前面の生活面は石垣の根よりも0.25mほど高いため、見かけの高さは約1mであったことになる。立ち上がりの角度は垂直もしくはオーバーハング気味である。総じて言えば、面を整えた花崗岩石材を平均三段に横積みするが、細かくは、部位によって様相を異にして、数次にわたる修理・改造の可能性が考えられる。便宜的に6つの部分に分けて記せば、その第I部分は最上段の南から3石目を除きその左右に展開する一連の延石である。一見うまく収まる石材であるが、転用材の趣が強く、下の石垣に対して連續性が乏しく、平面的にずれる部分や薄い土砂を挟む部分があって、最新相を呈す。幕末でもよいが、戦後までも念頭に置く必要があろう。同類のものとしてS100mラインがかかる最上段石材もあげられる。第II部分は最上段北端の4石で、その上角から20cm奥の面取り調整端に段を割り出すコブダシの特徴を持つ。また、下には詰石を伴い、内には豊島石のものが含まれる。第III部分はS102mライン付近の最上段の3石、ないしは主に以北の2段目石材を加えたもので、長辺1.0m以下で比較的直方体状の石材を横に積むが、少量の詰石を伴い、次の第IV・V部分より、主石材間の密着度は低い。石材に矢穴を伴い、粗削面をみせるものがある。2段目石材は、立面図では表現されないが、下の3段目に対して平面で3cmほどせり出し、明らかに不整合がある。第IVは、最上段の南から3石目に左右の2段目石材を加えたもので、前者の表面は丁寧に磨かれている。いわゆるキリコミハギに近いが、詰石を伴い第V部分ほどには緻密感がない。第V部分は、およそS111mライン以南の残りの部分で、他に対し石材が大きく、最大で1mを越える。しかも直方体状でノミで面調整を施すだけでなく、磨き石を一つ含む。詰石も少なく、最も緻密な部分である。特にS104mラインの付近の最下段石材と右上石材との詰石を介した接合は巧みである。幅が10cm程の広い矢穴を残すものが3石含まれる。第VI部分はS111mライン付近にある明らかな不整合縦界線以北の最下段で、整った横積みではあるが第IV・V部分に比べれば、石材の形は不揃いで、面調整も粗削り面をみせるものが主体で、最も粗く見える部分である。

石垣面の状況だけでなく、場所による偏差は、部分的に確認できた石垣裏での、本体石材の奥行きや裏込状況などに付いても認められる。絵図に線表現される塀が石垣上に想定できるが、後述の段上遺構面のレベルからして、上に整った水平を作り出している第V部分上端を石垣頂とする時期があった可能性もある。なお石垣前面の各トレンチでは明確な上層遺構は確認できず、絵図に合致する。

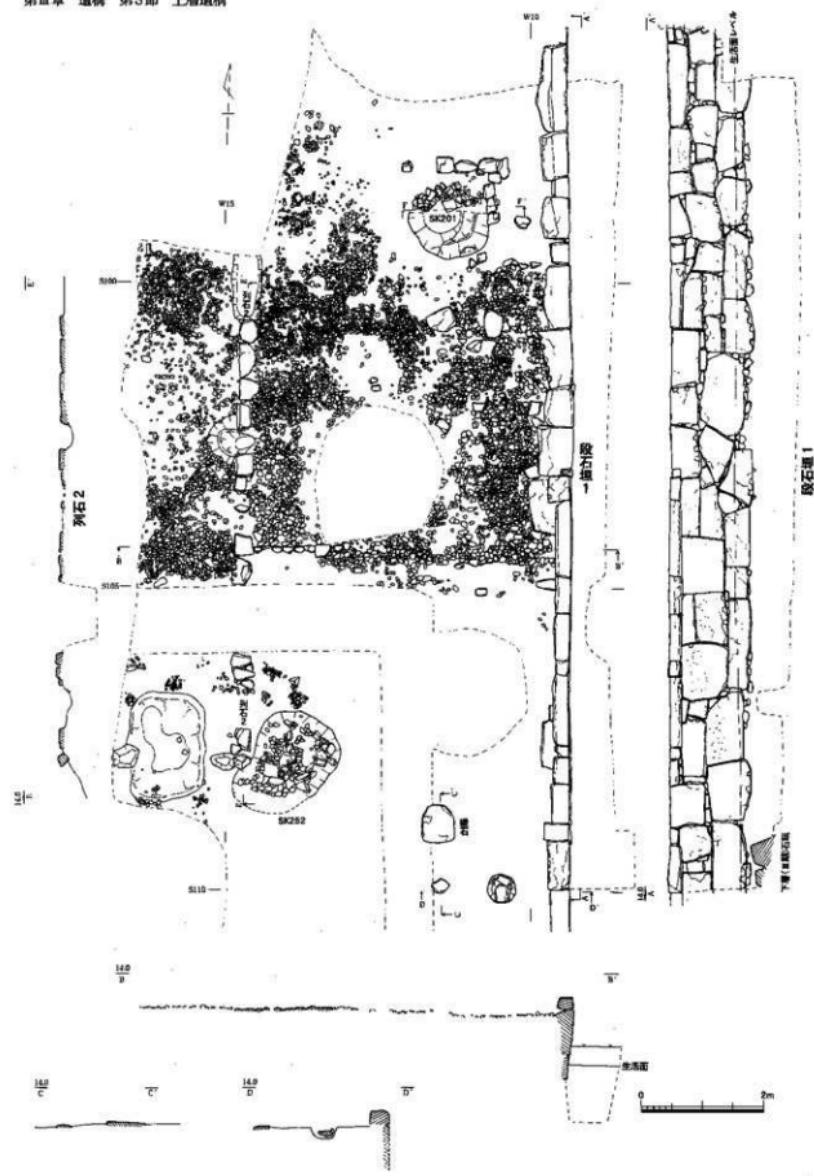
玉砂利敷・列石2・礎石【表書院南西棟南庭・塀・年寄中休処】（第19図）

段石垣1の西側では、高さ13.4～13.5mを測る生活面に伴って各種遺構が検出された。玉砂利敷は、基本的に2区から続くものである。列石2は長辺60cm以下の割石的な花崗岩を、長辺を主に縦にとつて1段、段石垣1に平行して南北一列に配したもので、特に西縁線が面をなす。この西縁から段石垣面までは5.5mを測る。石材の欠落部もあるが、抜き取り壙が確認される一方、検出部を越えてさらに南

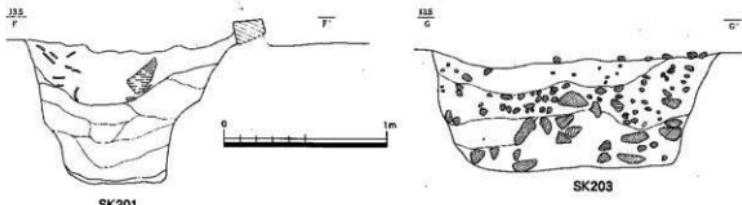
3. 上層3区



第18図 上層3区建物全体図 (1/160)



第19図 上層3区西側段石垣1と段上部 (1/80)



第20図 上層3区SK201・203土層断面 (1/30)

北の伸展が予想される。S104.4mラインの石材から、心々で1.3m東にやや小振りの類似石材が1石だけあって、両者の間には長辺20cm足らずの円礫6個がならび、以南はしばらく玉砂利がとぎれる。その東延長の段石垣裏でも大きめの円礫が列をなし、これが玉砂利の南端となる。一方、南の列石2の東西の隣接地では、少量ながらも玉砂利がおよんできている。この玉砂利欠落部では、礫石的な石材が2~3確認できた。最大のものは60cmの花崗岩石材の長辺を南北にとる。この南に、心々で約1.0m離れて20cm大の東石の石材があり、さらに1.0m東に20cm級の石材2個を据えた直径0.45mの土壙が検出された。周囲には未据部や旧制中学の建物基礎がおよぶこともある、検出遺構だけでは全貌はつかみにくい。絵図でのこの位置は、段石垣1上を東辺として南北に長く三部屋からなる「御年寄中休処」と注記された離れがあり、検出遺構はその関連とみられるが、柱の特定までは難しい。列石2のほうは、離れの立つ敷地をとり囲む区画の西辺をなす塀が線表記された位置にあたり、その下部構造と判断される。この西辺塀は元禄絵図にはまだなく、寛保絵図から示される。

SK 201【便所】(第19・20図)

直径0.3m、深さ0.9mの円形土壙で、断面は逆台形を呈する。埋土は、下層が暗褐黃灰色細砂で明褐色の漆喰ブロックを多く含むのに対し、最下の薄層は微砂でやや異質な存在である。上層は、豊島石材や瓦片を顕著に含む。この土壙の北辺には長辺30cm級の花崗岩割石材による列石があり、類似石材の分布から1.6m四方程度の区画が想定できる。また別に、土壙中心から1.6m程南には列石2に似る石材2個が東西に確認でき、そこでは玉砂利も東西直線状に大きくなる。絵図では塀で囲まれた区画内の北端にあった便所に対比でき、土壙は桶などの便槽を据えていたもので、表書院破却時に埋められたもの、周囲の列石は便所の外壁、南の2石は区画本体の北側塀から南に派生し、さらに東に折れる目隠し壁に関わるものと解釈できる。遺構としては確認できなかった北の塀、それにこの便所と目隠し壁は既に元禄絵図から描かれている。

SK 203・SK 252(第18・19・20図)

SK203は南北辺1.8m、深さは0.7mの方形に近いとみられる土壙で、大小の円礫を多量に埋め込んでいる。埋土は黄褐灰色のバイラン細砂で、最上部は周囲の地表にあったとみられる玉砂利が落ち込むように含まれるのに対し、中層はこぶし大のものを顕著に含み、下層は20cm級の大きなものを主体とする。南のSK252は直径1.5m内外の土壙で、やはり石材を埋め込んでいる。こぶし大の円礫のほか、長辺30cm級の花崗岩割石を顕著に含む。いずれの土壙も、絵図では庭を示す空白部に相当する。

4. 上層4区（第21図）

本区は、中の段ないしは表書院の要の位置を占める部分といえるが、特に中部は遺構の残りが悪い。その理由として、上層期の生活面が高く、後の削平を受けやすかったこと、戦後にコンクリート建物が建てられ、その掘り方が広範におよぶことがある。これには、ここが常に動線上の要であり、また目立つところであるから、明治の破却行為が徹底されたという事を加えてよいかもしれない。

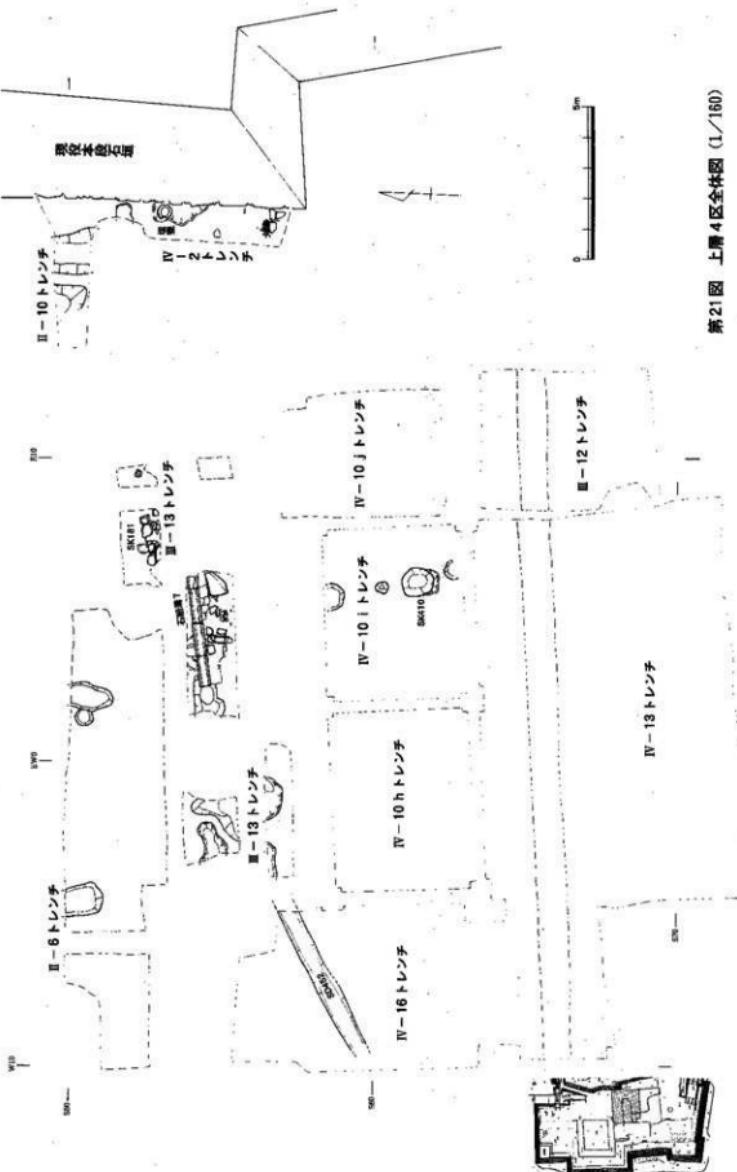
石組溝7（第22図）

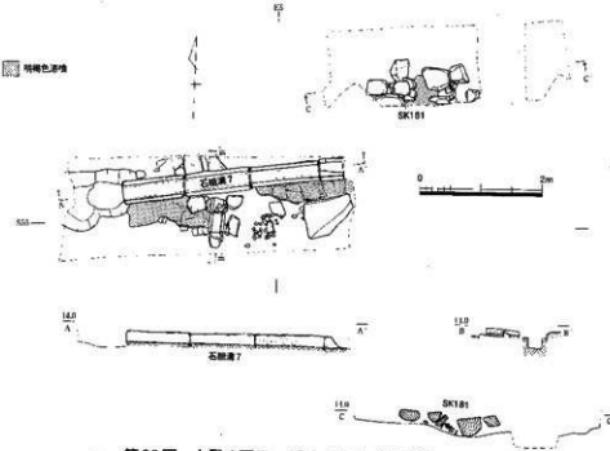
専用の豊島石のくりぬき式側底部材を組んだもので、石材4個、長さ3.6mを検出した。走向は、東西であるが、東が北に振っている。西は元来さらには続いているとみられるが欠損し、代わりに抜き取り痕とみられる土壌が検出された。東も検出部の隣は既に石材が失われている。検出材4個の両端は、一部の側部を除き原形を保ち、隣の石材との接合のためのホゾがよく残っている。こうした豊島石の溝側底部材は、断面コの字をなす溝小口の内面側を凸に仕上げたものと、同じく外側を凸にしたもののが組み合るようにホゾを切っており、ひとつの石材の両小口は常に逆の形態をもつ。ここでは、溝の内面側を凸にする小口を常に西にむけて配列していた。長さは、西のものから順に104cm、108cm、114cm、38cm、幅は38~34cmの微妙な振幅をもち、高さは24cm内外。長さ38cmを除けば中の段で確認される同様の溝材の中で平均的なものである。側部の厚みは7~8cm、底部の厚みは6~7cm、ホゾの厚みは各々その半分、ホゾの深みは2~3cmとなる。側部外側（一般には底部外側）にはノミ痕を顯著に残すが、底部を中心にならば比較的平滑に加工されている。溝の底部内面は検出部の内で東が8cm低く、排水は1区の石組溝4の暗渠に到達するものと考えられる。溝の側部では、西から2石目の南側部上縁に溝材の底部内面を合わせる格好で、枝溝が取りついている。同様の豊島石材からなるが、幅が24cmでかなり小形である。枝溝を挟んで東西には25cm級の平石が面を揃えて3個、その東にも0.6m離れて同様石材が1個、さらに0.3m離れて東には長辺80cmの花崗岩石材がやはり面を揃えて配置する。溝の北でも、枝溝に対峙する位置で溝側部に接し、かつ上面を揃えて平石が置かれている。また溝の南側では、溝石材上面から僅かに低い高さに明褐色の漆喰が張り床をなしていた。溝縁から0.4m幅で、溝材と平石の一部を諸共に固定し、下に瓦片を塗り込める部分もある。石組溝7自体は、他の溝類と同じく絵図には示されないが、表書院の南東の棟の北辺の本柱列をさらに2m程北に抜けた位置にあたり、かまどのある棟との繋ぎの構造をなして幕末絵図に「台所板の間」とされる部分の床下に相当し、溝の走行は南東の棟の軸に規定されているといえる。特に枝溝は、寛保絵図に示されて給水管と判断される朱線表現が取りつく水桶様の円形部に対応し、3つの平石などは例えば水桶の台座であった可能性もある。

S K 181・S K 410・S D 452（第21・22図）

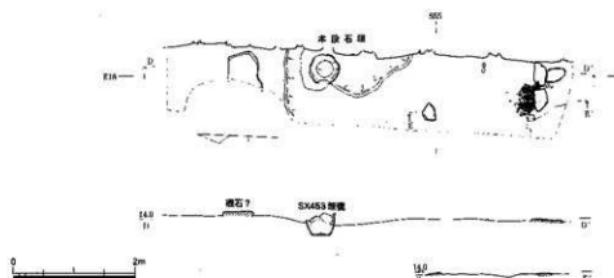
SK181は規模を確定し得ないが、深さ0.4mの土壌で、暗褐色細砂の埋土には角礫、瓦片、明褐色漆喰片が顯著で、廃材処理場の感が強い。SK410は、埋土上部を除く共伴遺物は下層期のもので、上層の浅土壌に図のような下層上部の土壌が重複していた可能性が高い。その南と北には、より小さくまた浅い土壌が3基検出された。SD452は、幅0.6mで、本来の深さが0.5m程に見積もれる溝である。平面図では石組溝7の延長とも思えるが、その抜き取り痕とするには底面が低い。絵図を対照しても、走行の方位を含め、関連性は読み取ることができない。周辺にあるその他の大小土壌も厳密な意味は不明であるが、表書院破却時の攪乱構造と判断される。

4. 上層4区





第22図 上層4区III-13トレンチ (1/80)



第23図 上層4区IV-2トレンチ (1/80)

S X 453ほか【便所?】(第23図)

北東部の本段石垣下のIV-2トレンチは、遺構がよく残っていた。SX453は、本段石垣に接するよう、胴径48cmの備前焼の甕を正位に据えるもので、推定器高約65cmの下半40cmを生活面下に埋める。胴部上半や口縁は既に失われていた。甕の内面には、石灰層が顕著に形成され、一般的に考えて糞尿が長期にわたり溜められていたと判断される。甕から0.9m離れて北には長辺70cm級とみられる花崗岩の礎石状大石材が1個、また甕の南南西1.5mに20cm大の平石が1個、さらに甕の南3.2mでも長辺30cm級の平石3個が接し合う。南の3石のうちの2石は、本段石垣に当たる直交列をなし、その西側石の北0.3m幅には3cm以下の非常に細かい玉砂利が敷かれている。絵図では、北の大石は南北に立つ離れ長屋〔供部屋〕の南東角柱か南接の扉の下部構造に対比できるが、以南は空き地で便所の表現などはない。それでも埋甕は便槽と考えたいが、石垣に近過ぎて上屋は石垣に寄りかかることになる。あるいは二次的な肥溜めも視野に置くべきかもしれない。

5. 上層5区（第24図）

本区は表書院北東部を占める台所のある棟の一帯に相当する。中央部には戦争で焼けた旧制中学の廃材を埋め込んだ巨大なゴミ穴が擾乱をおよぼしている。

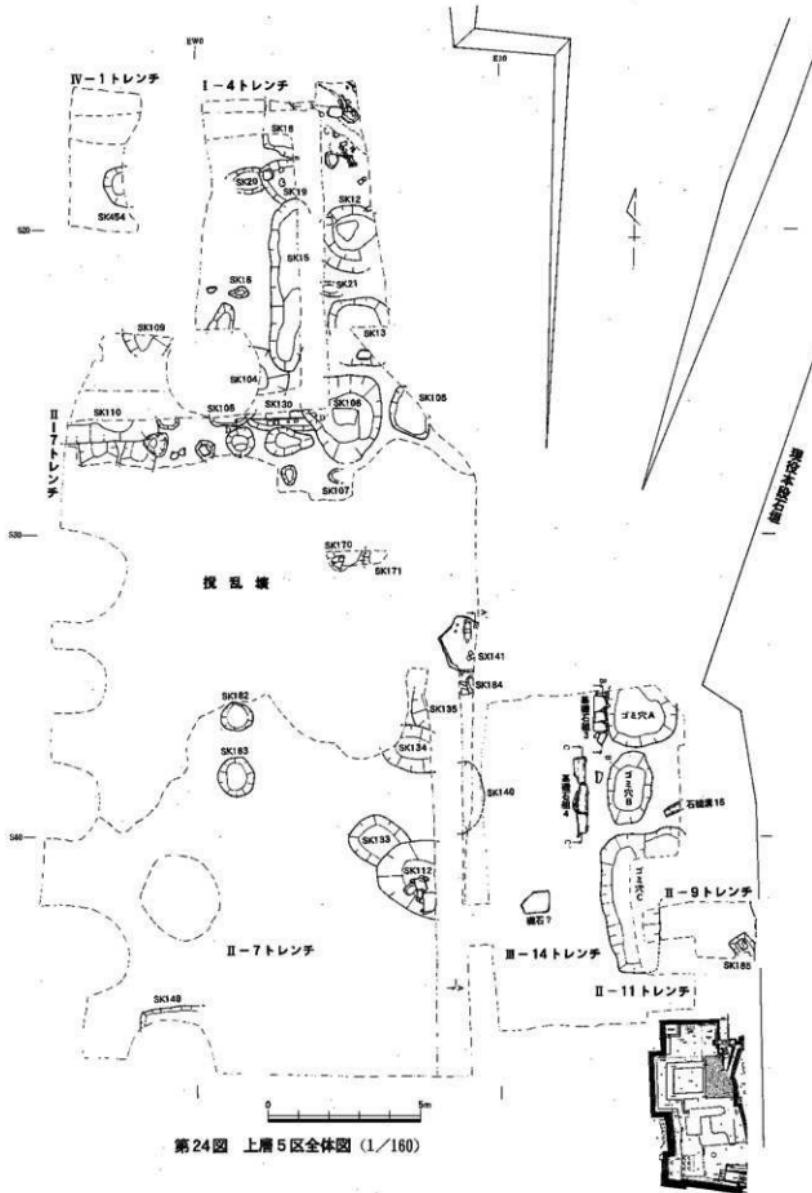
S X 141・S K 184【台所カマド・ゴミ穴】(第25・26図)

SX141は高熱で熔着・硬化した床が断面皿形になる構造体で、西側を破壊されているが、確認長は南北1.9m、東西1.3m（以上）を測る。第25図に示されるように、少なくとも西の破壊断面では、床は基本的に2層からなり、その南端では各々が別の傾斜をもった端面をもつことから、両層は焼けた度合いの差ではなく、古い段階の床面が下層上面であって、遅れて床のかさ上げが行われた状況が窺われる。床下層は灰白色を呈し、厚さは6~12cmで北が薄く南が厚い。上層は、全体におよぶ下部と、北側だけの上部に分離され、これ自体も時期差をもつ可能性がある。下部は暗灰褐色でやはり厚さは6~12cmで、北が薄い。その上部は下部の薄さを補うように最大厚は14cmで灰褐色～灰色を呈す。上層下部以下の最深部は北に片寄っており、床面の傾斜は北が急で南が緩い。床上層の上面最深部の高さが13.60mに対して、南北の端部は13.83mであるが、これは周囲の生活面のレベルよりも30cm程低い。床下のD層は暗黄褐色微細砂で、床下面から20cmほどは熱で赤変している。床の上層上面では、北よりで25cmの幅をなして南北に豊島石数個が仕切状に配されている。最大のものは25cm四方の整ったレンガ状で、いずれも底部は床面に熔着する一方、石材上面や側面の一部にも床と同じような熔着・硬化塊を付着させるものがあって、構築時に何段か積まれ粘土で塗り込められた状況が窺える。この仕切石の左右に床の最深部がある。なお、仕切石の南などにも豊島石ほかの小石材が無秩序にあり、床に熔着している。総合すればこの遺構は、南を向くカマドの下部構造と判断できる。その床を埋めるのは、炭や焼土を含む灰黄色微砂シルトで、これを切り込んで構築されたのがSK184である。長さ1.5m、深さ0.3mの浅い土壌であるが、底に40cm級の上面平坦な石材を据えている。この遺構の埋土下層（厚さ0.12m）は黒色の純炭層、上層は張り床的な暗黄灰色シルトである。それを覆うのがはじめてB層であるから、少なくともSX141は明治維新を待たずに埋められた可能性が高い。

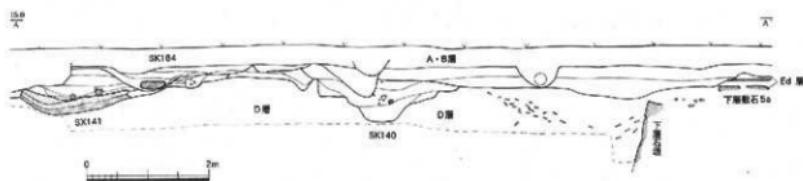
絵図と対比すればSX141は表書院の台所のカマドのひとつに相当するとみてよさそうである。最大の可能性は、元禄絵図のほぼこの位置に示された、東西3個一連で南を向く台所中で最大規模のカマドで、復元される豊島石のひだ状仕切壁はその中央と東部を区切る構造と判断できる。このカマドは寛保絵図には既に表現がなく、早くに廃絶したとみられる点も一致する。また、一帯の擾乱や未掘を割り引いても、このカマドだけが遺構として検出できたという特殊性を考える時、下部構造が他のカマドより深いことが特徴といえるかもしれない。なお、寛保絵図や幕末絵図などで近位置に示されているのは、南を向く「トウコ」（洞庫）である。

S K 140・S K 170・S K 171ほか【台所ゴミ穴】(第24・25図)

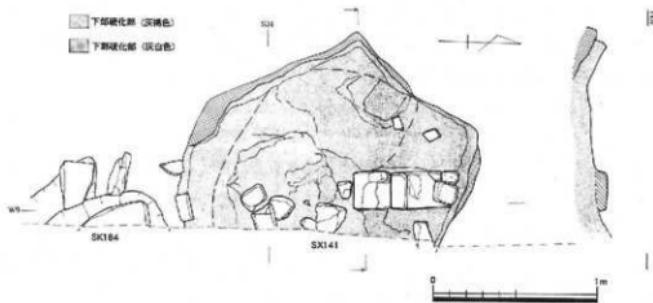
SK140は、西を擾乱されるが南北2.3m、深さ0.7mの土壌で、埋土の中下層は暗黒褐色細砂で炭粒や焼土が顯著、江戸中後期の陶磁器、貝殻・魚骨・魚鱗などを多量に伴っている。陶磁器は、伊万里の碗皿類、信楽の施釉陶器、備前の擂鉢や灯明皿、土師質の土瓶や皿類がある。貝殻はシジミ、ハマグリ、アカニシを中心に、カキ、サザエ、アワビなどで、魚骨はマダイが特に目立っている。金具や土製の彈薙玉などもある。表書院破却時に埋まったものを別にして、上層期で最もまとまって遺物を出土した遺構である。SK170とSK171は擾乱に囲まれ、かろうじて残された場所で確認されたもので



5. 上層5区



第25図 上層5区II-7 トレンチ東壁土層断面 (1/80)



第26図 上層5区SX141 (毫) (1/30)



第27図 上層5区石組断面 (1/80)

ある。規模形状不詳ながら、西のSK170は長さが1.4m以上、深さ0.4m以上で、最大30cmの花崗岩材3個を底に伴う。東のSK171も深さ0.4m以上。両者の切り合い関係は不確定。とともに埋土は、暗黒褐色細砂で炭粒を多量に含み、特にSK170からは、大量の魚骨や魚鱗、江戸時代後半の陶磁器、それに銅製の空玉などが出土した。SK135も埋土に炭灰を共伴しマダイの骨が多量に出土したが、戦後の遺物が混入し、魚骨は擾乱による再堆積の可能性がある。絵図によればSK140やSK135は、台所の南北3連のカマドの前面土間部分にあたり、SK170・171は台所傍の「碗部屋」から北に続く板の間の床下部分に相当する。先のSK184も含め、これらの土壤群に共通するのは埋土中の顯著な炭・灰・焼土で、台所に複数あったカマドに由来すると判断できる。多量の陶磁器や食物残滓の遺物が共伴するのも台所に相応しい状況といえよう。ただ、こうした台所のゴミを埋める土壤群が、恒常的なゴミ穴の累積の結果とするには、その量の少なさと屋敷内という場の性格から問題がある。SK170の位置が象徴するように、例えば台所やカマド、また建物全体の改修時など、偶然的要因の結果と考えた方が良いのではなかろうか。

南西部の土壤群（第24図）

SK112は、全長2mを越える大形の土壤で、長辺50cm級の花崗岩割石材を落とし込んでいる。そのほか、SK133・SK182・SK183・SK149もそれぞれ1mを越える土壤であるが、深さは0.2~0.3mで、余り特徴のない性格不明の土壤である。絵図を参照すれば、SK182とSK183は、「碗部屋」と「酒部屋」境の壁の南端と一間北の柱礎石の抜き取り跡に対比できなくもない。

基礎石組3・基礎石組4ほか〔表書院台所棟東外壁〕（第24・27図）

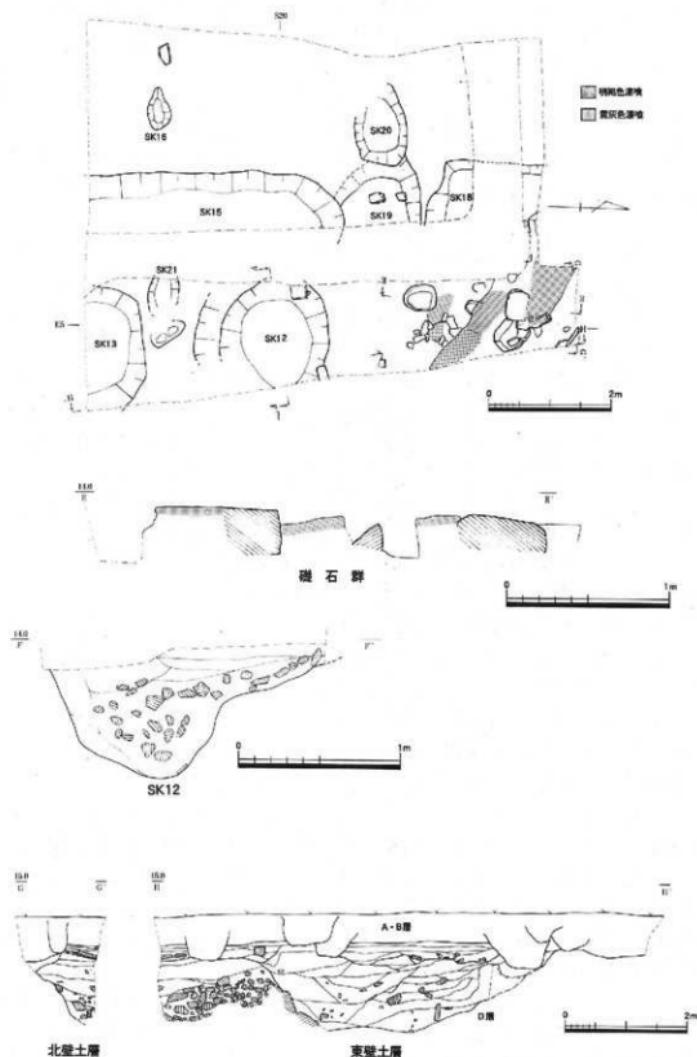
基礎石組3は最大長辺50cmの花崗岩割石を南北に組むもので、少なくとも西側は面を描える。東側は石垣の裏込状に小石をかますが、ゴミ穴Aに切られて本来は東にも面をなしていなかった可能性もある。石材上面は、北の14.2mに対し南端は13.85mと低くなる。南への伸展を含め、検出状況が本来の構造という保証はない。基礎石組4は、基礎石組3に対して主軸を0.6m西に平行移動して南北に延びるもので、最大長90cmと一回り大きな直方体状石材を横に立てて並べたものである。3石分を確認したが、東側の面を描え、西側に控え状の小石を伴う部分がある。また石材には幅8cmの矢穴をもつものがある。石組上面の高さは14.3~14.2mで、本来はさらに南北に続いていた可能性がある。その現状南端から南西2mほどの位置では、東西90cm、南北65cmの巨大な礎石状平石が確認された。上面の高さは14.2m。一方、基礎石組4の東2.5mでは、溝用の豊島石材が1石確認され、北東に続くものとみられ石組溝16とした。

絵図からは、台所棟の東外壁ないしは「御臺処口」（名称は寛保絵図）敷居が石組4に相当する可能性が高く、それならば石組3は未知の構造となるが、微妙な振幅の範囲があるので、石組3が外壁で、石組4は台所口の内戸に関わる可能性もある。石組溝16は、寛保・幕末絵図に示された本段石垣際の離れ「足洗」（名称は寛保絵図）に関わるものであろう。礎石状の大石は、台所の小部屋を仕切る柱にも対比できるが、大きさから、7区と同様に絵図より古い建物を視野におくべきかもしれない。

ゴミ穴A・B・C（第24図）

最大のCは南北4.5m、深さ1mの規模で、いずれも多量の陶磁器や瓦などが出土した。3基は一連とみられるなかで、Bからは旧制中学のセルロイド定規やボルトなどが確実に出土した。しかし遺物の大半は江戸時代後期までのものである。これらが旧制中学校内で伝世品として使われたとは考えにくい。旧制中学期の遺物を単に混入とみれば表書院破却時のゴミ穴と評価できるが、さもなければ、例

5. 上層5区



第28図 上層5区 I-4トレーニチ (1/80・1/30)

えば西側に広がる戦争直後巨大ゴミ穴の掘削時など、なにかの理由で表書院期の遺物が集められ、再投棄されたとしか考えようがない。なお一帯では近世近代の層位的弁別には困難を伴う。

北部の土壤群（第24・28図）

SK130は東西2.2m以上、深さ0.6mの土壤で、底部には長さ80cm、幅25cm級で長方形の矢穴を伴う花崗岩割石材3つを東西に列石状に据えている。埋土は黄灰褐色細砂。SK106はこれを切る長さ3.0mの大形土壤であるが、深さは0.5m足らずで浅く、埋土には明褐色漆喰片や陶磁器片を含む。SK108もSK130を切る東西1.5m、深さ0.5mの土壤で、暗褐灰色細砂の埋土にやはり明褐色の漆喰片を含む。西のSK110は大形で不定形な土壤で、陶磁器細片などが出土している。SK13は1辺2.0m、深さ0.5mの方形土壤、埋土は暗褐灰色細砂で瓦片多数や若干の陶磁器、火打石などが出土した。SK12は直径2.2mほどの円形土壤で深さは0.8m、第28図に示した埋土は、暗褐灰色細砂で焼土斑が混じり、こぶし大の円錐を多量に含む。江戸中期末を中心とする陶磁器片も出土した。SK19は南北1.3m内外、深さ0.5mの土壤で、暗褐黄色細砂の埋土には明褐色漆喰片を含む。埋土の最上部には35cm四方の花崗岩石材が、一見礎石状にある。その南端を切るSK15は、南北5.5m、東西1.5m内外の南北に細長い土壤で、深さは0.5m、周囲の土壤に対して汚れの少ない暗淡黄灰褐色細砂から江戸中期とみられる陶磁器細片が出土した。一帯にはそのほかにも、大小の性格不明の土壤が存在するが、目立った特徴は指摘しがたい。以上の土壤群のある場所は絵図と対照すれば、台所のある母屋の棟から北に付加されたように存在する建物の、板の間や「湯殿」（元禄絵図）や「茶部屋」や「小姓」・「坊主」の控えの間（寛保・幕末絵図）の床下にあたる。記述を行った土壤は表書院破却時のものとは考えにくいものが多く、それらは建物改修時などの形成と考えた方が良さそうである。特にSK130の列石は上屋構造に関わる可能性も考えられるが、絵図での特定はしにくい。

I-4 レンチ礎石ほか〔表書院東北辺棟〕（第28図）

レンチの北東部では、礎石2個を確認した。南の石材は南北55cm、東西43cm、平滑な上面を別として丸みをもった花崗岩である。北の石材は東西53cm、南北40cm足らず、割石の花崗岩材である。両石の心々距離は1.6m、上面の高さは南の石が僅かに傾くが14.9m内外でそろっている。その石材上面に高さを合わせて側面には、漆喰が床をなして張られている。場所によっては10cmもの厚さをもつ。漆喰は北側が顕著で、主要部は北西から南西にかけて幅約1.0mの帶状をなすといえる。漆喰そのものは二種類あって、部分的に重層し、先行して石材を固定したのが黄灰色、遅れる補修とみられるのが明褐色といえる。レンチ北東隅では漆喰主要部に平行して走行する豊島石の溝の一部が確認できた。こうした礎石などがのる地盤はD層を切り込む大きな掘り方の埋土である。レンチ東壁面の観察では二つの掘り方が切り合い、南のものは南北4.8m、深さ1.2mで、江戸中期初頭頃までの瓦や陶磁器などを伴っている。北はそうしたものは含まず、一見東の現役石垣裏込とも思えるほど花崗岩割石や円錐が下層ほど顕著となる。礎石が載るのは北の掘り方であるが、北の礎石の下接して類似の礎石状石材が落とし込まれたように存在する事実もあって、礎石ほかが上層期当初からのものではないことは明らかである。礎石は、絵図からジグザグをなして走行する表書院外壁に伴う2柱に同定でき、漆喰や豊島石溝は付随する塀などの走向と一致する。

6. 上層6区（第29図）

中の段の中西部に相当し、表書院中西の棟や庭が、高石垣の際には伊部櫓や多門櫓があった。

列石3【伊部櫓】(第30図)

西に高石垣が張り出す部位の南端にある。一帯は高石垣と背中合わせに城内を向く石垣が組み合って石壘構造をなすが、列石3はその内側で検出された。確認部は西・北・東の平面コ字状であるが、実際には未掘の南にもあって口字状となる公算が強い。北辺は、西角の南北長90cm、東西幅60cmを最大とする花崗岩で割石面をみせない石材9個程を一列に組んだもので、一部の隙間には詰石を伴うが、その南縁も北縁も面をなして揃うとはいはず、列石の幅は0.5~0.9mで半ばが狭めである。東西長は4.4mであるが、両端石材の心々距離は3.9m程度に計測できる。西辺は長辺を南北に取るやや大きめの石材で、北辺に対し敷設の工程が優先したとみられる。東辺は一部2個並列方式を取る。西辺から石壘内側石垣までの間隔を、未掘の南辺にも適用するとすれば、列石の中軸線は、まさに正方形をなすといえる。列石上面の高さはほぼ揃っているが、細かくみて北辺では、西端が13.87mであるのに対し、中央部は13.68mまで下がり、東は再び高くなって、中だるみといえる。この高さは西の石壘頂部より2.4m程低いことになる。絵図と対比すれば、北辺と東辺は「伊部櫓」の外壁とその柱列に相当する。特に北辺の延長は柱3つ分と一致し、一間195cm内外(6.5尺)の数値が割り出せる。櫓の西壁や南壁は当然に石壘上の高石垣側にあるから、櫓の基底部は2.4mの段差をもって、石壘に跨がって立っていたことになる。列石の西と予想される南辺は、絵図には表現されていないが、上屋を支える内柱列に関わるものであろう。

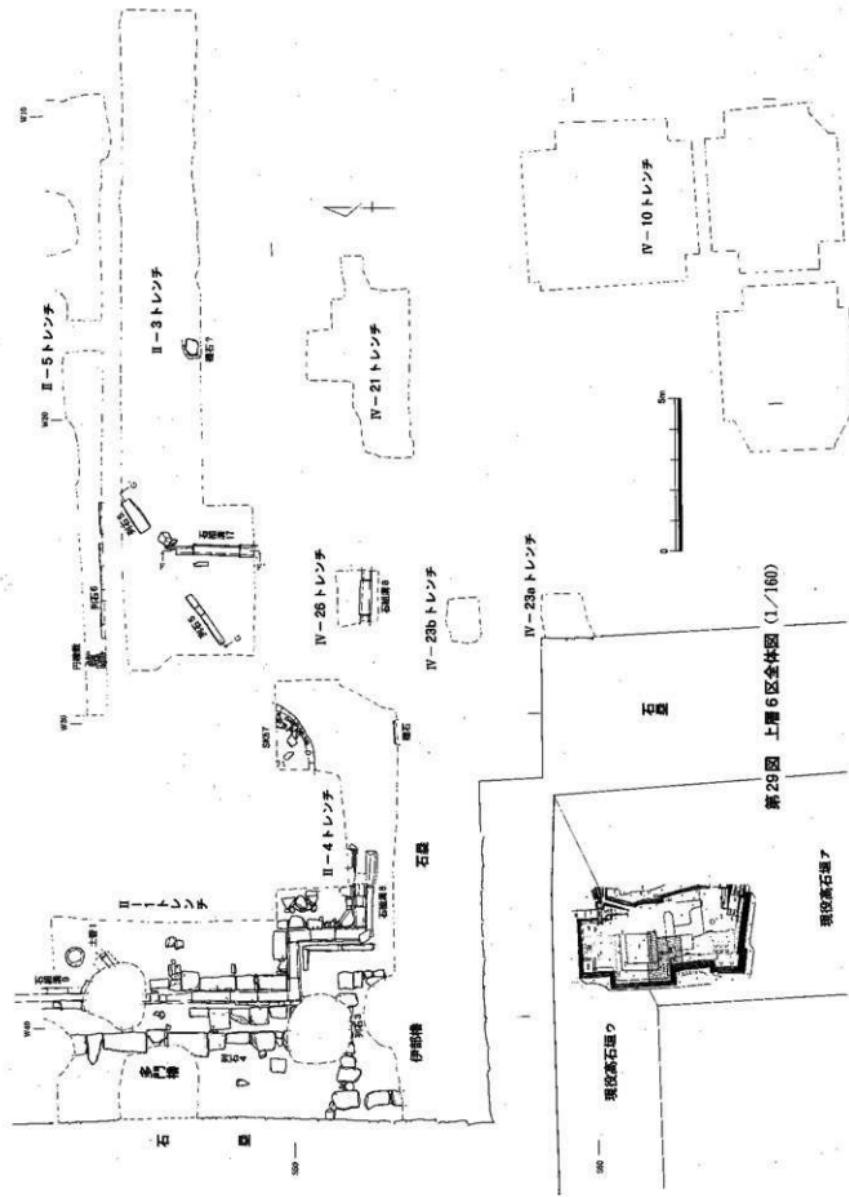
列石4【多門櫓】(第30・31図)

最大のもので長さ145cm、幅70cmの花崗岩石材を、石壘内側石垣に平行して南北、一段一列に組むもので、南は恐らく列石3に接して始まり、北は7区へ続いている。石材の長辺を縦、つまり南北にとるものが多いが、1個は横にとる。東側の面が揃っており、この東縁から内側石垣までは約2.8m。石材は割石面が目立ち、幅7cm程度の矢穴を伴うものもある。上面の高さは、この区のうちでは南が低く13.63m、本区北端で13.80mと高くなる。絵図では、伊部櫓と7区の數寄方櫓を繋ぐ多門櫓の城内側の壁とその柱列に対応し、これも石壘に跨がって建っていたことになる。なお、相対的に大きな石材が元禄・寛保に示される柱位置に対応するわけではなさそうである。

石壘内側石垣(第31図)

中の段の西縁の現役高石垣と組み7区に続く南北部と伊部櫓から東にかけての東西部がある。この石垣は上半部がなお現役であるが、南北部は前面を掘り下げ、一部では根石を確認した。南縁で確認した石垣の最頂部は16.25m、本区半ばで確認できた根の高さは13.20mで、概して高さ3.0m、矢穴を伴う花崗岩の大きな割石を基本的に5段積みしたものといえるが、上部ほど補修の積み直しが反復されたとみて、場所による偏差がかなりある。特におおむね14.4m以上の高さは戦中に露出しており、石材は旧制中学の校舎焼失時に火を受けて赤変したり割れて丸くなっている。また崩落もあったようで、7区に向かって頂部が低くなったり、焼けていない戦後の石積みに置き換わっている部分がある。少なくとも上部の、裏込は花崗岩の割石が主体である。

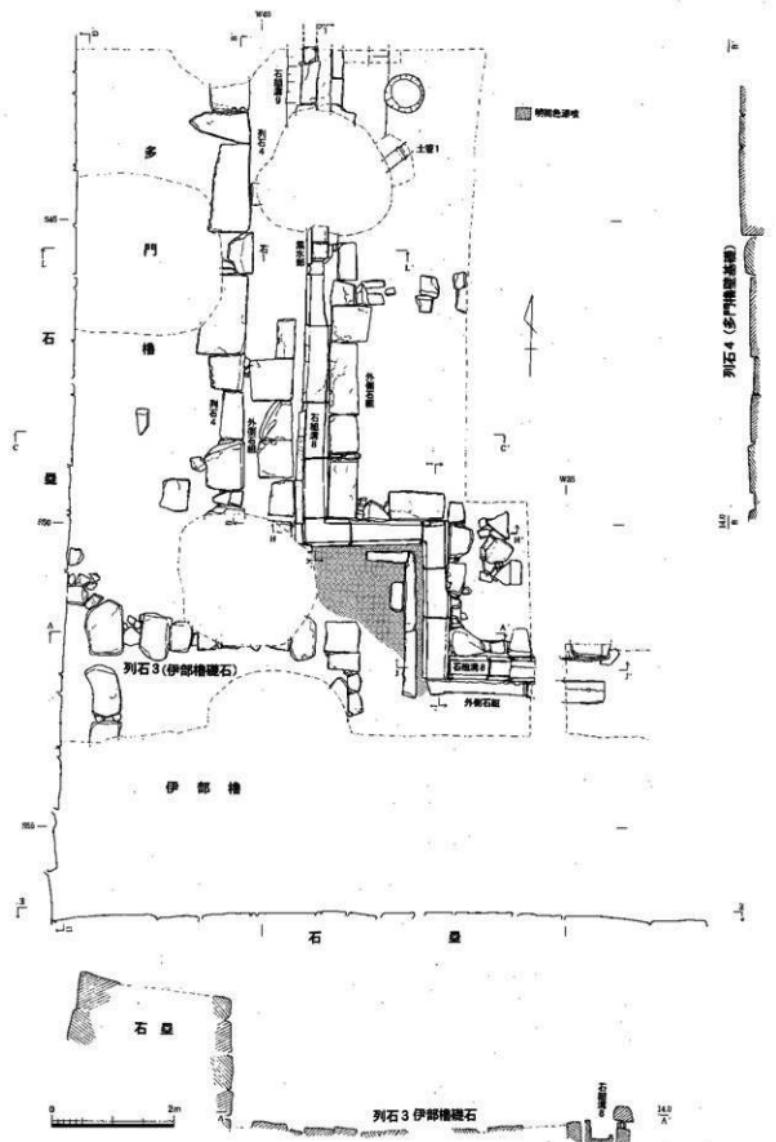
第31図の南北部立面図で、中部から北部の最上段にある長辺50cm級の方形石材は焼けておらず、総て戦後のものと判断できる。それらの個所の一段下や北端付近のV字状の不整合部の隙間を埋める



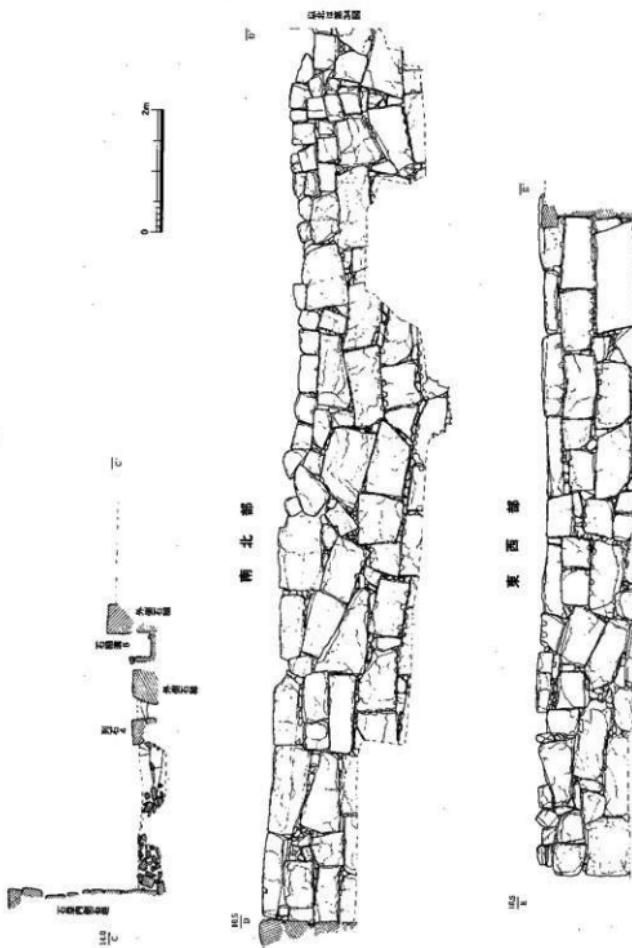
第29図 上層6区全体図 (1/160)

現状高石垣A

6. 上層6区



第30図 上層6区西部(伊部櫓周辺) (1/80)



第31圖 上層6區西部石壁內側石垣 (1/80)

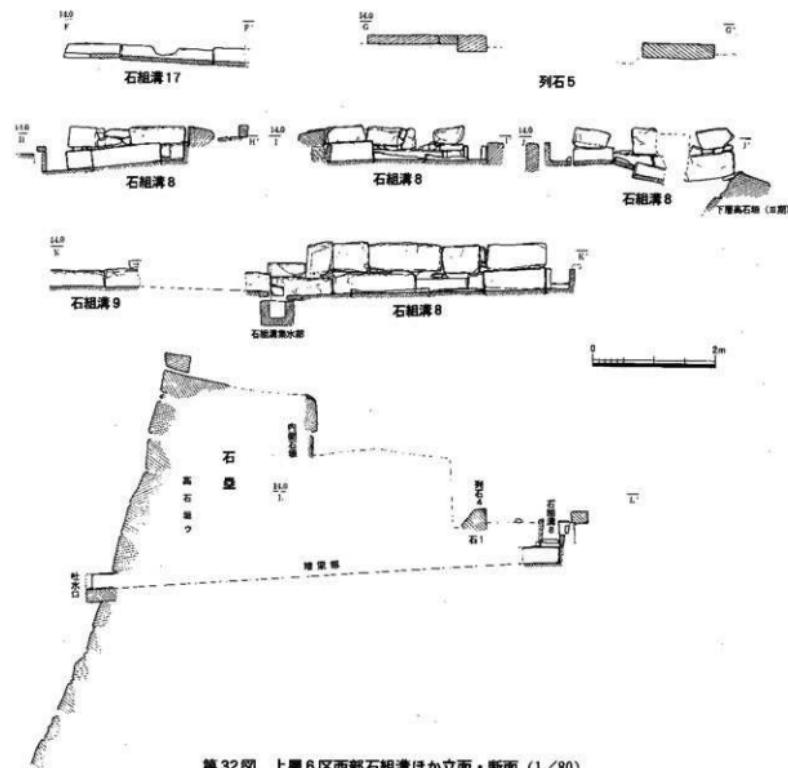
石材なども焼けた石を含むが、やはり戦後の補修である可能性が強い。次に中央部やや南寄りで幅3mあまり、深さ1.4mほどの落ち込みを充填する石材は、焼け方から戦前以前のものであるが、明らかな積み直しである。さらに、先の南端のV字部底の南は不自然な楔形石材で、しかもその南から9mほどの別の楔形石材までは他に対してメジの通り方が乱れることから、この個所の2~3段目石材はごっそりと積み直しである可能性もある。その他は、比較的初期の状態のままと考えられる部分で、長辺100~130cm、高さ40~70cmの直方体状の石材を横積みしたもので、3~4石単位で横メジが通る。石材は粗割り材主体で、幅8~10cmの矢穴を顕著に伴うものがある。詰石は伴うが、下層期の石垣に比べればはるかに少なく、比較的緻密に積まれるが、段石垣1はいうに及ばず、この石垣自身の北側延長である7区敷寄方櫓付近に比べても、粗雑觀があり、アラノミ調整などもみあたらない。

前面では石垣の根の高さが生活面になるのではなく、長辺20cm級の花崗岩割石を顕著に含む暗黄灰色細砂で高さ0.4m程が埋め戻され上面を生活面にする。この造成土に含まれる石材は下部ほど空石状態に近く、石垣本体の根に噛されたり、もぐり込むものもあって、大局では高石垣の裏込と本来一連のものとみてよいかもしれない。また列石4は構築のための掘り方を伴わず、石材設置後に周囲がこの造成土で埋められて固定されている。すなわち、この石垣と列石4は一体性をもっている。石垣の断面形は、外側の高石垣の傾斜が75°ほどであるのに対し、本石垣は90°といえる。なお、掘り下げを行っていない内側石垣の東西部は、東端最上段を除き積み直しの痕跡が比較的みあたらず、焼けと詰石の脱落・置換を別として、南北部の下部に近い比較的整った横積みを保っている。

石組溝8西部（第30・32図）

豊島石くりぬき式の専用側底材を組んだ溝で、東のIV-26トレンチから南側の石壘に平行して延び、伊部櫓の形に従って鉤折れした後、多門櫓に沿って北へ走行する。以下は伊部櫓近辺について記述する。豊島石材の両側には基本的に花崗岩石材による石組を伴い、一回り大きな溝の中に豊島石材を落とし込んだ格好をとっている。特に郭内側の豊島石側壁部は欠損している個所が多いが、それでも機能を十分果たせることになる。一方、豊島石材の小口は1個所を除いてホゾを残すものが多く、したがって計測できる本来の長さは100cm内外が主流であるが、65~125cmとややばらつきがあり、規格化されているとはいいがたい。幅と高さはともに40~42cmの幅に収まり規格性が高い。溝内底の高さは原形を保った部位での確認東端が13.62mに対し、北端部は13.20mで排水は西流あるいは北流する。東の短い南北部の南端の石材は通有の形態のものを用い、南東の側部を打ち欠き、南小口は直接花崗岩石材に当てて溝としての形態を保っている。短い南北部の北端材は、北西側部を打ち欠き、北小口は豊島石の別板材を花崗岩石組との間に立てて水圧を受けとめ、漏水することがないように工夫している。次の短い東西部の西端は西小口にやはり別の板状豊島石を立て、北西の側部を欠落させるが、ここは当初からその部位を欠いて作られた石材の可能性がある。その傍ら、南北部南端付近の西縁には、花崗岩石組とは別に、幅12cm、長さ70~30cmの整った棒状直方体の豊島石材が南北に4石、西に直交して1石が配されている。

豊島石の外側の花崗岩の石組は櫓側と郭内側とで構造が異なる。まず櫓側、南の東西部では長さが170cmと130cmで矢穴を伴う割石材を一列に配している。生活面での幅は20cm程度で延石状にみえるが、東の攢乱部での知見では高さが50cmもあって、下幅は38cmにまで脹み、強固な構造といえる。20cmの隙間を経て、続く南北部さらに東西部に移行してすぐまでの櫓側は、同様の状況で石材3つが続くが、真ん中のものは背後に控えの石材を伴っている。多門櫓に沿う南北部の櫓側では、石材は



第32図 上層6区西部石組溝ほか立面・断面 (1/80)

70cm四方の四角く幅のある石材などが列石状に組まれ、あたかも列石4と同様の列石が二重に構築された格好となるが、6石程度で以北はとぎれる。

一方、郭内側の花崗岩石組は二段積みである。石材は最大で長さ120cm、幅50cm、高さ50cmで、整った長方体の割石を横に積む。東の攢乱部では石材が詰石を挟んで下層の埋没高石垣2にかまされている。石組上面の高さは14.10mで、前面の豊島石溝の傾斜にもかかわらず水平に揃っている。平均的にみて、一段目は豊島石材の側部頂つまり生活面より深くなるため、2段目の高さ分の0.5m内外が地表に露出していたことになる。以上のように、場所ごとの偏差をみせる花崗岩石組であるが、単なる豊島石組溝の擁護とするには本格的な構造で、これ自身で古い時期の溝を構成していた可能性が十分に考えられる。その溝幅は0.55m内外で各所とも一定している。なお、橋側花崗岩石組の内縁から、列石3の東辺と列石4の縁までは共に0.8m、列石3の北辺までは1.2mの幅を測る。また、列石3の北東から豊島石による溝縁にかけては、明褐色漆喰が面的に施されていた。

花崗岩の側部石組が北で途切れる辺りに石組溝8の端部として集水部が確認された。これは、豊島

石の溝底部が0.26m四方にわたって途切れ、下では直交して西に向かう暗渠の端部が開口して水を受ける仕組みである。便宜上、集水部の北を石組溝9とするが、これを含めて集水部の周りの地上側の溝石材は細切れの小石材からなる。例えばすぐ南の底材は25cm四方であるし、北隣は側部材と底材が本来は別の部材で、内でも東側材は花崗岩である。この集水部では溝内石材の隙間や西側材の背後に、明褐色の漆喰が充填されていた。集水部地下の暗渠は、地上の溝より一回り大きな豊島石くりぬき式で、外幅50cm、溝の内法26cm、高さ15cmで、開口部以西の純暗渠部では厚さ9cmの豊島石製の板材を蓋としている。暗渠の出口は、真西の高石垣中に0.5mほど突き出した吐水口である。この東西暗渠は、事実上は露出する両端部も含めて全長は7.75m、内底の高低差は0.45mを測ることになる。ところで、この暗渠の直上に位置する列石4の石材(石1)は、小さめで形もやや不定形であるうえ、背後の隙間に溝の集水部などと同様の明褐色の漆喰が施され、明らかに位置もずれている。吐水口の高石垣との一体性からして、暗渠自身が高石垣構築に遅れるとは考えにくいが、郭内側の比較的浅い部分では、補修や溝浚えが行われ、その際にこの石材が一旦動かされて戻されたか、古いものに取って代わったのであろう。暗渠が補修を受けた可能性については、高石垣の吐水口が集水部と同じ豊島石ではなく花崗岩であること、集水口部の寄せ集め的な石材、ここで途切れる石組溝8の外側花崗岩石組が古い時期の溝本体である可能性などからも、十分に考えられる。

列石4と石組溝8・9の間隔は元禄絵図では多門櫓の郭内側を伝う板敷廊下となる。この廊下は南の石組溝8の鉤折部を斜めに飛び越えて、再び溝8に沿って東に延びていたことになる。石組溝8の鉤折部の郭内側石積は、元禄絵図では「蔽」、寛保・幕末絵図では「アツチ」(塙)の背後に当たり、起伏のある内庭の地形の端部処理の護岸構造である可能性もあるが、定かではない。

石組溝9・土管1 (第30図)

集水口部の北の未掘部を隔てた位置では、石組溝9は定形的な花崗岩石材による溝となっている。またその間に北東にある泉水からの配水管である土管1の取りつき部が予想される。いずれも7区から続く構造で、詳細はそこで記述する。

II-4 トレント礎石・SK57【多門櫓ほか】(第29図・第94図)

トレント壁面にかかる東西100cm以上、厚さ32cmの上面平坦な花崗岩は、絵図から伊部櫓東方の多門櫓北壁に關わる礎石類と判断できる。SK57は花崗岩角礫を埋める意味不明の浅い土壤。

石組溝8東部・石組溝17 (第29・32図)

IV-26 トレントでは石組溝8の延長を豊島石材3個分確認した。内底の高さは13.75mで、II-4トレントでの東端に対し0.13m高い。それに直交してII-3トレントで南北に確認された石組溝17は、溝の内底がさらに高く、北端が13.96m、南端が13.82mと南流する。3石のうち最大の石材長は155cm、幅は北から28cm、33cm、39cmとしだいに広くなる。必然的にできるホゾの隙間をスポット的に明褐色漆喰で埋めている。走行と高さから石組溝8に合流する公算が強い。

列石5・列石6ほか【庭塀ほか】(第29・32図)

列石5は、長さ110cm内外の花崗岩延石と長さ50cm以下の棒状直方体の豊島石を北東から南西に配するもので、上面は石組溝10頂より僅かに高い14.20m内外。直下には下層の埋没高石垣2があり、地盤陥没対策などの間接的な関係が予想される。列石6は、矢穴を伴う花崗岩延石を東西に並べたもので、高さなどは列石5に近い。すぐ西では長辺10cm内外の暗黒青色円礫約30個が、東西幅0.6mに敷かれているが、漆喰は伴わない。II-3トレント中央では礎石状石材1個を確認した。絵図では列石6は表書院中西の棟から北西の庭に張りだす斜方位の塀の線表現に相当するが、他の遺構は不詳である。

7. 上層7区（第33図）

6区の北に位置し、東部は表書院の中庭、西部は高石垣べりに多門櫓や隅の数寄方櫓があった。最も多数の上層遺構が検出された区である。

列石4・列石7・敷瓦敷1【多門櫓】（第34図）

6区から続く列石4は、そのまま石壇に平行して北にS26mライン付近まで延びる。この区で最大の石材の長さは150cm、幅67cm、引き続き一段一列で、石材の長辺を縦にとり、詰石は伴わず、東の面を揃えている。第35図のEセクションの観察でも、石材構築のための掘り方をもたないとする見方が支持される。上面の高さは13.75mを軸に微妙に波打つが、6区の状況に比べればかなり水平に安定している。石材は幅8~9cmの矢穴をともない、粗削面をみせるものが多い。

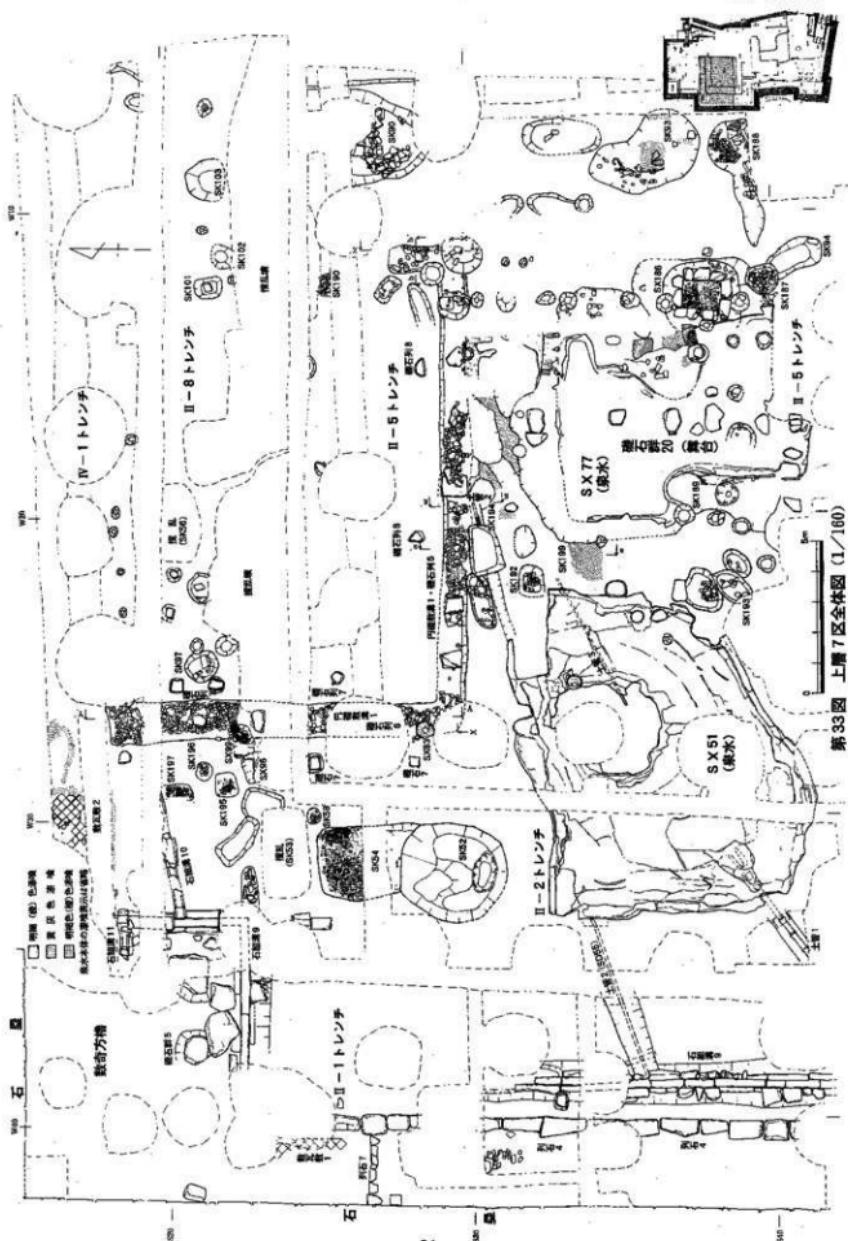
列石4の現状北端の石材は南隣に比べて大きく方形が整って、南北90cm、東西65cmを測る。その北には東西幅0.45m、南北幅0.8m以上、深さ0.3mの溝状の土壤があり、端部石材から土壤上角にかけては明褐色の漆喰が施されていた。一方、端部石材の西側には列石7が直交する。東西30cm級の花崗岩粗削材7個からなっており、北に面を揃えて、西は石壇内側石垣につきあたる。列石7の長さは2.28mであるが、上面の高さは列石4と揃っており、列石7の南北中軸から内側石垣までの2.60mを石材で充填する構造ともいえる。内側石垣に接して列石7の東端石材の南、心々で0.75mの位置関係で一辺40cm四方の石材が1個確認された。また列石7の北側では敷瓦敷1が確認された。一辺24cm(8寸)四方、厚さ4cmの専用磚を水平に敷いたもので、いわゆる四半敷きである。上面の高さは列石4より微妙に高い13.88mを測る。擾乱や未掘のため不確定な部分もあるが、南北は2m以上続き、東縁は三角形材を用いて本来直線をなして終わっていた可能性がある。そうすると、その東端部と先の列石4の延長溝との間隔は0.28mといえ、この部分は明褐色の漆喰が厚さ最大10cmで床をなして施されていた。また敷瓦の下でこれを固定するのも明褐色漆喰で厚さ1cm、その下には置土として厚さ2cmの鮮黄褐色バイラン土が敷かれていた。

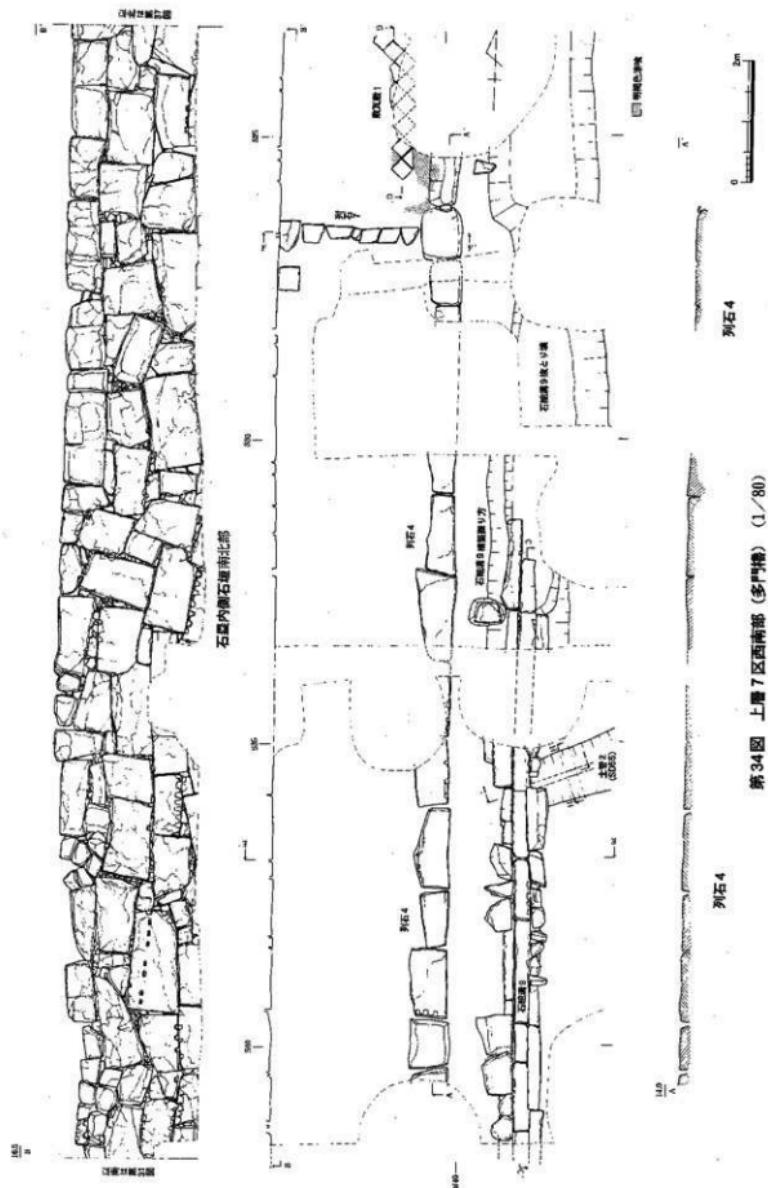
絵図と対照すれば、列石4が多門櫓東壁に相当することは疑いないが、うちでは列石4の北の途切れ部は、元縁絵図に示された表書院北西棟から多門に至る敷板廊下の取り付き部に相当し、櫓の入口である可能性が高く、敷瓦敷1はその櫓内入口部の床化粧、列石7は寛保絵図に示された櫓の隔壁のうちでも扉部分に相当する。多門櫓内部は、石壇内側石垣と列石4の間の遺構検出面、それに石壇上面の高さといった、上下二層の床が想定されることになる。

石壇内側石垣（第34・37図）

基本的には6区と同様の状況で続いている。第34図の範囲のうち、南端最上段の5石とS37mライン付近の最上部U字形部を埋める小石群は、焼けておらず明確な戦後の石積みである。また、S35mラインの最上段石材は、立っており、また現位置なら焼けないはずの奥側部が焼け、石材は古いが戦後の積み直しである。さらに、S34mラインの最上部2石から、さきの立石の下縁を南にたどるメジ以上にある石材、加えてS40mライン2段目の横形石材を含めその下縁以南のメジより上の石材は、積み方も乱れ、いわゆる万成石も含むことから、江戸後期以降、あるいは古材を転用した戦後の積みおしの可能性が高い。他の部位は古い石積みとみられるが、北側でも最上段などは詰石の脱落や焼けによる石材の破損が著しい。また、S32mライン付近の2、3段目は石材の長辺を縦にとり、古い時期での補修部である可能性も残る。その部分を別にすれば、基本は直方体の粗削材を横に積み、横メジは比

7. 上層7区





第34図 上層7区西南部（多門橋）（1／80）

較的よく通る。石材は、およそS40mライン以北が南に比べて大きめで、4段積が基本となる。石材の最大は長さ165cm、高さ85cmを測り、幅6~8cmの矢穴を顯著に残すものがある。矢穴を石垣面中に残し、割ることが途中で放棄された状況が窺えるものもある。詰石は伴うが大きなものはあまりなく、石垣面からさほど奥に入らない位置で、主石材同士が接する割合が高い。S28.5mラインの上から3段目の石材は、下のくぼみに対して落とし込まれたように北に傾いているが、北上の石材は見事に合わせあって、上に水平面をつくりだす。また、この傾く石材と、これを下で支える立石との間にできる南側の三角形の隙間には、貼りつけ板状で端部を巧みに加工されて主石材に密着する詰石が、石垣面の凹凸を潰している。また傾く石材の2石北の石材の南西角を見かけ上受ける詰石は、石材の形状を見据えた上でL字形に加工している。S24mライン付近の4段目石材と南の石材の隙間を埋める詰石もハメ石的で、南上の石材に合わせて角を鉤形に加工する。第37図に示したS21mラインの3段目と4段目の間の横長三角形の石材、S18.5mライン付近の3段目の隙間を埋める縦長三角形の石材も、同様の加工詰石で、むろん主石材の重量を受ける構造ではない。この種の技工を凝らした詰石は6区では確認できなかったものである。主石材の面調整は粗削り主体で、アラノミハツリ的部分を含むが、9区の石墨内側石垣のような明瞭なノミキリ痕までは観察されない。

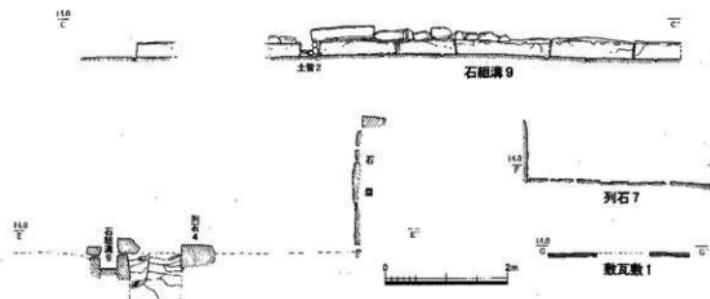
北の東西部も基本的に南北部と同様で、西寄りの1・2段目を貫く立石部を除き、横メジがよく通る。また半ばの2段目と3段目の隙間を埋める詰石の加工は巧みで、主石材の形にしたがって成形した結果、立面が刀子形になる長さ70cmの石材や、L字形となる長さ45cmの石材が確認できる。

東西部の長さは8.0m、石垣上角から高石垣までの石墨頂部幅は2.6mで、6区からの総長（内法）が41.3mとなる石垣南北部による西辺石墨とほぼ同じといえる。

石組溝9南部・土管2合流部（第34・35・36図）

6区の集水部から列石4に平行して北に延びる石組溝9は、改造を想定した集水部を除いて花崗岩製の溝である。本区南端から長さ約10mの地点より北は攪乱を受けて石材が抜き取られ、代わりに石材抜き取り壙が認められるのみである。ここでは、この南部に付いて記す。溝は、第35図に示すように、底に整った延石を置き、これを挟むように両側壁を組むもので、構築に際して、石墨内側石垣前面に置かれた列石4を固定する造成土に対して、溝状の掘り方を伴っている。少なくとも工程上、石垣や列石に対して遅れるものといえよう。掘り方の幅は1.3m、深さ0.5m内外で、底に若干の置土を施して高さを調節した上に、底材を置いている。埋土は周囲の造成土の再堆積状の暗黄灰色細中砂である。底材は長さが63~200cmと偏差をもつが、幅は24~28cm、高さは16~20cmと揃った割石で、矢穴を多数もつものもある。側壁は二段積みで、上下で様相が異なるが、上段は失われている部分も多い。下段の石材はやはり割石で、平面では長さは90~162cm、幅は最大30cm、平均20cmの一見延石状であるが、高さは40cm内外もあり、しかも下部が脹んで広くなる傾向がある。底材が高さを十分にもっているから、石組としては安定感があり、底材と下段だけで完結性をもっている。その石材の隙間に細かな詰石を施す部分があるほか、ごく僅かではあるが側部材の背後に控えの石材を伴っている。側壁の2段目は南寄りで確認された。溝西側の一群は、最大のもので長さ70cm、幅55cm、高さ25cmと、方形に近い大石材が下段内縁に面を揃えて配置されている。一方、東のS37mライン付近の一群は、長辺30cm以下の小さな花崗岩石材を組むもので、北のものと同時一連の工作とはとうてい考えられない。ここでも塗喰や豊島石材は伴っていない。

以上の部位での石組溝9は、溝の内底の高さが北端で13.37m、南端が13.32mで、さほどの傾斜で



第35図 上層7区西南部立面・断面(多門檻) (1/80)



第36図 上層7区SD55土管断面 (1/30)

はないが南流し、6区の集水部に排水する構造である。底材上面から側部下段頂までの溝の深さは0.23~0.25m、側部上段頂までなら最大0.50mの深さとなる。また西側溝縁から列石4の東縁までの幅は1.0~1.1mとなる。ここに、絵図から板張り廊下が想定できるわけである。なお、その幅のうちS32.5mライン付近では掘り方を伴う礎石状石材1個を確認したが、意味は不詳である。

さて、第35図に示されるように、多門檻の壁が載る列石4に対して、溝の側部上段頂は12cm高く、溝の側部下段頂は14cm低く、後者の関係の方が理にかなっている。すなわち、側部上段と下段における構造差や高さを考える時、下段のみの状態が古い姿で、後の改造として地盤の重上げに伴って上段が設けられ、それも補修が行われたという模式が浮かび上がる。これは、6区の石組溝8での想定とも対応してくるが、最初期の状況を確認遺構から復元する時、同じ花崗岩製溝でも両者は積み方や幅が異なり、両者を統一的な構造として一元的に解釈できる程には単純でない。

土管2は、北東から延びる排水管でS35.5mライン付近で石組溝9に合流する。管は直径10cm、厚さ0.7cmの備前焼で、部分的確認のため一本単位の長さは不明であるが、暗褐色と暗灰青色の個体がある。構築のための掘り方は、幅1.1m、深さ0.4m、埋土は暗褐灰黄色細微砂で、部分的に土管の左右を黄灰色の漆喰で面的に固定する。溝との合流部の土管端は元来の口縁が欠けているが、現況は溝

側部下段の壁面とほぼ合せた位置にあって、溝底材の上面に僅かに架かっている。土管進入部の溝側壁は長さ0.26mにわたって欠落し、隙間をこぶし大の円錐で埋めている。土管が石組溝当初からのものとするには、この状況は不自然で、また北隣の溝側壁下段材は幅15cmと他よりかなり薄く、当初材ではなさそうである。溝の改造として土管が埋設された可能性が高い。

礎石群5〔数寄方櫓〕(第37図)

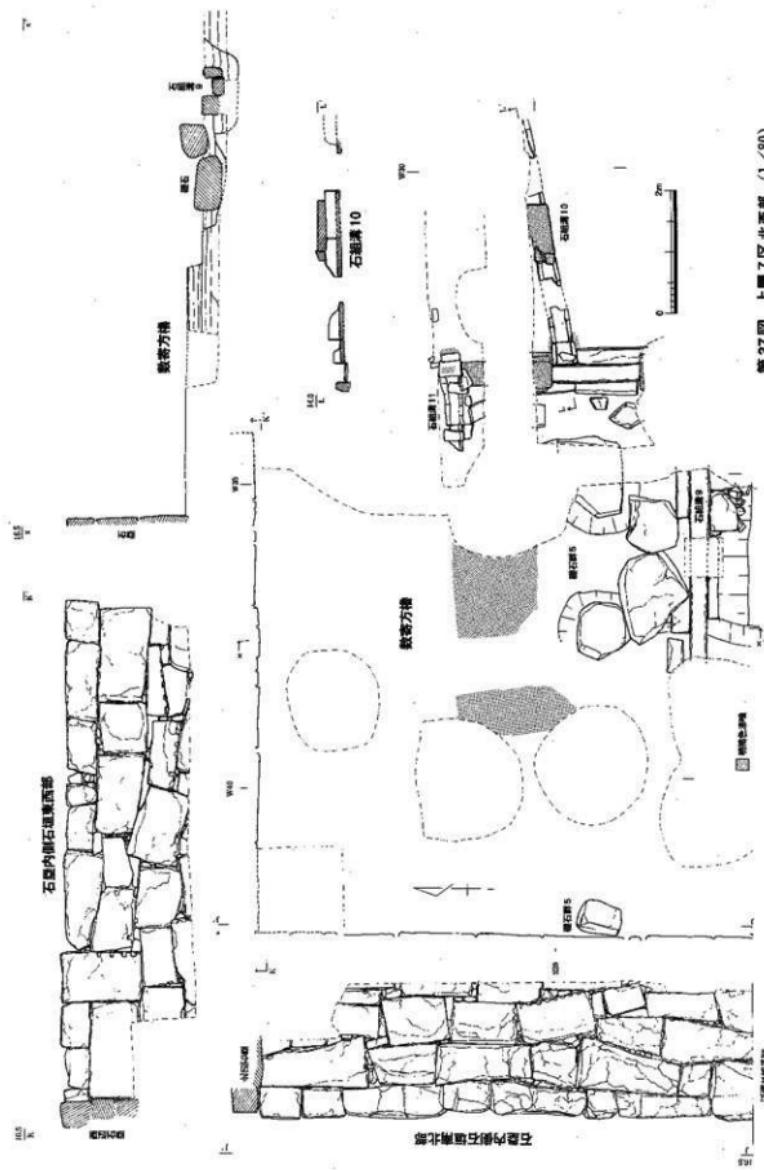
西に張り出す石壘の内側北端部にあって、据えられた状態で2石と攪乱でやや動いたとみられる1石を、東西に確認した。3石とも花崗岩であるが、明瞭な割面を伴わず自然石的である。東端の石材は最大で、東西130cm、南北105cmを測り、その東縁を北の石壘東端の石垣面に接している。後述の石組溝9の走行からしても、この石材は角石とみられるが、北に想定される礎石列は未掘と攪乱のため確認できなかった。角石の西隣の石は90cm内外、公園樹木のための未掘部を隔てたさらに西の石材は、少し動いているが正位に復元して、南北70cm、東西50cmで、内側石垣に沿って密着している。機械的にみて、東2石間の心々は2.50m、西側2石間は4.7mであり、西端石の柱を心からやや西におき、未掘部にもう1石想定すれば、一間2.40m(8尺)内外で並ぶ4柱が復元できる。東の2石には1石ごとの掘り方を伴い、しかも暗褐色黄色細砂の埋土には、建物の壁に由来するとみられる多量の白色漆喰細片や少量の瓦細片を含み、他の櫓の礎石類に対して様相を異にしている。高石垣構築に続く工程の掘り方とするよりは、礎石自身が遅れる時期のもの、または改修を受けた可能性が高い。礎石の上面の高さは13.7mで、北背後の建物内床面とみられる、これより10cmほど高い位置では、厚さ1cmの明褐色の漆喰が面的に施されていた。その状況は敷瓦敷1下面の漆喰に近似し、漆喰自身が張り床の可能性のほか、この上に敷瓦敷があった可能性もある。漆喰上面から石壘内側石垣上角まで、つまり建物内に想定できる段差は2.0mある。また、東の礎石2個の南前面には長辺150cm、幅110cm、高さ45cmと、それよりやや小ぶりの野面の花崗岩巨石2個が東西に並んで確認された。2石はとりたてて丁寧に接えられるものではなく、南の石組溝9の側壁や礎石本体や掘り方に重なって、遅れるものである。例えば風流や入口などの軒下脇構造である可能性が考えられるが、やや不自然な感もあり、明治の建物破却時の寄せ石の可能性も残っている。また、角礎石の東では心々1.5m程度の距離で南北に長辺50cm級の礎石状石材2個を確認した。

3つの礎石は、元禄や寛保の絵図の数寄方櫓南外壁の各柱表現と一致する。前面の巨石は不詳であるが、寛保絵図に示される櫓内南東隅「三畳」の区画や中庭の背景に関わる可能性が考えられる。

石組溝9北部・石組溝10・石組溝11(第37図)

石組溝9は数寄方櫓の周囲でも遺存していた。南から北に続くこの溝は、未掘部で東に折れ、いったんは礎石群5に沿う東西溝となる。この部位での構造は、南部での構造と基本的に同じで、その内底の高さは角礎石の前で13.46mにまで上がってくる。II-1トレンチ内の東端部南側壁は二段積みで、長辺65cmほどの上段石材の背後には裏込的な割石を伴っている。その対面の北側壁で二段積を保つ個所の上段石材の頂部高は、数寄方櫓の礎石前巨石上面とほぼ一致し、礎石上面よりも30cm高い。また溝側部材下段頂の高さは礎石上面より10cmほど低く、南の多門櫓部と同様の関係がある。溝の北側内縁から礎石縁端までは1.0m内外を測る。

溝の東方延長は、数寄方櫓の形に従って未掘部に角をもって北に折れる。その南北部では同様の構造をもつ花崗岩材による側壁下段相当以下に対し、豊島石製の蓋を渡して暗渠としていた。上の蓋材の幅は、南のものが57cm、北のものが43cmで、溝の内法よりは広いが、下の花崗岩側材幅よりは狭



第37圖 上層7區北西部 (1/80)

く、厚さ3cm内外の明褐色の漆喰で幅広く蓋を包み込み、上下を固定していた。ここでも花崗岩製の下部に対し上部は不整合を示すことになる。すなわち古くは明渠であったものを、地盤の重上げに伴って暗渠化して埋め込むという改造の過程が窺える。

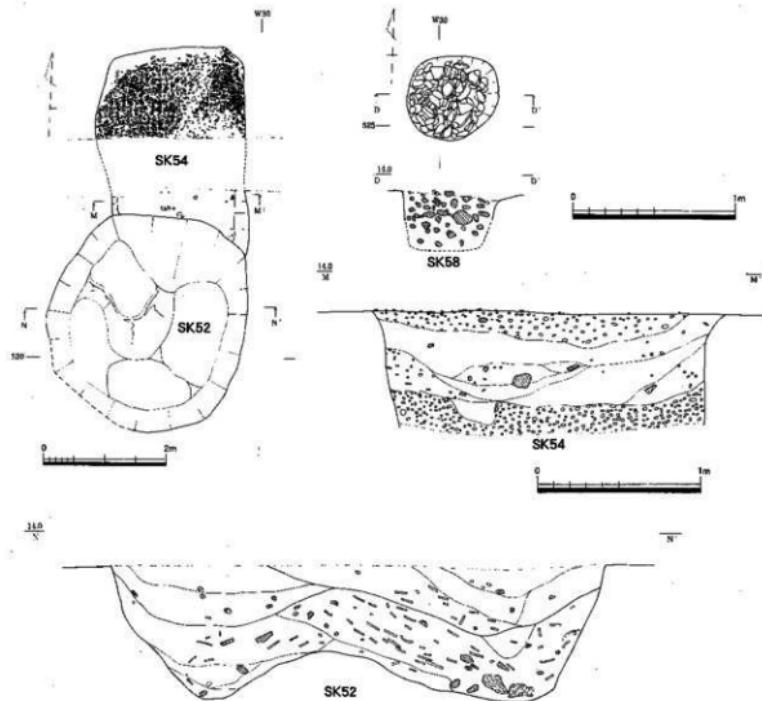
その南北部には東側から石組溝10が取り付いている。豊島石の専用材を組むもので、その外幅は34cm内外、内底は検出部長約3.0mのうちで10cmと比較的急角度で西が下がっている。この溝も少なくとも最終形態は暗渠であるが、蓋は豊島石ではなく、厚さ14cmもの長方形の明褐色漆喰板である。合流部は、豊島石の側底材を溝9の花崗岩底材上面に僅かに架けて載せ、溝9の側材が途切れる場所に溝10の石材が取まつて、隙間はほとんどない。ここでの溝10の専用材の頂部は、隣の溝9の側材より3cmほど突き出すことになるが、若干の蓋の凹凸を認めてよいなら、いまは蓋が遺存しないこの合流部も含め、最終段階では全体が暗渠化していたと考えて差し支えない。

石組溝11は溝9の確認部北端に數寄方櫓側から取り付く、幅0.3m程度の小溝で、豊島石ほかの細切れ石材を組むが、残りが悪い。

数寄方櫓の南東に隣接する石組溝9・10の位置は、元絵図では空地であるのに対し、寛保絵図では「湯殿」の西の「射場」に相当する。溝9は「湯殿」の排水に関わる可能性が高く、暗渠でなければならないのは、「射場」があるからであろう。加えて、両絵図を比較すれば、「射場」と組んで真南にある「アツチ」(塙)は「蔵」に代わって伊部櫓北東に新造され、射的を横切ることになる元絵図の多門に向う廊下は必然的に撤去され、その先で多門に沿う南北廊下の北半の東縁あたりは、塙とみられる線表現に置き換わっている。つまり石組9ほかで想定してきた地盤の重上や溝の改造などは、両絵図の間の時期に行われた一帯での一連の改変による部分が大きかったのではなかろうか。

S K 52・S K 53・S K 54・S K 58ほか (第33・38図)

SK52は南北3.5m、東西3.3mの梢円形で、深さは0.9mの土壌である。底面は起伏があって、中央が高く周囲が低い傾向がある。埋土は暗褐灰黄色細砂で、大量の瓦を主体に、明灰色を中心とする漆喰片、花崗岩角礫などを含んでいる。こうした遺物の量と大きさは、特に埋土下層で顕著で、瓦片が土砂を介さず直接折り重なる部分もあった。陶磁器類は、ほとんど含まず、瓦投棄壙といつても差し支えない。北隣にあってそれに切られるSK54は、南北3.7m、東西2.4mの隅丸方形土壌で、深さは0.8m以上。とりわけ埋土の最上層と下層に大量の玉砂利を含んでいる。上層の玉砂利は、直径3cm内外のものが主体で、概して暗青黒色、2区や3区の表書院南西棟周辺の庭に敷かれていたものに共通する。上層では隙間に暗黄褐色細砂を挟む部分もかなりあって、江戸後期とみられる陶磁器、貝殻、瓦、鉄釘などの各細片を共伴している。中層は、暗黄灰褐色細砂で、同様の玉砂利は含むが相対的にはかなり少なく、それぞれ5cm大の角礫、円礫、木炭、黄褐色漆喰片を含んでいる。下層は玉砂利の純粹層といえ、厚さ0.2m以上にわたって土砂をほとんど含まない。直径10cm級のものもあるが概して5cm以下で、たいていは2~4cmの振幅に収まるものである。その北東にあるのがSK58で、直径60cm、深さ40cm内外の円形土壌で、こぶし大の円礫を中心に、瓦片や漆喰、角礫片を充填する。SK54の北のSK53は長辺3m、深さ1.5mの土壌であるが、昭和の擾乱壙で、ごく少量の現代製復元瓦のほか大量に江戸時代の瓦を埋めていた。月見櫓の屋根修理時に降ろされた瓦の埋納壙とみられる。同様のものに本区中北部のSK56がある。SK53の西では、長辺60cm級の花崗岩割石が南北に2つ並んでいたが性格は特定できない、また同じく北に隣接して、東西1.2m、南北0.5mと南北に長く、破損した豊島石材を捨てる土壌など、深さ0.3m未溝の浅い土壌が2、3基確認された。



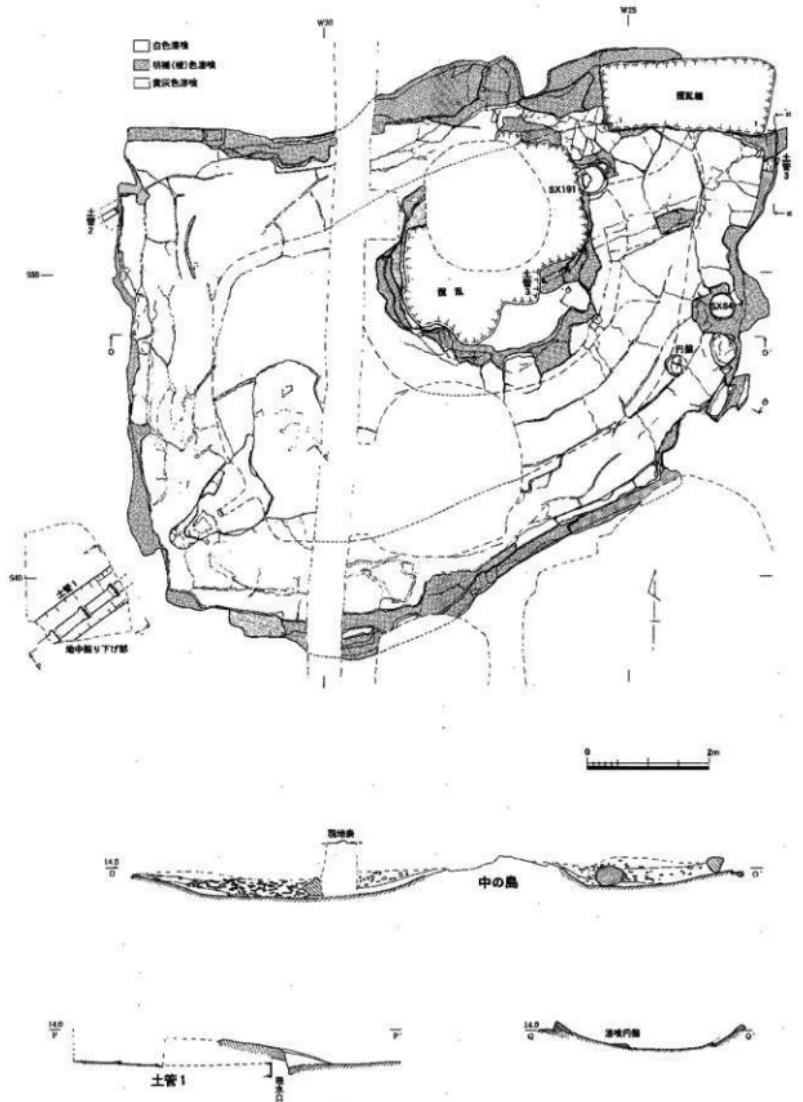
第38図 上層7区SK52・54・58 (1/80・1/30)

SX51・土管1・土管3・SX84・SX191 [泉水] (第39・40図)

SX51は、最大東西11.0m、南北9.7mの規模で、いびつな四角形を呈す皿状の窪みを漆喰張りの床がつくりだすもので、保水施設なわち池と判断される。攪乱を受けて破壊された部分での観察から、漆喰は下から黄灰色（古段階）、明褐色（中段階）、白色（新段階）のものが重層し、さらに各段階の内にも重層構造がある。各漆喰層は、全体的広範囲に及ぶものもあれば、ごく局部的なものもあるが、その各々の広がりは一定の独立性をもち、上面で風化の結果とみられる凹凸や汚染膜の付着が観察できる個所もあるから、重層構造は上層のための下塗というような工程上の結果ではなく、時間的な断絶をもつ改造・補修による上塗りの累積の結果としての部分が多いと判断できる。例えば、第40図のセクションでは、明褐色のものが4層、白色のものが1層で、厚さは最下のものが最大で、真ん中よりで10cm、側端部で5cm程度、5層分全体では厚さ18cmにまで達している。また、中央部の攪乱壌西側では、黄灰色が3層、明褐色が2層、白色が1層確認できた。いずれも、それぞれの場所での枚数であるので、全体とすれば漆喰層の枚数は少なくとも10を越えることは確実である。

先ず、最終形態（新段階）の白色漆喰に関する構造を中心に記すが、これは大別では単一層で、下の

7. 上層7区



第39図 上層7区 SX51(湧水)その1 (1/80)

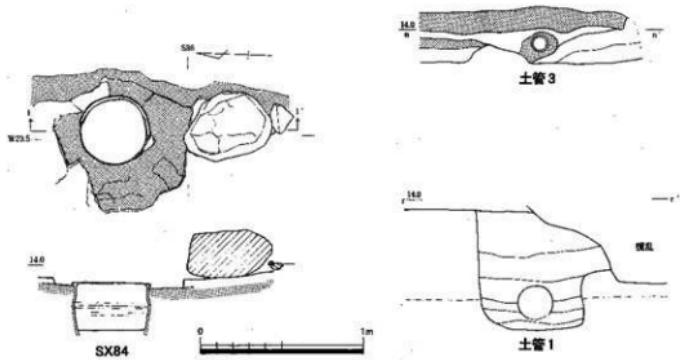
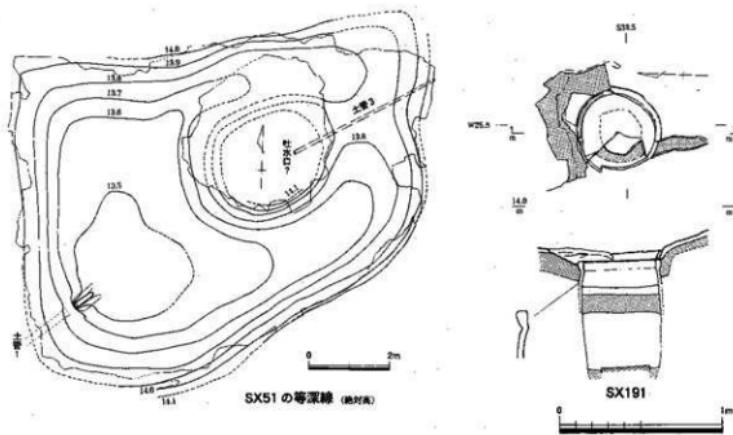
明褐色漆喰による中段階と共通する部分が多い。廃絶後の埋土は暗褐色灰色細微砂が基調で、多量の瓦が折り重なるほか、漆喰片や玉砂利、それに50cm級の花崗岩野面石1個が落とし込まれていた。ここでも、陶磁器は含むが決して多いとはいえない。白色漆喰の上面は、中央部北寄りが盛り上がり、中の島を形成するが、ここは攪乱を受けている。周端も損なわれている部分が多いが、北西隅の北縁は本来の漆喰端で、幅20cmあまり、長さ160cm以上の東西に長くおかれた延石状材があったような圧痕がある。白色漆喰端面の下では明褐色漆喰も端面を残し、また延石状材の圧痕部自身も明褐色の漆喰であるから、材の設置は明褐色漆喰の段階に遡る。そのほかでは、隣接する北西隅付近の直線的な西辺や南端部のW30mライン付近も、下の明褐色漆喰を含めて本来の端部が近いと観察されるが、実体としての端部は遺存しないし、明確な形では配石その他の護岸施設も確認できない。

第40図の左上は、白色漆喰上面の等深線を一部復元的に示したもので、当時からの地盤沈下がないとすれば、水を張った時の汀線に準じる。底は北東に高く、特に中の島には尾根状の起伏が取り付くが、内部には土管3が埋設されている。西側は深く広い底面をもち、最深の南西部には排水口があつて、土管1が取り付く。排水口端の高さは13.4mであるから、水を深さ約45cm以上入れなければ北東の隆起は露出し、本来からの端部が近いと考えた中南部にある最高点付近の高さ14.1mまで水を張ったとすれば長径2.6mほどの中の島が水面にみえ、北西隅の延石状材は少なくとも下部が水没する。この時、最深部での水の深さは70cmとなる。

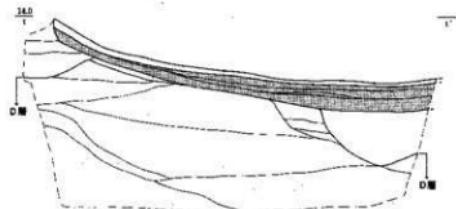
白色漆喰面を詳細に観察すると、多数の補修痕が確認できる。これは、水圧を受ける底面、斜面でも深部のものが多い。面的なものとしては、排水口付近が特に顯著で、漏水だけでなく排水構造の維持に関わる補修も含んでいるとみられる。その最新のものは、排水口を頭とするカエル形の部分で、周囲の漆喰に対して白さが強く面が平滑に仕上げてある。それに覆われ古いのは、やや南西に突出して端部が丸くなるシャトルcock形の部分で、いずれも漆喰を一旦破って内部の土管を露出させたのであろう。また別に隣接する底面を貼り込む橢円形の面的補修があり、以上を除く部分こそが白色漆喰の一次的部分と判断される。この部分はひび割れなどの痛みがかなり進行したようで、割目を埋め込む形で線状に漆喰を盛りあげた補修痕が随所に認められる。第39図でミミズ状にみえるのがそれである。当時よほど深刻な問題であったとみてとれる漏水は、まだ下に厚い漆喰層があるにせよ、池全体とすればD層という砂を主体とする地盤に營まれたことが、大きな原因であるに違いない。

SX84は池内東端にあり、口径50cmの焼締施釉の甕を正面に据えて、その口縁直下までを池底に埋め込む構造である。高さ13.88mを測る口縁端は、明褐色漆喰の上面より2cm高く、白色漆喰より2cm低い位置にあり、甕内部は口縁頂から29cmの深さで一面に白色漆喰が施される。水没を前提とするものであろう。そのすぐ南では、白色漆喰上面で長辺55cmの花崗岩の野面石1個を確認した。漆喰で固定されているわけではなく、池岸の意図的配石の可能性もあるが、破却時の投入石の可能性もある。またSX85から0.85m離れた位置では、池底の白色漆喰に直径35cmの円形線刻が施され、これを目印に同大の白色漆喰による円盤が貼り付けられていた。円盤は池底の傾斜に対し最大厚さ7cmの断面くさび形で、上面に13.78mの水平面をつくりだす。むろんこの円盤も水没するが、何かの台座の可能性がある。中の島北東脇にはSX191がある。大局ではSX84に近似する池底の埋甕であるが、攪乱で破損して断面構造がよく観察できた。甕は口径51cmの備前焼で、器高は75cm程度に見積もれる。口縁外面はこの種の甕に通有の強いなでによる凹線があって、体部はかなり筒状になってはいるが、口縁下のくびれ部はまだ明瞭で、器面は暗褐色を呈している。甕内底部には長辺27cmの礎石状の花崗

7. 上層7区



■ 明褐色地塊
□ 白色地塊



第40図 上層7区 SX51(泉水)その2 (1/120・1/30)

岩をおき、周囲を明褐色の漆喰で固定している。次にその漆喰面の上35cmから厚さ11cmで再び明褐色漆喰を全面に施して密封し、胴下半に中空部をつくりだす。この明褐色漆喰には遅れて厚さ5cmで白色漆喰が上塗りされる。その上面から甕の口縁頂まではまだ15cmあって、これが最終段階での甕の深さとなる。甕の外は口縁に、池底をなす明褐色の漆喰が厚さ6cmでそのまま垂れ込み、その上面は口縁外縁に密着する。遅れて、白色漆喰が口縁外角まで上塗りされ、さらに口縁上方にできる窪みを埋めて面を取る格好で、特にきめの細かい白色漆喰（これは工程差？）が施され、その分だけ甕の見かけの深さは増している。

土管3は北東から延びて中の島に取り付く備前焼の土管で、東方、SX77の北側では現存しないが管の抜き取りもしくは設置のための掘り方とみられる幅60cmの溝を確認した。土管本体の遺存を確認したのは池の北東端の第40図のnセクション以西である。この断面では先行する明褐色の漆喰層をかすめて掘られた幅90cm程度の溝状の掘り込みを伴い、底からやや浮いて高さ13.97mを上縁とする直径10cmの土管があり、周囲を厚さ2~10cm明褐色の漆喰で塗り固めた後、溝の上部を暗黄褐色灰色のパイラン土で埋め戻し、その上面は池底をなす12cmの厚さ明褐色の漆喰で覆っている。剥落しているが、さらに上には白色漆喰があったことになる。池底の隆起を抜け、中の島の半ばにあたる擾乱端では、その延長を確認した。暗灰色を呈する土管は、上縁高が13.94mで東より3cm低く、やはり明褐色の漆喰で帯状に塗り込められている。仮にそのまま西に土管を延長するとすれば、西の深みをなす漆喰層にあたることになるが、そこでは東側のような隆起が認められないから、土管は池に先行してあって別個に機能したものではなく、池そのものに付随する中の島への給水管と判断される。この確認西端は口縁が欠けてはいないが、本来の給水施設の端部とは考えられず、擾乱で失われた中の島中央部になにがしかの端末漏水構造が想定できる。

土管1は、池の南西から6区の石組溝9に至る長さ約9mの排水管で、器面が暗紫黒~暗褐茶色を呈する備前焼の専用材を繋げるものである。解体していないのでやや不確定であるが、各個体は、側部がハ字に開いて内面にソケット状の受段をもつ小口と、側部が段をもって一回り細くなる小口を片方ずつにもつもので、長さは62cm内外、一般筒部の直径17cm、受け側小口の直径24cm、受け部のホゾ裏での器厚は一般部より肥厚しているよう3.5cm、受け部のホゾは深みが2cm、厚さは1.5cmを測る。池から西にでた第40図のrセクションでは、幅0.65m、深さ0.7m程の整った箱形の掘り方をもち、構築後に暗黄褐色細砂ほかで丁寧に埋め戻していた。付近から6区にかけては、土管の縫ぎ目を環状に埋める格好で最大厚さ5cm内外の黄灰色漆喰が施されている。

池側の排水口は、前面の漆喰面が左右に対し谷状に深くなる一方、南西後方の池底斜面は周囲と変化なく続いている、奥では30cm近い段差となっている。この段差の下部に幅12cm、高さ13cmの隅丸長方形の穴があく。土管はこの奥に完全な暗渠として延びている。土管の端部吸水口は特別な部品が付くわけなく、他と同様の受け部側が単に剥きだしで、土管下部内面の高さは、前面の池底漆喰上面より14cm深い位置にある。不思議なことに、池側の漆喰穴から土管の端部までは28cmの距離があるにも関わらず、前面の池底漆喰は土管に接することなく穴の位置で途切れてしまい、下には単に土砂が堆積する。この点だけは機能に矛盾するが、池の南西端では土管上方を覆うことが確認できる明褐色漆喰や西側では土管に付着していた黄灰色漆喰が全く存在しないことを、先の白色漆喰表面での観察に合わせれば、この部分は決して当初の構造のままでなく、例えば池底の上塗りを重ねた結果、池底漆喰の穴口が土管端からしだいに遠のき、これが固定化したという過程を考えられる。

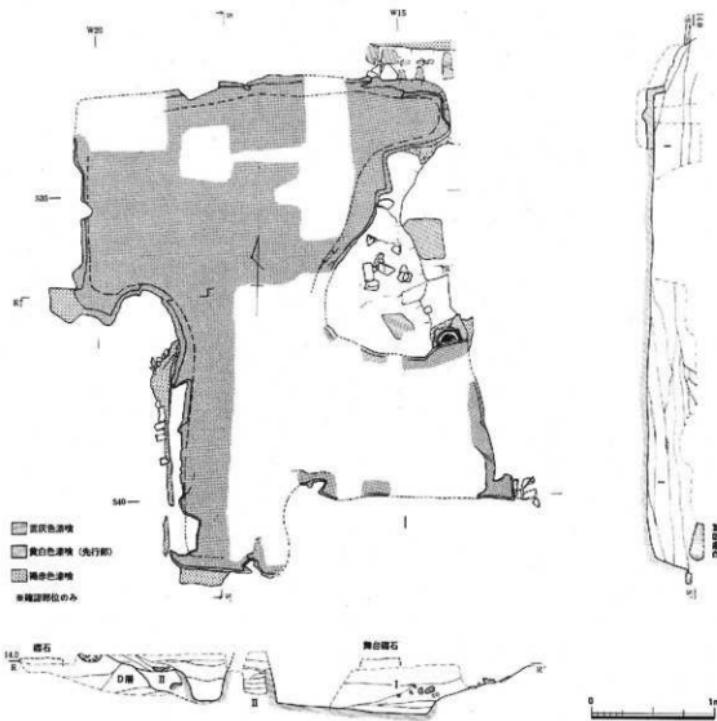
明褐色漆喰による中段階の池は、基本的に先述の新段階と大差ないが、必然的に深く、その最初期はそれより最低20cmは深かったと見積もれる。また、北辺部中・東部では白色漆喰より面傾斜がやや緩く、より北にまで漆喰が及ぶから、この方向に微妙に大きかったと判断される。

古段階の黄灰色漆喰は、上層漆喰に隠れる部分が多いが、北東の擾乱壌や中央の擾乱壌の東部では確認できず、西側にのみ存在する。しいて言えば、南北8.5m、東西5.5m程度の南北に長い長方形部分で、後の明褐色や白色の漆喰段階でも深く広い底面をなす池の中核的部分に相当する。

絵図を参照すれば、SX51は表書院中庭にあった「泉水」にうまく対比できる。元禄絵図では、泉水は南北に細長く、東には「舞台」があるのに対し、寛保絵図・幕末絵図では東の舞台はなくなり泉水は東に拡張されて中の島が出現している。すなわち、黄褐色漆喰による古段階が元禄絵図に示された池、明褐色・白色漆喰による中・新段階が寛保・幕末絵図に示された池に対比でき、その改造時期が両絵図の間にあったことが判る。北西隅の北辺延石状圧痕や西辺直線状部に相当するとみられる延石状の護岸表現が元禄絵図と寛保絵図にある。元禄絵図では北辺材の南に平行してもう2材があたかも階段状に示されるが、遺構としては検出されない。これは黄褐色漆喰が元禄絵図の段階であるから当然で、延石状部のすぐ下で黄褐色漆喰が確認できないことからすれば、北辺と西辺の延石状材は元禄絵図に遅れる池の改造・重上げに伴って、一旦はずされて再び置き直したものと解釈される。寛保絵図・幕末絵図に示された中の島には、北から橋が架けられ、その陸側ともには北西から飛石状の表現が取り付くが、それらを示す遺構は検出されなかった。また、寛保絵図では、中の段北東の井戸から伸びる朱線表現が、中の島の東方池縁まで取り付き、土管3に比定できる。井戸脇に示された水槽で水圧をかけるサイフォンで中の島に湧水させたものと判断される。湧水部の具体構造は絵図でも未詳である。元禄絵図の池の東岸中央の張り出しが中の島の前身ともみられ、こうした給水管が元禄絵図段階に存在していても矛盾はないが、管を塗り込む漆喰からすれば、土管3の確認構造は遅れるものであろう。池の水源は井戸であるから、常に給水されていたとは考えにくく、むろん排水口も平時は栓がされていたはずである。絵図には排水用の土管1の表現はないが、吸水口の細部はともかくとして、諸状況から元禄絵図段階から既にあった蓋然性は高い。SX84・SX191や円盤に相当する表現も見当たらないが、特に埋甕2個の機能は不詳で、渴水時や清掃時の魚溜り、あるいは不用意に育成すれば根が底の漆喰を侵食するに違いない水草類の植え所などの可能性も考えられる。

S X 77 [絵図に先行する泉水] ほか (第41図)

SX51の東に位置し、南北8.2m、東西7.4mの概して長方形の範囲に及ぶが、東西両側が半ばで括れるなど不定形な平面をもつ土壤で、その全面に漆喰を張る。やはり保水施設である可能性が高い。使用される漆喰は、基本的に黄灰色のもので、SX51の古段階に比べて軟質である。底面は平坦で、北西隅が高く13.35m、南東隅が低くて13.10m内外で、SX51と東西の傾斜が逆になっている。底面漆喰の厚さは10cm内外で、上面には砂利敷きなどは認められない。平坦な底部に対し側部は明確な界線をもって急角度で立ち上がり、断面は箱形となる。側壁の傾斜は平均65°程度であるが、40°~80°の振幅があり、局的には90°近く部分もある。漆喰は砂主体の混バイラン土に直接、しかも急角度に張られた結果、剥落やヘタリが起りやすく、また破却時や埋没後の別の上層遺構による擾乱を受けたりして、特に側壁上部の残りは全体に良くない。それでも側壁部で元位置を保っている最高位は13.90mを測り、続く斜面は14.10mまで上がっているから、最深部での深さは0.8~1.0mと見積もれる。側壁面を中心に、類似の漆喰を重ねた補修痕が見いだせる箇所もある。



第41図 上層7区SX77(絵図先行泉水) (1/80)

漆喰壁より一回り大きな構築のための掘り込みがあり、漆喰壁の裏には灰褐色系のバイラン土や暗黃灰色の純細砂などが置土されている(II層)。置土には20cm大の花崗岩角礫を含む部分があり、漆喰壁が複雑な曲線をなす池の括れ部などで特に細かく水平である。一方、廃絶時の埋土は、暗灰褐色細砂でバイラン質部を含み、少量のこぶし大円礫を含むが、総じて汚れは少なく、瓦などのゴミ類はまったくといってよいほど含まず、丁寧に埋め戻されたといえる状況である。

東辺の括れ部南側では、側壁本体に切られて先行する直徑34cmの半円形(もと円形?)の穴と、これを形成していた黄白色の漆喰張りが検出された。現状で東西60cm、南北40cmの規模をもち、特に穴の周囲の厚さ10cmほどの漆喰は、周囲の漆喰面より高さ10cmほど突出し、SX77の本体より極めて硬質で、白色度が強い。穴の中には直徑1cm内外の小さな玉砂利が充填されていた。

池の外縁部では水平面をなして施される漆喰が若干確認できた。前述の砂利穴の北などでは黄灰色漆喰で、池岸を固める施設の可能性がある。一方、褐赤色を呈すものもある。これは他所で明褐色漆

喰としたものの一部に色調が近いものもあるが、より赤味が強く鮮色で、なにより軟質で粘性がある。池の南西部で確認したものは下に20cm大の花崗岩割石を伴い、黄灰色の池の側壁に切られてい一方、池構築のための掘り方のうちにある公算が強い。北東の突出部の南にあるものも側壁に切られ、さらに突出部の北にあるものも一連である可能性が強い。遺存していたSX77の黄灰色の壁に先行して比較的広範囲に褐赤色の漆喰張りの床が存在したことになる。

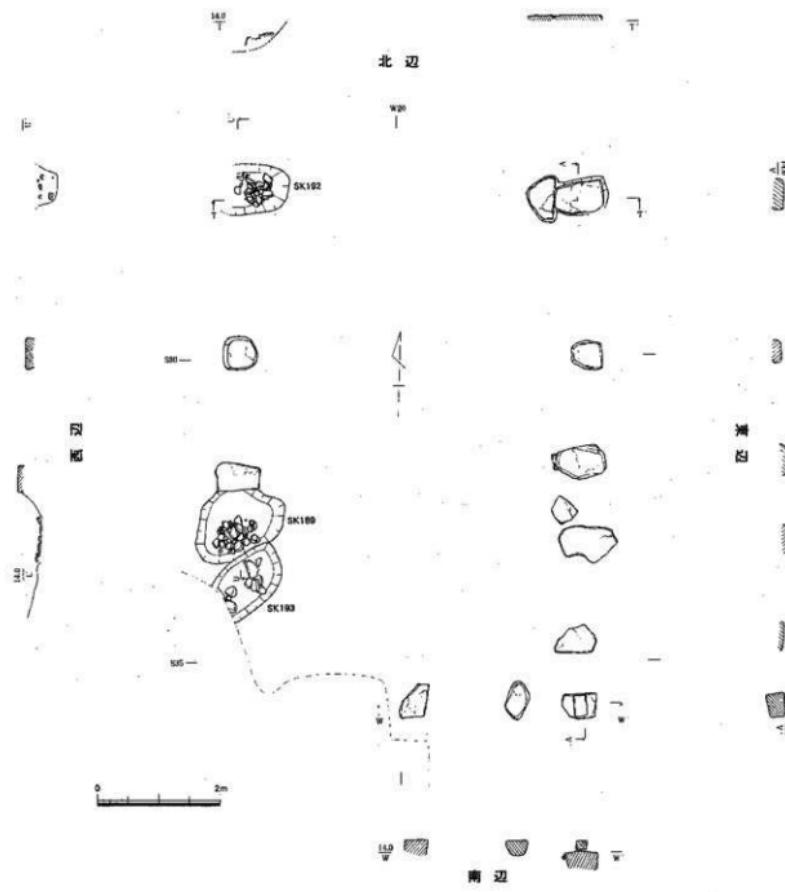
また、Rセクションにも示されるSX77の中西部付近では、黄灰色漆喰の側壁の内奥に塗り込められた褐赤色漆喰層が観察できる部分があり、黄灰色側壁の裏の置土には、褐赤色漆喰の粗片を含む層がある。SX77は本来は赤褐色漆喰を多用するものであって、大規模改修の結果、黄灰色漆喰への更新が行われたのではないかという仮定も想起でき、そうした改造を認めるなら、周囲の褐赤色漆喰床の一部も古い段階の池の脇の防水施設、また砂利穴はこの段階もしくは次の段階の池岸施設で、検出できた構造への改造によって半蔵されたという解釈もできるかもしれない。また、先の床張りと同様、褐赤色漆喰は黄灰色漆喰に対して先行的といえ、一部は併用もあったことになる。

元縁絵図ではこの位置に「舞台」が示されるが、それは、この遺構の埋土上に展開し別に記す礎石群20に比定できる。したがって、このSX77は元縁絵図に先行する泉と判断され、しかもその先行形態ないしは別の構造として、さらに古い遺構が存在することが確認できることになる。なお、調査中はこのSX77が舞台の下部構造の可能性も想定したが、第33図に示されるように、位置・規模・形態など両者の一体性は見いだしがたく、時期差をもった別遺構と判断される。

礎石群20 [舞台] (第42図)

礎石とみられる石材10個程と、抜き取り穴のある土壙が2、3基、細長いロ字状に確認された。東辺列はSX77の南北中軸付近の埋土上にあって、それより新しく、西辺の中部の1石はSX51の中段階の明褐色漆喰の下に伴う置土造成土に覆われるから、それよりは古くなる。各礎石は、割石面をあまりみせない花崗岩の平石で最大のもので長辺95cm、幅60cmを測る。東辺列は意味不明の傍石1個を除いて6柱分、全長は端礎石の心々で8.34m。石材間隔は北東角石から順に心々で、2.60m、1.78m、1.31m、1.59m、1.06mとなる。北西隅は既に石がなく、抜き取り跡とみられるSK192が検出できた。こうした土壙の底部には礎石の根固めとみられるこぶし大の円錐を伴っている。北辺全長は、一列南に残る東西2石を代用すれば、心々で5.68mを測る。北辺の半ばは擾乱が及んで不詳、北東角の石材に接してもう1石が配されている。西辺の遺存は2石のみで、心々距離は2.02m。南片は西延長部が未掘であるが、確認両端が心々で2.80m、半ば東寄りにもう1石ある。これらの礎石の上面高は14.2~13.94mの振幅をもつが、基本は14.1mをやや越えた辺りになる。この振幅の一因は恐らく地盤の不等沈下で、南東角の石材重複は、高さが下がったぶん本来の礎石の上に小石材を据えて14cmほど重上げし、北と西の石材に揃える補修を行った結果であろう。ところで、礎石上面の14.1~14.2mという高さは、先述した西の泉水SX51新段階の復元水位と一致する。したがって、泉水新段階での池岸の地表高はこれよりさらに高かったと考えるのが自然であり、現実の土層観察では判然としないが、この礎石建物廃絶直後、ないしは泉水の改造時に一帯の地盤のかさ上げがあり、礎石がそのまま埋められた結果、遺構として残ったとの解釈もできよう。

既に述べたように、この礎石群は元縁絵図の「舞台」に相当するが、表現されている柱との対比を行えば、北東角石は北を向く舞台正面の東角柱、東辺その南の2石は表現がなく、次の大きな石材が南東から延びる橋掛り取り付き部右の柱、次の1石は表現がなく、南東角石が橋掛り取り付き部左の柱、



第42図 上層7区礎石群20(舞台) (1/80)

南辺他の2石は舞台背後の壁線に従うが表現はない。西辺はSK192が舞台正面西の太柱、SK193辺りが舞台南西の太柱で、その間は西に張り出し(脇座)があって縁には南北の小柱列が描かれるが、そこはSX51の中・新段階によって攪乱を受けた個所で、逆に検出した西辺2石は表現がない。絵図に表現がない礎石は、東柱の類とみられるが、むしろ必然的な位置にある柱といえよう。

円礫敷溝1・礎石列6・7・8ほか〔表書院北西棟雨落ち?・先行建物?礎石〕(第33・43図)

円環敷溝1は、幅1m内外、深さ0.3m内外で、本区北側のW25mライン付近で短い東西部として端を発し、鉤折れして南北に11.5m、そこで東に折れて16.1m、さらに北端まで2.6mの延長をもつ。整った矩形ではあるが、完結囲繞はしていない。溝内は攪乱で残りの悪い個所もあるが、基本的にこ

ぶし大の円礫（一部後述の割石も）が詰まっている。円礫は無秩序な機械的充填にみえる個所もあるが、例えば第43図のbセクション付近などでは、上面を描えた底部の円礫敷きに対し、側部の円礫が面を描えて傾斜をもって立ち上がり、円礫自体が断面皿形の溝構造をつくりだす個所が、確実に存在する。またSK99やSX83、漆喰などと伴う擾乱の浅土壌など、他の上層遺構に切られる個所が多い。

礎石列6は円礫敷溝1の底面を中心に確認されたもので、溝の底面では、構築のための掘り方が1石ごとに確認でき、その埋土はD層の再堆積状で汚れは少ない。各石材の上には、たいてい溝の円礫が20~30cmの厚さで堆積し、しかも先述の円礫自体による溝構造が石材上部でいまだに完結性をもって残る部分があるから、円礫は柱の周囲を固める施設ではなく、礎石上の柱が撤去された後のもので、両者は時期差を持つと考えざるを得ない。しかし、溝を越えての伸展の有無や状況は十分に検証できていない。例えば西辺延長のSK102などは抜き取り穴の候補ではあるが、確定はできない。

礎石は花崗岩の粗割り材主体で、矢穴を残すものもあり、正方形に近いものが目につく。最大のものは長辺87cm、幅70cm、小さなものでも確実なものは50cm級である。上の円礫の保存と未掘のため不確定な部分もあるが、南辺は、未掘部に予想できる西端1石から東7石目までは遺存良好で、8石目とみられる石材は擾乱をうけて動き、本来の東端とみられる9石目の想定部は擾乱が著しい。推定の西端石材から7石目までの全長は推定11.71m、あと2石分を復元するなら15.20mとなる。石材間の距離を、西から順に示せば、1.88m（推定）、1.80m、1.85m、1.95m、2.19m、2.04m、以東を推定すれば、1.78m、1.71mで、振幅がある。西側7石に限って平均をとれば1間195cmとなるが、東2間は狭い。南辺7石目は、SX77で記したものと同質で先行的な褐赤色漆喰の張床に埋没後覆われるという前後関係がある。なお南辺部推定東端の北には、南北礎石軸から心々で1.2mの位置に1石があり、その東半分は円礫敷の直下から外れてしまう関係が確認できる。東辺の北寄り4石材の間隔は、心々で1.9m、1.95m、2.5m内外と計測できる。礎石上面の高さは、東辺にあって擾乱時にやや動いたとも判断できる1石を除いて、13.80~13.90mで非常によく描っているといえる。

円礫敷溝1の中には、礎石列6の礎石上に直接のるもの若干を含め、最大長辺40cm内外で礎石状の花崗岩粗割り材や、さらに小さな割石材1、2個の集合が確認できる個所がある。これは、礎石列6全体に係わる高さ調整や重上げとは考えにくい状況で、その上面の高さは円礫敷上面付近に達し、あくまで円礫敷溝1に付属するものと判断できる。また、円礫敷溝1・礎石列6の東辺と南辺に平行して、長辺40cm内外の礎石とみられる石材の配置が確認できた。南の礎石列8は、溝縁の北約1mに軸をとる2石で上面の高さは14.05m内外。西辺の内側では礎石列7の3石が確認された。両端石材間は心々で5.2m、2石欠落を予想すれば1間130cmの4間分にうまく復元できる。上面高は14.25m内外とかなり高い。溝の西辺外側にも2、3の石材があり、南2石間の距離は心々で3.3m、上面高はやはり14.25m内外である。

円礫敷溝1そのものは、絵図に示されないが、元禄絵図の確定的な舞台礎石などを定点として対比すると、その南辺は表書院北西棟の南外壁に平行し、溝縁のすぐ外にあって、あるいは軒先の雨落ラインに比定できる。その際、礎石列8は溝縁の東石予想ラインに合ってくる。しかし溝の西辺はどの絵図でも表書院北西棟西部の床下となってしまう。礎石列7は、北西棟の西側を南北に貫く柱列に平行するが、完全な一致とまではいえず、溝西の2、3石も床下になるが、さらに判然としない。円礫敷溝1は、本来露出を前提とするとみられる構造でありながら、絵図では一貫して床下位置になり、かつ他の上層遺構に切られる事が多いとなれば、溝の構築は元禄絵図に先行するものとみて間違いかろ



第43圖 上層7區內牆數弄1·磚石列6 (1/80)



第44圖 上層7區數瓦數2 (1/80)

第45圖 上層7區SK99 (1/80)

う。溝の西辺は表書院南西棟の内で完結性をもって南北に通る柱や壁に対しては、平行してすぐ西外にあって、絵図に先行する段階には、この雨落ち溝の内側に収まる建築であったものを、遅れて西に増築したという可能性が提示できる。その際、増築以降にも円礫溝1がオープンであったかどうかは未確定であるが、南辺は十分に想定していいだろうし、埋没の有無にかかわらず結果としては、この棟の防湿機能を果たしたに違いない。溝の下の礫石列6は、元禄絵図から2段階古いものとなる。伸展は未確定な部分が残っているが、石材の大きさから本格的な太柱が想定でき、濡れ縁の束石や軒の受け柱の類とはとうてい考えられない。しかも、溝1に関わって存在したはずの建物との相似形をもつから、後身建物より一回り大きな類似平面をもつ建物が想定できる。

敷瓦敷2【廊下床】(第44図)

北西部で確認されたもので、やはり24cm(8寸)四方の磚の四半敷きであるが、南北確認幅約1mの両側は旧制中学の基礎で切削されている。漆喰に側部を固められた東縁が確認できたが、端線は敷瓦の形に従ってジグザグをなし、角を欠損する材もあるから、当初の状況とは考えにくい。敷瓦の東は漆喰によるタクキ土間をなし、高さ13.9mをはかる敷瓦の上面に描えて床面をなす。全面に遺存するものではないが、重なりから褐赤色、黄灰色、明褐色の順に施されたことが判る。ここは絵図では、表書院北西棟から数寄方槽に至る「廊下」に相当し、加えて元禄絵図では「拾三疊」の注記があり、寛保絵図では東の母屋から土間に降りるためとみられる階段が示されている。

S X 83【水琴窟様伏堀】(第46図)

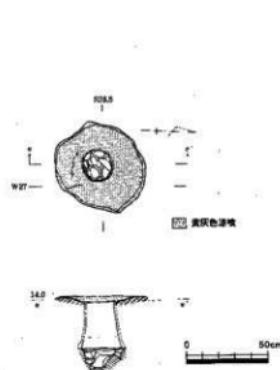
泉水SX51の北にあり、円礫敷溝1の円礫上埋土を切っている。口径29cm、定形20cm、高さ29cmのバケツ形で土師質甕を倒立して地中に埋め、その周囲を直径60cmの円形をなす黄灰色漆喰で固めている。漆喰は厚さ4cm内外、甕の底部は全体が欠損するが、本来はその上面にも漆喰が及んでいたとみられる。甕の中には締まりのない土砂が落ち込んでいたが、本来は中空とみられる。甕の口縁は、下の円礫溝1の円礫の転用ないしは部分加工とみられる円礫組に直接載っており、甕の中央は口縁よりさらに12cm深い。8区のSX30より一回り小さいが、同様の構造で、いまはない甕底部の中央には恐らく穴があり、水琴窟様の排水施設とみられる。絵図ではこの位置は、表書院北西棟の南西隅のすぐ東側に相当し、南辺の濡縁の僅かに外となる。伏堀の地上には手水鉢が想定される。

S X 96・S X 99【表書院北西棟便所】(第49図)

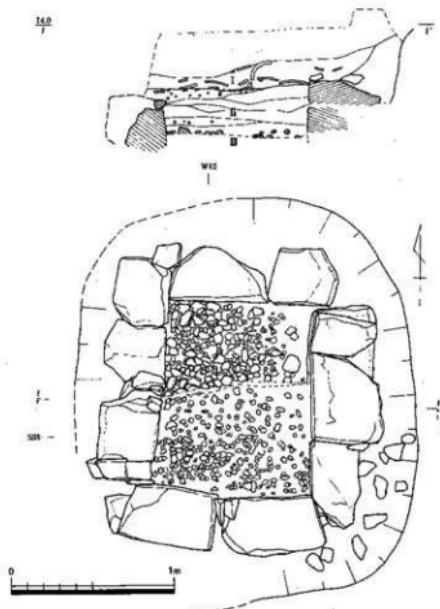
SX96は東西1.05m、深さ0.6mで断面箱形の土壙であるが、南側は擾乱で半裁されている。土壙内に東西45cm、深さ50cmほどの箱状の木組みが収まっていた痕跡があり、要所には鉄釘も伴っている。箱裏の埴土は暗黄灰色の細砂、箱内の埋土はそれより汚れ、その間層として厚さ4cmの明褐色漆喰による張り土があり、さらに最上層は箱を覆うように厚さ10cm内外の明褐色漆喰が全面に施されている。9区SX11との類似性が強く、表書院の破却以前に漆喰で丁寧に封印されたとみられる。

その東にあるSX99は、東西1.1m、南北0.7m、深さ最低0.4mの土壙で、円礫敷溝1を切り、SX96の最上部漆喰には切られている。直径5cm内外の小円礫が空石の状態で詰まっており、その下にはこぶし大の円礫が確認できる。大円礫は、この遺構内のものであるのか、円礫敷溝1のものであるのかは未確定であるが、どちらにしても円礫を介して溝と連絡する結果になる。

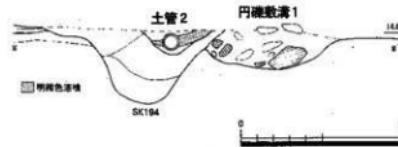
両遺構は各絵図に示された表書院北西棟南部の西端にある便所に比定できる。内でもSX96は細長い图形表示の便座式部でその便槽、SX99は東に付随して表現された小用便器下の尿水受けとみられる。寛保・幕末絵図の注記では、すぐ東には「御座ノ間」「南座敷」や「上段ノ間(添齊ノ間)」が



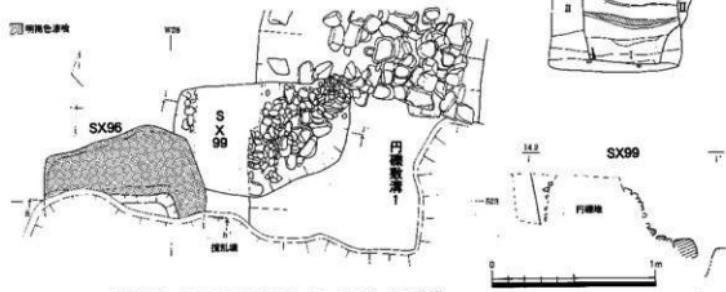
第46図 上層7区 SX 83(伏窓) (1/30)



第47図 上層7区 SX 186(耕形石組) (1/30)



第48図 上層7区土管2はか断面 (1/30)



第49図 上層7区 SX 96・99(便所) (1/30)

あり、間違いなくこの便所は大名が所在する上座に対応したものである。

S K 195・S K 196・S K 197 (第33図)

SK195は一辺0.8mの隅丸方形で3cm大の玉砂利を、SK196は直径0.6mの円形でこぶし大円礫を、SK197は南北1m以上の長形で平均5cmの小円礫を、それぞれ埋土上面に伴っている。絵図では屋外に相当し庭に関わる造構と思われるが、性格はよく判らない。

土管2 (第33・48図)

先述の石組溝9に排水口をもつこの土管は、北東に延び、SX51の北西隅にかかっている。土管本体はその底張りをなす黄灰色漆喰によって包み込まれて埋め込まれた状態で、泉水の古段階に先行ないしは同時敷設と判断できる。この部位での備前焼土管は、暗褐色茶色を呈し、一般部直径9.5cm、受け部側8cmは段をもたずに広がって、口径は11.5cm。泉水を挟んでさらに東では、攪乱横や抜き取り溝に置き換わった部分が多いが、第48図のgセクション付近にまでは延長が確認できた。ここでは、幅50cm程度の掘り方が円礫敷溝1の埋土を切り、明褐色漆喰によって左右を固定されている。判然としないが、漆喰の違いはこの部分が補修を受けた結果であろうか。

S K 93 (第45図)

南東部にある南北3.8m、東西2.6m、深さ0.9mの不整形な土壌で、埋土の下層上面に黄灰色の漆喰のまとまった塊があるほか、黄灰色細砂の下層埋土にも同様の漆喰片を含んでおり、漆喰を捨てたゴミ穴の觀がある。上層は対照的な暗褐色灰色細砂で円礫や明褐色漆喰細片を含み、本来は別の土壌かもしだれない。下層埋土からは、江戸前期の陶磁器が出土した。

S X 186 (枡形石組) (第47図)

南西部にあり、SX77の古い泉水を切っている。南北2.5m、東西2.1mの隅丸方形の掘り方の内に、花崗岩粗割り材による枡形を組んでいる。石材の長辺は40~60cm、幅20cm内外で、長辺を枡形の内面に向ける。石材の高さは20~30cmで、最大で2段が遺存するが、掘り方の深さや現存石材頂部の凹凸からして、本来はもう1、2段あったとみられる。枡形の内法は、東西0.94m、南北1.22mの長方形である。枡形内の埋土上層は、明治の破却時の攪乱とみられる瓦片を多量に含む暗褐色灰色細砂であるが、その下には3cm大の玉砂利が厚さ10cmに敷きつめられている。さらに滯水的状況を思わせる暗灰黄色シルト微砂層の堆積を隔て、下層には5cm大の小円礫が層をなす。石組の根の高さは、下の円礫上面から10cmほど下に求められる。上の玉砂利面から、高さ14.1m内外とみられる石組復元頂ないしは当時の地表面までは0.5mで、これが破却時点での枡形の深さであろう。この位置は絵図ではまだ内庭のうちで、舞台(元裸)や敷き屋(寛保の貼り紙後・幕末)に望む東の母屋側の軒先付近に相当し、屋根を伝う雨水を流すための集水溝の可能性が考えられる。土管などの二次的排水施設は確認していないが、基盤となるD層は砂主体であるから、地表水を一旦この構造で伏流水化すれば、しみこみ式でも一定の機能は果たせたはずである。

S K 187・S K 188・S K 90ほか (第33図)

SK187は直径1mの円形土壌でこぶし大の円礫や江戸後期の瓦片が詰まっている。SK188は東西4mほどの細長く不定形な土壌で、こぶし大の円礫が多数落としこまれている。南の側部は下層の埋没高石垣1がかかるており、一部はいまだに空洞となっている。下層石垣の存在による水みちや石垣材隙間への土砂転落によって生じた地盤陥没の埋め戻しあると判断される。SK90は南北3m、東西3m内外、深さ0.5mの土壌で、埋土には長辺40cm大以下の花崗岩割石や20cm級の豊島石破損材を多

量に伴っているほか、瓦片なども含まれる。石材埋棄場の觀が強い。

本区では、以上に記述した以外にも多数の土壌類や断片的な礎石状石材若干を確認したが、絵図との対比を含めても、たいていは性格不明のものである。なお、寛保・幕末絵図に示されて元禄絵図の舞台跡地の東よりにあるはずの「数寄屋」の痕跡を特に入念に追求したが、確認には至らなかった。先述のように、両絵図の間に中庭部の地盤の重上げが想定でき、地表面が高かったぶん、擾乱削平を受けたものと解釈される。また、中庭部の各所では面をなす状況ではないが、2・3区同様の黒色系玉砂利が散在し、本来これが敷きつめられていた可能性が強い。よく舞台に伴う白玉石はみられない。

8. 上層8区（第50図）

中の段の北西端で、表書院の最奥部である「招雲閣」や月見櫓との間の庭部に相当する。

円礎敷溝2・礎石列9・礎石列10ほか（第51図）

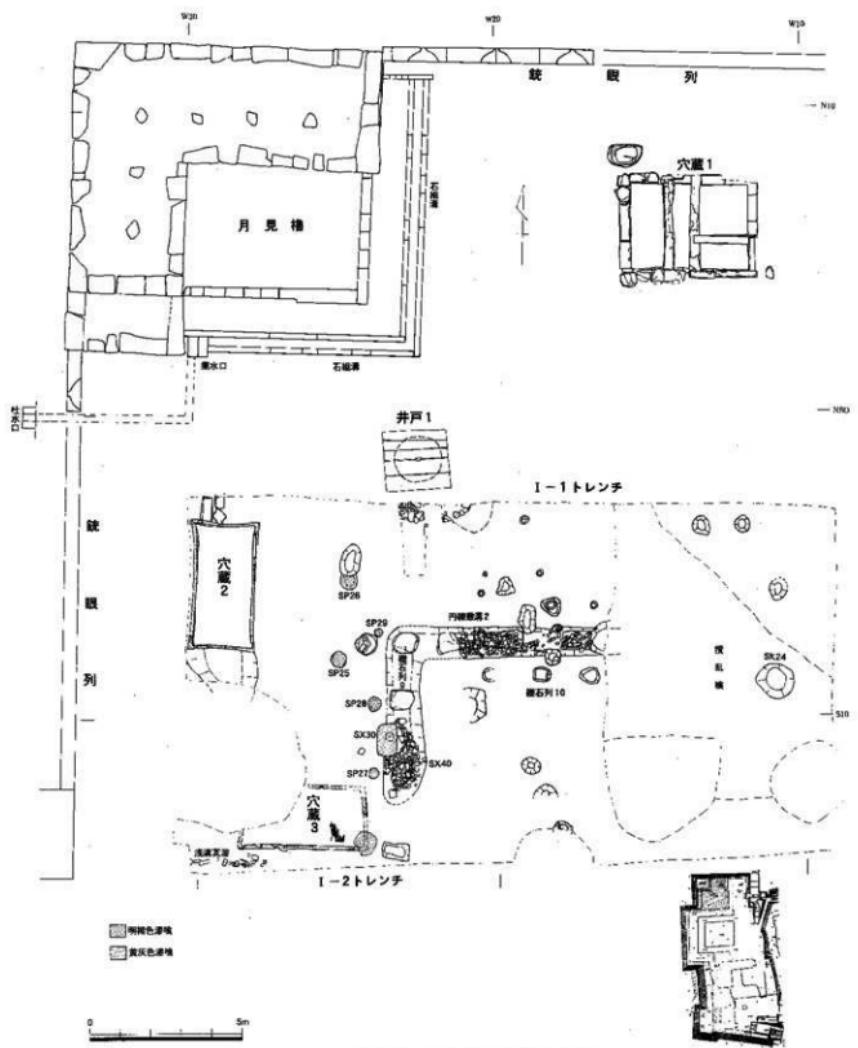
円礎敷溝2は、基本的に円礎敷溝1と同じ構造であるが、それとは直接は連ならない。南の端部から約3mで鉤折れし、東西部は東を擾乱に切断されている。Eセクション付近では、円礎が面を描えて断面皿形の溝をなす状況が残っていた。この溝内でも円礎下に礎石列9が確認された。石材は長辺80cm前後で揃っており、南の礎石列6より安定感があるが、沈下のためか上面高は13.7~13.9mとやや幅がある。やはり1石単位の構築時の掘り込みをもつ。南北部南端に想定できる1石は上の溝ないしSX40のために現存しない。礎石間の間隔は、西辺2石が1.88m、東西部は西から順に1.4m、2.18m、1.93m。礎石列10は、溝の東西部に平行し、主軸で1.1m南で、遺存石材は1石のみであるが、心々1.7mの距離をおく左右に抜き痕状の土壌がある。石材上面の高さは、14.05mで溝の円礎上面より15cmほど高い。また円礎溝ないしは礎石列9の南北部に平行してSP27・28・29がある。2.4m間隔で並ぶ、直径0.3~0.5mの円形土壠で、外形ほぼ一杯に褐赤色塗喰を充填する。塗喰の高さは最大で45cmにまで達する。その南北列から主軸で1.4m西に平行しながら北によるSP25・26がある。やや大きめの土壌であるが、同様に褐赤色塗喰を充填し2.6mの距離をおく。

元禄絵図では、円礎敷溝2の東西部は表書院北西棟北半の座敷北の軒先に平行する塀表現にあたる。南北部の北まではその塀が回り込むが、中南部は構造が変わって出書院が示される。溝の元来の機能は塀の下部構造とは考えにくい。次のSX30・SX40の評価とも関わって、円礎敷溝2は1と同じく、元禄絵図の表書院北西棟の外形とかなりの整合性をもつが、絵図そのものよりは先行し、母屋の雨落ないしは防質機能に関わって成立したものと判断される。礎石列9は、7区礎石列6同様、溝より古くて一回り大きい前身建物の本体に関わるものであろう。礎石列10は、絵図に示された座敷北の滲れ縁の東柱予想位置に相当する。SP27ほかの塗喰充填土壠は判然としないが、いずれの段階かの建物に規定された屋外構築物と考えられ、塗喰の状況から比較的古い段階のものとみられる。

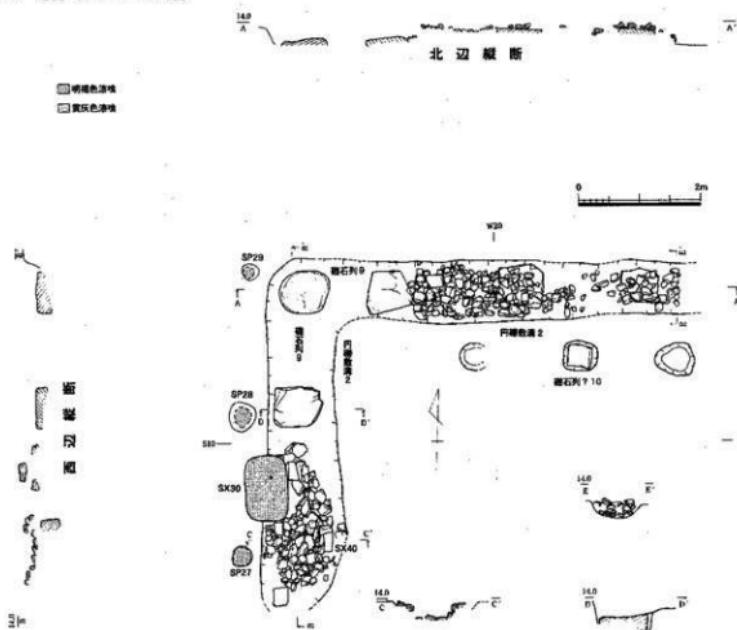
SX30〔水琴窟様伏堀〕・SX40（第51・52図）

SX30は、円礎敷溝2の南部西寄りにあって、溝の円礎埋没後にその西縁を切って構築されている。構築のための掘り方は南北1.1m、東西9.3m、深さ0.6mで、掘り方の内にはやや西によって、バケツ形の土師質壠が倒立して掘えられて、内部は中空になっている。壠の口径は36.0cm、高さは34.2cm、底部外径は29.0cmを測る。口縁は馬爪形に2.6cmにまで肥厚し、頂端は水平。体部の器厚が1.0cmに対し、底は0.5cmと極端に薄い。底部中央には2.8cmの孔が焼成前から開いている。外器面は暗茶褐色を呈し鉄分を含む塗土が施されている。内面や断面は、淡暗褐色で0.5mm以下の砂粒を含む。植

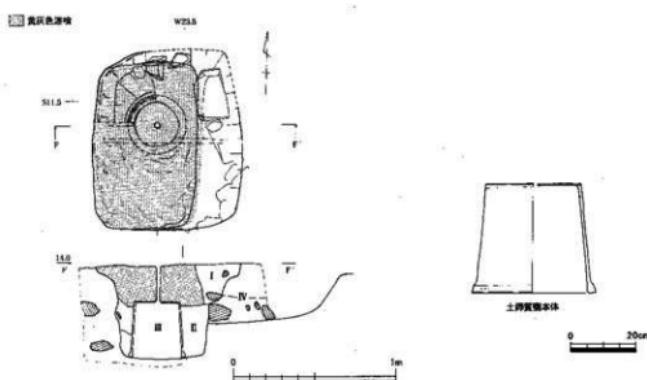
8. 上層8区



第50図 上層8区全体図 (1/160)



第51図 上層8区円礫散溝2・礫石列9(1/80)



第52図 上層8区SX30(伏堀)(1/30・1/15)

木鉢にも似るが、各部の器厚バランスや底面全体が单一平面であることなど、そう考えるにはあまりにも不自然で、この種の造構の専用材の可能性がある。壺の底面の上は厚さ23cm内外もの黄灰色漆喰が施され、その範囲は東西0.65m、南北1.1mの長方形となる。壺底面の孔の直上は漆喰も内径2cmの筒状孔がある。いわゆる水琴窟に似た構造であるが、孔下の中空部の床は皿などの水受け施設は本来から存在せず、地盤をなすD層の灰黄褐色の純細砂があるので吸水性が強いから水溜りは形成されず、現代品のような、金属的な反響音はほとんど期待できない。

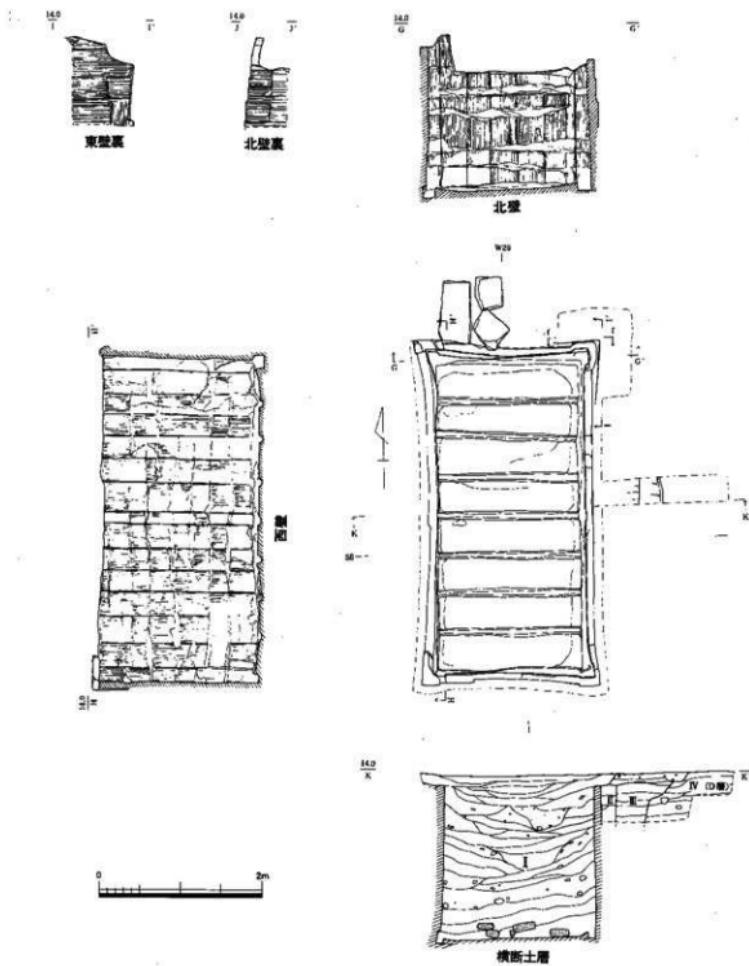
その南東にあるSX40は、円礫敷溝2の二次加工的部分とも思える円礫組みである。南北0.54m、東西0.60mの方形範囲に、溝2の他所より大きな長辺20cm大の不定形の丸石を敷きつめて床とし、四隅は同大以下の丸石・円礫をほぼ垂直に2段ほど積み上げ、側壁としている。つまり、ここでは本来の南北方向の溝を遮断して、深さ25cm以上の窪みをつくりだすことになる。この窪み構造は、伏壺との同時機能には矛盾ないが、北西端を伏壺の掘り方に僅かに切られている。

この場所は、表書院北西端の座敷（寛保・幕末絵図では「招雲閣」の注記）の上座の壁裏、溝れ縁の突き当たりに相当し、元禄絵図には小用便器の表現がある。SX40はしみこみ式の尿水受け、SX30は傍らに想定できる手水鉢の排水構造に比定される。

穴藏2（第53図）

月見櫓の南にあって、黄灰色の漆喰を床・壁・天井材とする地下式の部屋で、穴藏と判断される。側壁は本来垂直であるが土圧でやや内に孕みだし、天井はほとんど残らず、破片化して埋土中に落ち込んでいる。床面は12.0mの高さにあって、側壁間の内法は南北4.0m、東西2.0mを測る。南西隅では水平をなす天井が僅かに残る個所があって、そこでの蔵の高さは内法で1.9m、天井上面の高さは13.95mであるから、東隣での当時の地表面高からして、全体が地中に収まる構造になる。漆喰の表面には構築時の木柱や板によるとみられる段差や木目痕が顕著に残っている。漆喰材中には芯材やスサなどは観察されない。

以上は概観であるが、細部構造は複雑で、構築工程の復元を念頭に細部構造を記す。横断土層に示されるように、第一に、予定の穴藏より一回り大きな箱形の土壤がD層を切り込んで造られる。土壤底の上では漆喰が張られ平坦な基底部をつくりだが、先立って、その四周つまり穴藏の平面形を決めるため、横板もしくは角棒による外枠基部を組む工程が予想できる。次に基底漆喰張り上の四隅と長辺の中央には、一辺15~20cmの角柱が垂直に計6本立てられ、蔵の立面基準ができる。各角柱の間に厚さ10~15cm、幅25~36cm、長さ200cm以上の板が垂直に、各6枚づつ立てられる。この時、柱の内側と板の内側はほぼ揃えられ、必然的に柱の外側面は板の外側面より3~5cm外に突出する。この内側型枠の内側には、側部を底張り上面、小口を柱もしくは立板に接する格好で、長さ175cm、厚さが9cm内外の板もしくは角棒がかまされる。この木材は枠形の長軸に直交し、7つあり、南北小口の立板間を等分割する。特に中央のものは立柱間に渡される。これは内側型枠の補強を担っており、別に床から浮いた位置にも予想できるが、痕跡は残さない。補強の横材に続き、内枠内の床には基底の漆喰張りに上乗せして、新たな漆喰が打たれ蔵の床面をつくりだす。その厚さは、中央部で6cm、立板や柱に接する端部は12cmほどにまで肥厚する。柱や立板の内側や補強の横材の状況は、この床の漆喰に記録される結果となる。一方、内側の型枠と、基底部外側に組まれた外側の型枠との隙間には、上から漆喰が流し込まれ蔵の側壁となる。つまり側壁内面には、内側の型枠外面の立板材や柱材間の段差や微妙な隙間、それに木目の状況が克明に記録されることになる。同様に、側壁外



第53図 上層8区穴藏2 (1/60)

には外側の型枠の内面の状況が写されている。内外の型枠の間隙は板材同士の場合で幅10cm内外、これが側壁の厚さとなる。この側壁構築工程は、外側の型枠の板が上まで積まれてから一気に漆喰の投入がなされたのではなく、段階的に構築された可能性が強い。すなわち、蔵の側壁内面は縦方向に走る立板や柱の圧痕とは別に、横方向に20~30cm間隔で、漆喰の目や亀裂が走っており、漆喰投入の単位と判断される。この間隔は型枠板の幅に一致するか若干下回る数値である。一方、外枠板と掘り方壁との間にはD層の再堆積状の暗黄灰色バイラン・細砂が詰め込まれている(Ⅲ層)。これは外か

ら板を押す固定材となり、入念な土砂投入で単位も細かい。漆喰の充填を待たずに、こうした置土を伴いつつ、内枠板との間隔を保持して高く外枠板を積むことは至難であろう。また、外枠の板材は最終的には抜き取られて残っていないが、立板ならともかく、側壁高まで置土がなされた後に深部の横板を抜き取ることには困難が伴う。すなわち、側壁漆喰の注入は一回分が外枠板の幅程度の高さで、漆喰凝固後そのつど横板材をはずし、板に替わって暗黄褐色灰色のパイルラン細砂を充填（II層）、その上に横板をわたして次の漆喰注入と裏の固定材（III層）をおく工程を繰り返したと考えられる。北東部の側壁外面に残された、継ぎはぎ的な外枠圧痕の反復やタケノコ状の段をなす断面形の状況は、こうした工程の結果として理解できる。終始内面側に型材を置いて整った側壁内面をつくりだすための、見えない側での工夫ともいえよう。天井の構築法はよく判らない。蔵内埋土から出土した天井材は、側壁よりやや白色が強く硬質であるが、その形は屋根形の傾斜をもたずに一枚の板状と判断される。また外縁とは別に構築時からの直線的な切りこみをもつ天井部破片があり、入口穴と判断される。現位置で天井を組むためには、蔵の内部からの支えが不可欠であろう。内部を側壁頂まで一旦土砂で埋め戻した可能性もあるが、僅かに残る天井部は側壁端面を包みこむのではなく、平面で接するに過ぎないことからすれば、天井板は他所で別に作って載せただけの可能性も考えられる。

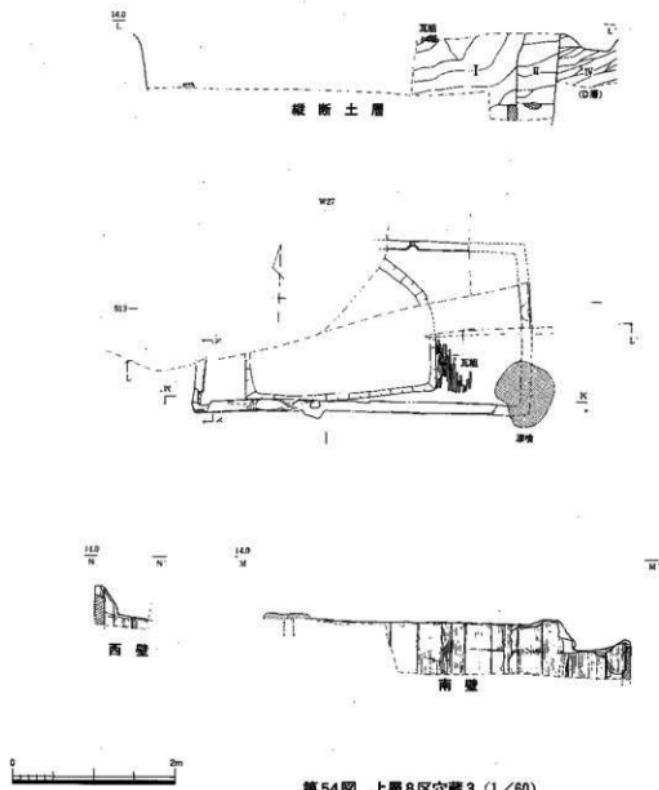
蔵の内部は、構築時の内枠の木材がそのまま残されて使われた可能性がある。少なくとも6本の角柱は、抜き取りに物理的困難を伴うし蔵の強度面でも問題があり、まず間違いない。立板も残っていた可能性があるが、そうすれば土壁自身は表面にみえないことになる。横材まで残っていたとした場合、それが角棒であれば床の凹凸はあまり考えなくてよいが、板なら豊状の隔壁が整然と並ぶことになり、貯蔵品の品目や貯蔵形態とも関わってくる。痕跡はなんら残さないが、例えば、もみ穂やムシロなどが一定の厚さで施され、床面の凹凸を覆っていた可能性もあるだろう。以上は確定的でないが、事実として3種材とも相当部の漆喰床上に木質そのものが未だに残っている個所があり、南東隅ではカスガイを伴っていた。また北と南の側壁は、ともに東隅部を除いて、頂部から深さ40~50cmが二次的に打ち欠かれている。入口構造の改修に伴うものであろう。

穴蔵内の埋土（I層）は（暗）黄灰褐色の細砂・中砂で、大量の漆喰材のほかは少量の瓦細片や円碌類で、B層とは大きく異なる。明治維新を待たずに、丁寧に埋め戻された状況といえる。

元絵図と寛保絵図（貼り紙）では、まさにこの位置に「穴蔵」が描かれ、その北西隅と南西隅には、天井部の入口穴を示すとみられる表現がある。南北側壁のくり込みは、両絵図に遅れるのである。なお元絵図では黄色表現である。

穴蔵3（第54図）

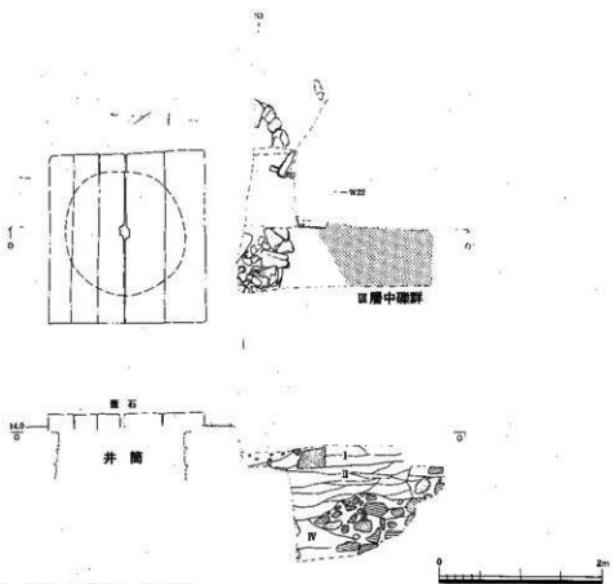
穴蔵2の南東にあって東西に長辺をとり、やはり黄灰色の漆喰できている。床まで掘り下げていないが、確認部の東西内法は3.95m、南北は1.9mで、角柱や板痕など、大局は穴蔵2と同じであるが、細部では、内枠角柱とは別に、立板を外で支えた直径10cmの丸柱があり側壁中に塗り込められた痕跡をもつなどの違いがある。やはり穴蔵内は黄灰褐色の細砂で丁寧に埋め戻される。南東隅付近の埋土上面には、平瓦をち密に立て小口で床をなす平面0.5m四方の大構造や、直径0.8mの明褐色漆喰張りといった、新しい上層造構が構築されている。また、穴蔵の南西外方では、20cm大の瓦片や豊島石材が東西に浅溝状をなす。元絵図では、この穴蔵も黄色で描かれている。寛保絵図では穴蔵2は示されるのに穴蔵3は既なく、埋没が古く後に別造構が營まれたことと適合している。東西に延びる瓦片列は、表書院北西棟から数寄方櫓に延びる廊下の北側軒先の雨落ちに比定できる。



第54図 上層8区穴藏3 (1/60)

井戸1 (第55図)

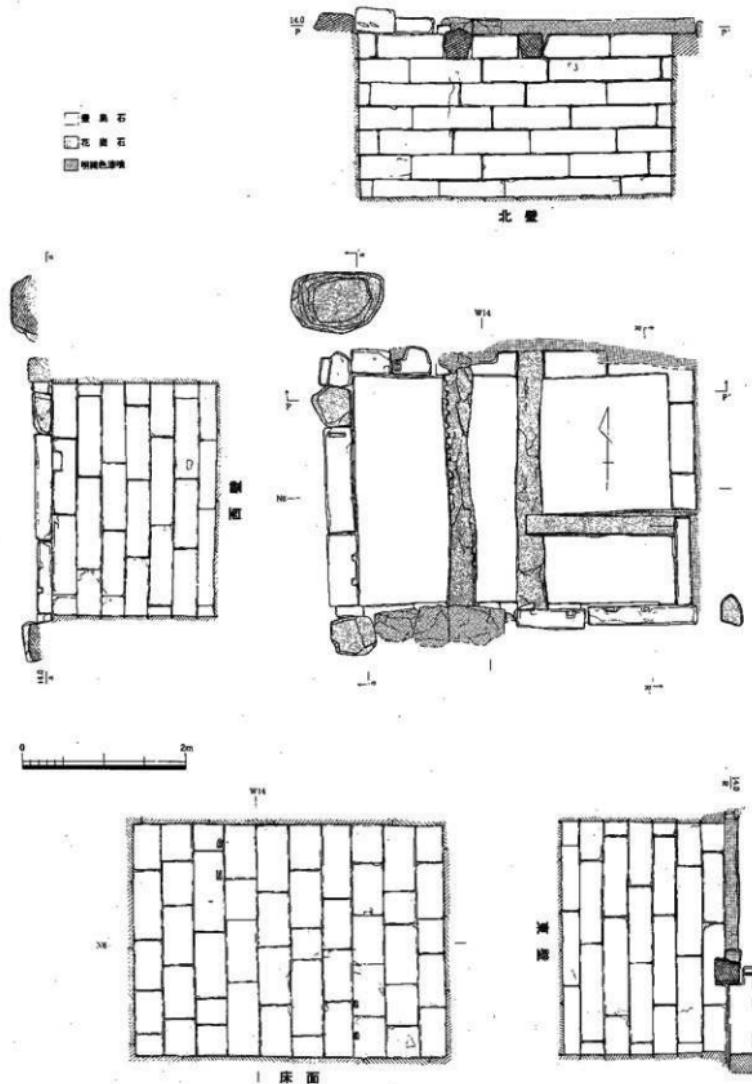
花崗岩割石による延石5個で蓋がされており不詳であるが、井筒は、内径1.5mの整った円形に花崗岩の割石が積まれている。その南背後では、D層一般部と同じ暗黄灰色の細砂と、長辺30cm大の花崗岩割石層が交互に堆積する状況が確認できた。石材は井筒の控え材を担っていると考えられるが、全体が井戸構築のための掘り方の中とは考えにくく、むしろ井戸の構築と中の段を造成するD層の積み上げが併行した工程であった公算が強い。この井戸は元探査図では上屋を伴なって現役状態で表現されるが、寛保絵図では現況と一致する形で既に蓋石が架けられている。



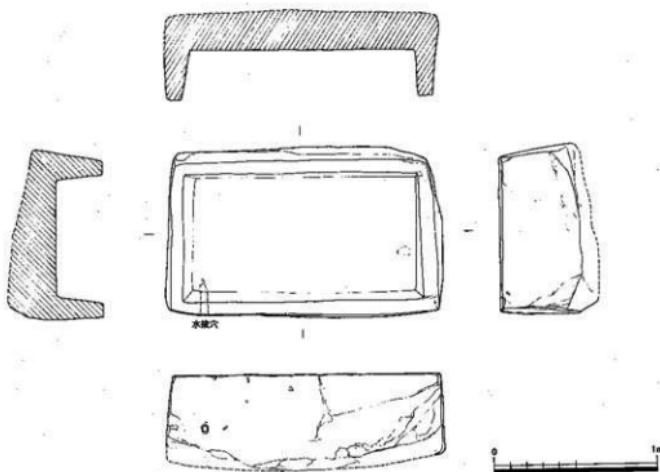
第55図 上層8区井戸1 (1/60)

穴藏1 (第56図)

豊島石材を組立てたもので、現在も露出するが、観察と実測を行った。藏の内法は東西3.80m、南北2.85m、側壁の最大高は2.34m。床は平坦かつ水平で、側壁による折形の中に豊島石材をはめ込む手順でつくられている。床の石材の表面は、幅38cm内外で一定し、長さは29~95cmと振幅があるが、ノミ調整が極めて整った長方形で、石材間の詰石は皆無であり、メジは南北に通る。北西部と南東部には、梯子の滑り止めとみられる小さな窪みが2つずつくり込まれている。側壁は8段積みであるが、下から7段目までは一様で床材と同様材の幅を天地にとって横に積み、きれいにメジが通る。側壁の隅部は、上からみた形がL形の専用材を用いているから、角には縫メジは通らない。側壁7段目には藏の上部をまたぐ延石が架けられるが、この延石部と上の8段目は明らかに改造が認められる。すなわち、現存の延ベ石は矢穴を伴う花崗岩製で、南北に渡された2本と南東の短い1本である。短い延石が載る東壁7段目と8段目は、それぞれに方形の抉りがなされて、延石を挟むが接合がずれている。一方、延石が現存しない西壁の北部の7段目石材にも同様の抉りがあるが、上の8段目は抉りのない石材に置き換わっている。南北に渡された延石は太く、7段目の隙間で6段目に載っているが上面は7段目より高い。つまり延石は当初からあった公算が強いが、今のものは代替材で北西のものは省略されることになる。また8段目は石材が既になくなかった部分も多く、石材形をなす明褐色塗喰によって頂部と脇全体が塗り固められている。穴藏の側壁には白色塗喰が部分的に付着し、当初からかは判らないが、建物の白壁と同様の景観を呈していたものと考えられる。また穴藏隅の外方には、統一性は必ずしも見いだしがたいが礫石を思わせる石材が残り、上屋を伴っていた可能性もある。



第56図 上層8区穴蔵1 (1/60)



第57図 上層8区石造水槽(1/30)

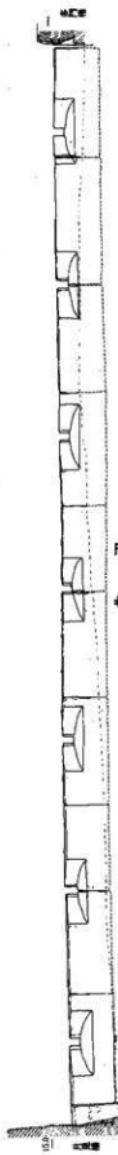
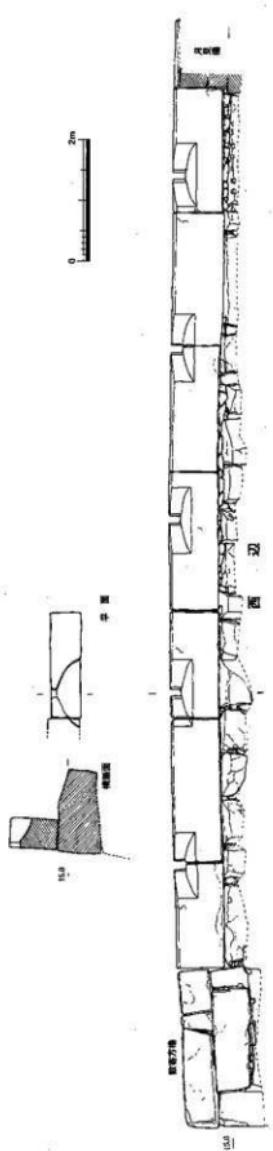
元探査図・寛保絵図ともこの穴藏が示され、「口」の注記位置は床面の梯子固定穴と一致する。元探査図では青色表現で、石造は青色、漆喰製は黄色に対応させた可能性がある。なお、未掘であるがこの西隣にもう1つ青い穴藏の表現がある。

水槽（第57図）

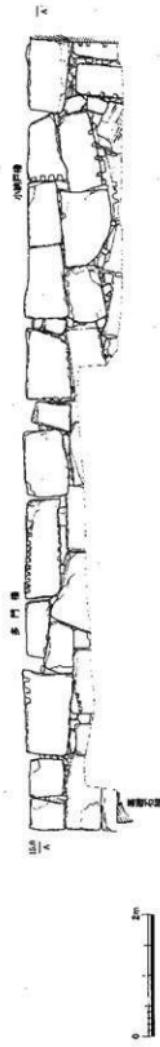
穴藏1の南東に放置されるもので、通常の豊島石とは異なる種類の凝灰岩をくり抜いたもので、水槽部の内法は長辺138cm、短辺120cm、深さ28~30cmを測る。内底面の隅部長辺側一個所は微妙な窪みがつくられ、厚さ14cm程の側壁を横に抜ける内径4cmの排水穴が開けられている。水槽内面はノミで平滑に仕上げられているのに対し、外面とりわけ排水穴の高さより下は面調整が粗く、また外底面は内底面に対していびつな形をしており、下半三分の一を地中に埋め込んで使ったものと考えられる。寛保絵図や池田家文庫T3-344絵図の表書院台所内の「ナカシ」に相当する可能性がある。

銃眼（第58図）

月見櫓に隣接する西辺と北辺の高石垣上は、石壘構造をなす内向き石垣に代わって、花崗岩巨石材による銃眼列が構築されている。西辺は月見櫓の櫓台（石壘）と數寄方櫓の櫓台（石壘）の間を繋ぐ長さ14.35mで、銃眼石材の上面高15.9mは両櫓台の上面に掛っている。石材は直方体で長辺は180~217cm、高さは85cm、厚さは50cmで共に規格化されている。どの石材も上部に整美で複雑な曲面をもつ銃眼のくり込みがなされているが、その位置は石材によってまちまちである。しかし組上がった巨石列は心々で285cmの等間隔に銃眼をもつ。高度な設計を要したに違いない。石材の面調整は丁寧なノミキリで、さらに銃眼部はビシャンウチ的工程を経ている。全長17.6mの北辺も基本は同様であるが、上面は14.80~14.90mの高さで、西辺や両側の櫓台より低く、また石材は一回り小さく、銃眼は245cm間隔と結果として密になっている。なお、銃眼は月見櫓内櫓台石壘にも組み込まれている。



第58図 上層8区高石壇上石造結構 (1/80)



第59図 上層9区北部石壇内側石垣 (小納戸門～多門精舎) (1/80)

9. 上層9区（第60図）

中の段の北東隅に相当し、本段から表書院への廊下（高架式）の取り付きや、小納戸櫓があった。
基礎石組6（第60・61図）

I-3トレントの東辺を中心に確認し、IV-7トレントまで延長がおよぶ。基本は南北に延びる列石状で、現役の東辺石壁の南端に揃えて隅をもち、東の石壁内側石垣にあたって終わる公算が強い。撹乱で石材が欠落する個所もあるが、上面の高さは13.9~14.0m、花崗岩の粗割り材を用いている。隅部は高さ1.0m、2、3段の石垣状になり、さらに下には割石や円礫の堆積を伴うが、前面の生活面の高さは13.60mほどであるから、多くが本来地下に埋没し、みかけは1段となる。この段上東には主材と高さを揃える控えの石材も伴っている。ほかの個所は1段1列の列石で、下にはこぶし大の円礫などの石材堆積を伴うが、隅部ほどは顕著でない。構築のための掘り込みは未確認で、下部や周囲の控え石材は西の井戸の控え材と一体的である。絵図と対比すれば、この石組は、廊下門の西に接する多門櫓の西と南の外壁が載る。この多門櫓も東の石壁に跨って建つことになる。

I-3トレント礎石ほか（第60・61図）

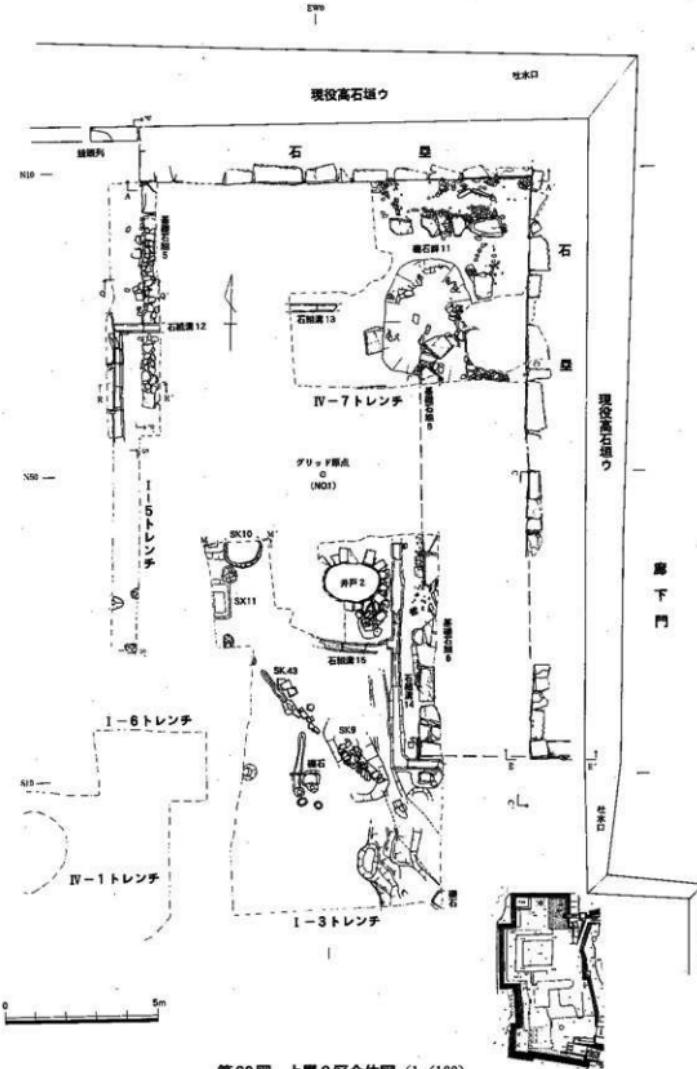
S10mラインに添う東西に2石と、トレントの南東隅に1石を確認した。石材は長辺50cmの自然石で、上面の高さは13.85~13.90mで基礎石組6より僅かに低い。東西の2石は、心々距離は3.8m（1間190cmの2間）、東のものは下に固定のための小石材を伴っている。東と南の石材は、それぞれ長辺2m、3m以上、深さ0.6、0.8mを測る大きな土壙の埋土上に据えられている。いずれの土壙も埋土は暗褐色細微砂で豊島石や明褐色漆喰、それに江戸中期の陶磁器などを含んでおり、礎石の設置はそう古いものではないことが判る。

絵図では、東西2石は多門櫓から表書院北東端を繋ぐ廊下の南壁に相当し、元禄絵図・寛保絵図とも西の石は表書院への取付部、東の石は廊下の南東隅の柱表現と一致する。中間のSK9の位置には、もう1柱の表現がある。また、南の1石は、両絵図とも表書院台所棟の北に続く付加的な棟のジグザグをなす外壁の角の柱に一致する。しかし、東と南の礎石は先述のように元禄期にまでは遡り得ない。従って、先行する礎石を一旦はずし、土壙を掘って、埋め戻したのち、従来とほとんど同じ場所に礎石を戻す形での改修があったことになる。これは南隣の5区I-4トレントから続く状況である。関連しそうなのは、東の石は元禄絵図では単なる隅柱に相当するが、寛保絵図では本段からの渡廊下が新たに取り付く事である。両絵図の間になされた改造が、渡廊下の新設だけに留まるものではなく、絵図の見かけでは不動のはずの周辺建物本体にも及ぶものであった可能性が考えられる。

井戸2・上水道石駒（第61・62・63図）

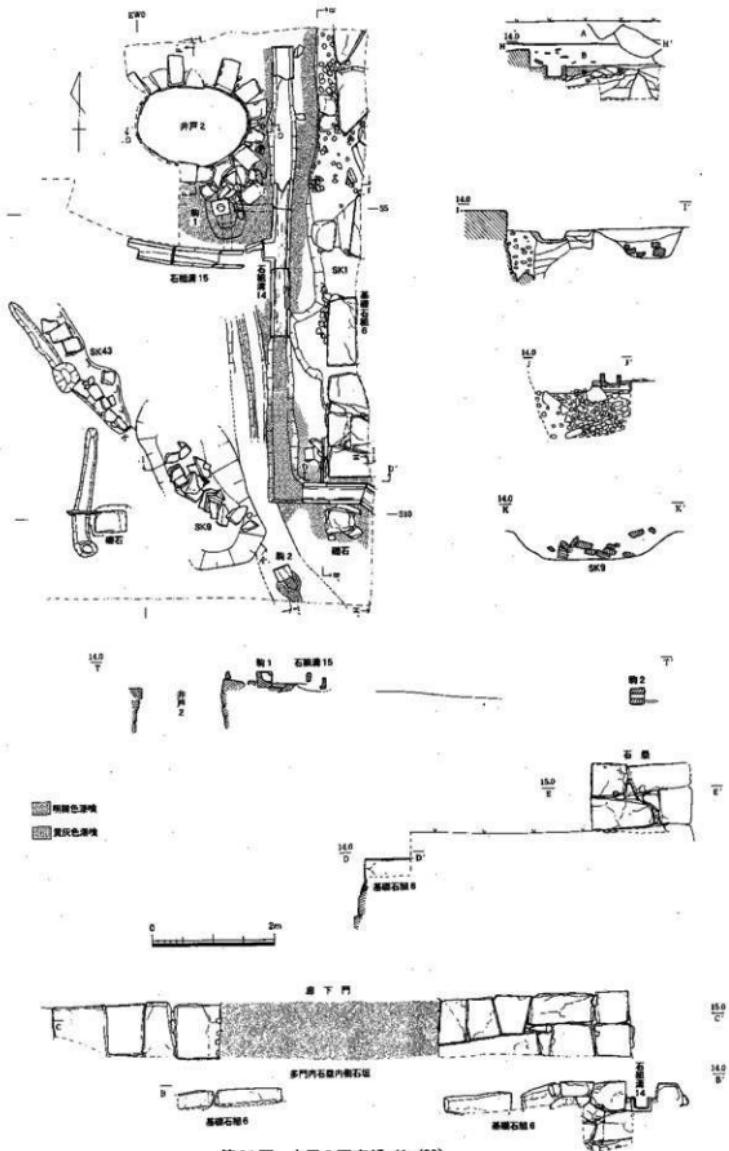
井筒の内法は短径南北1.3m、長径東西1.8mの楕円形で、井戸1より大形である。一部しか掘り下げていないが、湧水は標高0m以下でないと期待できないから、深さは最低でも14mはあるはずである。縦横30cm内外の不整方形の花崗岩粗割り材を積む。縦断面楔形の間知石的傾向をもつが、なお石材間の接点は井筒面のやや奥にある。横メジが通るが、一貫するわけではない。この最上部付近の井筒断面は、長径方向がほぼ垂直であるのに、短径方向は持ち送って上がすばまる。井筒の背後の地表下には、膨大量のこぶし大いしはそれ以上大の円礫、30cm級の花崗岩割石を裏込めや控えとして伴うが、基礎石組6や中の段の造成土であるD層と一体的で、同時施工の可能性が高い。

恐らく防水のため、井戸脇の地表面には最上段石材の隙間を含めて黄灰色漆喰が張られ床をなす。



第60図 上層9区全体図 (1/160)

9. 上層9区

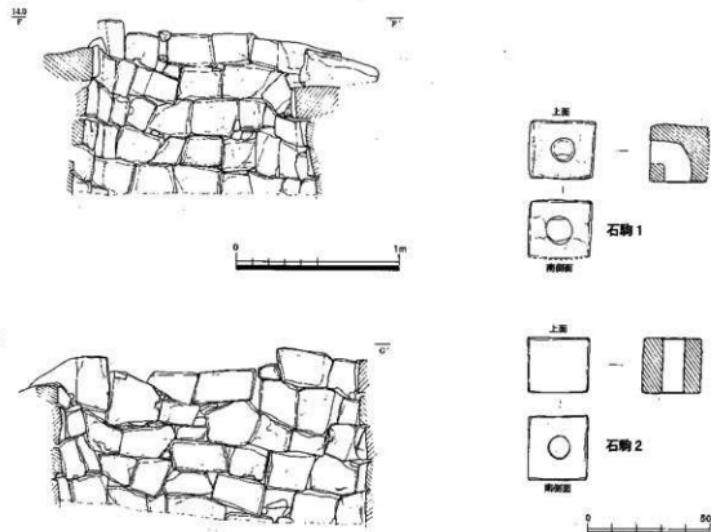


漆喰は石組溝14の縁まで連続的におよんでいるが、諸共に固定されるのが、駒1である。

駒1の中心は、井筒内縁の南約0.7mの位置にある。駒の構築は入念で、まず厚さ20cm以上の黄褐色漆喰床に長辺80cm、深さ20cmの穴を掘り、25cm四方で厚さ10cmの花崗岩平石が置かれ、この礎盤のうえに駒本体が据えられる。さらに固定のため、掘り方を埋め戻す格好で黄褐色漆喰が施される。駒本体は南北25cm、東西27cm、高さ25cmのほぼ正方体で、底部側が僅かに先細りとなる。花崗岩割石をノミ加工したもので、上面中央から南側面中央にL形をなして内径10~11cmの円孔が空けられる。孔は上面側が僅かに狭い。ノミ加工は駒の上面と孔部が特に入念である。

南方の地中に駒2がある。これは豊島石製で丁寧にノミ加工されている。東西と南北が23cm、高さが25cmのほぼ正方体で、側面を南北に内径8cmの円孔が貫通する。この南側下部は黄褐色の漆喰で固定されており、石材の孔に位置と径を合わせた痕みがあつて、実物は現存しないが管の存在が明らかである。また2つの駒を結ぶ線に沿って、幅0.6m足らずの溝があり、埋土の中央には管の痕跡とみられる軟質土部が確認できた。駒の間に復元できる丸管は、外径が駒の孔と同大、管芯の高さは駒1接合部が13.68m、駒2が13.36mで、南が32cm低い。長さは6.00m。材質は有機質で不詳であるが、例えば節を抜いた竹などが考えられる。現況ではこの直線上に石組溝15の側壁が突き当るが、該当部の石組溝15は井戸2脇の一連の黄灰色漆喰床を切っており、駒の配管が先行、機能停止後に溝が構築されたと考えられる。なお、駒2の以北に対し、南に続く配管も同様であるが、漆喰痕跡からして20°ほど東に折れている。管は井戸からの上水道と判断される。

井戸2は各絵図に示され、幕末絵図では略式表現であるが、元禄絵図・寛保絵図とも上屋の表現を



第62図 上層9区井戸2立面(1/30)

第63図 上層9区水道管石駒(1/20)

伴っている。駒1の東隣の平石などはこれに関わる可能性もあるが、未確定。上水道施設も元禄絵図・寛保絵図に明示されている。前者では、駒1そのものとみられる小さな四角形から、管とみられる黄土色の線が確認管痕跡に一致して南に延び、同様の四角形を通過しながら、台所北東隅の屋外の中縦枠とみられる表現に続いている。線表現はここで分岐し屋内台所へと到達する。ただし駒2そのものに相当する表現はない。寛保絵図では駒の表現はなく、同様の走行を持つ管は朱線表現である。この絵図では、石駒1付近に長方形の枠形表現がある。恐らく駒1の直上にこうした枠があり、サイフォンの原理で地中配管や中縦枠を経て台所方面への給水が行われたのであろう。管の縦目の駒石材(花崗岩)は、台所脇にあたる上層5区のIII-14トレンチの擾乱壙からも2点出土している。

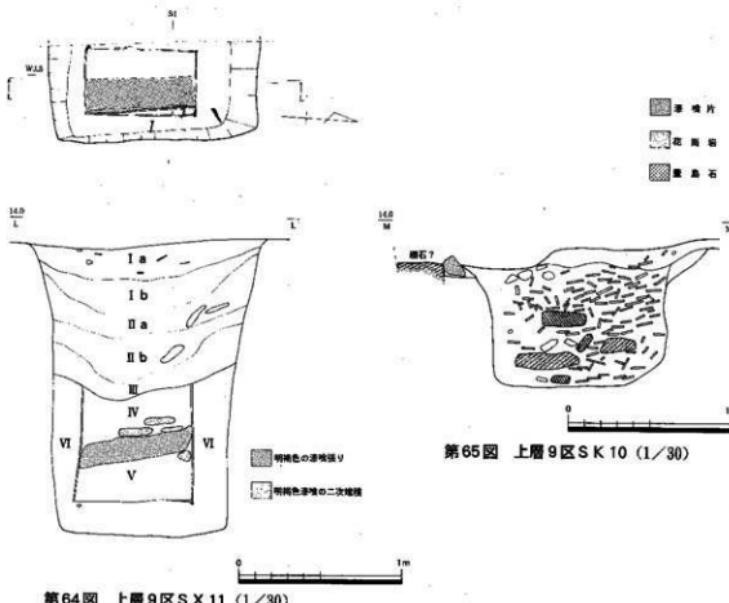
石組溝14・15(第61図)

石組溝14は、豊島石の専用材製で、石材を抜かれた個所も多い。基礎石組6の西前面を平行して南に延び、隅で折れて、基礎石組と礎石の間を東に抜けたのち、35°ほど南に折れている。この折れ部では互いの小口を斜めに切って石材を巧みに接合している。未掘部を経て、東の廊下門脇の現役石垣の上部で確認できる溝口に抜ける公算が強い。北部では溝の両側に黄褐色漆喰が面的に施される一方、南部では石材下や両脇の基礎石組や礎石にかけて明褐色漆喰が固定・防水材として施されている。石組溝15は西から延びて井戸2を挟み込む格好で石組溝14と合流する。合流部はT字につくられた特殊材を有し、一体性を感じさせるが、合流部石材は床の漆喰に先行するのに、西部石材は縫ぎはぎ材で掘り方が同じ漆喰を切っている。両溝は場所ごとに何度か補修・改造を受けたことは間違いない。

S X 11【便所】(第64図)

西辺は未掘であるが、南北1.3m、東西推定0.7m、深さ2.9mの長方形で深い土壤の底付近に、木箱を据える構造である。箱の木質は内面側の幅1cmほどに圧縮されながらも有機質の帯として、かろうじて残っており、釘を多数伴っている。土壤底には厚さ20cmで黄灰褐色純細砂が置き土(VI層)され、木箱が載る。箱は内面で南北73cm、東西40cm、高さは70cm(遺存)で、整った長方体であるが、蓋板の痕跡はみいだしがたい。側板の最下で逆立する釘があり、底板があったことは間違いない。四隅には釘が集中し、その方向と付着の木目から判断して、側板は横に組まれ、各側1枚板ではないが、基本は長辺側板が小口側板を挟んでいる。板の厚さは、釘の木目からして、いずれも5cm内外。箱の周囲にも下と同質の置土(VI層)がある。箱の内は、汚れの少ない黄灰褐色純細砂(V層)で厚さ20~30cmほどが埋め戻されるが、底板から5cmほどは最大2cm大の白色繊維質塊を含んでいる。下層埋土の上には、木箱の内法一杯に厚さ13cmで明灰色漆喰が張り込まれている。その上は漆喰以下と同様のきれいな砂(IV・III・II層)が連続的に堆積し、丁寧に埋め戻されたことが判る。この段階ではもはや深さ40cmほどの土壤となる。最後の埋土は一転し、壁土とみられる白色漆喰細片を顕著に含む暗褐色細微砂で、表書院破却時のB層に連続する。なお、掘り方東辺の南と北には、上屋に関わる可能性もある小土壙があり、北のものは20cm大の割石を伴っている。底板上の土壤の分析結果も合わせ、木箱は便槽と判断される。

絵図でもこの位置には便所が示される。元禄絵図・寛保絵図では、便座は南北に長く造構に一致する。一方、誤記かもしれないが幕末絵図では東西に長く、下半は表書院破却前に埋められたとみられるから、幕末には上部に別の便槽を置く構造に改造された可能性も考えられる。この便所は、本段奥御殿から廊下門や空中廊下を通って表書院の奥座敷に至る通路脇にあって、利用者は大名自身などに限られたに違いない。7区SX96と構造が共通し、上座の便所の特殊な封印も注目される。



第65図 上層9区SK 10 (1/30)

第64図 上層9区SX 11 (1/30)

SK 10 (第65図)

深さ0.8m、直径1.3m内外の円形とみられる土壌で江戸後期までの瓦を中心に、花崗岩・豊島石材が折り重なって埋められている。埋土の土砂分は黄褐灰色細砂。

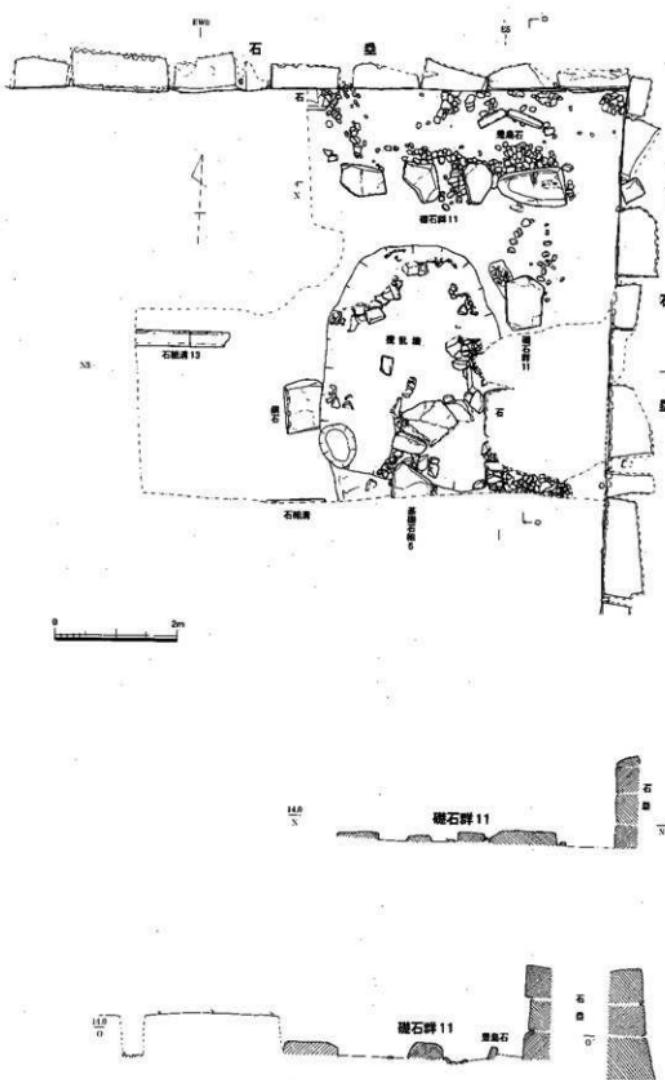
SK 9・SK 43・SK 1ほか (第61図)

SK9とSK43は北西から南西に細長く延びる土壌で、前者は深さ0.6m、後者は浅く0.3mで、共に長辺30cm級の豊島石の溝材破片・花崗岩割石材が埋め込まれている。SK1は基礎石組6を破壊する明治期の土壌である。江戸後期の陶磁器などが比較的まとまって出土した。

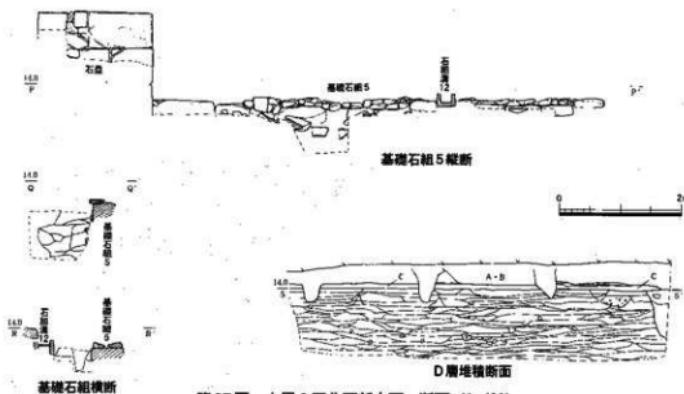
礎石群11 [小納戸櫓] (第66図)

石墨内側石垣に沿って内側に、東西と南北のL字形に並ぶ礎石が確認された。北辺は心々全長2.8m内外の4石、東辺はやや軸が安定しないが同じく3.7m内外の3石である。その東北では、礎石上面に高さを描えて豊島石がハ形に組まれ、床面直下とみてよい位置ではこぶし大円礎が礎石を取り巻いている。南西部は大攪乱を受け、壁面の花崗岩割石ほかの存在状況から、中の段階部での地盤形成の入念さが判る。攪乱壙の南の石材は基礎石組6の延長で、攪乱壙の東と、その真北の石墨内石垣の際にも、他と高さを描える礎石がある。以上の礎石類の上面高は13.80m内外で描っている。

絵図と対比すれば、攪乱壙の西の石材が小納戸櫓の南西隅柱、北の石垣際石材がその西壁北隅(石墨上)から1間南の柱にあたる。L形の配列は表現がないが、櫓の内柱であることは疑いない。



第66図 上層9区北東部(小納戸構)(1/80)



第67図 上層9区北西部立面・断面(1/80)

北部石壁内側石垣（第59図）

全長12.8mで、最大長辺1.6mの花崗岩割石を横に積む。高さは前面の礎石頂から1.3mあまりで、垂直に立ち上がる。6・7区の石壁内側石垣より、顯著な矢穴を伴うものが目立ち、スダレ状のノミ痕を残すものが含まれるという特徴を持つ。背後の石壁上面幅も2.0mと狭い。小納戸櫓と西に続く多門の室内に収まっていたことになるが、ここでは階を分けるまでの段差ではない。

基礎石組5【多門櫓・取り付き通路】（第60・67図）

石壁の西端に面を揃えて南北に、長辺1.0~0.4mの花崗岩粗割または野面材を1段1列に並べ、上に一辺30cm以下の小割石を配している。小割石は上部構造の高さ調整ともみられ、東西二列状で外縁を下の主石材と面を揃える個所もある。全長は石垣内法からの7.4mで、南端部が確認できる。石組溝12が東西に横切る部分は石材が途切れ、以北の長さ4.6mは石材が大きめである。溝の北では明確な構築のための掘り方を持たず、郭の造成と一体的工程とみられるのに対し、溝の南は掘り方を持つ可能性がある。

絵図から、溝の北は多門櫓の西外壁に、溝の南はこれに取り付く廊下の西壁に比定できる。元探査図では、表書院側は黄色に対し、多門櫓からこの下部構造をもつ廊下部までは青色表現である。なお、確認石組端の南は「口」の注記があって、庭からの入口部が石材の途切れに一致する。

石組溝12・13（第60・67図）

共に豊島石の専用材を組むもので、溝12は補修の結果か、維ぎはぎ材を組む。内底高は、溝12の南端が13.89m、同東端が13.70m、溝13東端が13.54mで、未掘部で軸のずれを解消し両溝は連結、東流したと考えられる。溝13は溝12北端より既に低く、具体構造は確認できないが、どこかで暗渠化し、北の現役高石垣ウの北面中に確認できる吐水口に繋っていた可能性が高い。

I-5 トレンチ土層断面（第60・67図）

上層期の生活面は13.85mほどの高さに求められ、以深では中の段の造成土（D層）が非常に細かい単位で堆積する。概して汚れの少ない黄灰褐色の細砂で、微妙に明・暗、黄・褐・灰、中砂・細砂・微砂・シルト・混バイラン疊などの偏差を持つ。

第4節 下層遺構

下層遺構の時期は、土塁を伴う中世的城郭構造がG層で埋め立てられて本格的な高石垣を伴う近世城郭構造が成立（1590年ごろ工事着手、1597年完成と伝う）してから、D層が造成されて最後の郭の拡張が行われ月見櫓などが建てられる（1615～1632年の振幅中1620年代？）までで、最大でも41年ほどの短い期間であるが、複雑な遺構の変遷をみている。

1. 下層1区（第68図）

南東部にあり、大手筋から本段に上がるための通路的な位置を占める。

列石8・石壁内側石垣5 [第II期] (第68・69図)

列石8は南北に長さ7.5m、9石分を確認したが、南端の細部は不確定。長辺40～80cmの花崗岩自然石を東に面を揃えて組んでいる。S102mライン付近では、西裏に本体と同大の控えの石材を伴うほか、全体にこぶし大の円礫が裏に残っている。石材の厚さは25cm内外で、現状では1段だけであるが、石材の上に円礫が散在し、構築に伴う前面埴土とみられるII層上面が石材上面より5cmあまり高い位置にまで及ぶから、本来は石材を重ねていた可能性が強く、むしろ確認部は地覆部といえる。II層は鮮黄灰色の純バイラン土で、以下の層も含め瓦片を含まず、G層に相当すると判断される。従って本遺構は、下層期のうちでは初期（第II期）のものである可能性が高い。

列石8の北に続いて、列石と同じ高さで長辺40cm級石材が帶状に散在する。石材の東前面には同様にII層が続いており、上には主石材があったものと思われる。一連の石組の中で、南の列石8は根石が深く南端の特殊部といえるのに対し、ここは石材が浅く一般部といえるかもしれない。走向や前面造成土のG層対応の可能性などから、3区の石壁内側石垣5の延長部残骸である可能性が強く、列石8と同様に下層期のうちの遅れる造成土で埋められる。IV-8トレンチでは残りが悪い。

敷石3・円礫群 [第IV期] (第68・69図)

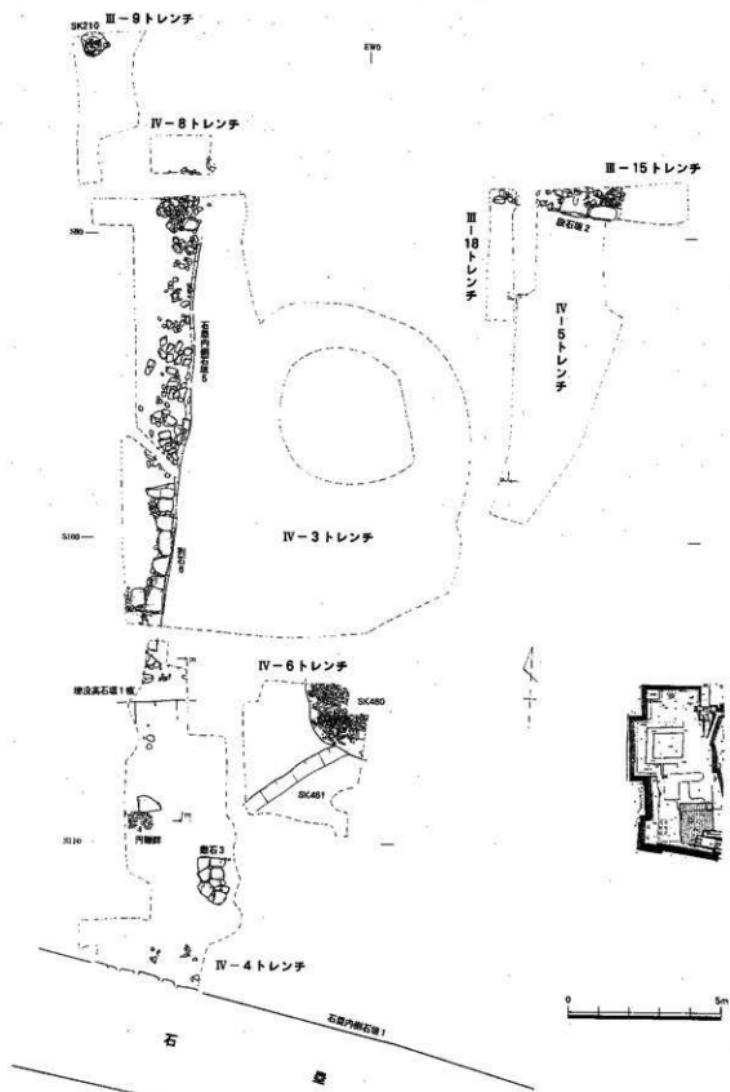
長辺50cm大で平坦な自然石を12.9m内外の高さに上面を揃えて組むが、四周は攢乱が及んで残っていない。その北西には、それと高さを揃えて長辺80cmの花崗岩石材とこぶし大の円礫の集合が検出された。性格は判然としないが、3区の石壁内側石垣4（第III期）延長線の南外にあって、その埋没を前提とするから、必然的にE層造成以後の下層遺構（第IV期）となる。

S K 461・SK 460 [第IV期] (第68図)

SK461は規模・形状とも不詳であるが、深さ0.3mほどの皿状の大形土壙で、厚さ0.3m足らずの下層造成土のうちでは比較的上部に肩を持つ（第IVb期相当？）。大量の瓦が折り重なって出土し、実体としては土壙というより、造成土中の瓦溜りの觀が強い。それを切るSK460の埋土の上面にはこぶし大の円礫を大量に伴っている。

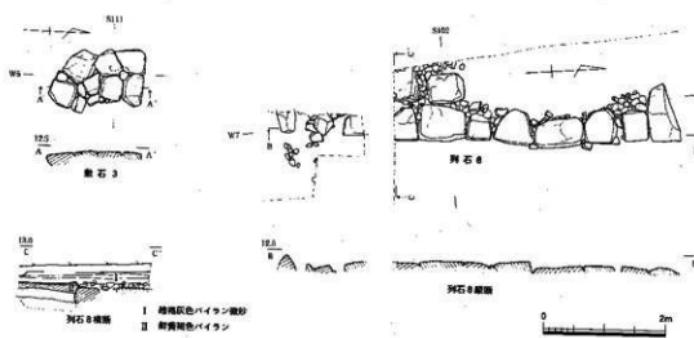
段石垣2 [第III～IV期] (第72図)

西北西から東南東に延び、低石垣の根石と考えられる。花崗岩野面石材の1.0m内外の長辺を横に取り、裏込は角礫主体で円礫は少量に過ぎない。石材の大きさや積み方も含め、列石8・石壁内側石垣5とは異なっている。西は基底の高さが上がり、石材も小さく元来の端が近い可能性がある。東へはさらに続いていることは疑いないが、上層1区の段石垣1の構築時ないしはそれ以前に石材が抜き取られ



第68図 下層1区全体図 (1/160)

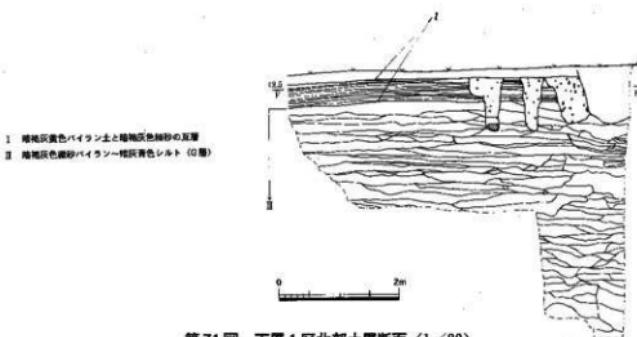
1. 下層1区



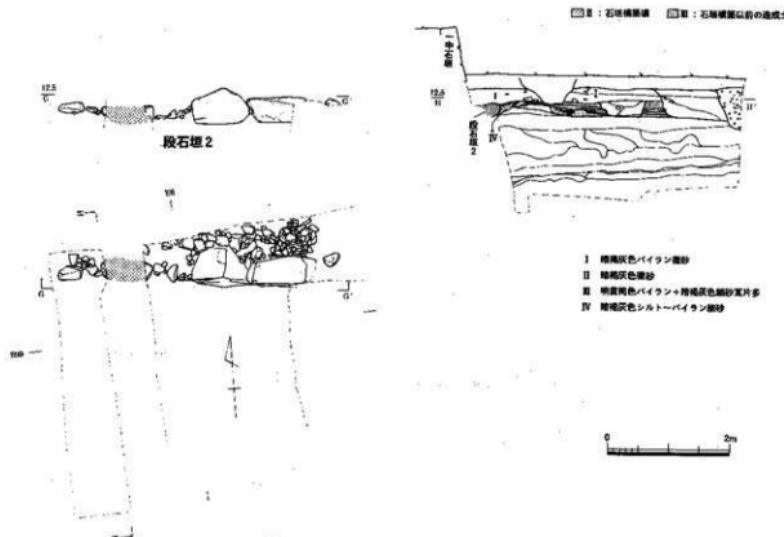
第69図 下層1区南部列石・敷石 (1/80)



第70図 下層1区南部土層断面 (1/80)



第71図 下層1区北部土層断面 (1/80)



第72図 下層1区南部段石垣2 (1/80)

ている。構築に伴うとみられる掘り込み（II層）は、G層の上にあって瓦片を一定量含む造成土（III層）の上面から切り込まれており、下層期当初よりは遅れる時期（第Ⅲ～Ⅳ期）の遺構である可能性が強い。

IV-4 トレンチ土層断面【埋没高石垣1破却痕?】(第70図)

上層期・旧制中学期の生活面は土層の上では一体化し、12.60m内外に求められる。その下には暗褐灰色細砂（地表腐食層）と黄褐灰色バイラン土（造成土）の2単位ほどの互層が厚さ30cm足らずに堆積し、その下面からは55°ほどの傾斜の落ち込み線が確認できる。外のⅢ層は暗黄褐色系のバイラン土が優位であるのに対し、内のⅣ層は暗褐灰黄色細砂・微砂となっている。Ⅳ層は最下層の土壌のはるか南にあって、石壁内側石垣5や列石8が直接載るからG層の可能性が高く、Ⅲ層は位置と厚さからして石壁内側石垣1や同4（2区参照）に先行することは疑いなく、Fa層に相当する可能性がある。すなわち、落ち込み線は3区ではそのまま残っている埋没高石垣1の延長部破却跡の可能性がある。

IV-5 トレンチ土層断面(第71図)

12.60m内外の高さの上層期・旧制中学期の生活面の下には、厚さ30cmで暗褐灰色細砂と黄灰褐色バイラン土の細かな互層（F～D層）があり、瓦片を多数含んでいる。下層期のうちでの生活面の上昇を示している。その下は瓦を含まない鮮明黄褐色のバイラン土があり下層期初期の生活面の化粧層（G層最上部）と判断される。以深のG層は、順に暗褐黄灰色シルト微砂、暗褐灰色微砂バイラン、暗褐灰色細砂、暗灰青色シルト微砂、褐黄色バイラン土が細かな盛土の単位を示しながら水平に堆積し、郭造成〔第Ⅱ期〕のための採土が沖積地で行われたことが判る。16世紀後半の備前焼片など少量のはか、弥生時代以降中世前半以前の遺物をかなり含んでいる。

2. 下層2区（第73図）

郭の南西部にあたり、上層期に「大納戸櫓」「呉服櫓」の名があつて天守に次ぐ規模を誇った三階櫓の櫓台があるが、下層期の複雑な造構変遷の結果として今の構造が成立したことが判明した。

大納戸櫓の櫓台 [第IV～V期] (第73・74図)

ここは中の段の南西隅が張り出す構造で、南辺と西辺それに北辺の西半分は現役高石垣、東辺は上部がやはり現役の郭内を向く低石垣である。

先ず上層期の状況について記す。東側郭内の生活面の高さは13.70mで、東の内側石垣の見かけ上の高さは約1.0mである。北に取り付く石壁の内側石垣2の見かけの高さもほぼ同じであるが、東の石壁の内側石垣頂は13.30mで上層期には既に埋没し、石壁の呈をなしていなかった。櫓台の外形は、高石垣の頂部がなす西辺が19.65m、同南辺が10.8mの長方形で、両辺は厳密には直線でなく半ばが弓なりに括れる。列石9は北辺高石垣の東延長をなして、石材を既に欠く部分もあるが、長辺80cm級の花崗岩の平滑な自然石が一段一列に組まれている。上層期の東辺は石壁内側石垣2から連続する直線で、その南延長の旧石壁の上にも列石が予想できるが未発である。櫓台の内側は擾乱が広範囲によぶるが、かろうじて南寄りで、礎石列12の3石を確認した。最大長辺175cmもの花崗岩の自然石を用いている。櫓の外壁が載る櫓台各辺の石材上面の高さは概して14.70mで揃っているといえるが、細かくみれば高石垣側の西辺と南辺は、両端が14.90mに対して、弓なりに半ばが20～30cm下がっている。礎石列9の上面は、それよりやや低い14.40mを測る。

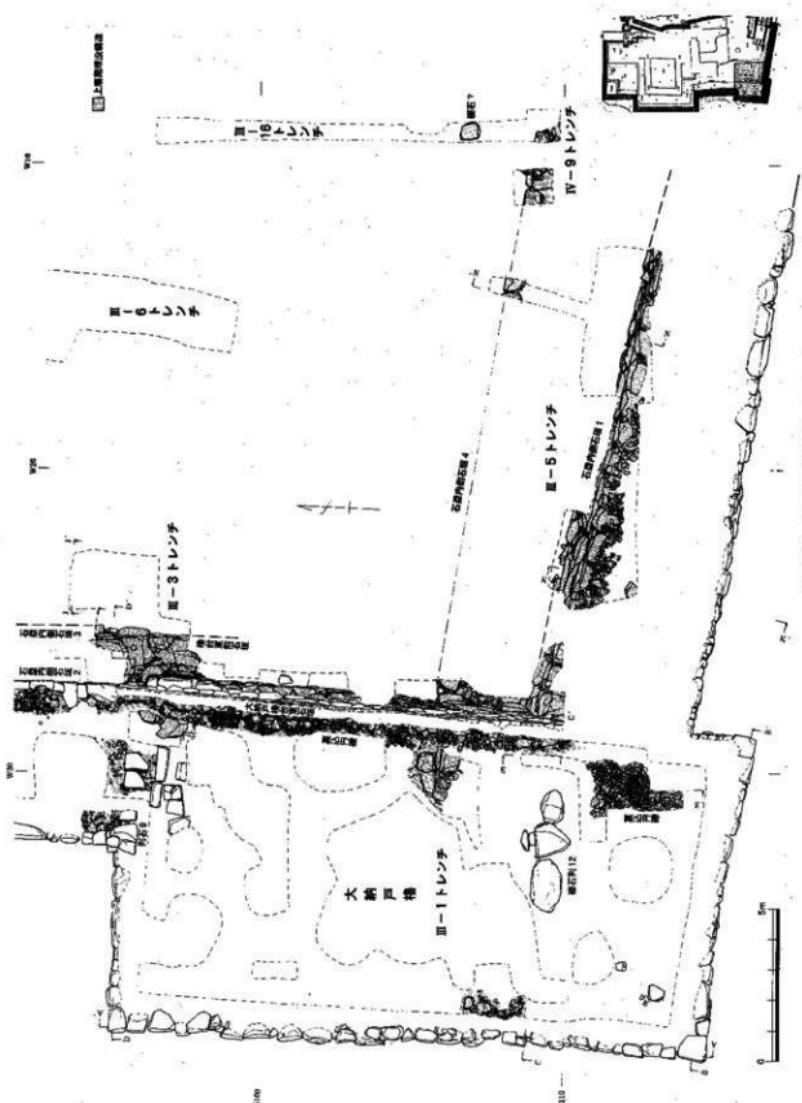
以上の上層期の構造は、基本的に絵図とよく合い、櫓台の各辺には大納戸櫓の外壁が、石壁内側石垣2には北に隣接する多門櫓の東壁が載る。後述のように、この二つの建物の台は下層期に成立したものであるが、上層期に成立した他の櫓類とは異なって、石壁に跨がって建つではなく、全体が台上に載る構造といえる。絵図にみる大納戸櫓東壁から北の多門櫓東壁が微かに東に出る食い違いだけは不詳であるが、両石垣の走向は確かにこの食い違いを生み出す傾向があり、大納戸櫓側の最上部は近代の改変を受けたことが明らかなるため、これが影響している可能性もある。礎石列9は三つの絵図では表現されないが、「牙城郭櫓實測圖」(岡山大学池田家文庫蔵)の大納戸櫓の平面図には内部にロ形をなす四間四方の柱表現があり、その南辺東寄りの3つの柱に対比できる。

櫓台の上面をつくりだす造成土は、暗黄灰褐色系パイラン土・細砂でよく締まっているが、瓦片を少量含んでいる。南東部の深掘り部では、造成土の下で高石垣側を高くとる、こぶし大円礎のおびただしい空石堆積が確認された。単に南の現役高石垣の裏込とするには量と広がりが不自然で、後述の石壁内側石垣4と組む高石垣かその破却跡が埋め込まれているのかもしれない。

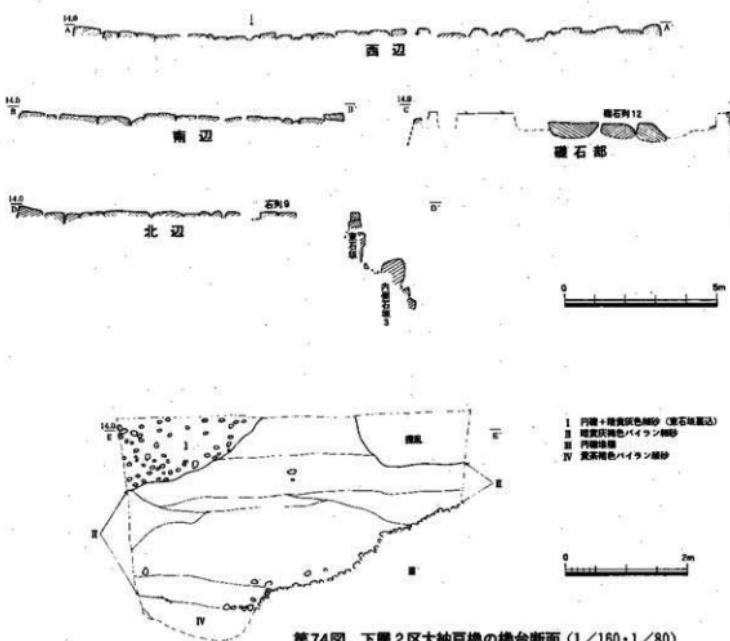
大納戸櫓台東石垣 [第IVa期] (第75・77図)

上層期では見かけ1m程であったこの石垣の高さは、根石まで入れると最大3.2mを測る。ただし構築時の前面生活面は造成土の状況から12.0m内外の高さ(第77図VI層中)にあって、当時の見かけの高さは2.7m内外といえる。南端は110°ほどの角度をなして石壁内側石垣1と接合し、北端は石壁内側石垣2と連続する。また、南部では櫓台内に続く石壁内側石垣4(第III期)を埋める造成土上から積まれ、北部ではやはり櫓台内に続く石壁内側石垣3(第III期)に跨がっており、二つの石壁内側石垣より明らかに遅れる時期(第IV期)の構築といえる。

最上部の1段は一辺30cm内外の方形を石垣面にみせる花崗岩の間知石で、上にコンクリートが帶状



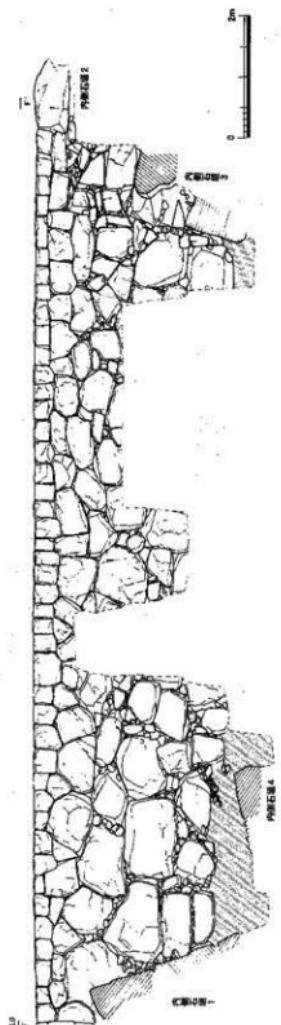
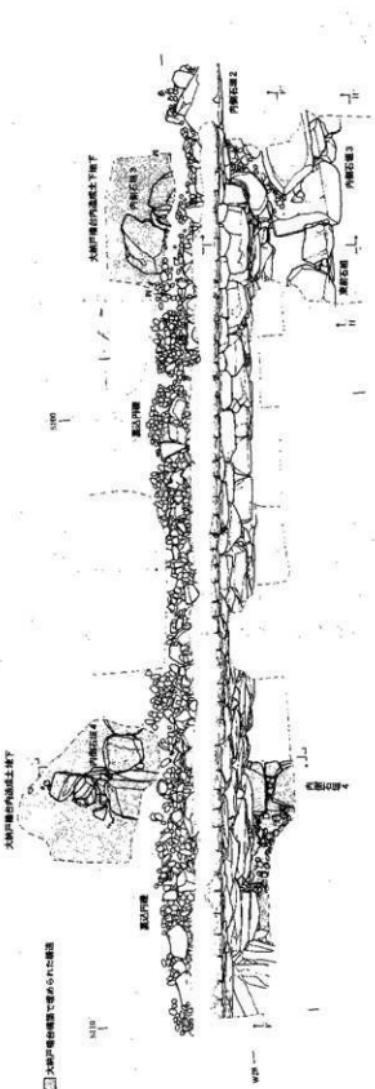
第73图 下层2区全体图(1/160)



第74図 下層2区大納戸塔の横台断面 (1/160・1/80)

に付着し、下の石材のようなこぶし大円礫による裏込を伴っておらず、一中期の教室建設に伴う基礎石組みと判断される。しかし、直下の石積みだけでは頂部の体をなさず、横台他部との整合性からも江戸時代から近い高さで石材が積まれていたことは間違いない。上から2段目も、特に北側は当初からの石積みとは考えにくく、その下方に対して平面的なズレをみせるが、長辺60cm級の花崗岩自然石を横に積む。北部ではその下2段ほども後述するように特異な個所があり、これらを除く個所が本石垣の当初的部と判断される。最大のもので長辺1.4m、高さ1.0mの平滑面をあまりもたない花崗岩の自然石材を横に積む。主石材には矢穴や割り面が一切観察されないが、間詰石は30cm以下の角礫やこぶし大の円礫で、一部に割石を含んでいる。石垣の立ち上がりは75~80°で、ほぼ垂直の内側石垣2と異なっている。

北寄り石垣前面では、内側石垣3に面を描える石組が確認された。この石組の載る造成土はそのまま横台石垣の下部を埋めるから、石組は横台石垣本体の構築に少なくとも工程上は遅れるものといえ、さらに横台石垣構築後も、なお北の内側石垣3が露出・機能していた時期（第IVa期）があったとみこめる。しかし、横台東石垣の北に続くのは内側石垣2である。3区側も含め内側石垣2は内側石垣3の破却後に郭内に重上げ造成土（V~Ⅲ層= Ea層）を伴って構築されたものであるから、一見矛盾をきたす。これは、横台東石垣と内側石垣2との接合部が改造を受けた結果による可能性が強い。



第75図 下層2区大納戸檜台東石垣 (1/80)

檜台石垣の北端では下から2段まで（下部）は内側石垣3に当たって終わっているのに対し、その上の2、3段分（中部）は石材が小形化して、内側石垣3の石材に0.5mほど掛って丸く隅をもち、北に0.3mほど窪んで鉤をなす形で内側石垣2に続いている。一方、上部と最上部は、中部の複雑な走向を無視して、単純に内側石垣2に続いている。中部の鉤折れは不自然で、丸隅を檜台の本来の角とするには、石材の大きさや使い方、恐らく強度の点でも難があり、二次的構造の感が強い。またS112mライン付近から始まり、ここで最大となる檜台東石垣の中部と上部の平面的なズレは、一貫した設計による石材積み上げとは考えにくく、石墨内側石垣2にスムーズに接合するため、あたかも石材を西奥へ押し込むように積み直した結果であるように見受けられる。つまり、独立先行して存在していた内側石垣3（第Ⅲ期）に対して、新しい檜台石垣の初期構造（第Ⅳa期）は、まだ十分な高さを保っていた内側石垣3に接合し、見かけ上一連となった東へ張り出す石垣との内折部が檜台の隅で、東前面には石組なども伴っていたのが、内側石垣3を破却して内側石垣2を構築した際（第Ⅳb期）、檜台石垣の下部や前面石組、内側石垣3の深部は造成土に埋め込まれ、先の内折部の撤去後の端末処理として中部の丸隅がつくられる一方、石垣上部は、内側石垣2に整合性をもつよう積み換えられたのではあるまいか。この可能性が認められるなら、大納戸檜東辺の北寄りは、初期構造から壁を微妙に西内へ引く改造を受けたことになる一方、内側石垣2に東壁が載る多門櫓は、大納戸櫓に遅れる時期に、新築されたか東辺を切り詰めるという大掛かりな改造を受けたことになる。なお、先述の絵図に示された櫓の東壁の微妙な食い違いは、この辺りの事情に絡んで解釈できるかもしれない。

一方、檜台石垣（第Ⅳa期）の南部は、後述の内側石垣4（第Ⅲ期）が完全に埋没してからの独立構造で、石材の重なりや石垣自体の様相から、東の内側石垣1と本来一体のものと判断できる。

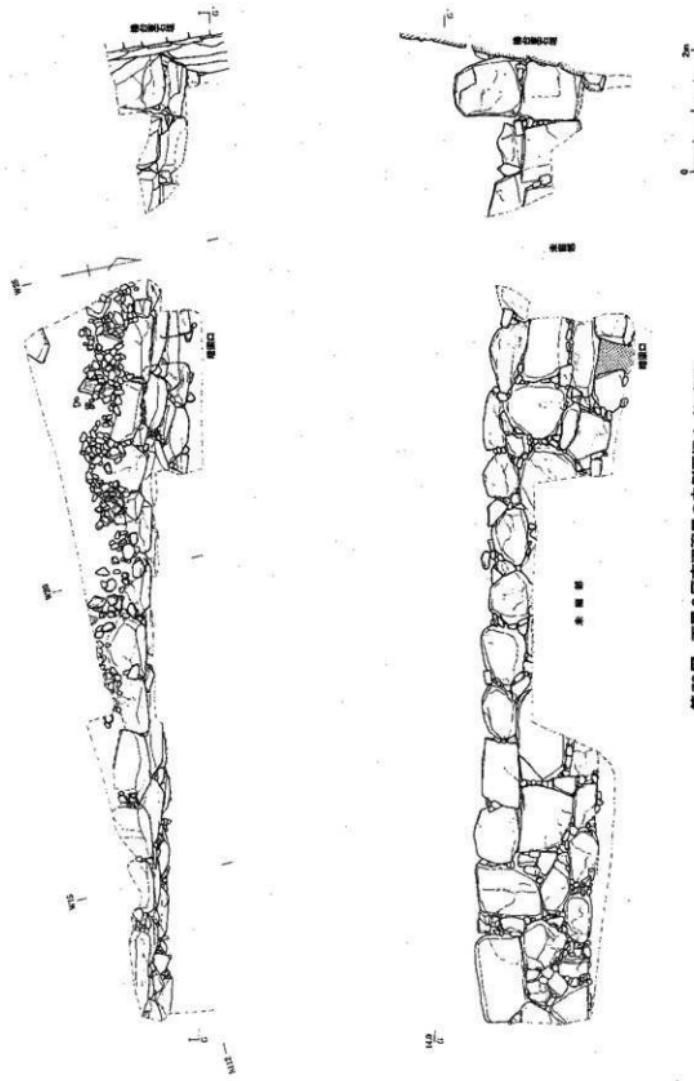
石墨内側石垣1 [第Ⅳa期] (第76・78図)

石材の最下部から遺存頂までの高さは2m内外、最大的もので長辺150cmの野面花崗岩を横に積む。間詰石はこぶし大円礫が多く、角礫が混じる。石垣の立ち上がりは80°程度檜台東石垣に近似する。確認は3段分が基本であるが、西寄りに暗渠口があって、その左右は基底の高さが低くなり、上から三段目を蓋石とする格好で、四段目を側壁にとる。暗渠は内法40~50cm四方で、床の高さを減じながら長さ6.9mで、現役高石垣イの面中に抜けている。上層期にはこの内側石垣1の延長は段石垣1以東が露出し「鉄門」南の石墨をなす。下層期（第Ⅳ期）の石墨は大納戸櫓に直接取り付き、頂部での長さが約46m、幅は西の付け根が4.8mに対して、東端が2.5m程としだいに減じていく。

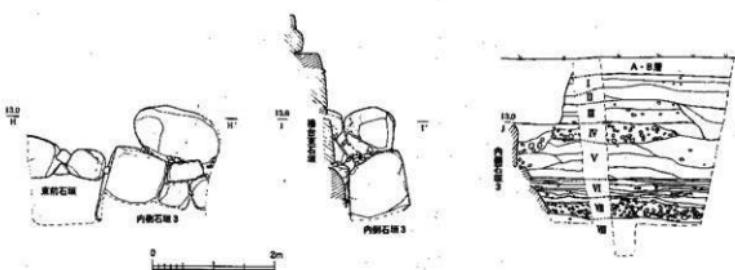
暗渠の構造から現役高石垣イは、内側石垣と一体的といえ、しかも吐水口以上の積み直し痕などは観察されず、基底部からの一貫構築とみられる。また、大納戸櫓の南東辺をなす高石垣との接合部は石材が交互にかみ合うから、大納戸檜台各辺と東の現役高石垣イ、檜台東石垣、内側石垣1は一連の造作（第Ⅳa期）と判断できる。なお、吐水口は上層期のような石垣面からの突き出しあはない。

石墨内側石垣3 [第Ⅲ期] (第73・75・77・79図)

3区から南に延び、角石を置いて西に折れ、2.8mほどの東西部を経て、さらに南に鉤折れする。角石は高さ1.2m、幅・長さとも1.0mほどで他より大きく、野面であるが整った面をなす石材で、長辺を高さにとってひとときわ深く据えられている。大納戸檜台東石垣が載るのは短い東西部で、以西の構造は大納戸櫓の檜台に埋め込まれることになる。ここでは裏込にこぶし大円礫空石堆積を伴い、4段以上が確認でき、その頂部高は13.7mに達するが、なお本来からの頂部の体をなしていない。内側石垣2の東での遺存は最大でも高さ約1.5mの3段で、たいてい3区では最下段のみであるが、内側石垣



第76図 下層2区南辺石壁の内側石壁 1 (1/80)



第77図 下層2区大納戸櫓の北東隅石垣 (1/80)

- I 黄灰褐色バイラン・無砂
- II 黄灰褐色の中砂
- III 棕褐色のバイラン・無砂
- IV 棕褐色のバイラン・無砂 + 内陸多
- V 棕灰褐色細砂 + 底灰黄色バイラン・無砂
- VI 黄灰褐色バイランと棕褐色細砂の互層
- VII 棕褐色バイラン・内陸多
- VIII 黄灰褐色細砂・細砂の互層



第78図 下層2区南辺石垣断面 (1/160)

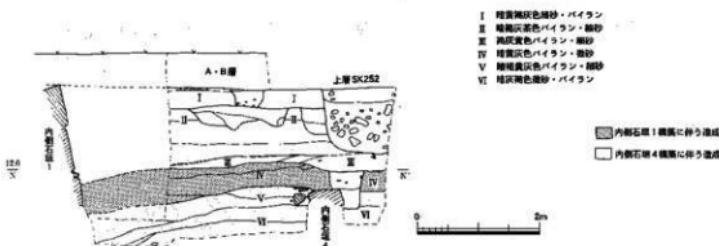
3の本来の頂部高は、内側石垣2とほとんど変わらなかったことが判る。

内側石垣3構築直後の角石付近の前面生活面は11.80m (VI層下面) にあり、檜台東石垣構築(第三期)を経て石壁内側石垣2の構築前までに、厚さ約30cmの段階的な地盤重上げに伴う造成土の堆積があり、多量の瓦片を含んでいる。これをさらに埋め立てて、石壁内側石垣2の積み上げ面をなす造成土(第77図V～III層)中の瓦の内には、金箔を施すものがあって、内側石垣3に関わる時期に(第III～IVa期)これを戴く建物があったものと考えられる。

内側石垣3の構築当初にそれと組んで石壁をなした高石垣(第三期)は、現役の高石垣アである可能性が強い。この高石垣アは、大納戸櫓各辺の高石垣イに対し、傾斜や石材の大きさなどの様相が異なり、両者の接合部は後の孕みで不明確な部分もあるが、基本的にアがイに潜り込んで行くように観察でき、この内側石垣(第三期)と大納戸櫓台東石垣(第四a期)との時期差に整合している。そうであるなら、内側石垣2は、構築時(第四b期)に古い(第三期)高石垣アの改変を伴わなかつことになり、高石垣イの新造を伴う内側石垣1(第四a期)とはこの点でも異なっている。



第79図 下層2区大納戸棟の樁台内に埋没の石垣 (1/80)



第80図 下層2区南部の土層断面 (1/80)

石壘内側石垣4〔第III期〕(第73・75・79図)

III-16 レンチ以東は欠損しているが、現役高石垣イに平行して東西に延び、大納戸樁台東石垣(第IVa期)の地下を抜け、樁台内で北への折部をもつ。そのまま内側石垣3(第III期)と繋る可能性もある。樁台の外では、長辺90cm級の花崗岩自然石による根石が、こぶし大の裏込を伴って残るだけであるが、樁台に埋め込まれた部分では頂高12.50mで最低3段が確認され、やはり本来はかなりの高さをもつものであったことが判る。この折部では、西にそのまま1m程続く格好で控えの石材を伴い、一般裏込は円礫や角礫が空石状態であるが、前面にも大納戸樁台東石垣(第IVa期)の裏込石材が充満している。III-5 レンチの土層断面では、構築時(第III期)の前面生活面は11.65m内外にあって、破却後の造成土の上から内側石垣1が積みあげられていることが確認できる。ここでは、内側石垣1構築時(第IVa期)の前面生活面(IV層上面)は12.0m内外の高さにあって、上層期(第V期)の生活面である13.3mまでの間には、2~3の生活面が挟まれている可能性があり、内側石垣1が前面地盤の重上げによって段階的に埋もれていった状況が窺える。なお、その東方郭内では、内側石垣1に対応する高さで、長辺60cm台の礎石状石材1個を確認している。

内側石垣4と組み合う高石垣(第III期)は、内側石垣1と一体の現役高石垣イの構造そのものとは考えにくいが、近似する走向と高さをもつことは疑いなく、予想される石壘幅からして、上角がやや北側に寄ったものである可能性が強い。あるいは、北の現役高石垣アと同様の緩い傾斜の石垣であったかも知れない。また、この内側石垣は内側石垣3と対をなし後の大納戸樁付近で複雑な折れをなすから、先行してほぼ同じ場所に、樁などの建物があり、その壁が載っていた可能性が十分にある。

3. 下層3区（第81図）

西辺部に位置し、古い石垣構造が埋め立てられ、郭が西に拡張された状況が明確に把握できた。
石垣内側石垣2〔第IV b期〕（第81・82・83図）

現役高石垣アと平行して南北に延びて組み、頂部幅4.8mの石垣構造をなす。上部は今も現役である。III-7トレンチでは、頂部の高さが14.75m内外で、上層期での見かけの高さは1.3mであるが、構築当初は前面生活面の高さが13.10m内外の高さにあって、見かけの高さは1.8mほどであったことになる。頂部高は、IV-11トレンチの北寄りでは15.15mと、北にしだいに高くなり、根石や構築時前面生活面もそれにみあって高くなる。一方、上層期の生活面の高さは南のトレンチと大差なく、結果として石垣構築後の下層期造成土は南方よりかなり薄くなっている。以上の区間では、最上部が近現代の延石などに置き換わった個所もあるが、最大長辺200cm、平均100cm級の花崗岩自然石をほぼ垂直に積んでいる。IV-11トレンチ南部で矢穴を伴う石材が1個あるが、遅れる補修材である可能性も残る。石垣面中でかなりの面積を占める間詰石は、角礫とこぶし大円礫で、30cm級の大形の角礫の中には、割石が確実に含まれる。主石材は長辺を横にとるもののが確かに多いが、比較的扁平な石材を立て、その最大面を石垣面に向ける石材が、散見できる。石垣立面図でひときわ大きく見えるS92mライン付近の2、3石、S87mラインの上段石がそれで、IV-11トレンチ北部の基底石など、その可能性が強いものは他にもある。

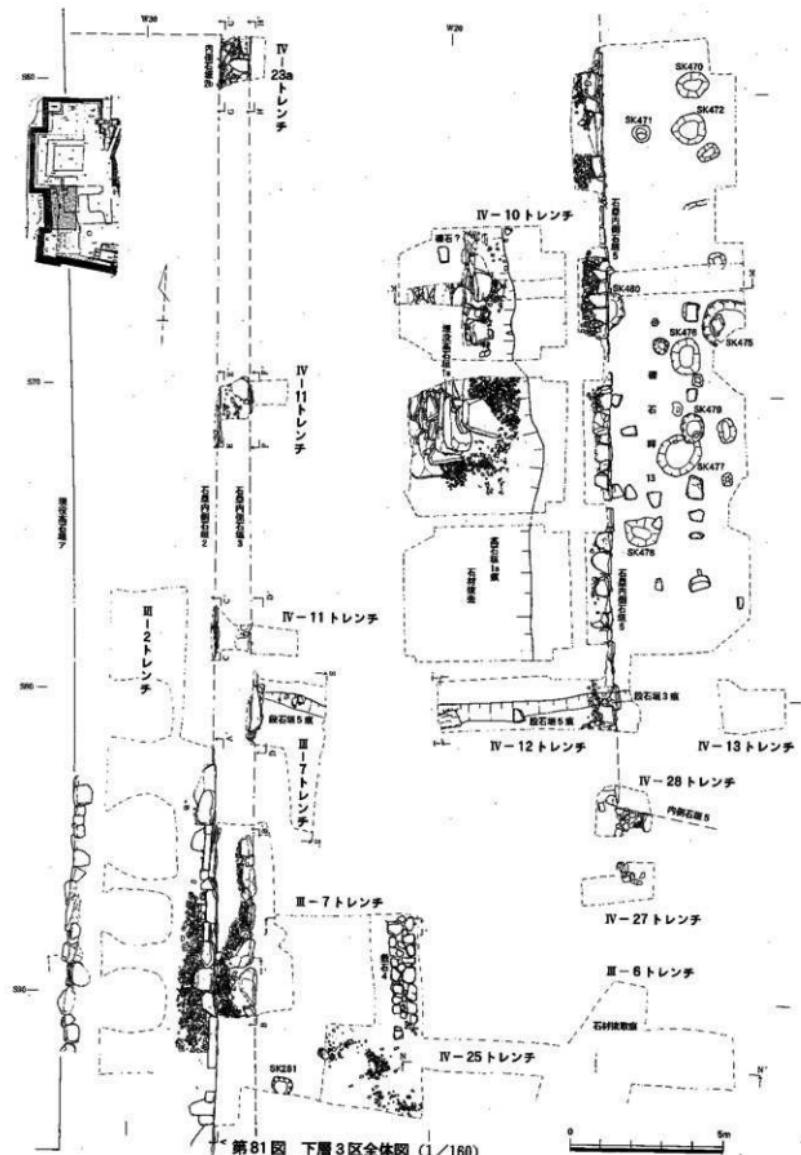
北端はIV-23トレンチにあって、これに向かって基底がさらに高くなっていくが、2bと呼ぶ最後の2.0mは、以南の状況と一転し、頂部が16.0mにまで急激に高まり、最大長辺90cm級の整った長方体で矢穴を伴う割石材が用いられ、北向きにも石垣面をつくりだす。ここでの石垣の様相は、鉤折れを経て西に連なる上層期の西辺石垣内側石垣に近似するが、石垣基底はその上層石垣よりも0.8m程も高く、この接合状況も特異である。つまり、内側石垣2の北面端は当初からの端部とは考えられず、上層期内側石垣構築時に一部石材の交換を含めた積み直しを受けており、本来の内側石垣2はさらに北に続いている可能性が高い。絵図を参照すれば、本石垣2部の高まりは、南の石壁上にある多門櫓と、西の伊部櫓に続く多門櫓を分かつ壁が載る位置に相当し、下層期からあった南の多門櫓に上層期新造の多門櫓を接合する時、南の多門櫓側で端末処理の変更が行われた結果と判断される。

石垣内側石垣3〔第III期〕（第82・83図）

南端が大納戸櫓の櫓台に埋め込まれたこの石垣は、本区では現役高石垣アや遅れる（第IV b期）内側石垣2と平行に南北に延びる。構築直後の生活面は、石材自体の下端より0.3~0.5m高く、最下段石材の半ば以下は地覆となっていた。たいていの個所では、最下段が列石状に残っているに過ぎないが、本来は段を重ねる石垣であることは2区で述べた。概して長辺1m足らずの花崗岩自然石を横に置き、隙間に円礫や角礫を充填している。裏込はこぶし大の円礫が圧倒する。

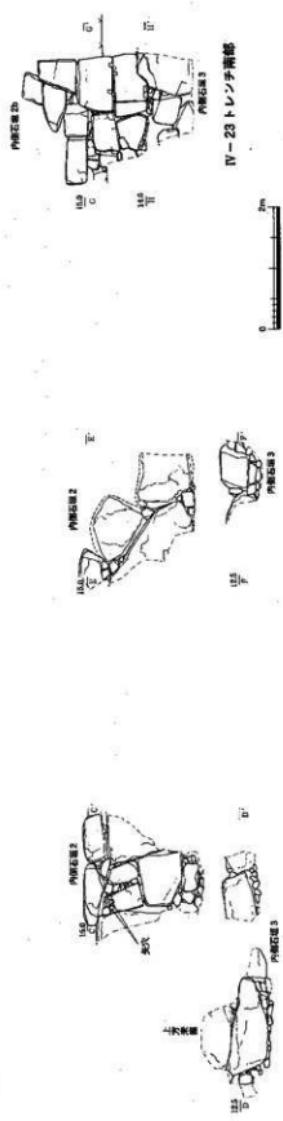
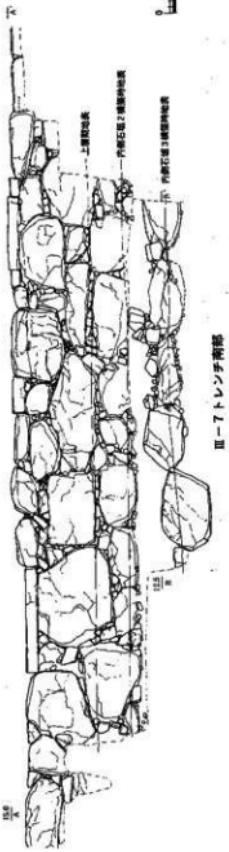
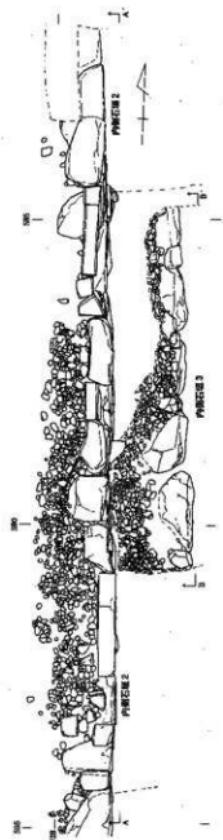
III-7トレンチの北部はやや特異な個所であるが、ここに取り付く段石垣5との関連で後述する。別に、III-7トレンチの南端付近では、最下段下面が一気に40cmほど段をなして浅くなる個所がある。石垣前面の状況を踏まえてもその意味は不詳であるが、内側石垣2と同じく北がしだいに高くなつて行くことは確かである。しかしIV-11トレンチ以北は、5区のうちにある北端まで、前面生活面の高さ12.7から12.9mへと変化するだけで、内側石垣2に比べればはるかに水平に近い。

根石の状況から内側石垣2のような垂直の断面形は想定困難で、組む高石垣が現役高石垣アでよい



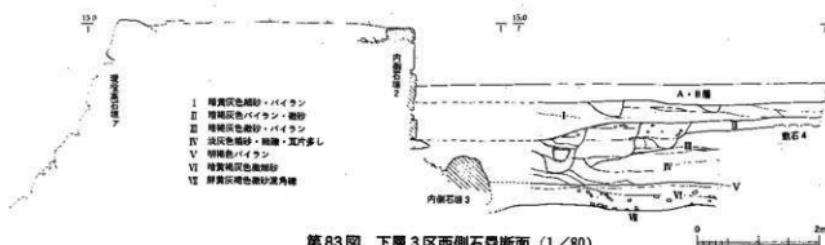
第81図 下層3区全体図 (1/160)

3. 下層3区

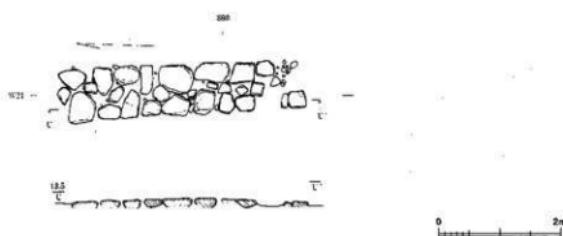


第82図 下層3区 西側石壁内剥離石垣 (1/80)

III-7トレンチ北・IV-11トレンチ南部



第83図 下層3区西侧石壙断面 (1/80)



第84図 下層3区敷石4 (1/80)

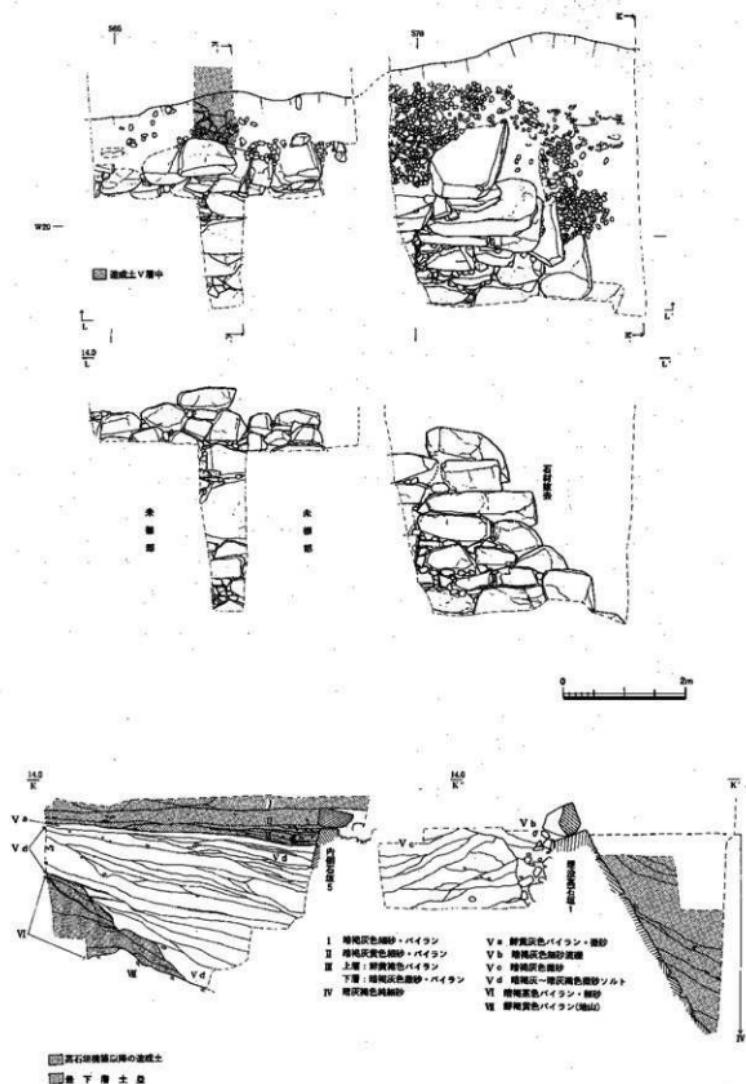
とすれば、石壙頂幅は5.4m程に見積もられ、後の内側石垣2の段階（第IVb期）より数十cm広いことになる。内側石垣3は、内側石垣2の前身構造で、郭内の重上げを伴って代替されるといえる。

第83図の土層では、石壙構築に伴う生活面化粧土がV層（F層最上部）で、石壙が破壊された後に残骸を埋めるのがIV層（Ea層）である。IV層から出土した大量の瓦のうちには、金箔おしの大形鳥衾（1013）があって、内側石垣3が機能した時期（第III～IVa期）にこれを戴く建物があったことが判る。III・II層は、内側石垣2構築と同時もしくは遅れるとみられる造成土で、上面は各々生活面をなす。この土層断面は、内側石垣3（第III期）の構築から、I層上面の上層期生活面形成（第V期）に至るまでの、内側石垣前面の段階的な重上げ造成の過程が良好に読み取れる。

敷石4ほか【第IV期】（第83・84・81図）

内側石垣2に平行して南北に延び、上面は緩やかに南に下がっている。幅は0.8mで、長さ約4mを確認したが、南北端は本来の状況ではなく、下層期のうちでの擾乱を受けている。最大で60cm級の花崗岩自然石材を両側が揃うように配し、半ばの隙間にやや小形の石材を充填している。庭の通路が築地状塀の下部構造とみられる。第83図JセクションのⅢ層上面に伴い、内側石垣2（第IVb期）が機能した段階の下層遺構とみられる。なお、敷石南方の同じ生活面では径5cm級の円窪が面をなして散布する。造成土を挟んで直上では上層期の玉砂利敷が確認されており、この場所の庭としての空間利用やその景観がこの時期まで遡るのかもしれない。また、本敷石より約20cmほど下位のⅢ層中では、径0.8m、深さ0.1mで、焼土と炭を伴うことから焚火跡と判断されるSK261が確認された。これは、継続的な生活面に伴うというより、盛土工事中に偶発的に形成された遺構の可能性が強い。

3. 下層3区



第85図 下層3区中部埋没高石垣1(1/80)

埋没高石垣 1a [第II期] (第85・86図)

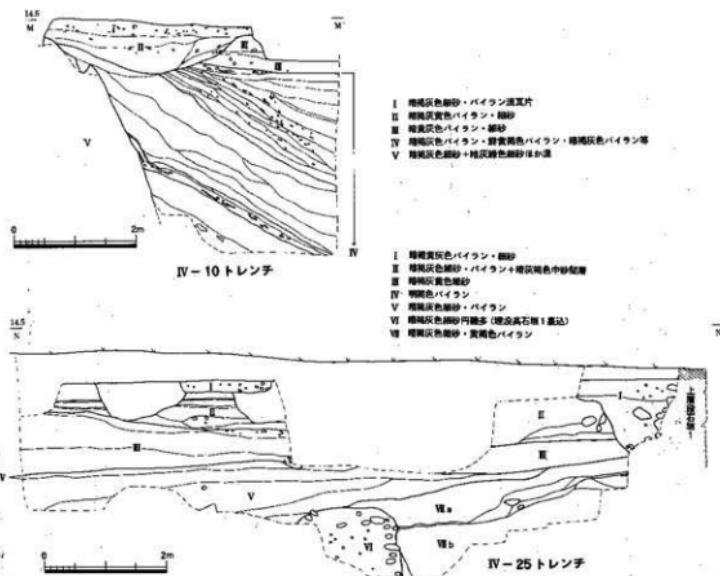
南北に延び、中の段の前身郭(第II期)の西辺を画していた。確認頂部から西の現役高石垣ア頂部までは6.6mの距離がある、後(第III~IV期)にそれだけ郭が拡張されたことになる。IV-10トレチの半ば以南は、郭の拡張時に石材を抜き取られ、破却跡の法面に置き換わって確認される。東背後には背中合わせに平行する内側石垣5があって、頂部幅4.1mほどの石墨構造をなす。

本区では、高さ最大3.8m、8段積み分までを確認した。本来の頂部は、遺存最高位からさほど隔たらない見込みではあるが、下層期のうちに失われている一方、基底は恐らく下の段相当まで降りて、高さ10m級の高石垣であったとみられる。築石は、風化面をみせる自然石で、割面や矢穴は観察されず、花崗岩がほとんどであるが、僅かに堆積岩も確認できた。形は長方体傾向をもつが整ってはおらず、大きさも、長辺が最大180cm、平均数十cm級、最小で40cmと、かなりばらつきがある。頂部付近の石材は小さめといえるかもしれない。積み方は、長辺を石垣面に向けて横に積むものと、奥行きにとって小口積みにするものがある。横メジをつくる傾向があるが、整然としたものではない。石垣面の立ち上がりは57~59°で、反りは観察されない。石垣面中で一定の面積を占める間詰石は、20cm級の風化角礫で、円礫は含まない一方、裏込はこぶし大の円礫主体で、40cm級の角礫を含む。断面として裏込のおよび範囲は石垣面から背後の1.5m程まで、決して分厚いとはいえない。さらに背後をなす造成土のV層(G層)の各単位層は、構築工程の遅い内側石垣5付近が最も深く、外の高石垣側が再び高くなる。石垣面に対して垂直な盛土面を反復してつくりだし、石垣の重量を巧みに受ける要領の盛土法といえ、郭の土砂造成と石垣の積み上げが、併行工程でなされたことが判る。

IV-10トレチ中の遺存石材端部では、深い石材ほど南側まで残っており、ここが特に高石垣の走向の変換点などであったという兆候はみうけられないし、石垣が城壁としての盛土斜面に転換する構造でもない。石材がまったく残っていないMセクションでは、石垣を支えたはずのV層(G層)端が裏込の予想端付近で破却擾乱の限界線として65°程の法面をなし、これを郭拡張のための造成土であるIV層(Fa層)が直接覆っている。

石材遺存の有無に関わらずK・Mセクションとも、次の郭の拡張に伴う造成土(Fa層)は、総て古い(第II期)郭の内側から土砂を落とし込んだような傾斜の堆積で、断続的に包含される多数の瓦片のうちには天守と共に金箔おしの瓦(1002~1004)なども含んでいる。またMセクションでは郭の拡張直後(第III期)での生活面(Fa層上面)は、13.10mの高さにあって、遺存石垣頂より0.5m低い。すなわち、北の5区方面にかけての石材を残された部分での高石垣1aは、頂部が埋まり切らずに、郭内の段石垣の体をなしていたことになる。それが埋まるのは、さらに遅れて郭内地盤の重上げを伴って西側で石墨内側石垣2が構築された段階(第IVb期)である。MセクションのII層はその段階に伴う土壤の埋土で、唐津焼の細片を伴っている。また、IV-10トレチ北西(第81図)で検出された長辺50cmの花崗岩自然石による礎石状の据え石1個も同段階(第IVb期)である。

高石垣の南延長にあたるIV-25トレチ(第86図)でも、築石は抜き去られ既にないが、裏込円礫の残存とみられるVI層が確認された。V層は郭を形成し石垣を支える造成土(G層)で、盛土の工程が石垣の積み上げと併行するとみえて、一部はVI層に被さっている。V層は本高石垣の破却を伴う郭拡張時の造成土(Fa層)で、その最上部から沢瀉文軒平(250)と桐文軒丸(403)という特殊な瓦の組合せが出土した。IV層は、新たな生活面(第III期)の地表化粧土(Fa層最上部)、II・III層はさらに遅れる郭の重上げに伴う下層期造成土(D・E層=第III期末~IV期)で、III層は第77図のV層や第83図



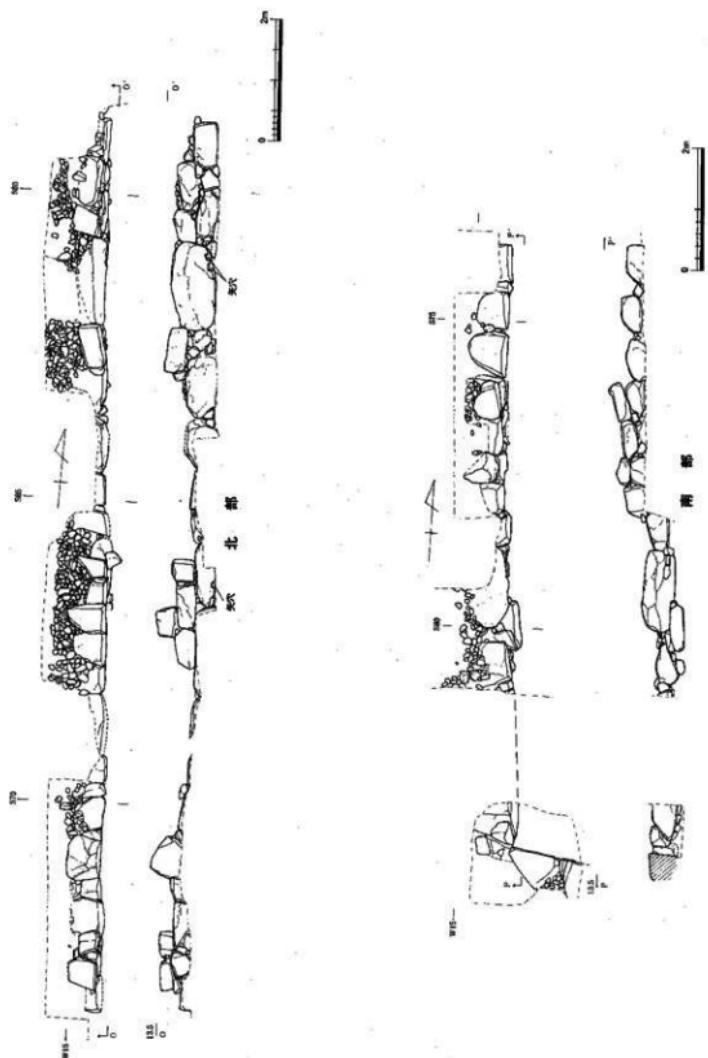
第86図 下層3区埋没高石垣延長部土層断面 (1/80)

IV層と同一である。I層は上層造構埋土(C層)である。III層上面などを生活面とする時期(第IVb期)には、東の1区との間に1m程の高低差をもつことになるから、III・II層を止めて東に段をなす構造、例えば上層段石垣1の先行形態的な段石垣を想定する必要がある。

石壁内側石垣5 [第II期] (第87・85図)

埋没高石垣1aと組んで石壁をなす東向きの低石垣で、下部の石材は良く残って、長区間に渡って検出できた。また、徹底して石材を抜かれた高石垣の南部での走向を追求する手がかりにもなった。すなわち北の5区から一直線に南に延びて、S84mライン付近に112°の角度の内折部を持ち、その東方1区IV-8トレンチ付近で、再び南に折れて1区の列石8に連なる公算である。

築石は花崗岩で、平均的に長辺50~80cm、最大で140cmに達する。同時に築かれて組み合った埋没高石垣1aのものに比べ、長方体傾向が強く、平滑な面をもつものが多く、自然石主体の内にも、粗割材を含んでいる。特にS61mラインの巨石やS66mラインの最下段石材は幅10cmほどの矢穴を伴っている。いずれもV層(G層)が密着するから、確実に当初材といえる。ただ、割石材を含むといっても、複数の割り面を持つものではなく、例えば先のS61mラインの巨石やS75mラインを含む左右の3石は、倍程の自然石を単に半截しただけで、石垣面に向ける割り面以外は丸い風化面である。間詰石は20cm級の角礫が主体で、こぶし大の円礫を交え、石垣面に占める面積比は組む埋没高石垣1より少ない。裏込はこぶし大の円礫主体。築石の積み方は横または小口積みで、横メジがよく通るが乱れる部分もある。立ち上がりは80°程度で、外の高石垣より急であるが、決して垂直ではない。



第87図 下層3区中部石壁内側石通5 (1/80)

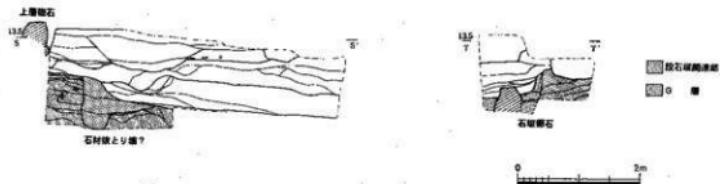
本区での最大確認高は1.0mの3段積みであるが、裏込の状況などから、最低でもあと1~2段はあったものと思われる。第85図のKセクションに示されるように、最下段石材は、構築直後の生活面であるVa層(G層)上面に対してほとんどが埋没する根石である。また、構築のための掘り方を持っていないから、郭の造成、高石垣と内側石垣の積み上げが一連の工程でなされたと判断できる。石材基底の高さは、S59mラインが12.6mに対し、S66mラインでも12.6mと水平、以南はS78.5mラインの12.4mまで緩やかに下がる。ところが、S80mライン付近では、北の最下段に統けて長辺130cmの巨石があり、その南下にはさらに石材があって、基底は12.1mまで段状に落ちる。その南は内折れ部でも同じ12.1mで再び水平をなす。さらに、この石垣の延長南端とみられる1区の列石8の基底も同じ高さで、見事に水平を保っている。

段石垣3・段石垣5 [第II・III期] (第81・88図)

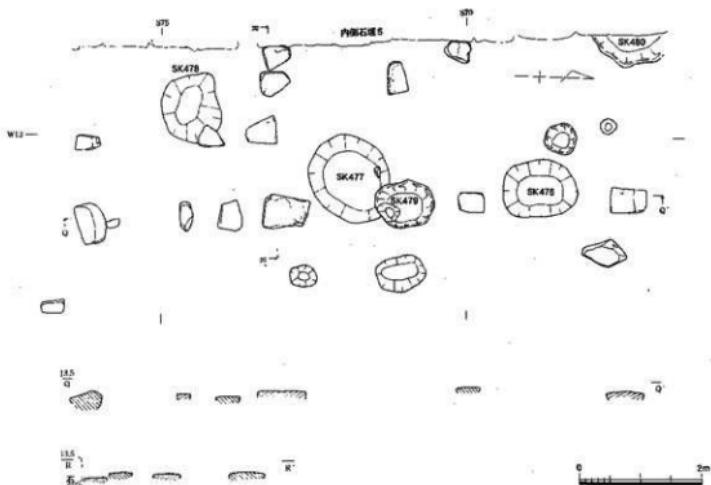
段石垣3は、東隣の4区半ば以東では石垣の体を保って東西に延びるが、本区ではその延長直線上で破却跡とみられる法面や若干の石材を確認した。これは、S80mラインにほぼ沿う格好で、石壁内側石垣5で述べた段落ち部分を通過する。便宜上、内側石垣5以西を段石垣5として区別する。

段石垣3の痕跡の西端付近は、石材はまったく残っていないが、郭内造成土(G・E層、F層深部)の堆積が北に対して南が急落し、ここに土留めをなす段構造があったことは確定的といえる。しかも、石壁内側石垣5最下段の大石材や段落ちちは段石垣3の取りつきを意図したものと解釈されるから、段石垣3は石壁内側石垣5やG層と同時性をもって構築された(第II期)と考えうる。このことは、4区III-9トレチの土層断面(第92図)でG層と石垣の裏込が密着し両者が一連の工程と判断できることとも一致している。なお段石垣3の基底の高さは、4区III-11トレチで13.15m、同III-9トレチで12.9mを測り、西に低くなっていて、西端ではさらに基底を下げながらも、石壁内側石垣5の基底高12.1mよりは少し高かったものと思われる。

一方、段石垣3の痕跡と連続する段石垣5の痕跡は、埋没高石垣1aの復元線を横切り、西の石壁内側石垣3にまで至る。すなわち、埋没高石垣1aの破却後(第III期)に、段石垣5は段石垣3を延長する形で構築され、逆に段石垣3は継続して機能したものと理解できる。IV-12トレチの西端では、段石垣5の一部とみられる石材1個が掘えられた状態で確認できた。長辺70cm以上の花崗岩自然石で、背後には4cm内外の小円錐と暗褐色シルトによる裏込、前面には石材の半ばまで埋めて石垣構築直後の生活面をつくりだす暗褐色細砂・バイラン土による造成土を伴っている。鮮黄色バイラン土ほかF層と判断される造成土は、掘石部を境に0.5m以上段落ちする。



第88図 下層3区段石垣5想定部断面 (1/80)



第89図 下層3区中部礎石群13 (1/80)

また据石の東では、段石垣に由来するとみられる50cm級の花崗岩材や小円礫が局部的に散布する。西のⅢ-7トレーナーでも、主石材は既にないが、その抜き取り跡とみられる掘り込みを確認した。ここでも、F層上面は北と南で0.5mほどの段差を持っている。こうした段石垣5の痕跡が取りつく石墨内側石垣3の最下段石材は、南北の隣接石材より、特に大きく(長辺160cm)て基底も深く、また段石垣5を迎えるように東に脹む形態で、両者の一体性や構築の同時代性が読み取れる。

段石垣5の痕跡とみられる造成土面の南北段差を埋めるのは、石墨内側石垣2(第IVb期)の構築に伴う造成土(E層)である。段石垣5と石墨内側石垣3の破却は同時とみられるが、前者の抜取り壌埋土の完結性から、部分的には段石垣5が先行して石材が抜かれ法面化した可能性もある。

礎石群13・土壤群 [第II～III(IVa)期] (第89・81図)

段石垣3以北のG層上面は、東の4区などで基本的に13.5mの高さで水平であるが、石墨内側石垣5の脇部は0.5m程低くなる。そのため内側石垣から約5～6m幅は緩斜面となるが、これを覆う厚さ20cm足らずの造成土(第85図Ⅲ層=Fb層)は、下か暗褐色微砂バイラン土、上が次の生活面をなす鮮黄褐色のバイラン土で、前者を中心にも多量の瓦片(含む金箔おし瓦)が出土した。

遺構として、礎石群13と総称した石14個と深さ0.3m内外の土壤が15基検出された。礎石は、G層上面に置かれて瓦片を含む造成土で固定されることから下層期当初よりはやや遅れるとみられるものが多いが、配置、微妙な層位や高さの振幅から、總てが同時一連のものとは考えにくい。これは土壤についても同じである。Qセクションに沿ってほぼ等間隔で並ぶやや大きめの4石と、内側石垣に接する2石に抜取り壌と思われるSK480を加えた、東西1間南北3間の組合せは比較的明確で、東辺石材間の距離は心々で北から257cm、307cm、310cm、東西間は250cmを測る。南・北・東にさらに繞いていた可能性もあるが、内側石垣5に沿って建物があったことは疑いない。

4. 下層4区（第90図）

礎石列14【第II期】（第90・91図）

G層上面に伴い、石材下半は掘り方の中に埋まる。長辺80cm～50cmの花崗岩自然石が東西一列に並び、上面もG層より10cmほど高い13.6mではほぼ水平に揃う。心々距離は、西から145cm、157cm、277cm、193cm、206cm、195cm、203cmで、平均1間199cmで間隔が広い東5石（14a）と、平均1間151cmで間隔が狭い西3石（14b）は別の組合せの可能性もある。この8つの石材は建物の礎石と思われるが、南北への伸展は未確定で、IV-15トレンチ北東の石材などがその組成の候補である。

礎石列15・礎石列16【第III～IVa期】（第90・91図）

礎石列15は東西に並ぶ石1～5と北の石6からなり、G層上面に置かれた礎石が暗褐色灰色微砂バイラント（Fc層）で固定されている。この造成土に含まれる瓦（第II期由来）は大量で、無秩序な個所も多いが、石3から石5を東に越える軸の0.5m南では完形の丸瓦が正位で列に組まれ、礎石にかけては特に入念に瓦片が敷きつめられている。礎石上の建物を念頭に置いた、地覆の防湿構造とみられる。石材間の心々距離は、西から148cm、150cm、151cm、185cm、また北へ190cmを測る。

礎石列16の上面高は13.7mで、層位も礎石列15とはほとんど同じであるが、関係の有無は判然としない。西の心々距離400cmの間にもう一石が想定でき、東の2石間は心々155cmを測る。

その他の郭内遺構【第II～IV期】（第90図）

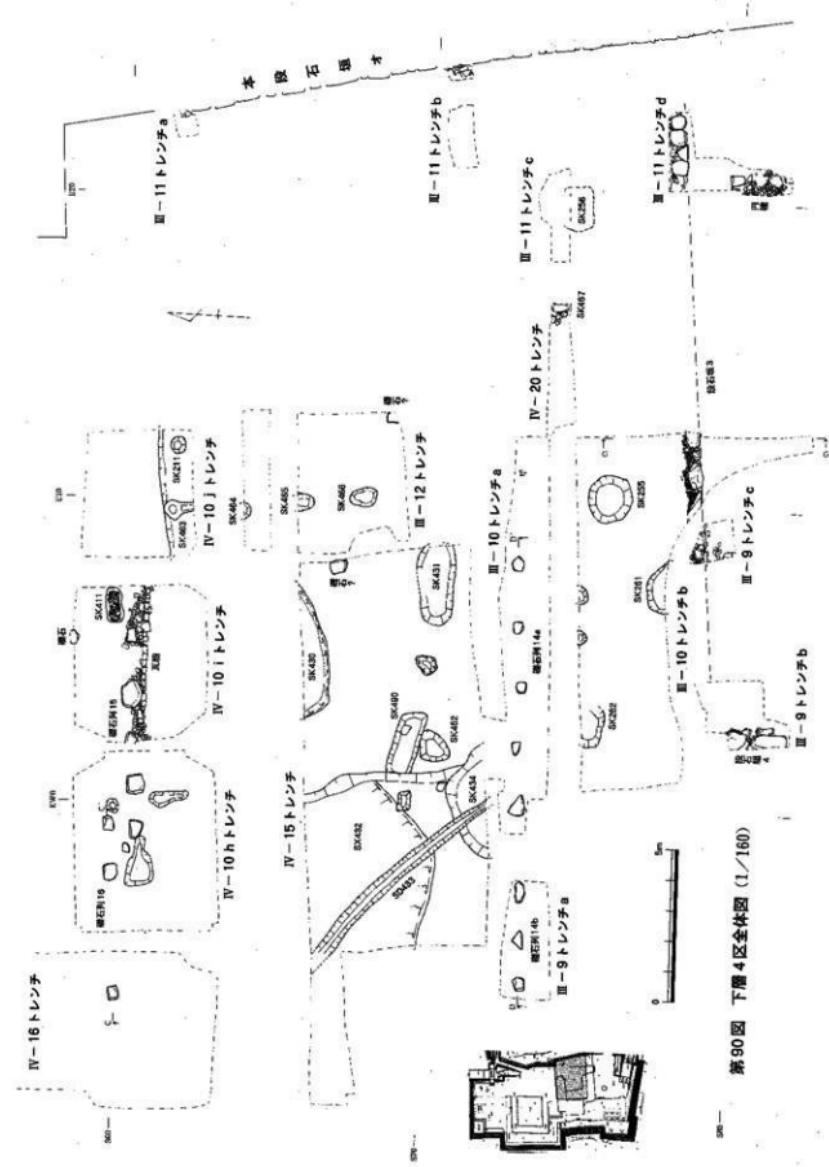
たいていは性格が不明である。SK490とIV-20トレンチの集石はG層上面に伴うが、名称を付したその他の遺構は、主にEd・Ec・Db層に伴い下層期でも比較的新しい。SK255は大量の瓦を埋め込む穴で、SK411はこぶし大円錐を充填していた。SK211とSK463～466の土壤列は礎石の抜取り跡の可能性がある。遅れる層位ほど郭内地盤の重上げ時とみられる擾乱が著しく、遺構として捉えがたい造成土上面の起伏や削平段が多数観察され、礎石類は原位置では残っていない。

段石垣3【第II期】・段石組4【第II～III期？】（第92・90図）

III-10トレンチ付近での段石垣3は、高さ80cmの2段積みで傾斜は約80°。築石は最大80cmの花崗岩自然石で、基本は長方体傾向の石材を横積みしてメジを通すが、E11mラインの大石は最大面を石垣面に向けメジを乱す。間詰石は20cm級の野面角礫やこぶし大円錐で、石垣面に占める割合は小さい。裏込は平均4cm級、最大こぶし大円錐で、石垣面の北背後60cmに及ぶが、多くはない。G層が築石背面や裏込に密着し、段石垣と郭（第II期）造成が併行する工程であったことが判る。石垣上の最古の生活面は高さ13.55mで、石垣頂より10cmほど低い。この時の石垣下の生活面は13.10mで、石垣段差は約50cmといえる。石垣面を一気に埋めるのは灰白色粗砂で、西のEa層（第83図IV層など）の主成分に近似し、石墨内側石垣3と同時に破却・埋没された可能性が考えられる。この砂層は石垣上から投入され、石垣現存頂より上面が約20cm高いにも関わらず、石垣北には及んでいないから、石垣は郭内地盤の重上げに伴って1段追加されていたが、破却時にその石材は欠落した可能性がある。

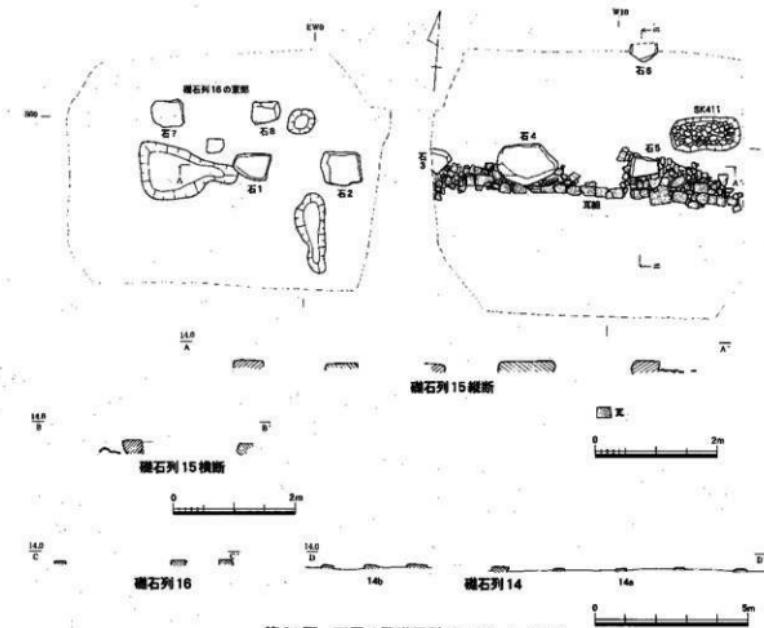
東のIII-11トレンチでの段石垣3は、長辺50cm級、高さ20cmの花崗岩自然石による列石状で、段重ねは疑わしい。しかし北背後にだけ、裏込の4cm級小円錐を伴い、走行と合わせて、西の段石垣3と一連と判断できる。段石垣3は前面生活面が高い東で低く、前面生活面が低い西で高いといえる。

段石垣4は、長辺120cm級の花崗岩自然石を最低2段に組むもので、構造や機能は不詳である。12.50mという基底高と走行から段石垣3に付く階段状張出しの一部の可能性も考えられる。

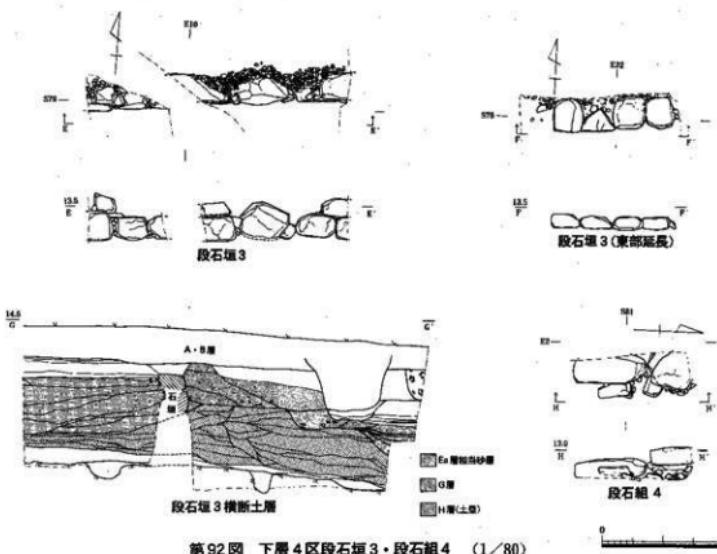


第90圖 下層4區全體圖 (1/160)

4. 下層4区



第91図 下層4区岩石列 (1/80・1/160)



第92図 下層4区段石垣3・段石垣4 (1/80)

5. 下層5区（第93図）

埋没高石垣1 [第II期] (第93・94・95・96図)

3区から北に続く高石垣はIV-21トレンチを経て、IV-22トレンチで103°の角度で東に折れる隅角を持ち、II-5トレンチから6区の方へ延びている。隅角部以南を埋没高石垣1a、以東を1bと呼ぶ。隅角部（第96図）は、後に1bに面を揃えて埋没高石垣2bが付加され、直線部に改造されている。したがって、1a側を埋める造成土はFa層（第II期末）であるのに対し、1b側はD層（第IVb期末）で埋没時期が異なることになる。1aの背後には内側石垣5が平行して石壁をなし、1bには内側石垣5bと内側石組6が組む。

IV-21トレンチでは、最大長辺120cmの花崗岩自然石を横に積み、立ち上がりは約65°で3区よりやや急である。間詰石は石垣面で占める割合が高く、長辺30cm以下の自然角礫を用いる。残存石材の最高位が13.8mに対し、この石垣を埋め西に郭を拡張した直後の前面生活面（第III期）は13.1m内外で、この時点では頂部が埋まり切らずに、最低0.7mの段石垣として機能していたことになる。その生活面をさらに埋めるEa層は2・3区と近似する灰褐色中砂で、その深部を中心で大量の瓦が出土した。ここでも金箔瓦が2点（1001・1008）含まれる。そのEa層や郭内Eb・Ec層上面の生活面（第IVb期）では、もはや石垣は地表に痕跡を残さない。それを埋める暗灰褐色中砂層は、北の埋没高石垣1bを直接埋めるDa層と一連の公算が強い。なお、高石垣の東背後約1mにある長辺80cmの花崗岩自然石は、この石壁上にあった建物礎石の一部の可能性がある。

IV-22トレンチの隅角部は両辺直線に対して北西に張り出す傾向があり、「輪取り」状になる。立面はほぼ水平の両脇石材に対して、角石は外角縁を高くとる傾きをもつ。発掘は角石3段分まであるが、石材の長辺は、最上段が東、2段目が南、3段目が東に向かって算木積みの傾向をもつ。角礫石は一般部に対しての差異は明瞭ではないようである。ここで石材は長方体傾向のある花崗岩の自然石で、他所より大きめで、最上段の角石などは長辺150cmに及ぶ巨石である。間詰石は長辺30cm内外の自然角礫が主体で、角石の上下間に認められる。D層下面で検出した裏込は、こぶし大ないし20cm級の円礫が背後2m以上にわたって夥しく堆積するが、これは本石垣にとっては二次的状況である。すなわち遅れる（第III期）埋没高石垣2bの裏込は、頂部石材を除かれた1aをそのまま連続して覆い込み、1b部の背後にまで入念に及んでいる。1a・1bの本来の裏込は本トレンチでは未検出。

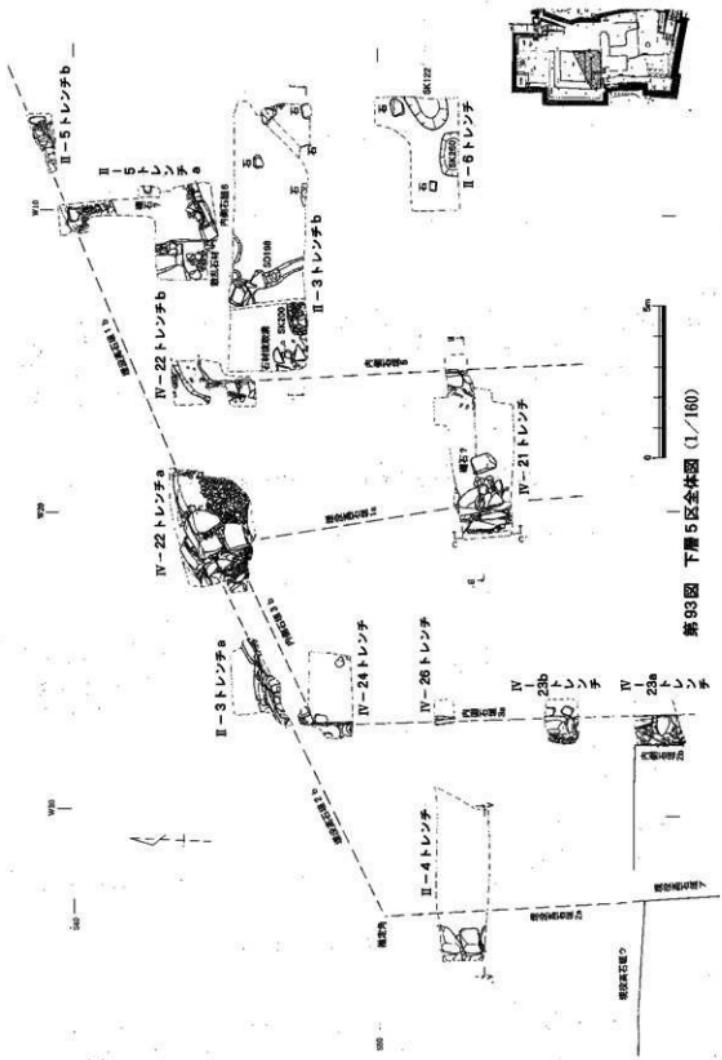
II-5トレンチでは、小面積ながら1bの頂部石材と裏込の一部をD層下面で検出し、6区に至る石垣の直線走行を確認した。

石壁内側石垣5 [第II期] (第93・94・96図)

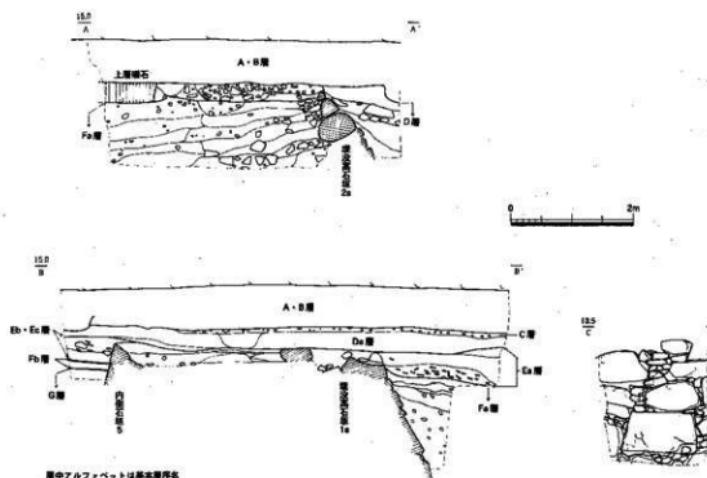
南の3区から埋没高石垣1aと平行して延び、IV-21トレンチでは、3区での状況に近似する状況の石材2段を確認した。前面のG層上面の生活面（第II期）の高さは13.3m、西の高石垣と組んで成す石壁幅は遺存頂間で4.3mで、以南と比べて大差ない。

IV-21トレンチ以北では高石垣が西に張り出す傾向があるのに対し、内側石垣はそのままの直線を維持するから、両者がなす西辺石壁の幅は北端のIV-22トレンチでは5.4mにまで広くなる。IV-22トレンチでの内側石垣5は縦・横60cm内外、高さ30cm程の花崗岩の自然石が列石状に残るのみである。背後には、こぶし大円礫と30cm級自然角礫を裏込として伴うが、最北の築石の基底高は13.5mと、IV-21トレンチに比べ最低でも40cmも高く、北に付随して面を揃える小石材の状況と合わせて、

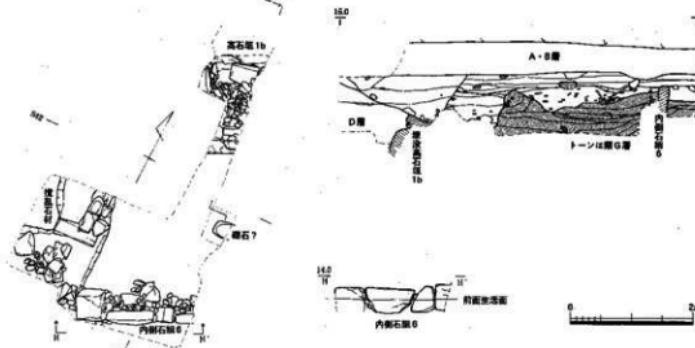
5. 下層5区



第93図 下層5区 全体図 (1/160)

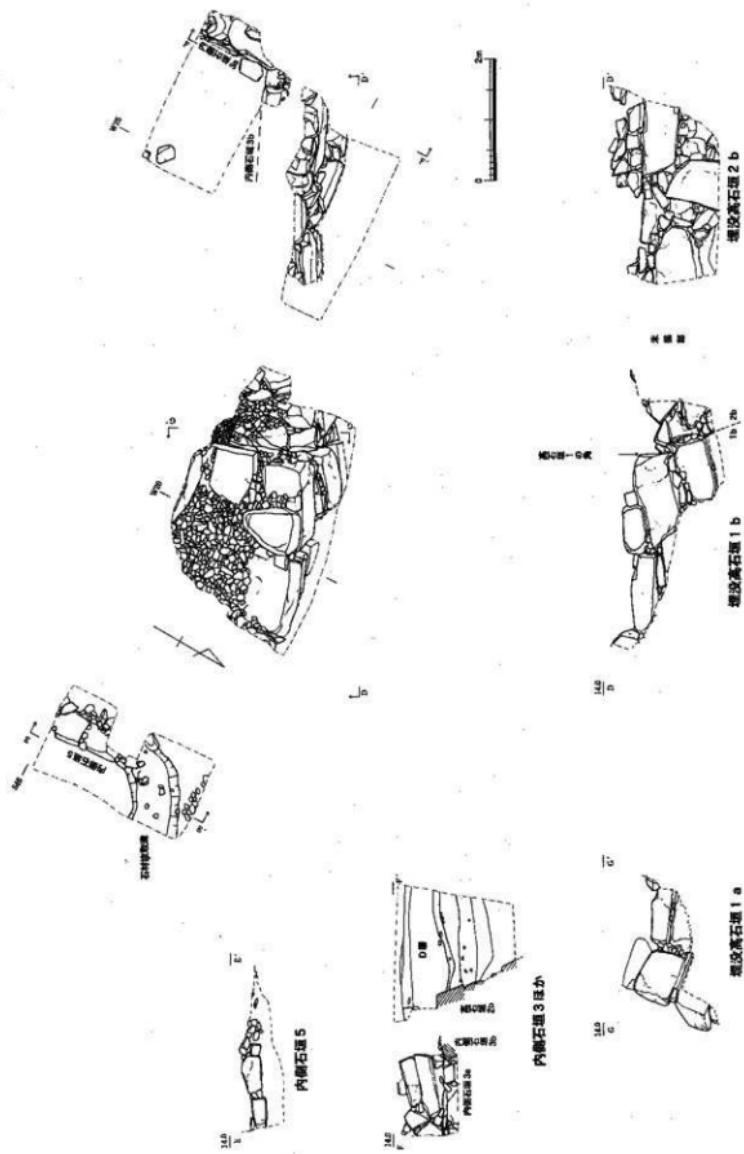


第94図 下層5区西側埋没高石垣土層断面 (1/80)



第95図 下層5区北辺石垣 (1/80)

石垣の大きな構造変化が読み取れる。面を描える小石材には、裏込再堆積状の円礫を伴って石材の抜取り跡とみられる溝が続き、内折れして埋没高石垣1bの想定線に平行して北東に延びる。この溝に石材を復元すれば、石材南縁と埋没高石垣1b頂北縁のなす星構造の幅は1.9m程に見積もれる。これは、西辺石垣に比べて極端に狭い。



第96图 下层5区强风化石建造带 (1/80)

内側石垣6〔第II期?〕(第95・93図)

II-5トレーナーで確認され、埋没高石垣1bと背中合わせに平行して石墨構造をなし、東の6区に続いている。ここでの石墨幅は遺存石材頂間で4.2mで、郭の西辺の埋没高石垣1aと内側石垣5による石墨の一般部に一致している。石組の築石は花崗岩の自然石が主体であるが各面はかなり平滑で、ハツリ面ともみられる部分も僅かに含む。確認部西端の石材が長・幅50cm、高さ40cmの正方体状であるほかは、長さ最大80cm、高さ40cm、厚さ20~25cmの板状をなし、最大面を南の石組面に向かって立てるように据えられている。確認できたのは6区側も含めて1段のみで、石材が段を重ねて石垣の体をなしていたという確証はない。間詰石は少ないが、角礫である。また、石組面の裏約60cmまでは、こぶし大円礫や40cm級以下の粗割り角礫（花崗岩のほか堆積岩も僅かに含む）を裏込として伴っている。石材基底の高さは13.4mに対し、構築直後段階での前面生活面の高さは13.6mで、残っている1段のみが仮に当時の構造とすれば、石材による見かけの段差は20cmあまりに過ぎない。

問題は、石墨内側石垣5との同時代性の有無ないしは接続状況である。G層の主体部に対し深さ10cmほどの石材を据えるための掘り方を持ち、この点は内側石垣5と異なり、新しいものとする要素ではあるが、これは石材の高さ調整に加え、石を立てるという技術的な必然の可能性もある。また掘り方を覆って生活面をなす造成土や背後で石組を支える造成土の一次的部分は、その上方の遅れる造成土と異なって瓦片を含まないことから、むしろG層の一部と評価してもよいかもしれない。そうすれば、構築がG層と同時工程という関係は、内側石垣5と一致してくる。さらに石材の使い方はやや異なるが、石材基底の高さ、それに少なくとも現状では築石が1段という点は内側石垣5の確認端と一致する。一方、内側石垣5の延長として石材抜取り痕的溝または石組が、内側石垣6とは別にその北にあるか否かの追求は完全ではないが、明確な構造体としては6区側を含めても確認できなかった。また内側石垣6の確認西端の石材は形状から特異性が窺われ、そのすぐ西から北側は、下層期のうちに擾乱を受け、石組に由来するとみられる石材が散乱する。以上を総合すれば、内側石垣5と内側石垣6は同時構築、内側石垣6の確認端は角石で、そこから北に折れて2m程のところでさらに西に折れ、検出した溝を経て内側石垣5に繋るという、複雑な石組の走向が可能性として提示できる。

埋没高石垣2〔第III期〕(第93・94・96図)

本区南西の現役高石垣アとウの接合部では、石材の重なり方や石垣自体の様相から、アのなす直線に対して、遅れてウがほぼ直角に付加された状況が明確に観察できる。現役高石垣アの延長でD層に埋め込まれた部分が、埋没高石垣2としたもので、113°程に見積もれる未掘の隅角部を境に以南を2a、以東を2bとする。

2a側のII-4トレーナーでは狭い範囲であるが築石3、4段分を確認した。ここでは、本来の頂部は残っていないが、築石は長辺80cm級の花崗岩自然石の小口を石垣面に向けて積む。立ち上がりは50°内外で、南の現役部と一致する。石垣背後には20cm級の大量の角礫と少量の円礫を含む黄灰色微砂シルト層(Fa層と評価できる可能性が強い)が堆積するが、裏込としての石材の集中度は低く、築石直後に空石状態の部分はほとんどない。この造成土の単位も3区の埋没高石垣1a背後同様に外の石垣側を高く盛る。なお、頂部石材の欠落を勘案しても石垣の走向は、南の現役直線部に対して、隅角部は輪取り状に北西に張り出す傾向がある。

II-3トレーナーとIV-22トレーナーで確認した2bは、長辺120cm以上の花崗岩石材を築石とするが、埋没高石垣1bに接する部分は小さめである。高さ13.40m付近には横メジがあり、これより上は40cm

級以下の石材のみとなり、少なくとも工程上は別の部分といえる。全般に自然石が主体であるが、II-3トレンチの中央部の1石は石垣面に割面を向ける。この石は、二次的に15cm程前にせり出し、奥行きがあまりなくて、立てるように据えられる。他の築石は横積みが優勢といえる。間詰石は石垣面中に占める割合が高く、野面の角礫主体で割面を伴うものを含む。石垣の立ち上がりは、約70°で西面する2aより急で、未掘の隅角部で傾斜差が解消されるはずである。前面を埋めるD層は暗黄灰色中・粗砂で、高石垣上の南からというより東方から投入されたような傾斜の堆積をなす。

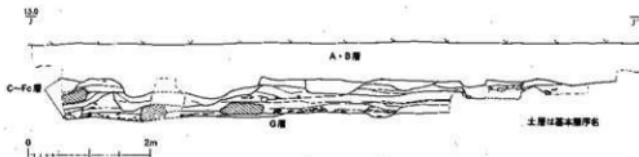
石室内側石垣3 [第Ⅲ期] (第93・96図)

現役高石垣A-埋没高石垣2aと平行して3区から続く直線のまま北に延びる部分を3aとする。II-4トレンチでは、埋没高石垣2aとの間に別の高石垣やその痕跡は確認できないから、2・3区で述べた両者の同時構築の可能性が、いっそう補強される。北端のIV-24トレンチでは、長辺100cm級の長方体的花崗岩自然石材の3段、高さ1m以上を確認した。その北端では113°で東に折れる角を持ち、埋没高石垣2bと平行する部分を3bとする。3bが高石垣となす壁の幅は0.9mに過ぎず、ここでは他の石垣と組み合う可能性を考える余地はない。この幅での上部構造は土塀であろう。内側石垣3は埋没高石垣2b側の頂部横メジ以上に相当する部分を既に失っているが、その横メジ以上的小石材は土塀基礎ないしはその二次的改変に関わる部分として理解できるものではあるまい。

内側石垣3構築直後(第Ⅲ期)の前面生活面(Fa層上面)の高さは12.9m内外で、この時の内側石垣5以東の郭内生活面の基本高より0.6m以上低く、内側石垣3と埋没高石垣1a頂部の間の幅6.8mほどは主郭の西に付く帶曲輪的景観を呈していたことになる。また、郭の北西隅の東隣での壘構造幅が、他所より狭いという点は、埋没高石垣1と内側石垣5・内側石組6による先行構造(先述の想定)の反復といえる。なお、郭の西辺で現役高石垣Aと遅れる段階(第IVb期)に組む内側石垣2に関しては、3区で既に述べたように元来はさらに北へ続いた可能性が高いが、予想される基底が上層期生活面と近接し、その痕跡を遺構として確認することはできなかった。

郭内平坦部の遺構 [第Ⅱ～Ⅳ期] (第93・97図)

SD198はG層上面かFb・Fc層中に伴う(第Ⅱ～Ⅳa期)深さ20cmの浅溝で、内側石組6による石壁に直角に延び、石組の破却材とみられる石材に覆われる。その東約4mの礎石状石はG層上面(第Ⅱ期)、その南の3個のうち西の2個はFb・Fc層(第Ⅱ～Ⅳa期)、同じトレンチの他の2個・II-6トレンチの2個・II-5トレンチの1個の礎石状石材はEb～Ed層に伴う(第Ⅳ期)が、元位置を保った建物礎石としての確認はない。特に遅れる層位のものは造成土中の二次堆積的色彩が強いように観察される。40cm大の花崗岩角礫やこぶし大円礫を充填して石捨場的なSK200、意味不明のSK260・SK122もEc層上面～Ed層に伴い(第IVb期)、下層期では新しい遺構である。



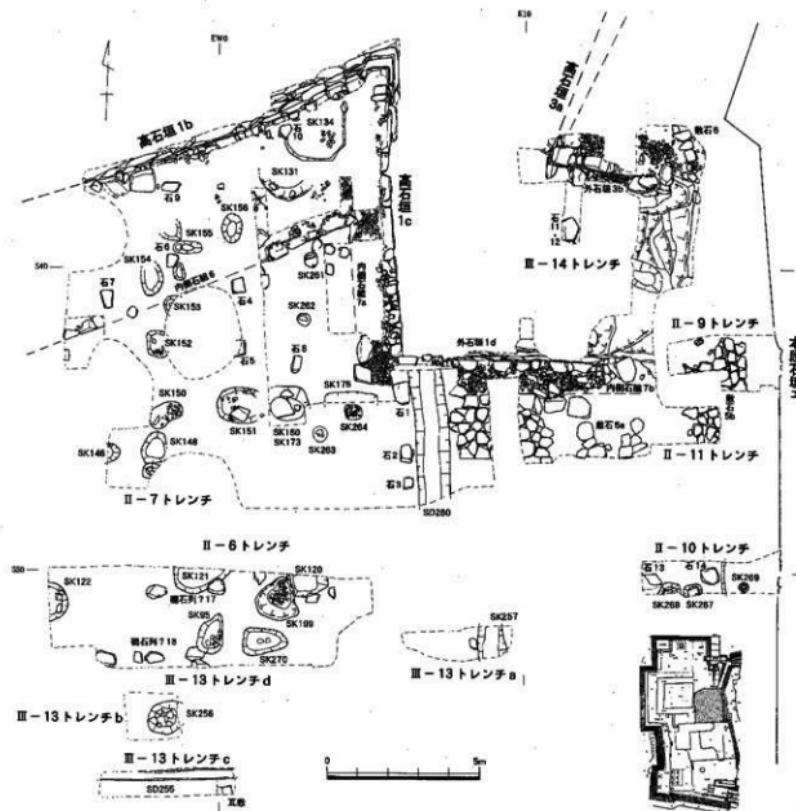
第97図 下層5区郭内土層断面 (1/80)

6. 下層 6区 (第98図)

5区から続く埋没高石垣1bが鋭角から内側に引いて鉤折れし、北からは廊下門東側の現役石垣の延長とみられる埋没高石垣3aが迫って鉤折れ、その間を通路とする城門が確認できた。

埋没高石垣1b・1c・1d [第II期 (~第IVb期)] (第99・100・101・102図)

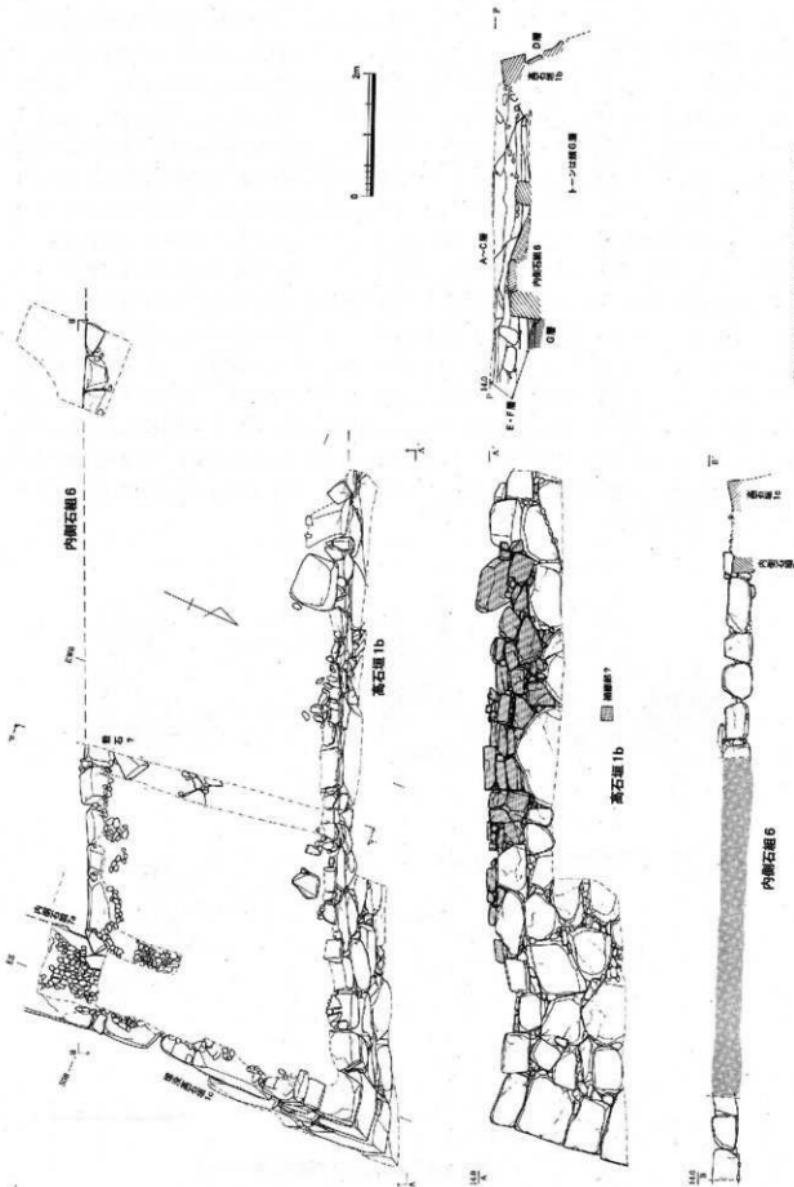
北東に延びる1bの端は70°の鋭角をなす隅角部で、そこから南に延び頂部長9.4mを測る部分を1cとする。1bと1cは直線でなく微妙に内に引く弓なり傾向があるて輪取り状で、出角の鋭角度を増している。1cの南端でさらに石垣は直角に折れて東に延び、この部分を1dとするが、東ほど高さを減じて既に高石垣とは言い難く、頂部長10.0mで端部をもつ。前面を埋めるのは暗黄灰褐色中砂のD層で、石垣は下層期のうちでは比較的長期にわたって機能していたことになる。



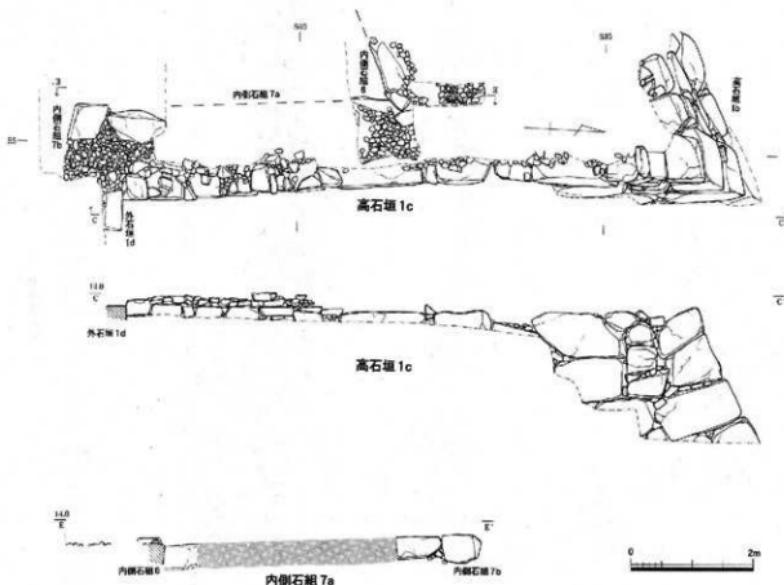
第98図 下層6区全体図 (1/160)

6. 下層6区

第99図 下層6区北石壁(1/80)



III-7 レンチでの1bは長さ約11mにわたって連続的に検出できた(第99図)。隅角部付近では、現存頂部までの高さ2.3m、築石4段分まで検出したが、掘り下げは基部まではとうてい及ばない。このうち、E1mライン以西の石垣頂部、最大で深さ約1mに及ぶ範囲は、他と様相が異なり、下層期のうちでの補修を受けた可能性が強い。ここは、築石が長辺70cm以下と小さく、長方体ないしは台形状で角のある花崗岩で、矢穴は残さないか粗割り面が多く見でき、積み方は横積み傾向があるが乱れる個所もあり、間詰石はこぶし大以上の円礫が主体となる。その他の部分は、近似的に観察されるが、角石の上から2段目までと、その脇石3段及び1c側(第100図)の脇石4段は、やや違和感があつて積み直しを受けた可能性(少なくとも工程的に独立)がある。すなわち、角石の1段目は80cm四方、高さ50cmの方形石材(野面)、2段目も各辺80cm程の立方体で(特に1b側は粗割りによる整美な面)、両石は重箱積みとなる。その両脇石は、小形で、隣の一般部材に噛み合わずにやはり重箱積み状である。これに対して角石の3段目は整った長方体形で140cmの長辺を1c側に向かって、4段目も整った長方体で120cmの長辺を1b側に向かって、算木積みの傾向が垣間みえる。その脇石は1b・1c側とも一般部に対して特徴的ではなく、違和感なく続いている。頂部と角石2段連関を除く1bの一次的部分は、平均長辺100cm級、最大長辺170cmの花崗岩自然石で、平坦な自然風化面をみせる比較的丸みをもった築石を、どちらかといえば横に積むが、横メジの通りは弱い。間詰石は長辺30cm以下の風化角礫が主体で、円礫は含むが少量で、補修を受けたとみられる頂部と異なっている。以上の1bの断面立ち上がりは、約65°といえる。



第100図 下層6区 城門部西石垣(1/80)

1cの特に南部は深くは掘り下げを行っていないが、S39.5mライン以南では長辺30cm以下と小さくて長方体状の花崗岩割石材を最低2段に積みあげた部分を確認できた。背後の内側石組7aとでなす壁構造(幅1.4m)の上に想定できる土壌に関わる部位であろう。その下の段も、長辺50cm級の整った長方体の割石か近似する自然平滑面を持つ築石を整然と横に積み、同じ高さの以北の巨石材に対して変化を持ち、南の1dに近似してくる。一方、1c北部の一次的部分は、築石が長辺120cm程度で長方体傾向を示し、平滑な粗割りないしは自然面をもち、石材を横に積む傾向が強く、断面の傾斜も約72°と急で、隅角を挟んで一連の1bの一次的部分に対して変化をみせる。

1dは、中部のE10mラインで基底を検出し高さ3.75mを測るのに対し、擾乱による欠損部を隔てたE16mライン付近では築石1段分の高さ0.2mまでになり端部となる。この間を平均化すれば、基底は22°程の傾斜で東に上り、仮に同じ傾斜で1d西端での高さを見積もれば4.4mとなる。1dの東端には石垣確認頂に高さを合わせて敷石5bが続き、また石垣の南背後の敷石5aも高さが揃うことから、石垣の確認頂である13.90mという高さは、ある段階の機能状況を保っているとみられる。この高さは1cや1dの遺存部最高位とも共通する。全体に1dの築石は、石垣面側がかなり平滑である。その面は自然風化面が多いようであるが、一部に粗割り面(矢穴は伴わない)の可能性をもつものも含む。また、高さ13.0m以下の下部が長辺100cm級と大きめであるのに対し、上部は80cm以下と小ぶりである。積み方は、横積みが優位で特に13.0m付近と頂部に横メジをなすが、未掘部東側の上から2段目は板状材を立てて、最大面を石垣面に向ける。石垣上部は、間詰石に20cm級以下の割石や10cm以下の円礫が多見でき、積み直しを受けた可能性もある。以上の1dの断面形は、一連の石垣のうちで最大の78°の傾斜を持ち、石材面の平滑さとあいまって、最も凹凸が少ない。

高石垣3a・外石垣3b [第Ⅱ期 (~第Ⅳb期)] (第101・102図)

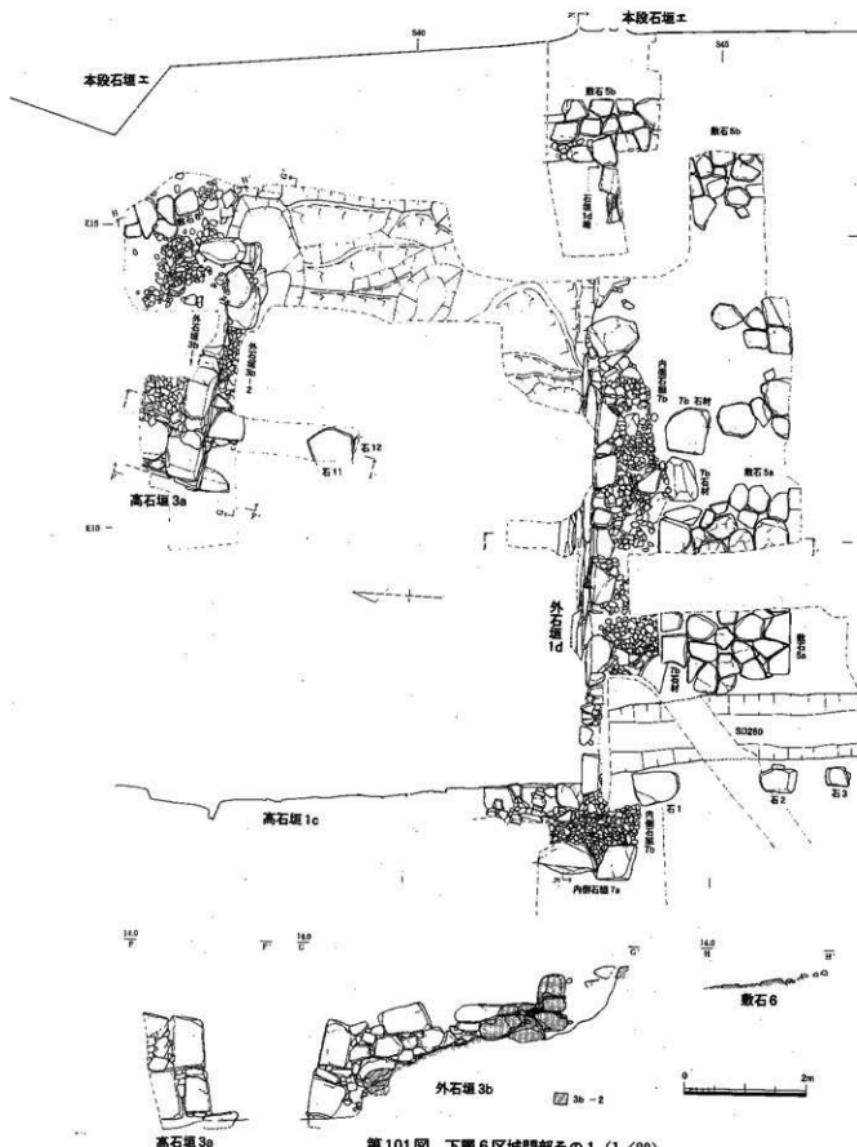
廊下門の東脇の現役高石垣と本来同一で同じ走向をもちらがらDa層(第Ⅳb期末)に埋められた部分が3aで、現役部(第V期)南端から8mの位置で75°程の隅角を持ち、東に折れる。その角以東を3bとするが、東に向けてさらに高さを減じ、確認長は4.2mを測る。この3bの構造は複雑で、3b-1とした石垣面と、0.6m南で3b-2とした石垣面を段違いに持つ。

実際に検出した3aは長さ1m程に過ぎないが、高さは1.8mで、北の未掘部を経て現役部に向かってさらに基底が下がっていく状況が読みとれる。築石は平滑面をもつ長方体状花崗岩であるが、間詰石も多くの面積を占める。石垣の断面傾斜は約78°である。裏込は3b-1側と一連で、石垣面奥1mほどにわたって、こぶし大内外の円礫が空石積の状態で充填されている。

隅角部では、最下の角石が70cm×60cm×45cmの大きさで、最大面を3b側、次に大きい面を3a側、小口を天地にとる。小形の石材を挟んで上の角石は、90cm×60cm×50cmで、角柱状石材を同じく立てて据えている。角石だけで独立して縦メジが通り、しかも上の石材の方が大きいから、物理的には不安定な積み方となっている。見かけの整美さを優先した結果であろう。最下の角石の南下には、長辺60cmの花崗岩野面石が咬まれ、その南縁は3b-2の面に揃っている。

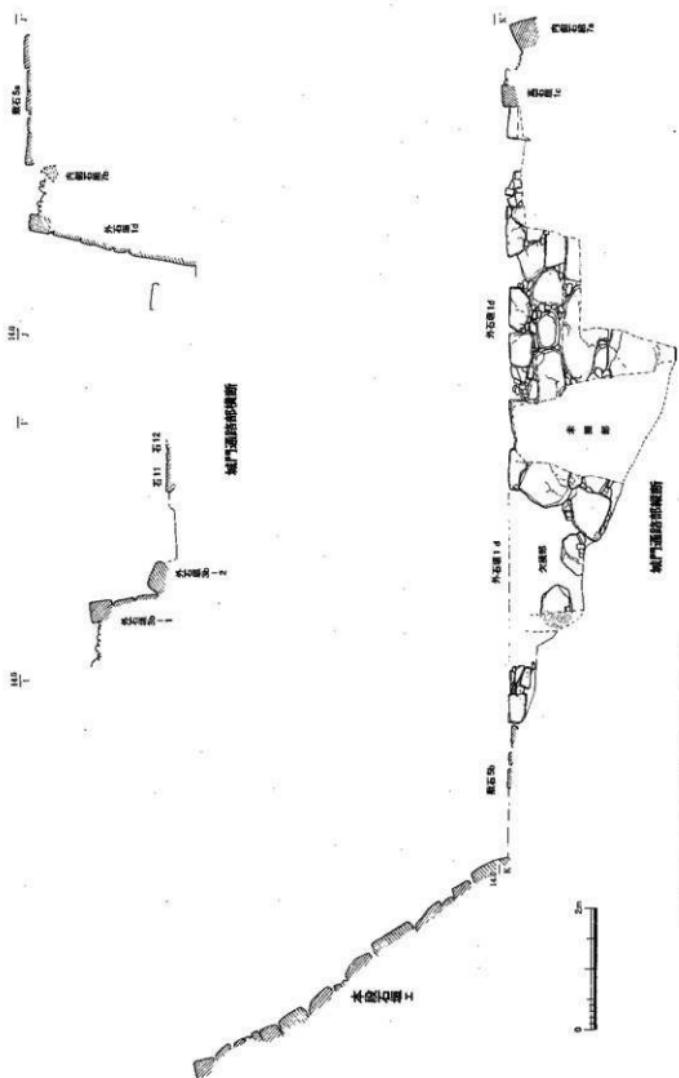
3aとの隅角をなす3b-1の基底は平均30°程で東に上がって、長さ3mほどで石材が途切れる。築石は70cm級以下の花崗岩自然石で、一般部は角石に比べ面の平滑度や角の尖り方が弱い。間詰石は30cm以下の野面角礫で、こぶし大の円礫も混ざる。石垣断面は83°もの急傾斜である。

3b-2は長辺80cm以下の丸みを持った花崗岩の自然石を積むもので、西部では1段のみしか確認できないが、検出東部は3段積み、高さ0.9mで、端部は縦メジをなし、そこが本来の端部であった可能



第101図 下層6区段門部その1 (1/80)

6. 下層6区



第102図 下層6区南門部その2 (1/80)

性もある。石材基底はb-1より緩い20°程の傾斜で東に上るといえる。b-1の東端付近の基底石材は、b-2をなす築石の北奥に直接載っているが、b-2の西方石材は、逆に3b-1構築後にその前面に据えられたものもある。従って3b-2は、3b-1と併行する工程で一体に造られたもので、その前面に付く張り出しと考えられるが、各々が部分的に積み替えをうけて、関係が複雑化した可能性も残っている。いずれにせよ、3b-1に対し3b-2は、石垣1dとの間の通路に関わって、その幅を部分的に狭め、緩い傾斜をつくり出す機能を持つものと理解できる。

城門部通路〔第Ⅱ期（～第Ⅳb期）〕（第101・102図）

高石垣1cと3aに挟まれた部分は、特に1c側の掘り下げが浅く、路面の状況は不詳である。3a上角の走向に対し1cは西に振って、通路は北に向かって広がっていたように見受けられるが、石垣上角に対しその下端は、石垣が高くまたその断面傾斜が緩いほど、通路側に脹むから、通路幅の北への開きは検出遺構平面図での見かけ印象より小さいはずである。3aの隅角部での1cとの間の通路幅（石垣下端間）は3.5m内外に見積もられ、上方の1d・3b-2間の通路幅の5.1mより明らかに狭い。その1d・3b-2間は平均化すれば20°程の傾斜で東に上がる。検出面は褐黄色のバイラン土による造成土で不定形の段が多数連続するが、本来は石材が据えられて階段をなしていたものとみられる。石11・12は長辺70cm級の扁平な花崗岩野面石を上面を揃えて据えるもので、階段の一部の可能性がある。なお石垣3b-2の上面を階段そのものとし、高さを揃えて南にも石材が統一していた時期があった可能性も否定しきれないが、その時の石材と考えるには石11・12は位置が深い。また石11・12は、城門の扉構造に関わる石材にも擬せられるが、東背後には傾斜が続き、ここに大きな扉が回転する空間的余裕はない。この幅広部を背後の武者溜の部分として、扉は石垣1c・3aに関わる部分に北面してあった可能性が考えられる。

未確定な部分もあるが、この城門は、狭い通路が石垣に囲まれて深くまた急傾斜で、土塹や櫓など後述の石垣上構造に守られた、埋門の構造の搦手門とみられる。すなわち、通路の北端開口部は高石垣1b・3a（両石垣の軸は鈍角に交わる）に紛れて目立ちにくく（特に西～北西から）、入城者は、先ず石垣1dを正面にみて左右の高石垣に挟まれ、次に突き当たりを東に折れ、石垣1d・3bに挟まれて現役本段石垣エに面し、さらに本段石垣直前の敷石5bのある幅2m程度に過ぎない平坦地に登りつけ、これを通路に、南に折れば中の段の前身郭の内へ辿り着き、北に折れば現役構造（幅約2m）に近い隘路を経て、本段の天守に直接到達したとみられる。後身といえる上層期の廊下門は、通路幅がもっと広く、折れなく一直線に中の段に上れることと対照的である。

内側石組6・7a・7b〔第Ⅱ期〕（第98・99・100・101図）

内側石組6は、埋没高石垣1bと基本的には平行するが、高石垣上縁の弓なり走向に関わらず、より直線に及び、両者のなす壁の幅は4.2m～4.6mと微妙に変化する。検出できた石組は1段1列に花崗岩自然石（但し一部は粗割り？）を組むが、5区とは様相を異にして長辺80cm級、高さ50cm級の石材を横に置く。やはり、石材の石組面側は自然面を主体としつつも平滑で、こぶし大円礫や角礫による少量の間詰石と裏込を伴う。現頂部の描いかたと構築が遅れる敷石5や礎石群？（後述）の高さからして、石組6は一連の石組7a・7bと同様に、本来から一段であった可能性が十分にある。またPセクションでは、石組背後に石組と上面を揃えG層とみられる鮮黄褐色バイラン土に載る格好の長辺50cm大の石材1個が残っており、石壁上面に敷石が存在した可能性もあるが、下層期のうちで遅れる時期の攢乱が及んで、判然としない。石組下半は瓦片を含まない灰褐色バイラン細砂のG層的造成土に埋めら

れて固定され、構築直後の前面生活面は高さ約13.40m、石組による見かけの段差は30cm程度で、むしろ墨（特に初期）の主体は、実体として残ってない土壌であった可能性もある。

内側石組7aは、高石垣1cと組んで南北に延びるもので、石組6と70°程の角度で接合する。接合部は石組7a側の走向がやや優位気味ではあるが、双方の端部石材の角が点で接する格好で、7aが本来はさらに北に続き、遅れて石組6が付加された痕跡とは言い難い。石組7a自身の構造は石組6と同じであるが、高石垣1cとでなす墨構造の幅は1.4m程に過ぎず、その間にこぶし大円錐が空石状態で充填されており、上部には土壌が復元される。

内側石組7bは、石垣1dと平行し、7aから直角に折れて続く部分である。自身の構造や外石垣との関係は7aと同様であるが、下層期の内に石材が南に動くか欠落し、円錐堆積の南端としての痕跡に置き換わった部分がある。また東部は上層期以降の擾乱を受け敷石5と諸共に失われている。

敷石5 [第IV b期] (第101・102図)

外石垣1dに沿って東西に延びる部分を敷石5a、外石垣1d端以東で現役本段石垣エに沿って南北に延びる部分を敷石5bと呼ぶが、本来一連のものと判断できる。

敷石5aは内側石組7bの郭内側を埋める造成土(Fc・Ec層)の上に構築されたもので、石組7bの石材に僅かに掛けて直接載る部分があり、下層期でも遅れる構造であるが、外石垣1dと石組7b間に想定できる土壌(第II期構築)との同時併存には矛盾なく、むしろその存在を前提としたような位置関係である。石材は長辺60~30cm、厚さ10~15cmの花崗岩で、敷石面に粗割り面または平滑な自然面を向ける。敷石端部に比較的整った直線を持つ石材を充てるほかは、平面形態が丸いものや三角のものも含まれ、枠内の隙間を任意に充填したような石材配置である。さらに7cm級以下の詰石を伴うが、ごく僅かである。5aの西半は造りが良く、その北縁での上面高は13.85m内外と、外石垣1dの頂高とほぼ揃って5cmほど高く、南に向かってさらに5cmほど高くなる。この西半での北縁と南縁は直線をなし、本来の状況を保っていて、その南北幅は2.1mといえる。西縁自体は、SD260などによる下層期のうちでの擾乱を受け、端部の体をなしては残っていない。一方、E10.5mライン付近では先の南縁からさらに南に石材があって、敷石が一定の幅で南に続いている可能性が高い。敷石5の上面は南東部が最も高く、5aの南東端では14.0mにまで達する。

敷石5bは、本段石垣エの下端に平行して、1.0mのところに東縁があり、石垣1d端以北では城門通路部斜面(階段)上端に西縁を合わせて、東西幅1.0mを測る。ここでの石材は5aや5b他部と同様であるが、おおむね縦3列に組まれている。石垣1dとの接合部は、上面の高さが13.9mで互いに揃っているが、石垣側石材が高さ20~25cmであるのに対し、敷石側の厚みは10cm程と、断絶性をみせ、敷石を石垣1d構築当初からの構造と考える必然性はなく、むしろ内側石垣7b前面の造成土を介して窓える敷石の新しさと整合している。石垣1d端以南の5bは5aと一体化し、境線のメジが通るわけでもなく、上面高は検出部南端で14.05mにまで達する。

基本的に敷石5は、上面を人が歩ける床を形成するものと思われるが、特に5aについては、その広がりから、単なる通路敷というより、なにかしかの上屋を伴っていた可能性が十分に考えられる。あるいは、先行して存在した北の土壌に対し、郭内側に直交して壁が付加される形で成立した構が想定可能かもしれない。なお、敷石5aの大半部は、暗灰色微砂と鮮黄色バイラン土の互層で最後の下層生活面をつくり出すEd層(第25図)によって早く(第IV b期中)も埋められるに対し、5b部は暗黄色細中砂のD層が直接被さって、下層期末まで引き続き露出していたことが判る。

敷石6（第101図）

外石垣3bの北東背後に確認されたもので、長辺70cm級以下の中面の花崗岩を7石以上組む。上面は南が高く13.7mを測るが南の敷石5bよりも既に低く、さらに北北西の検出部端に向かって13.4mまで下がっていく。城門通路の北側上端から始まって、本段天守に至る通路の西縁をなす位置にあり、塀の下部構造もしくは通路面自身であった可能性が考えられる。現役の本段石垣エの鉤状折曲は、通路の確保を考えると、整合性を持った構造といえるが、この敷石6が通路の西縁を画す土壠とすれば、南では最大2.0mあった通路幅が、石垣屈曲部では1.2m程にまで絞り込まれることになる。

G層上面～Fc層に伴う郭内造構〔第II～IVa？期〕（第98・103図）

内側石組6・7a・7bがまだ段の体裁をなす時期のものである。II-7トレンチでは、G層上面に伴う確実な造構は、石組自体のほかは確認できていない。SK173は、多くの瓦片を含む厚さ10cmほどの造成土（Fc層）の上面から掘られた土壠で、新しいSK160と位置が重複するが、底には80cm級で礎石状の花崗岩自然石が確認できた。転石ともみられる石8もこの層位に伴う。南のIII-13トレンチの礎石列？18も同様の層位に伴うもので、東西に4つ石材が並び、そのうち大石3つは、西から160cm、130cmの心々距離を測る。形状などから礎石材である可能性は強いが、本来の位置を保つものとの確証はない。その南でやはり同様の層位とみられるSK256は、直徑1.0mあまり、深さ0.4mの土壠で、瓦片や20cm級の石材が投棄されていた。

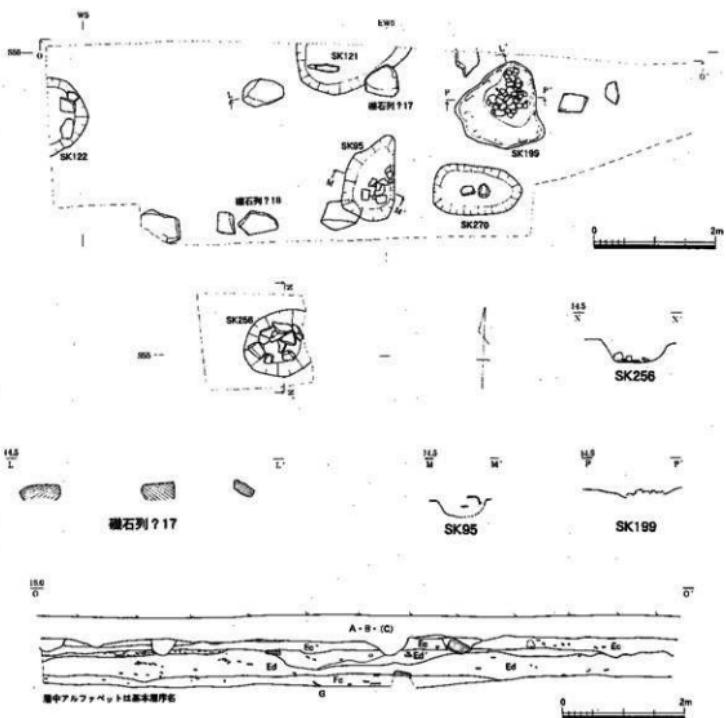
一方、東のII-10トレンチでは、確実にG層上面に伴う造構が集中して検出された。石13と石14は、長辺60～70cmの花崗岩自然石で、平滑な上面を周囲のG層より5cmほど高く据え、礎石である可能性が強く、心々距離は200cmを測る。SK268、直徑0.7m、深さ0.25mの土壠に20cmあまりの方形石材を2個据える。SK267は、それとほぼ同大の土壠に完形の平瓦1枚を置き、上に完形の軒丸瓦1個を重ねていた。SK269は、深さ0.1mで円碌4個を伴う。ここでG層上面は、5cm程の段をして東側が高い。III-13トレンチaのSK257もG層上面の深さ0.2mの浅土壠で、西縁に30cm大の扁平石材1個を配す。

Ec・Ed層に伴う郭内造構〔第IVb期〕（第98・103図）

内側石組6・7a・7bによる段が埋まつた段階の造構といえる。

敷石5と同じEc層に伴う造構は、II-7トレンチでは、SK154、SK152、SK150、SK160、SK262、SK261の東の小石材3個、SK175などである。たいていの土壠は深くても0.3m程度で、こぶし大円碌などの小石材を伴うものが多く、礎石の抜取り跡の可能性を持つものもある。南北・東西に並ぶような傾向があるが、明確な配列の抽出にまでは至らない。SK175は大量の瓦、SK160は魚骨を顕著に含む。II-6トレンチのSK121は埋土に大量の炭や灰を含み炉材ともみられる焼石を伴い、SK122は石材を落とし込む。礎石列？17は礎石状石材が200cm、140cmの間隔で並ぶが、本来の位置を保つものとの確証はない。SK95は、深さ0.5mの不定形土壠で小石材や備前焼の擂鉢を伴っていた。III-13トレンチcのSD255は、東西に延び、幅・深さとも0.3mの断面箱形で、多數の土師質土器皿を出土し、その南西肩では完形の平瓦2枚が水平に敷かれていたが、諸共にEd層とみられる暗灰緑色微砂シルトに直接埋め込まれる。

敷石5aを埋めたEd層の上面に伴う造構としては、II-7トレンチでは石1～10、SK261、SK264、SK263、SK156、SK146、SK148、SD260などがある。石1～10の上面の高さは、14.1～14.0mに据つて礎石とみられ、抜取り跡とみられる小土壠と合わせて、特に南北に軸を通す組合せが指摘できる。



第103図 下層6区郭内造構・土層断面 (1/80)

例えば、石1～3は高石垣1c頂部の延長線上に描い、石材の心材は北から、200cm、100cm測る。また、SK156・石4・石5の組合せは約200cm間隔、石9・石6の間隔は240cmを測る。明確に配列を復元できるまでには至らないが、高石垣縁の橋を含め、礎石建物が複数？あったとみられる。SD260は石1～3と敷石5埋没後の微妙な高まりを隔てる幅1.1m、深さ0.2mの溝で、下層期最終末のDa層に直接埋められる。そのほか明確な遺構とは捉えがたいSK131・SK134のような削平痕状の産み類は、図示した以外にも多数ある。II-6トレチのSK120やSK199も同じ層位の浅い土壤で、後者にはこぶし大円礫が溜まっていた。

第5節 最下層 遺構

最下層遺構は、高石垣を伴う以前の層位のもので、中世城郭的色彩が強い。郭内には礎石？や列石、段石垣を伴い、その外周に廻らされた土塁の内側には石組を伴う個所がある。(第104図)

土塁内側石組1 [第I期新] (第105図)

郭の南西隅で確認されたもので、その走向は土塁内側に貼りつく鉤形をなす。内側石組1が埋められて土塁が北に拡幅された後の、最下層期では新しい段階の構造といえ、北辺と東辺北部の石組面はG層によって直接埋まっている。北辺は、土塁内隅の裾にはじまって、長さ9.6mを測る直線をなすが、背後の土塁軸に対して北に振り、東端の隅角部は土塁裾に対して2.3m北に張り出す格好になる。長さ3.5mの東辺は、北辺とほぼ直交するが、角石の形だけで言えば80°程の鋭角をなす。東辺には長さ2m程の南辺が直交して続くが、東辺南部から南辺はG層以前に土塁盛土に埋め込まれている。なお、南辺は築石1石のみで、西には石材が続かないことを確認している。

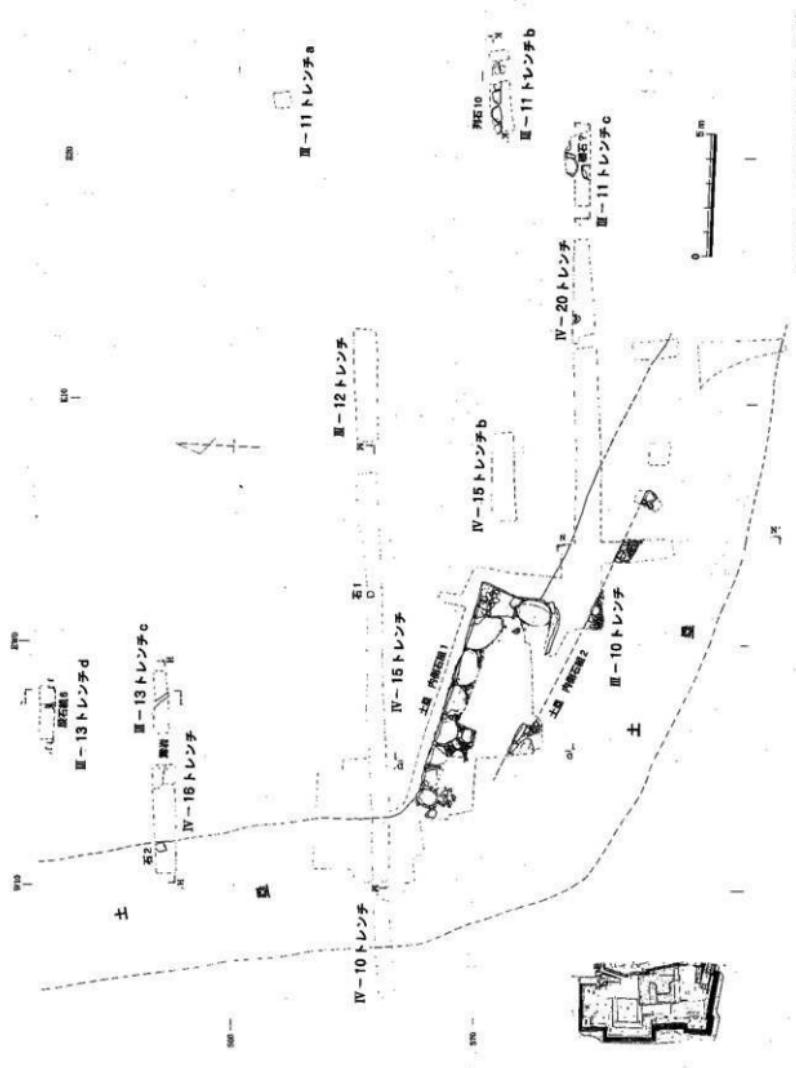
石組の築石は、長辺90cmから200cmもの巨石で、自然面を保って丸みの強い野面石である。石種はほとんどが花崗岩であるが、北辺の西から3番目は堆積岩系(変成岩?)とみられ暗緑灰色を呈する。南東隅角だけは基底高の関係で築石が重なるが、基本的には一段で、横置きされている。石組面の高さは概して0.7~0.8mであるが、上に石材が重なっていたとの確証はなく、むしろ検出石材の上面の描い方からして、本来から1段であった可能性が十分に考えられる。間詰石は長辺40cm以下の平滑面をもつ花崗岩ほかの角礫(自然面主体、僅かに粗割面を含む)がほとんどで、20cm以下の円礫を僅かに含む。この間詰石は築石の丸みをカバーするために数が多く、丁寧にはめ込まれて築石の見かけの隙間を埋めるから、立ち上がりが70~80°の石組面はかなり整った面をなしている。石組面から幅1.7mの背後には、50cm級の野面花崗岩による控え石材と15cm以下の角礫と円礫による裏込がある。控え石材は上面が平坦で、判然としないが規則的な配置をもつた、もっと意味のある遺構の可能性もある。石組北辺の前面生活面(I層上面)の高さは、石組基底より10cmあまり高く、土塁裾にあたる西端が12.8mに対して、東端に向かって20cmほど下がっていく。

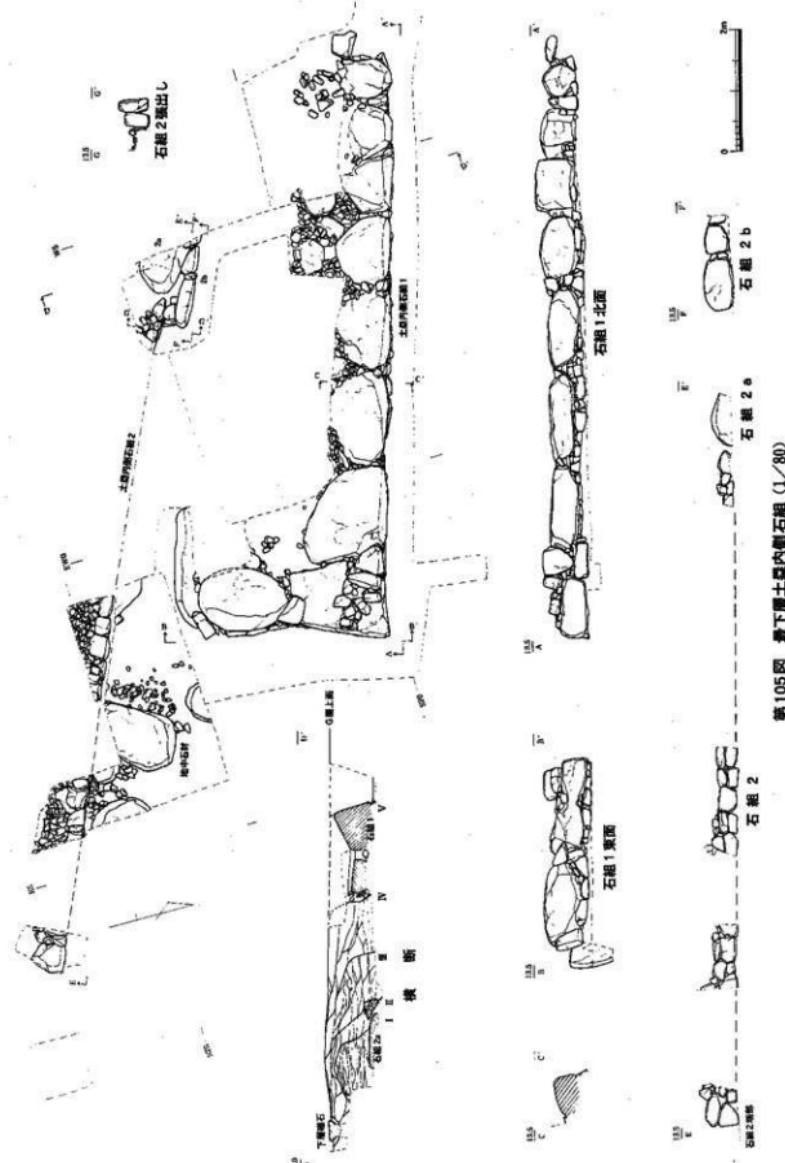
土塁内側石組2 [第I期古] (第105・108図)

内側石組1の南にあって、新しい土塁盛土に埋め込まれるが、土塁の芯構造ではなく古い土塁の裾構造とみられる。その走向は土塁の中軸にほぼ平行し、内側石組1の北辺とは軸がずれている。確認部の西端は2aとした特種部があり、遅れて2bとした北への張り出しが付加されている。

北西から南東に一直線に延びる一般部は、長さ11.0mを測って、長辺40cm級で長方体状の築石を横に最大3段に積み、事實上は小規模な石垣の体をなす。検出東端は、石材がやや大きめで東に通る縦メジの状況から、本来の端部である可能性が強い。築石材は緑灰色の火成岩(閃綠岩)がほとんどで、少量の花崗岩が加わり、表面は比較的平滑で、自然風化面を主体に僅かに粗割り面の可能性を持つ部分を含む。少量の間詰石や石組面の背後の幅0.7mにある裏込も同様の閃綠岩系統である。裏込材はこぶし大の自然角礫で、土塁内側石組1や下層期の石垣のような円礫を含まない。上部の築石背後が土塁盛土に直接覆われるのに対し、裏込材は下部の築石にのみ対応している。石組の高さは最大0.6mを確認したが、背後の土塁盛土との関係から本来の高さを保っている可能性が高いと判断できる。石組の立ち上がりは、垂直に近い。

第104図 最下層全体図(1/200)





第105図 墓下覆土内側石組 (1/80)

2aは一般部と面を描え延長線をなすが、長辺90cm以上の花崗岩の自然石による1段へと変化する。2bは、2aを覆う格好の張り出しで、一般部から0.4m北に石組面をつくり出す。この石材は長辺90cmの扁平な野面の花崗岩で、長辺を横に取りつつ立てている。一般部に取りつく側部は、幅20cmの小石材を立てて、きちっとした面をなす。石材だけの関係では2aは2bを予定した先行工程とも思えるが、Dセクションに示される様に、背後の土壌盛土は2aがI面、2bがII面と独立して対応し、両者は時期差を持つ石組と判断される。

土壌 [第Ⅰ期] (第104・105・106・108・85・92図)

平面として検出できた部位はほとんどなく、たいていはサブレンチなどの土層断面での確認である。盛土(H層)は、基本的に黄褐色灰色系バイラン土と暗灰緑～暗褐色系微細砂の互層で、G層・I層に比べて盛土単位が細かく、よく締まっていて、土層壁での判別は容易である。東からⅢ-10トレーニング東部(第92図)、同中部(第108図)、同西部(第105図)、IV-15・10トレーニング(第108・85図)、IV-16トレーニング(第106図)、II-3トレーニング(土層図は省略)の状況を繋ぎ合わせれば、南東から北西に延び、120°程で折れて北に延びる走向が把握できる。これは全体として弧状ではあるが、直線傾向を持つ南辺と西辺が二辺をなすともいえる。南辺の東部や予想される北辺は実体として検出していないが、検出部ではI層の造成土を挟みながらも、本来あった丘状地形の緩傾斜部外縁に相当することからして、北辺は下層期の埋没高石垣1bに近い位置と走向をもった公算が強く、南辺東部もあり南に張り出すとは考えにくい。

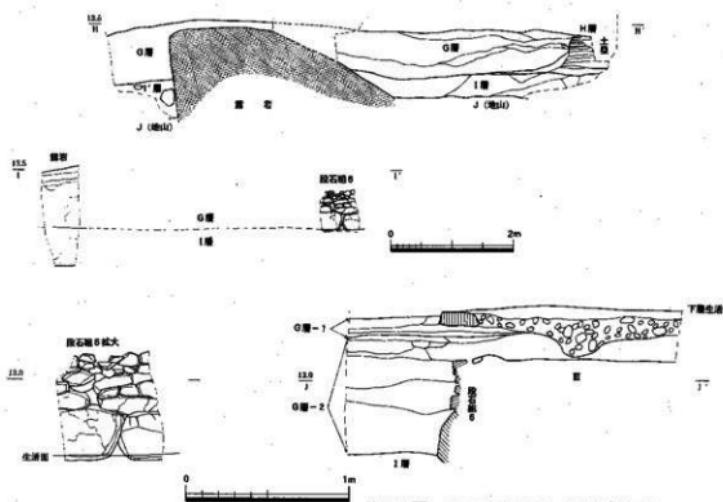
こうした土壌は、補修や積み足しが繰り返されている。特に石組のある南辺西部は、郭内側への拡幅が顕著で、Dセクション(第105図)では、少なくとも石組2aを伴うI面、2bを伴うII面、石組1を伴うV面を複数とする段階があったとみられる。石組痕跡を残さないIII面やIV面も盛土工程上不整合のほか、時期差を持つ可能性がある。つまり土壌を伴う最下層期は、最低でも3つの時期に細分できるほどの時間幅を持つものであったといえる。最終形態としての土壌幅(盛土幅)は4.5mから7.0mと場所によって振幅をもつ。また内側石組を含めた壇の最大幅は9.4mに達する。

各段階の土壌とも、その盛土単位は、側斜面表部とりわけ郭内側で細かく、純バイラン土と細砂による厚さ2~10cm単位の互層がよく整うが、その単位や入念さはそのまま奥には続かないことが多い。盛土単位の傾斜も場所ごとに任意で、版築ないしは築地のように一貫した水平とは言い難く、芯部の水平に対して、両側は側斜面表部に向かって高くなる場合が多い。郭内側の生活面であるI層上面から土壌の遺存頂までの高さは、最大で1.0mを測るが、これは郭内を埋めたG層(鮮黃色バイラン・暗黃色細砂、部分的に15cm以下の角礫を顕著に含む)の厚さにほかならず、本来さらにも高かったとみられる土壌頂部は下層期最初の生活面(第Ⅱ期)による削平を明らかに被っている。

土壌の外斜面は元来ある丘の急傾斜(人為的な切り落としを受けた可能性はあるが)に一体化し、外側高は一概に捉え難いが、Mセクション(第108図)・下層3区Kセクション(第85図)では、地山(J層)上面に載る土壌盛土(H層)端と土壌遺存頂との比高は3.0mを測る。なお、土壌の外側では、高石垣や下層の埋没高石垣1の石材抜取部のような状況でのその痕跡はみいだし難いが、流失や破却を考えれば、腰巻き的な石組や低石垣程度の構造は存在した可能性が十分にある。

郭内平坦部 [第Ⅰ期] (第104図)

土壌内生活面の高さは、Ⅲ-11トレーニングaの13.15m、列石10のあるⅢ-11トレーニングbの12.8~12.9mを除けば、12.5~12.7mでほぼ一定して、かなり平坦といえる。旧地形に従って必然的に東が



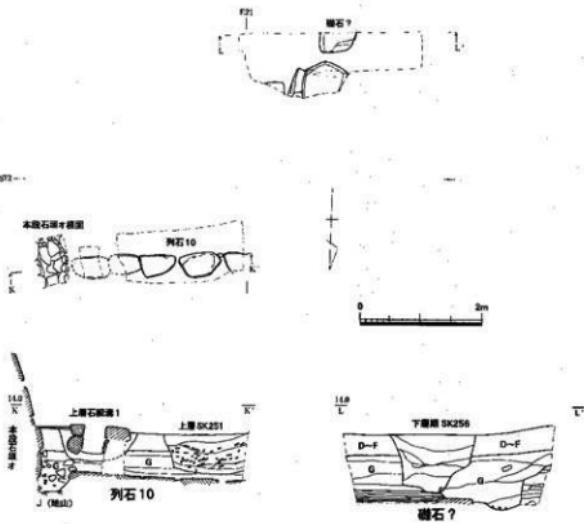
第106図 最下層西部土壁・露岩・段石組(1/80)

高いほか、微妙に土壌裾付近が高く、南東部のIV-20・III-11トレンチ付近とIII-13トレンチdの段石組6前面が低い。生活面は中東部の僅かの範囲では地山(J層)の削平、その他は造成土(I層)によって形成されている。I層は必然的に郭外側に向かって厚くなり、土壌内据直下での厚さは各所とも数十cmから1m足らずといえるが、後の郭を形成する造成土よりはかなり薄くに留まっている。なおMセクションの土壌裾付近では、土壌の改修と対応する最下層期のうちでの生活面の重上げが、20cm程行われた状況が読み取れる。生活面付近からは、備前焼ほかの少量の陶磁器や瓦が出土したが、特に瓦は上層期に比べれば、ごく微量である。

段石組6・露岩ほか【第I期～第I期以前】(第106図)

郭内北西部には地山中の未風化花崗岩があり、土壌を伴う郭内生活面(第I期)に露岩としてあつたことが判る。生活面での見かけは南北3.6m、高さは0.8mを測る。露岩の北には段石組6が東向きにあり、その高さは0.7m、最下段は数十cm級の花崗岩自然石を横に置き、上部は30cm以下の小角礫を横に積む。石組の前面高は郭内他所の生活面高と揃い、南への延長は未掘であるが露岩に当てて終わる公算が強い。石組上につくり出される平坦部は、露岩の高まりと一体的であったとみられるが、その性格は不明である。石2は扁平な花崗岩石材であるが、土壌内据の盛土中に埋め込まれている。

なお、露岩の東前面では段石組6に対応する生活面をつくる造成土(I'層)が60cm程の厚さで堆積し、その下部岩壠を中心に、炭粒を顕著に交えて土師質土器皿を多数包含する。例えば岩前祭祀などを考えられるが、高さから言えばI層に対応し、土壌を伴う城郭構造成立以前の可能性がある。



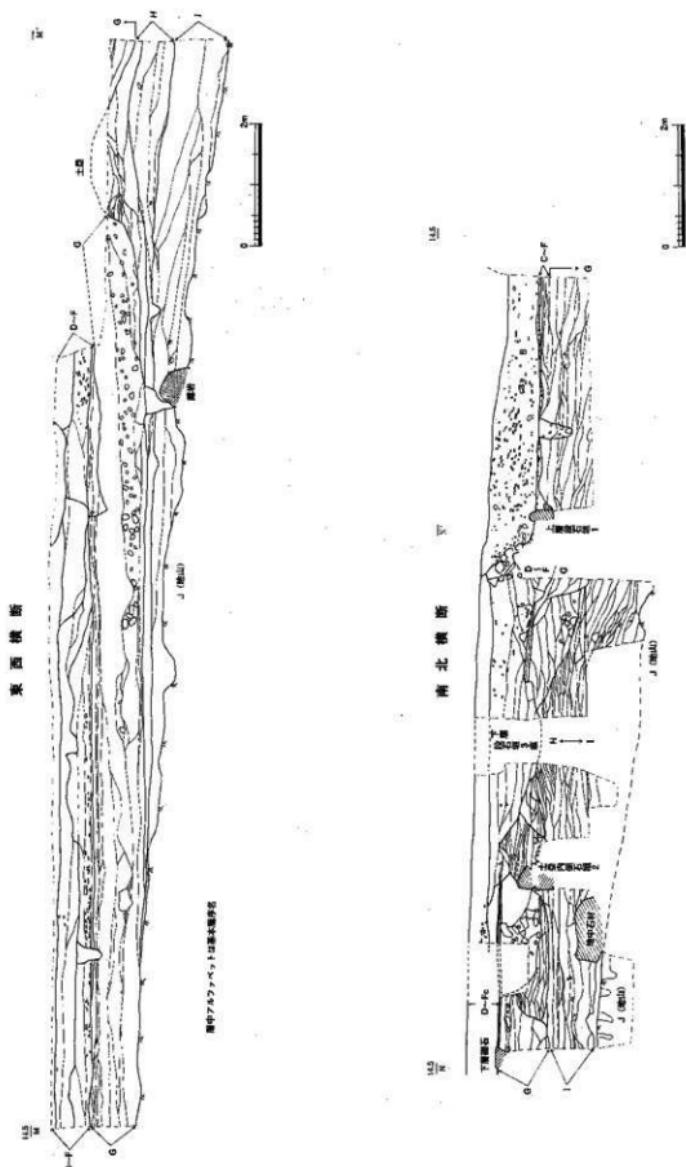
第107図 最下層東部列石・礎石 (1/80)

列石 10・礎石?ほか [第I期] (第107図)

郭内東部の列石10は、長辺60cmの細長く扁平な花崗岩自然石を東西一列に5個以上並べたもので、上面の高さは東が10cmほど上がっている。さらに東に石材が続いているが、本段石垣の構築時に壊された可能性が高く、替わりに本段石垣の根固めとみられる30cm以下の角礫が多数落ち込んでいる。本段石垣は、最下段が断面傾斜からも地覆の根石とみられ、その基底高とも総合すれば、構築直後の生活面はあくまでG層上面で、最下層にはまだ存在しなかったと判断できる。列石の南西には、平滑な上面を生活面から7cmほど高くとる長辺70cm級の花崗岩自然石が2~3個据えられている。南の石材の東縁に被さって以東には、全厚20cm程で単位の細かい造成土が堆積しており、なにがしかの上屋を伴う礎石の可能性がある。IV-15トレンチ北の石1は30cm四方と小形であるが、やはりI層上面に据えられた礎石状で、周囲には灰や炭が集中する個所がある。

I層中～J層上面の石材ほか [第I期以前] (第105・108図)

土墨内側石組2の前面地下には長辺1.3m内外の丸みの強い花崗岩自然石とこぶし大角礫が散在する。大石は地山中の露岩に由来する可能性があるが、自然層であるJ層にめり込まずに載っており、また角礫も自然転石とは考えられないから、人為的な集石とみられる。IV-15トレンチでもI層中に花崗岩の1m級巨石が散在するが、J層にめり込む未風化岩や転石で、ほとんど自然のままとみられるが、I層上面の生活面でも、まだ見えていたものがある。各トレンチのI層の堆積をみる個所でのJ層上面には、炭を一部に交える黒褐色の旧表土が確認でき、その下面で落ち込みが検出できた。たいていは、木根痕と判断できるものや浅い自然起伏状であるが、III-10トレンチ東部の長辺60cm、深さ15cmの窪み(図は掲載外)からは、平安時代頃とみられる須恵器の細片が出土している。



第108図 最下層土壁ほか土壁断面 (1/80)

第6節 中の段の現役石垣

現役高石垣ア [第Ⅲ期]

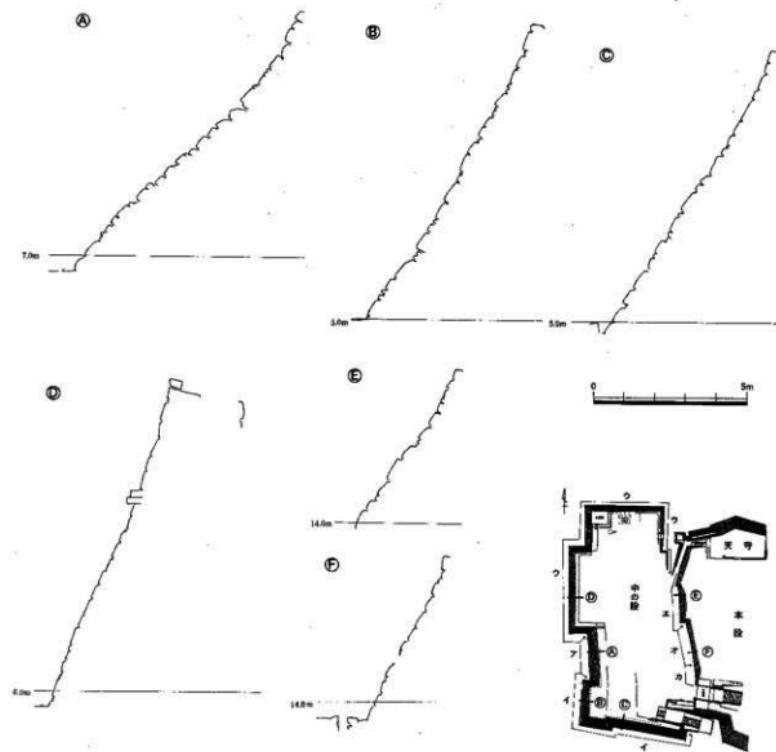
北は石垣ウが付加されているが埋没高石垣2に続く。中南部の下半は孕みだしが激しく、南端も石材の重なりから現役高石垣イが遅れて付加されたように観察できる。現況高は8.6m、傾斜は平均的には 50° 程で、先行する埋没高石垣1より緩い。細かくは、下部はやや急、中部は緩く、頂部の2m足らずは再び急となる。中下部の特徴は孕みによる要因が大きいとみられるが、現南端の状況から石垣イが付加された時既に多少ともこの特徴があったことが判る。頂部付近の傾斜の特徴は、反りとして理解できるが、明らかに補修を受けた部分もある。築石は、長辺が平均60~90cm大であるが、1.7m級以下の大きなものも含み、ほとんどが花崗岩（色や雲母量など構成鉱物の特徴は多様）の自然石である。形状は長方体状を指向するがばらつきが大きく、戦災による被熱の影響もあるが元来丸みが強く、自然面が大半で粗割り~ハツリ面はほとんど観察されない。築石は基本的に横に置くが、横メジの通りは顕著でない。築石が丸いぶん、間詰石が多く、脱落や二次材への置換が目立つ。

現役高石垣イ [第IV a期]

大納戸櫓台や中の段の南辺をなし、各区間は直角に接合する。櫓台南東の入角は二辺築石が重なること、東端では幅狭の石壘を形成して内側石垣1へ折り返すこと、立面的にも基底からの構造が連続することなどから、頂部付近の補修を除いて、内側石垣1も含めた全体の同時性が看取できる。現況高約10.0mの花崗岩自然石積みで、傾斜は平均的に 60° であるが、直線的なうちにも、比較的下部から始まり頂部ほど顕著な反りがある。一般部築石は、平均的に長辺60~80cmで、1mを大きく越えるものは含まない。石垣アに比べ、大きさが揃い、やや小さめ、長方体傾向が強い。面もより平滑で、自然面主体のうちにも、粗割り~ハツリ面を少數含んでいる。ただし、矢穴は観察できない。こうした築石は基本的に横に積まれ、部分的にせよ石垣アより横メジが通るが、整ったものではない。隅角部は、角石が最大で長辺が1.5mに達して一般築石より大きく長方体度が強く、算木積みをなすが、上部が重箱積み状になる出角もある。隅脇石は一般築石に対してほとんど際だたない。

現役高石垣ウ [第V期]

西辺の現況高は10.3mで、各辺が直角に接合して、北辺から北東の廊下門にかけ高さを減じていく。傾斜は平均化して 70° 程と急で、頂部に向かって反りをもつ。築石は長辺60~70cm大、形も短い長方体によく揃い、ほぼ全面が平滑な割面で、矢穴を多数もつもの、粗割りに留まらずにアラノミハツリやスグレ条痕を残すノミキリによる面調整をもつものがある。これらは基本的に横に積まれ、横メジは水平もしくは波を打って通る。間詰石も同様の割石で、築石の形に合わせて精巧に加工したハメ石的なものが一部に認められる。隅角部は、角石が最大で長辺180cm級で、長方体の形態や面のノミ調整が一般築石よりさらに整い、同様の加工度をもって一般築石から際だつ脇石を含めて定式的な算木積みをなす。石垣材は総て花崗岩で、白色度が強く含有鉱物が粗粒のものにはほぼ統一されている。また、築石には刻印を施すものがある（第110図）。確認刻印は14個であるが、高位での調査精度が上がれば、もう少し増えるかもしれない。所在位置は、南西の伊部櫓西辺から北東の小納戸櫓北辺までで、西面部の石垣中位に多いといえるが、それ以上の特別な傾向は今のところ指摘し難い。图形は、「-」が2例、「④」が1例のほかは、「L」もしくはこれと「-」との組合せである。

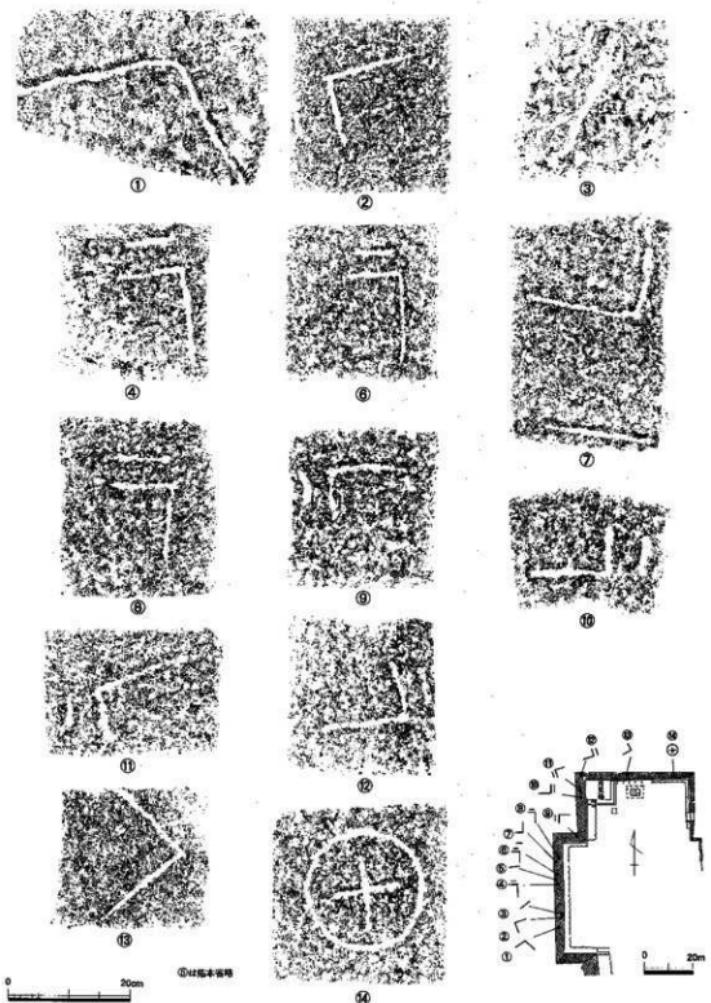


第109図 中の段の各現役高石垣断面 (1/160)

現役本段石垣エ・オ・カ [第II～V期]

中の段と本段を画し、高さ5.7m内外、反りは顕著でない。現況は一連であるが、南ほど新しい可能性がある。北のエは、長辺80～120cmで、自然面を主体に粗割り～ハツリ面を単面にもつものの少數を含む長方体的な築石を横に積み、断続的に横メジを通す。出角は、築石より大きめで長方体の角石を算木に積むが、隅脇石は際立たない。南の出角中位などに矢穴をもつものも微量含まれる。北の鉤部入角は二辺石材が重なり合うのに対し、南端の入角は、石垣オ側が一様に被さって、オが遅れる時期のものである可能性がある。そのオは、北部の構造はエと大差ないが、南部の上半は築石の主体が70cm級に小型化し丸みが強い一方、特に大形のもの（立石？）が中上部に挟まれるから、大きさがばらつき、メジがかなり乱れる。傾斜は65°でエより急となる。その南端は、出角の埋め込みではない南下りの斜メジが通ってカとの境線をなし、カはオの部分破壊を伴う改修結果の可能性がある。カはオ北半からエの構造に近い部分もあるが、南端の不明門に向かって石材が全体に大型化し、長辺1.8mにまで達する巨石（立石）や矢穴を伴うものを含めた平滑面をもつ割石材が散在する。

(第III章=乗岡)



第110図 月見櫓周辺現役高石垣の石材刻印 (1/8)

第IV章 遺 物

出土した遺物は、整理用コンテナ362箱に及ぶが、その9割以上は瓦類が占める。土器・陶磁器類は15箱と一般的な近世遺跡に比べれば少量で、発掘地が日常的な居住空間としての要素が希薄であった事と恐らく関係する。先ず第1節では城郭遺構に直接伴わずに先行する年代観のものを掲げ、第2~5節は、出土遺物の根幹をなす第I期から第V期に至る城郭構造に直接伴う遺物について、種類ごとに記述を進める。なお、末尾の第6節には旧制中学関連の遺物をとりあげた。

(乗岡)

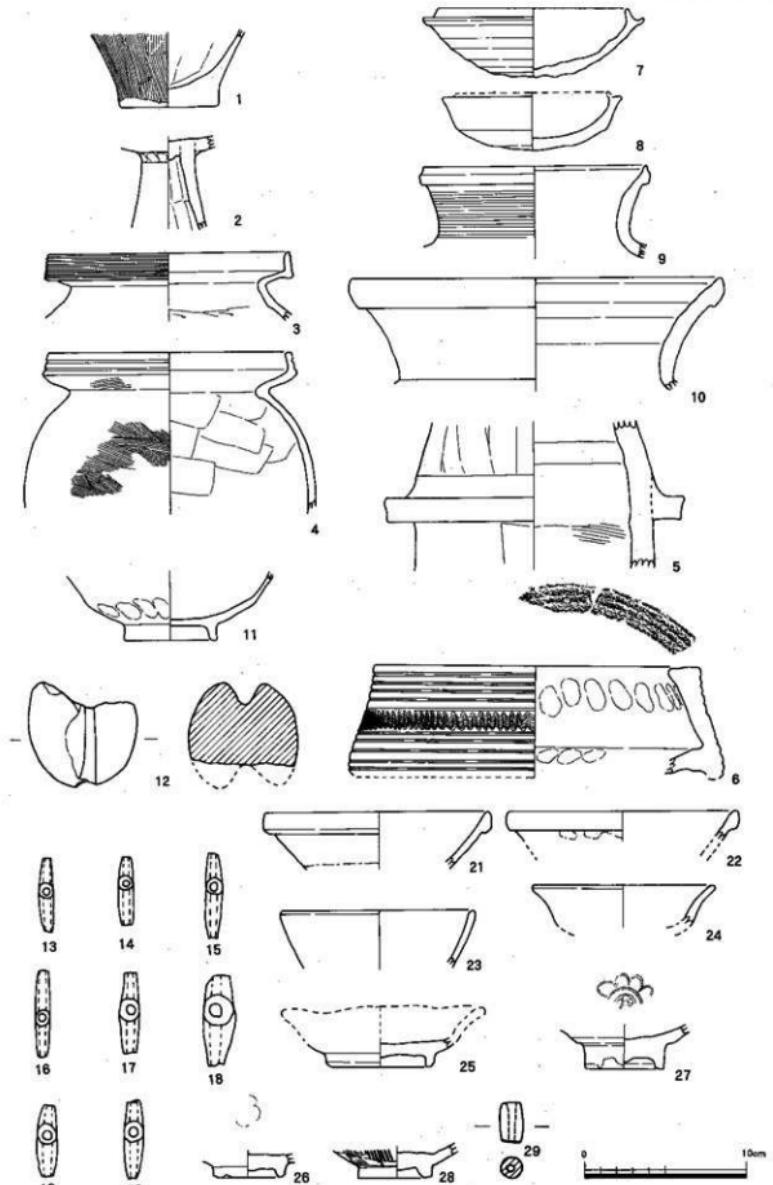
第1節 岡山城以前の遺物

総て下層期の造成土から出土したもので、城郭普請に供された採土地（近隣？の沖積地）に元来は包含されていたものと考えられる。1~6は弥生時代、2~5、7~10、29は古墳時代、11~28は中世を中心とする時代の遺物である。ただし、13~20、23~27は城郭構造に伴う可能性も残る。

1は壺の底部で、淡褐色の胎土に白色砂粒等を含んでいる。2は高杯で、淡赤褐色を呈し、白色砂粒・クサリ礫・雲母を含む。外面はナデ。3・4は古式土師器の壺。3は淡褐色の胎土に雲母・長石・黒色粒等を含む。口縁に7条の櫛描き沈線がめぐり、内面はヘラケズリ。4は口縁に2条の凹線がめぐる。外面は細いハケ、内面はヘラケズリ。5は、朝顔形円筒埴輪の一部かと思われ、器壁が厚く、タガは肥大化している。調整はタテハケを丁寧にナデ消しており、内面にヨコハケの一部が残存する。胎土は粗く、白色砂粒・雲母・クサリ礫を多く含む。タガの上部が内窓気味になっている。ただ形象埴輪の可能性もあるほか、埴輪とすること自体にもやや疑問が残る。6は器台の口縁部で、淡橙色を呈し、雲母・クサリ礫を多く含む。焼成はあまいが、口縁端部に櫛描き波状文がめぐり、上下それぞれに4条の凹線がめぐる。7・8は古墳時代末の須恵器の杯身。7は白灰色を呈し、胎土は白色砂粒・黒色粒等を含む。焼成は堅緻。立ち上がりは短い。8は立ち上がりが、欠損しているが、短く内傾するものと思われる。白灰色を呈し、微小砂粒を含む。9・10は須恵器壺の口縁部。9には口頸部にカキメがみられる。青灰色を呈し、胎土は緻密で、白色砂粒を含む。焼成は堅緻。10は淡黒灰色を呈し、胎土に白色砂粒・黒色粒を多く含む。11は土師質高台付碗で、外面高台付近にユビオサエ痕が残る。内外面共にナデ調整。白褐色を呈し、胎土は砂粒をあまり含まず、緻密であり、焼成は軟である。高台径は5.7cm。12~20は土錠で、中世を中心とするものであろう。13~20は赤褐色を呈し、胎土は密で、焼成は良好。13は長さ4.6cm、幅0.9cm、14は長さ4.2cm、幅1.0cm、15は長さ5.2cm、幅1.0cm、16は4.2cm、幅1.0cm、17は長さ5.0cm、幅1.3cm、18は長さ5.6cm、幅2.0cm、19は長さ4.5cm、幅1.2cm、20は長さ4.9cm、幅1.3cmである。21・22は、中国製の玉縁口縁白磁碗である。21の胎土は乳白色で釉は白色を呈し、砂粒をほとんど含まず焼成は堅緻。22は胎土は白灰色で、釉は白色を呈する。23~28は中国製青磁で、23、26~28は碗、24・25は皿で、共に胎土は淡灰色である。24は体部内面に刻文を施し、25は高台外角付を削って面取りした後に疊付まで釉を施し、共に透明度の高い緑青色の釉で、14世紀末から15世紀中葉のものと思われる。26・27は疊付から高台内が無釉で、23も含めて、くすんだ緑灰色の釉を施し、15世紀から16世紀前半にかけてのものであろう。28は体部外面にクシ目を施し、同安窯系の青磁と思われ、緑黄色の釉がかかっている。29はガラス製の管玉で、灰緑色を呈し、最大長は16.5mm、直径9.0mm、孔径は3.0mmを測る。

(仲井光代)

第1節 岡山城以前の遺物



第111図 岡山城以前の遺物 (1/3)

第2節 土器・陶磁器類

1. 土師質土器皿 (1~146)

土器陶磁器類のうちで最も数が多く、細片を入れると膨大な点数になるが、口径をほぼ正確に測れるものは146点ほどで、これらについて記述を行う。口径は、5.9~16.0cmと幅があり、便宜的に、5.9~8.0cmのものを小皿、8.1~11.9cmのものを中皿、12.0cm以上のものを大皿として分類する。

掲載した146点中129点が回転台を使用して作られたものであるのに対し、残り17点は回転台を使用していない。さらに成形や底部の調整から、回転台を用いるものは①ヘラキリ痕を残すもの(1点)、②イトキリ痕のみを残すもの(104点)、③イトキリ後に板目压痕を残すもの(22点)、④切り離し後の回転ヘラケズリ痕を残すもの(2点)、それに⑤回転台を用いずに手づくねで成形し、ユビオサエ痕を残すもの(17点)の5つに分類することができる。

イトキリによる切り離し痕をもつものは、形態の特色から以下の5つに分類した。

A類：底部と体部の境が明瞭で、立ち上がりに段かその痕跡をもつもので、以下に細分できる。

A1類：底部より外反気味に立ち上がり、口縁に至るもの。器高が高めである。

A2類：底部より内湾気味に立ち上がり、口縁に至るもの。器高はA1よりやや低めである。

B類：底部と体部の境が明瞭で、立ち上がりに段を持たず、体部は外方へ大きく開くもの。

C類：底部と体部の境はあまり明瞭でなく、体部は内湾気味のもの。

D類：体部と底部の境は明瞭で、内湾気味に立ち上がり、口縁に至るもの。

また、その他の技法によるものについても、同様に類を設定しておく。

E類：回転台を用いずに手づくねによるもので、体部は外反気味に口縁に至る。

F類：底部切り離し後、回転ヘラケズリを底部・体部外面に施し、体部は内湾気味に立ち上がる。

G類：ヘラキリによる切り離し痕をもつもので、体部は内湾気味のもの。

なお、以上のどの類にも当てはまらないもの、A類であっても1・2には分類し難いものもある。

出土品は最下層期、下層期、上層期に至る長い年代幅をもち、必然的に、同じ系譜とみられるものでも、体部と底部との明瞭さ、色調、胎土等は、時期変化している。例えば、A類、B類共に、下層期末(第IVb期)までは、底部と体部の境が明瞭であるが、上層期(第V期)にはいると、体部と底部の境が不明瞭となり、色調は白褐色系が多くなり、焼成もあまいものが多くなる。

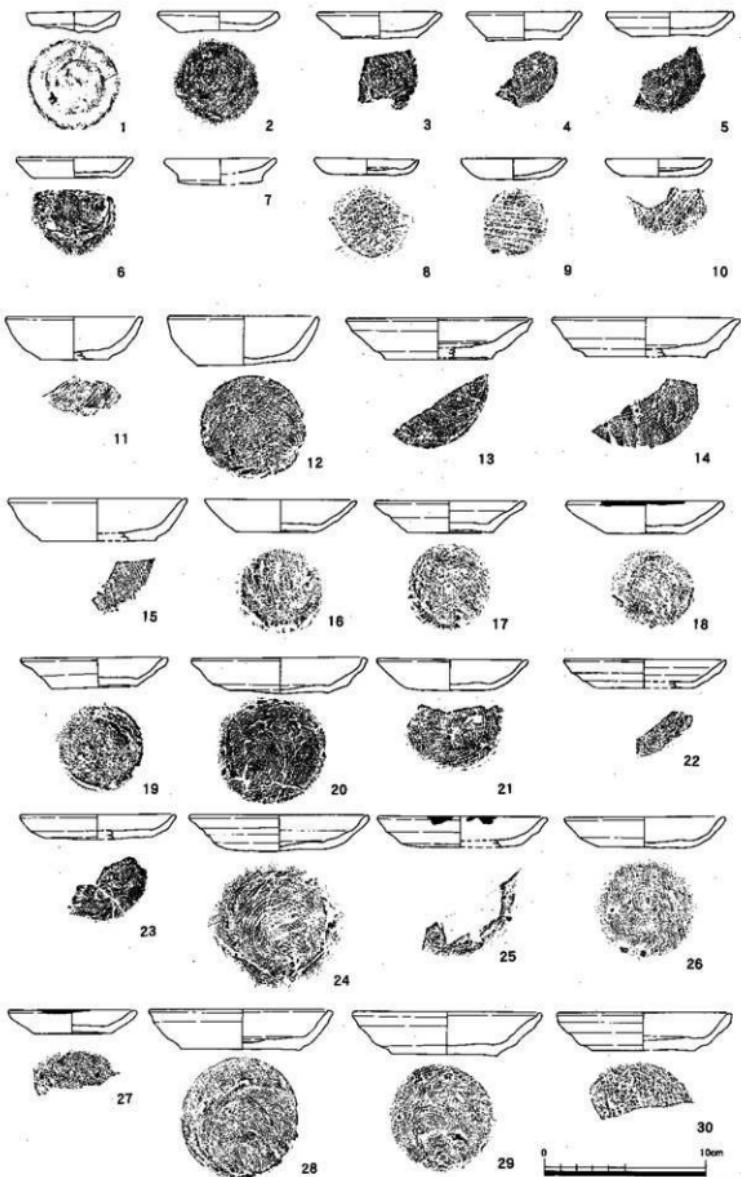
a. 回転台使用の小皿 (1~10)

1は、多分に客土を含む造成土であるG層からの出土で、これ自体から正確な実年代を求めるには困難を伴う。口径5.9cm、器高1.1cmを測り、胎土は赤褐色を呈し砂粒をほとんど含まず、焼成は良好である。唯一のG類、すなわち底部ヘラキリの個体で、板目痕を残す。

2~5は、大皿の86と合わせて、最下層のうちでも先行的で、城郭構造成立=第I期以前の可能性をもつI'層に伴う一括遺物で、年代の比定には困難を伴うが16世紀第4四半期以前のものとみておきたい。淡橙色を呈し、胎土に微小砂粒を含み、焼成はややあまい。底部の回転イトキリ痕は、明瞭には遺存しないが、3はイトキリ後の板目痕を僅かにとどめている。口径7.2~8.0cm、器高1.2~1.8cmを測る。3・4はA類に属する。3は灯明皿として使用されたと思われる。

6は、城郭成立後の第I期の層位に伴う遺物で、淡褐色を呈し、口径は7.4cm、器高1.3cmである。

1. 土師質土器図



第112図 土師質土器図1 (1/3)

7は第II～IV期のもので、口径7.0cm、器高は1.6cmである。茶褐色を呈し、底部と体部の境は非常に明瞭で、底部は厚く、体部は短く外反する。8～10は第V期のものである。いずれも淡褐色を呈し、底部調整はイトキリ後の板目痕を残している。8と10がA2類、9はA1類に属すると思われる。口径は6.5～7.0cm、器高は1.0～1.3cmを測る。同じA類でも、下層期の2～5が淡橙色の色調に対して、上層期の8～10は淡褐色に変化し、体部と底部の明瞭さは失われ、立ち上がりの段は、僅かに小さなくぼみを残すのみとなっている。法量では、第I期の2～5の口径平均が7.6cm、器高平均が1.5cmに対し、第V期の8～10は口径平均が6.6cm、器高平均が1.2cmである。

b. 回転台使用の中皿 (11～85、97)

中皿の出土点数は、小皿に比べると非常に多く、使用される頻度が高かったと思われる。このうち、確実に灯明皿として使用されているものは9点ほどに過ぎない。

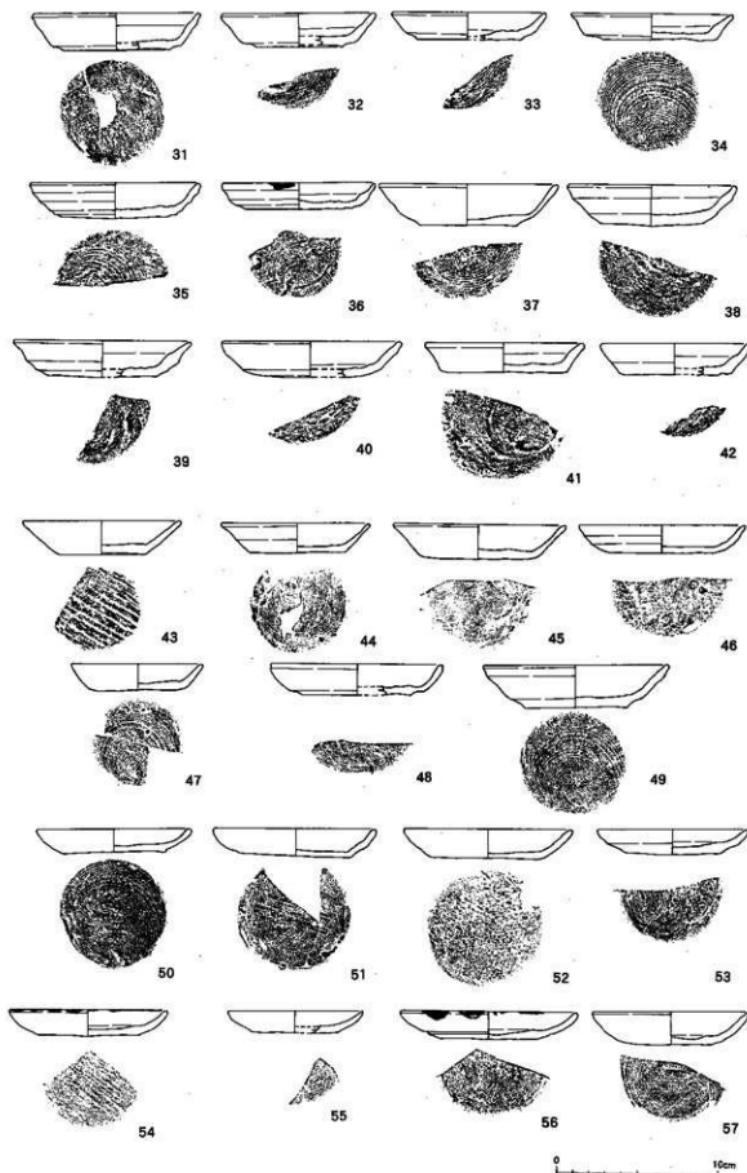
11・12は共に第I期のもので、D類に属するものである。底径が小さく器高は高い。赤橙色を呈し、胎土に微小砂粒を含み、焼成は良好である。D類はこの時期のみの出土である。11は口径が8.6cm、器高は2.7cm、12は口径が9.5cm、器高3.1cmを測る。

13～25は第II～IVa期のものである。このうち13～15はA1類、16～19はB類、20～25はC類に分類される。13は、淡茶褐色を呈し、胎土にクサリ蹠、黒色粒等を含むが、緻密で焼成は良好で、口縁端部に稜をもつ。14は赤褐色、15は茶褐色を呈し、いずれも胎土は緻密で焼成も良好。器壁は厚く、口縁端部を外反させている。法量は、口径が13・14は11.8cm、15が11.2cm、器高は13・15が2.6cm、14は2.4cmを測る。16～19は、B類のもので、第II～IVa期の層位からの出土である。いずれも、淡茶褐色を呈し、胎土に砂粒を比較的多く含み焼成は良好である。18は灯明皿としての使用が考えられる。法量は口径が16・17は9.5cm、18は10.0cm、19は9.3cm、器高は16～18が2.0cm、19は1.9cmを測る。これらは同一工人の手による製作かと思われるほど近似性がある。20～25はC類としたが、20・23・24は、底部と体部の境に緩い段をもっている。これらは、調整、胎土、焼成が酷似する。20は淡橙色を呈し、口縁端部に面をもっている。口径は11.1cm、器高は2.1cmである。21は、口径が9.4cm、器高が1.9cmを測る。橙色を呈し、胎土に微小砂粒を多く含み焼成はあまり。22は、淡橙色を呈し、口径は、10.1cm、器高が1.8cmを測る。23の口径は、9.7cm、24は10.3cm、器高が23は1.6cm、24が2.3cmである。25は淡褐色を呈し、口径10.6cm、器高1.9cmを測り、灯明皿として使用されている。

26・27・97は第III～IVa期のもので、26はC類、27はB類、97はA1類。26・97は赤褐色を呈し、胎土に砂粒、クサリ蹠等を多く含んでいる。口径は26が10.0cm、97は11.4cm、器高は26が1.8cm、97は2.7cmである。27は淡橙色を呈し、口径8.1cm、器高1.5cmを測り、灯明皿として使用している。

28～49は第IVb期の層位に伴うもので、28～33、35、37、49はA1類、34、36、48はA2類。28は、下層6区SK160出土で、赤褐色の胎土にクサリ蹠、砂粒を多く含み、口径は11.6cm、器高は2.4cmを測る。29は、口径11.9cm、器高2.6cmを測る。ほとんどのA1類が赤褐色を呈するのに対し、暗灰褐色であるのが特徴的で、胎土は緻密で焼成良好である。28・29は口縁端部内面に稜をもっている。30は口径11.0cm、器高2.3cm、胎土にクサリ蹠、微小砂粒等を含むが、緻密で焼成は非常に良好である。31～36、48、49は色調、胎土、焼成に共通性がみられ、いずれも淡赤褐色の胎土に砂粒をあまり含まず緻密、焼成は極めて良好である。口径は、31が10.6cm、32は9.7cm、33が9.8cm、34が10.1cm、35が10.6cm、36が9.4cm、48は11.0cm、49は11.6cmである。器高は、31が2.3cm、32は2.0cm、33は1.7cm、34は1.5cm、35が2.3cm、36が1.6cm、48は2.0cm、49は2.6cmを測る。34、

1. 土師質土器皿



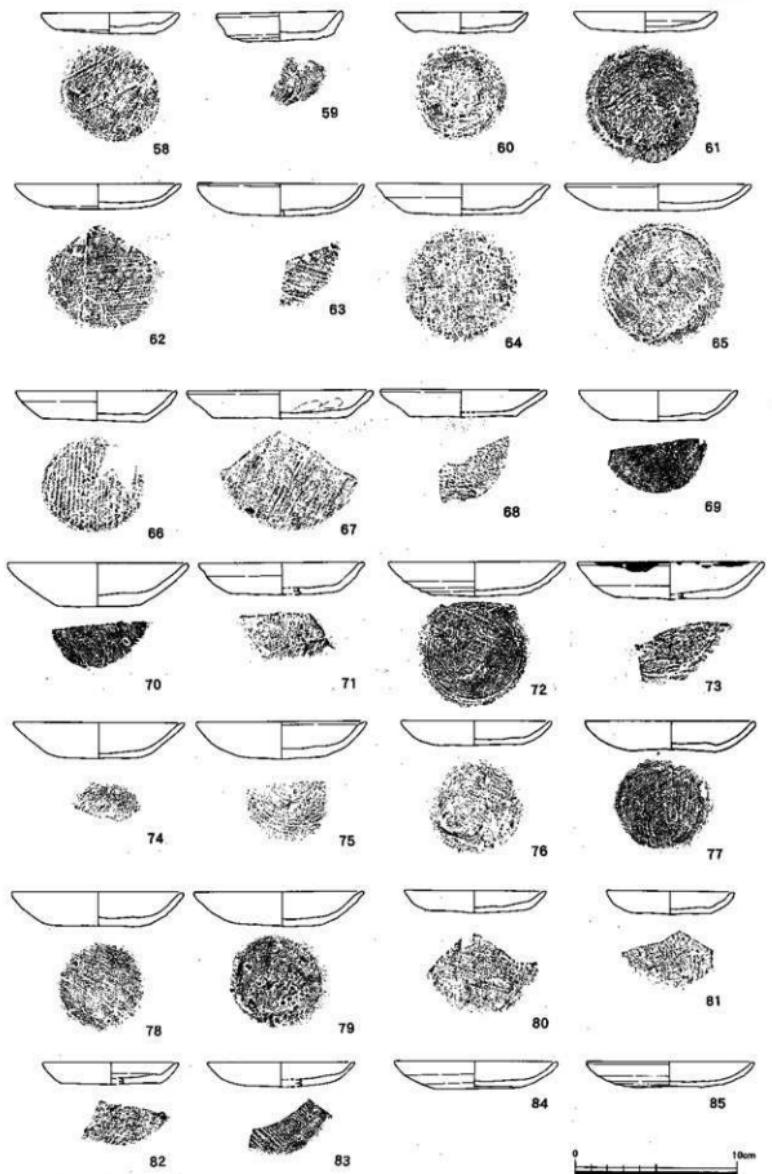
第113図 土師質土器皿2 (1/3)

36、48は、典型的なA2類に属するものである。31は灯明皿として使用した痕跡があり、焼成後に穿孔している。29~31、33、35は下層6区SD255、32・34・36はEd層の出土品である。36・37・49は灯明皿として使用している。SD255出土の38・39、Ed層の出土の41は、胎土や色調はA1・A2と同じであるが、体部と底部の境はあまり明瞭ではなく、段をもたない。38は口径10.6cm、器高2.6cm、39は口径11.2cm、器高2.2cm、41は口径10.0cm、器高1.9cmを測る。またEd層の出土の42は、やはり胎土・色調がA類と同じで、A2に近似するが、底部と体部の段が浅く、口径9.4cm、器高1.9cmと小形である。38・39・41・42はA類の亜流的存在で、この第IVb期にこうしたバリエーションが一気に広がったといえるかもしれない。40は下層6区SD255出土でC類に属し、口径11.2cm、器高2.2cmを測る。43~45はB類に属す。43は、第IVb期相当の上層4区SK410下部からの出土で、淡茶褐色を呈し、口径10.0cm、器高2.1cmを測る。底部はイトキリ後の板目痕を残し、灯明皿として使用されている。44は、白褐色を呈し、胎土には砂粒を含まず、口径9.4cm、器高1.8cmを測り、17~19、27と系譜を同じくするとみられる。45は、下層6区SK121出土で、口径10.8cm、器高2.2cmで、白褐色の胎土は砂粒をあまり含まず緻密である。46・47はC類に属する。46は、下層6区SK160出土で、赤褐色の胎土にクサリ礫を多く含み、焼成はややあまく、口径10.4cm、器高1.8cmを測る。47は、第IVb期相当の上層4区SK410下部出土で、白褐色の胎土に微小砂粒を含み、口径8.2cm、器高は1.6cmである。

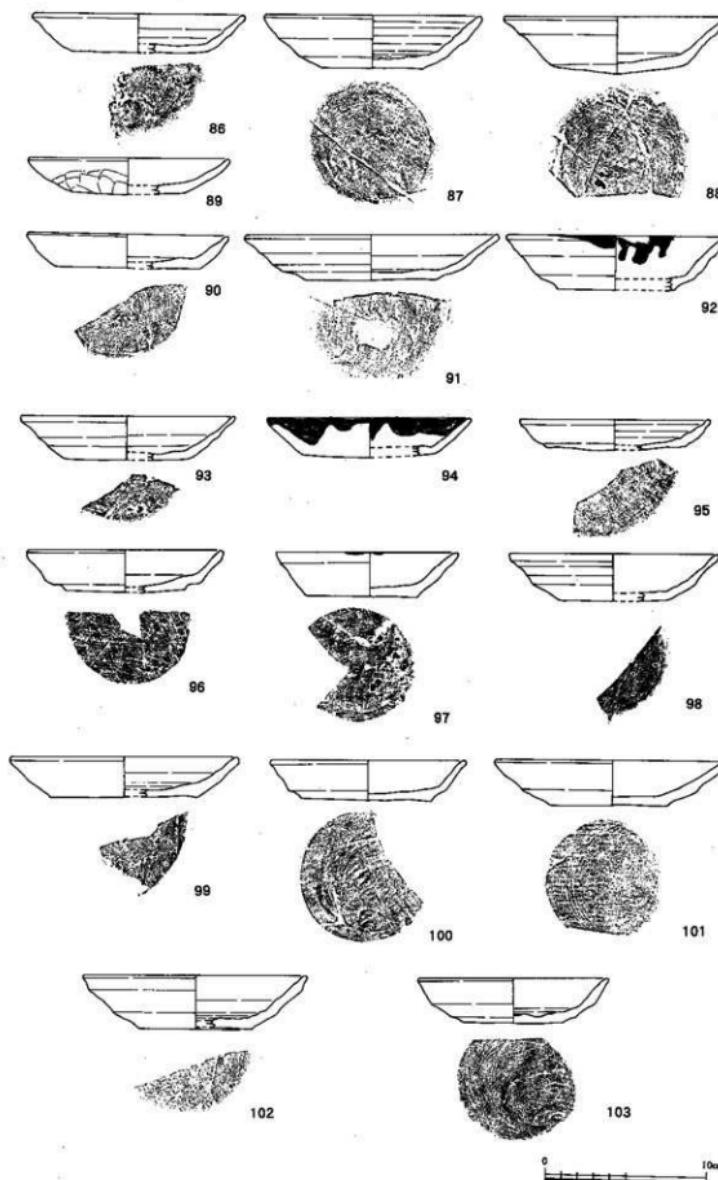
50~85は第V期のものである。50~54はA1類、56・57もA類に属すが、底部と体部の境は不明瞭となり、くびれの段も浅く小さくなる。また、胎土の色調は、白褐色~淡褐色といったものが多く、第IVb期までの茶褐色~淡赤褐色系主体に対し、状況が一転する。50・51は、上層5区SK13の出土で、V期の内では比較的段を明瞭に残している。50は口径が9.8cm、器高は1.4cm、51は口径10.2cm、器高1.6cmを測る。52~57は、体部と底部の境は不明瞭で、境の段もごく僅かしか認識できない。52・55は上層5区SK140の出土である。52は、淡赤褐色を呈し、底部にイトキリ後の板状工具痕がみられる。53は白褐色、口径9.4cm、器高1.5cmである。54は、白褐色、口径9.8cm、器高1.7cm、底部にイトキリ・板目痕を残し、灯明皿として使用されている。55は白褐色を呈し、口径は8.4cm、器高1.4cm。56・57は、上層5区SK106出土で、56は口径11.2cm、器高1.7cm、白褐色を呈し、底部はイトキリ後の板状工具による擦痕がみられ、灯明皿として使用された。57も胎土は同様で、口径10.4cm、器高1.5cmである。58~64は、一応A2類に属するものとした。A2類もA1類と同様に、底部と体部の境は不明瞭となり、胎土は白褐色のものが多くなって、砂粒を多く含み、焼成もあまくなっている。58は、上層5区SK106出土で、V期の内では底部と体部の境を比較的明瞭に残し、白褐色を呈し、底部にイトキリ後の擦痕がみられ、口径8.6cm、器高1.3cmである。59は、第V期の層位からの出土であるが、第IV期のものの可能性がある。すなわち、赤褐色をしており、底部と体部の境は明瞭で、36に近い。胎土にクサリ礫を含み、焼成良好で、口径8.9cm、器高1.8cmを測る。60は、上層5区SK104出土で、口径8.3cm、器高1.2cm、白褐色の胎土に砂粒多く含み、焼成はあまい。61・62は、底部にイトキリ後の板目痕を残し、白褐色を呈す。61は口径9.0cm、器高1.2cm、62は口径10.4cm、器高1.6cmである。63は、上層5区SK170出土で、口径10.4cm、器高2.0cmを測り、白褐色、焼成はあまく、底部にイトキリ後の板目痕がみられる。底部に焼成後的小穿孔が認められる。64は、白褐色を呈し、口径10.8cm、器高1.9cmを測る。65は、本来は第IV期のものかもしれない、口径11.6cm、器高1.1cmを測る。

66~70は一応B類に分類した。第II~IVb期のB類に直接の系譜が繋がるのは68のようなものと思

1. 土師質土器皿



第114図 土師質土器皿3 (1/3)



第115図 土師質土器皿4 (1/3)

われ、他のものについては関係が不明である。66は、上層5区SK170の出土で、白褐色を呈し、口径10.4cm、器高2.0cmである。67は、上層5区SK106出土で、白褐色、口径11.6cm、器高1.7cm。68は、白褐色、口径10.4cm、器高1.7cmを測る。66~68の底部には、イトキリ後の板目痕がみられる。69は上層5区SK140出土で、口径10.0cm、器高1.9cmを測り、淡茶褐色、底部はイトキリ痕をナデ消している。70は、上層4区SK410出土で第V期というより下層のものの混入とみられ、赤褐色の胎土にクサリ跡を含み、口径11.3cm、器高は2.7cmを測る。71は口径10.4cm、器高2.0cmである。

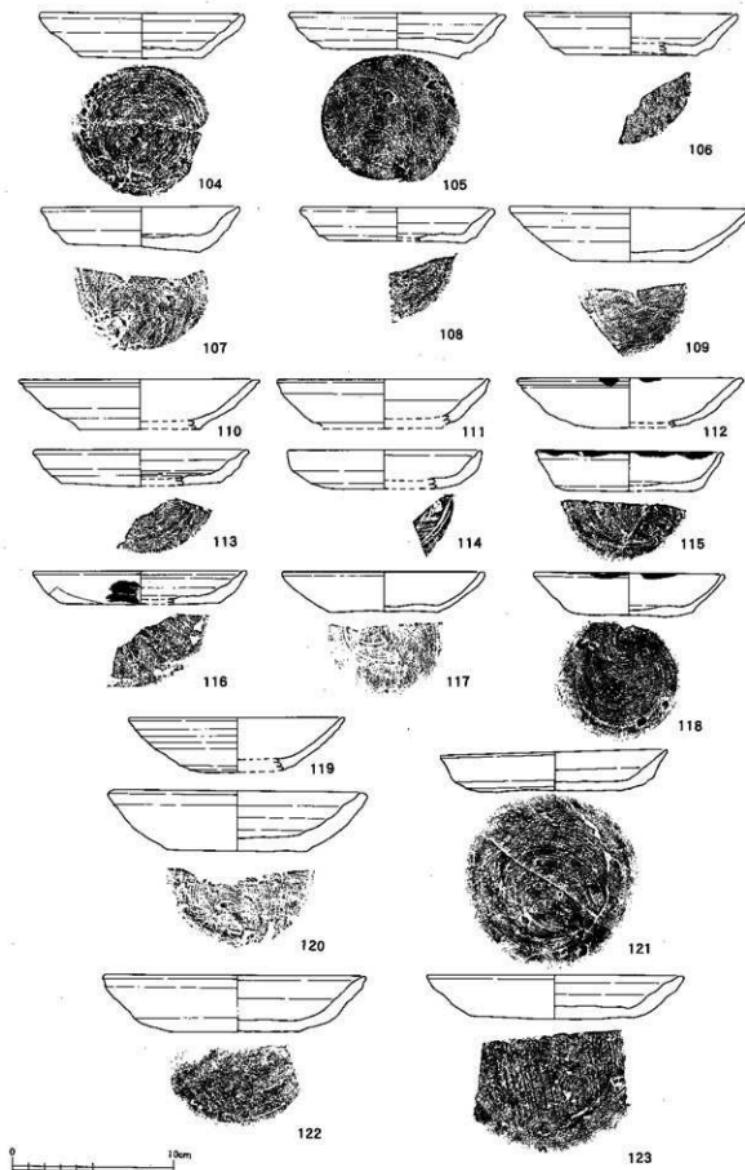
72~83は、体部が内湾するC類である。72・73は、白褐色、微小砂粒を多く含み焼成はあまり。72は口径は11.2cm、器高2.1cm。73は口径11.6cm、器高2.3cmで灯明皿として使用。74・75・77・78は第V期から近代にかけての層位から出土したもので、淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、同じV期でもA類とは色調や胎土などが明らかに異なっている。口径は、74・75・77が10.6cm、78が10.8cm、器高は74が2.2cm、75が2.4cm、77が1.7cm、78が2.2cmを測る。76は上層5区SK13出土で、C類とはいえ、A類と近い要素をもち、口径9.6cm、器高1.5cmを測る。79は、色調、胎土、形態の特徴が、74・75・77・78と共通性があり、口径11.0cm、器高2.1cmを測る。この一群は、この時期の他のものと比べて法量が若干大きい。80~83は、中皿のなかでも小振りなもので、白褐色を呈し、底部は、イトキリ後の板目痕を残しており、底部調整及び、色調、胎土の共通性から、小皿である8~10と組み合うと思われる。口径は、80が8.8cm、81が8.0cm、82が8.6cm、83が9.2cm、器高は、80が1.3cm、81と82が1.4cm、83が1.5cmを測る。82は上層5区SK104、83は上層5区SK106から出土した。84・85は、F類で底部外面に回転ヘラケズリ痕があり、口縁から見込にかけては回転ナデが施される。84は上層5区SK106出土で赤褐色、85は上層5区SK140出土で白褐色を呈し、共に胎土には砂粒をほとんど含まず、焼成は良好である。口径は共に10.4cm、器高は84が1.5cm、85が1.7cmを測る。

c. 回転台使用の大皿 (86~96、98~129)

86は、最下層のI'層出土で、小皿である1~5に共伴する。口径13.4cm、器高2.4cm、淡黄褐色を呈し、砂粒を多く含み、焼成はあまり。

87~99は第II~IVa期の層位に伴うものである。87・92はA1類、95はA2類、94はB類。87は、淡赤褐色を呈し、クサリ跡等を含むが胎土は緻密で、焼成良好、口径13.6cm、器高3.7cmを測る。88は、口径14.2cm、器高3.5cm、白褐色の胎土に微小砂粒を多く含み焼成はあまり。89は、外面に静止ヘラケズリ痕がみられる。胎土にクサリ跡を多く含むが緻密、焼成はあまり。口径12.6cm、器高2.2cmを測る。90は、赤褐色を呈し、口径12.6cm、器高2.1cmである。91は、淡赤褐色で、口径16.0cm、器高2.8cm。92は、茶褐色、口径13.8cm、器高3.4cmで、灯明皿として使用している。93は、白褐色、口径13.2cm、器高2.7cm。94は、茶褐色、口径12.6cm、器高2.5cmで、やはり灯明痕がある。95は、暗茶褐色、クサリ跡、微小砂粒を多く含み焼成はあまりく、口径12.0cm、器高2.4cmを測る。96~99は、淡茶褐色あるいは淡赤褐色を呈し、胎土は緻密で焼成は非常に良好である。96は、A1類に属し、口径12.4cmで、イトキリ後の板目痕を残す。98は口径13.2cm、99は口径14.0cmである。

100~123は第IVb期の層位に伴い、100~106、108~110・111~113・120・122はA1類、114~121はA2類、117~118はB類、119はC類に分類できる。そのほとんどが淡赤褐色あるいは茶褐色を呈し、胎土は緻密で焼成は非常に良好である。100は、下層6区SK154出土で、口径12.4cm、器高2.5cmで茶褐色を呈する。101は、下層6区SK120出土で、口径14.8cm、器高は2.8cmを測り、淡赤



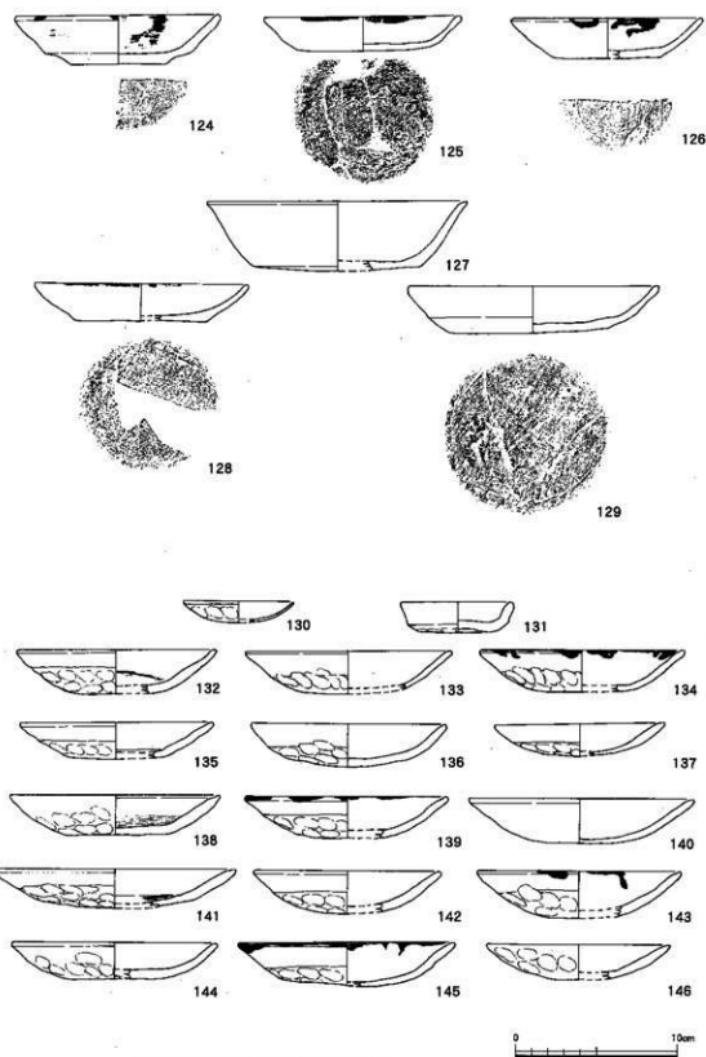
第116図 土師質土器皿5 (1/3)

褐色を呈する。102は、下層6区SK160出土で、口径14.0cm、器高3.3cm、淡赤褐色を呈し、灯明皿として使用している。103は、口径12.0cm、器高2.3cm。104は、口径12.9cm、器高2.8cmで淡赤褐色。105は、口径が13.6cm、器高は2.2cmで淡赤褐色を呈している。116は、口径13.4cm、器高2.1cmで、胎土にクサリ蹠、微小砂粒を多く含み、灯明皿として使用されている。B類の117は、口径12.8cm、器高は2.4cmで、白褐色を呈する。113は、口径13.2cm、器高2.3cmで淡赤褐色を呈する。108も淡赤褐色で、口径12.1cm、器高は2.1cmを測る。107、口径12.6cm、器高で2.5cmで、色調、胎土などはA類に近似する。106は、淡茶褐色を呈し、口径が13.4cm、器高2.6cmである。109も111と同様に第IV b期最終末の層位で、口径15.2cm、器高3.4cm。白褐色の胎土には砂粒をほとんど含まず焼成は良好。B類の118は、上層4区SK410の下部出土で、口径12.0cm、器高2.6cm、白褐色の胎土には砂粒を含まず焼成良好であり、灯明皿として使用される。115は、A類に属するが、中皿である41と形態の特徴などが似て、灯明皿として使用されている。C類の119は、口径13.4cm、器高3.3cm、白褐色を呈する。110は、口縁外面に沈線がめぐり、口径14.8cm、器高が3.1cm。114は、口縁内面に沈線がめぐり、口径12.2cm、器高2.4cm。120は、下層6区SK199出土で、口径16.2cm、器高は3.7cmで、茶褐色の胎土にクサリ蹠を多く含み、器壁が厚い。123は、口径16.0cm、器高2.8cm、底部はイトキリ後の板目痕を残す。112は、下層6区SK120出土、口径14.2cm、器高は3.1cm、灯明皿として使用する。121は、口径14.1cm、器高は2.4cm。122は、口径16.5cm、器高3.6cm。第IV b期は、大皿のほとんどがA類ないしA類に近いともので占められる一方、中皿と同じくA類が多様化する時期ともいえる。

124~129は第V期のものである。124は、上層5区SK133出土で、灯明皿として使用。A1類に属し、茶褐色の胎土に砂粒をあまり含まず焼成は良好で、口径は13.2cm、器高2.9cm。125も灯明皿として使用しており、淡黄褐色の胎土に白色砂粒を多く含み、焼成はあまく、底部にイトキリ後の板目痕がみられる。126は、口径12.2cm、器高2.6cmを測り、やはり灯明皿である。127は、口径16.2cm、器高4.2cm、体部は外方に大きく開き、口縁端部はやや外反し、赤橙色を呈する。128は、B類に属し、白褐色、口径13.4cm、器高2.4cmの灯明皿。129は、A類とみられ、白褐色を呈し、口径15.6cm、器高2.9cmの灯明皿。第V期では、大皿6点のうち、5点までが灯明皿で、機能の限定性が窺える。

d. 回転台を使用しない皿(130~146)

E類とした一群で、手すくねによる成形、外面体部にユビオサエ痕がみられ、見込み及び口縁部外面をヨコナデする。第II期から第V期まであって、時期的な偏在は必ずしも指摘し難い。130は、明治初めの造成土であるB層から出土した第V期のもので、赤橙色の胎土には、僅かにクサリ蹠を含むが砂粒はあまり含まず、器壁は薄く口径7.0cm、器高1.3cmを測る。131は、第IV b期の下層6区SK160出土で、口径7.1cm、器高1.9cmで、白褐色を呈し胎土に砂粒を多く含む。132は、第II期のもので、口径12.6cm、器高2.7cmを測り、茶褐色を呈している。133・134は、第II~IV a期のもので、ともに口径13.0cm、器高2.5cmである。133は淡褐色、134は白褐色を呈す。135・136は、第III~IV a期のもので、135は淡褐色を呈し、口径12.2cm、器高2.2cm、136は白褐色で、口径12.2cm、器高2.8cmである。137~144は第IV b期のもので、137はEd層、138~140・142~144は下層6区SD255、141は同SK160の出土品である。137は、淡茶褐色で口径10.8cm、器高2.0cm測る。138は、内面にハケ調整がみられ、白褐色の胎土は緻密で、口径13.0cm、器高は2.5cmを測る。139は、白褐色、口径12.8cm、器高2.6cmである。140は、淡茶褐色、口径14.1cm、器高2.3cm。141は、淡茶褐色、口径15.0cm、器高2.5cm。143は、淡赤褐色、口径13.0cm、器高2.9cm。144は、口径13.0cm、器高2.3cm。



第117図 土師質土器皿6 (1/3)

145は、茶褐色、口径13.6cm、器高2.7cm。146は、近代のゴミ穴から出土し、白褐色、口径11.4cm、器高2.2cm。

E類は、近隣地域では少數派で、近畿など他地域からの搬入品の可能性もある。また大形のものが目につき、17点中の9点までが灯明皿として使用されており、用途との相関が認められる。

全体を通じて、灯明皿に使われるものは大形品が多く、第V期では灯明皿になる比率が下層期よりも高めで、備前焼などの灯明小皿と共存する。しかし、土師質皿の一般は、特に下層期では、灯明皿というより儀式に伴う供膳形態、使い捨ての壺としての用途が多分に想定できよう。(仲井)

2. その他の土師質土器

a. 焼塙壺 (147~154)

身5点、蓋7点が出土した。153のみが下層期のもので、他は上層の第V期のものであるが、上層5区SK140での4点など、台所付近に集中して出土した。刻印を残すものではなく、渡辺誠氏の分類⁽¹⁾に従えば、身の形態は153・154がA類、152がC類に属する。153・154は輪積成形で、内面に布目を残し、154は胎土に微量の雲母を含む。152は板作り成形で、内面は底に粘土充填痕、上半に粗い布目を残し、雲母を含む。蓋は151がA類のほかは、B類で、いずれも内面に布目を残す。149は胎土に雲母を含み、同じSK140出土の152とセットとみられる。147は頂部に判読できない墨書きがある。

b. 焼壺 (155~157)

155は焼壺そのものというより、その模倣品かもしれない。口端は内傾する面をなし、外面の口縁直下には太い沈線を二条めぐらせ、胴部には太いヘラもしくはクシによる平行沈線を斜めに、丁寧に施す。底部は型押しによる成形ではなく、回転台使用とみられ、外面にはハケを施す。器面全体には赤褐色に発色する釉薬の塗土が施され、この時の回転性の強い横ナデが最終調整となる。胴下縁付近に丸に「樂」字とみられる刻印を施して仕上げている。二次的に火を受けた痕跡はないが、一次焼成時の黒斑が認められる。胎土は断面ハダ色で、生地は細かいが1mm大的石英粒などを含む。焼成温度は低くて、軟質である。

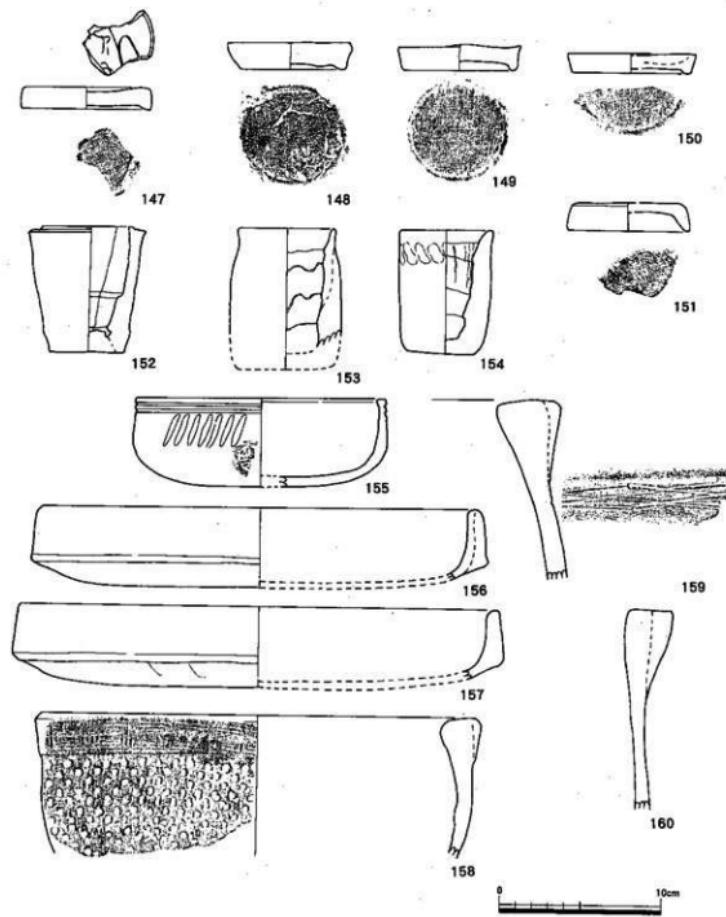
156・157は底部型押しによる焼壺で、共に上層5区SK140から出土した。157は、形態的には難波洋三氏のD類⁽²⁾に属し、胴部と底部の境に面をもつが、余分な粘土の切り取り痕としてのヘラケズリ状には必ずしも観察されない。156も形態はD類に近いが、胴部と底部の境の面は157より弱く、粘土の切り取りは確実に行わず、その点ではむしろE類に近い。共に、粘土を貼り付けを伴わずに貫通しない把手穴が1つずつ遺存するが、本来の数は不明。共に、胎土は2mm以下の石英粒ほかを含み、157には少量の雲母が認められる。

c. 壺ほか (158~160)

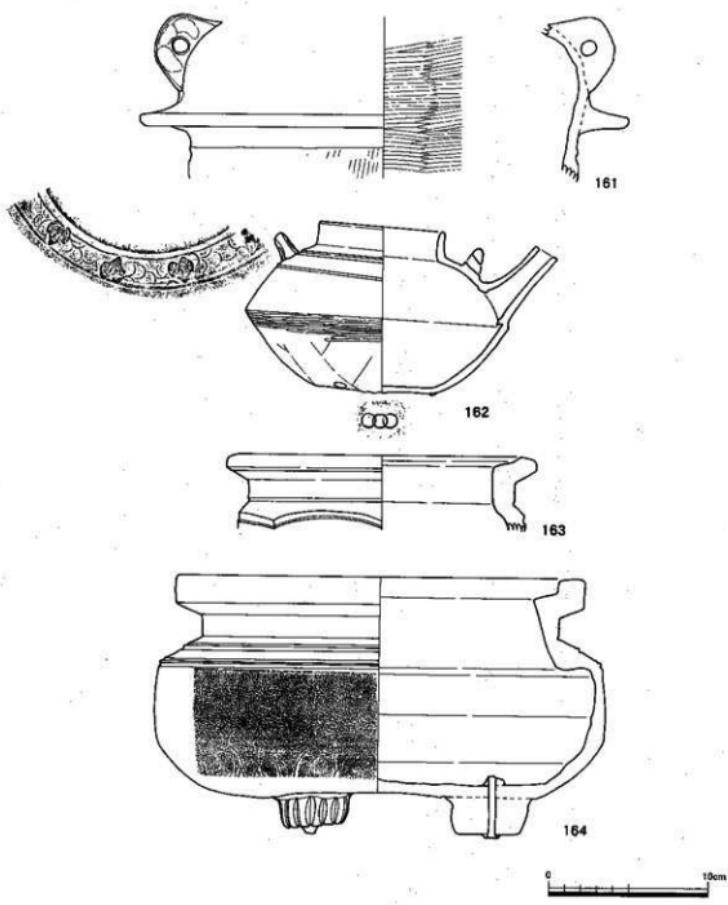
158は、鉢形となる可能性があり、口縁下外面に押印による雷文、胴には棒状工具による刺突文がみられる。159・160は壺で、160は上層1区SX202の便槽として使用。いずれもが、口縁外側に粘土を貼りつけて肥厚させ、胎土には3mm以下の砂粒を多く含み、小形品に比べて粗い。

3. 瓦質土器 (161~164)

161は羽釜で、釣手のある外面上半は横ナデ、外面下半および内面は粗いハケを施す。最下層の土器盛土中(H層)からの出土で、数少ない煮沸形態であるが、第I期の城郭遺構に伴うものかどうかは



第118図 土師質土器その他 (1/3)



第119図 瓦質土器 (1/3)

未確定。162～164は上層の第V期に伴う。162は、上層5区SK140出土の土瓶で、備中の大原焼などと同系統とみられる。少なくとも胴下半と胴上半はそれぞれ型押しで、ハナレ材にキラコを用い、18世紀末から幕末にかけてのものであろう。胴上部には萬字文が、底面には三環文がみられる。163・164は火鉢類で、やはり型作りとみられる。163は胴部上肩が多角形に面取りされている。164は、上層8区SX30の北側の生活面出土で、完形に復元できた。3つの足は、胴とは別仕立ての型作りで花弁状の刻みをもち、鉄釘を貫通させて胴に固定した後、焼成を行っている。鉄釘の頭は、足の下面から突出し、各々の頭には銅線が結ばれている。銅線は設置対象にこの火鉢をくくりつけるためとみられる。胴外面には、無数のアバタ状の窪みが、意匠として施されている。

4. 備前焼およびその他の焼締陶（165～238、339・340・342～344、346）

器種ごとに記述を行うが、178・205のはかは備前焼で、例えば丹波播鉢などは出土していない。

165は、碗類と思われるが、全形は不詳。第II期に伴う。

166～173は、中形の短頸壺である。出土層位からは、166・167・169・170・171が第I期もしくはそれ以前、168・172が第II期、173が第IV期に分類される。166・167は、胴部肩にクシによる波状文があり、暗緑褐色の自然アメ釉が掛かる。170・171は、口縁が外反し、口端を丸く収めるに対し、新しい168・172口縁が直立気味になって、口端は上から潰されたように横に肥厚する。168はゴマが顕著で、四耳壺の可能性もある。

174～176は大甕である。最も古相を示すのは第I期の層位からの174で、口縁外面が十分に凹線化していない。175も第I期の層位であるが、口縁は僅かに内湾気味で、外面凹線が認められる。176も同様であるが、口縁の内湾がさらに顕著である。明治の造成土であるB層からの出土で、下層相当期からの伝世期間の長さを物語っている。177は、上層の第V期の層位に伴う甕で、内面にはカルシウム分が付着し、便槽に用いられていた事が判る。口縁上端は水平で、横方に丸く突出し、胴部にはカキメを施し、器面には赤褐色に発色する塗土を施す。

178は、内外面とも茶褐色に発色する鉄釉を施し、外面には黒色のアメ釉を流し掛けする焼締陶で備前ではない。上層7区のSX51の泉水内に深みをつくるSX84の埋甕で、口縁は内側に折り曲げて水面をつくりだす。内面口縁直下の露胎はハダ色に発色、胎土には2mm以下の鉄分粒などの砂粒を含む。遺跡的には、寛保絵図の1744年までに製作された甕の可能性が強い。産地は不詳。

346は小形の甕で、口縁下外面は意匠的なカキメ。外面は暗茶褐色、内面はハダ色で赤褐色火拂。

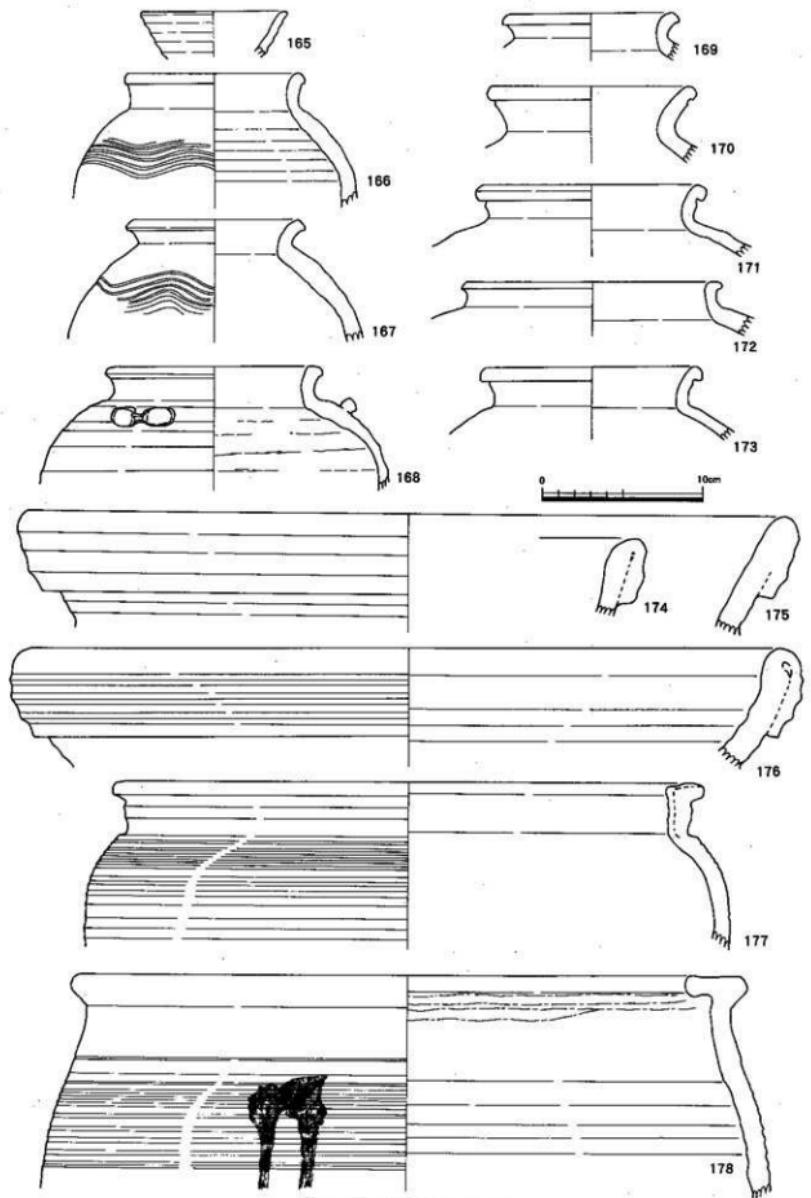
179・180は口径40cm超級の大皿で、口端は鉤状に内折し、内面は黄ゴマが顕著である。180は第II～IVa期、179は第IVb期と、共に下層期の層位出土。

181・182は、無頸壺である。第II期の層位に伴う181は口縁が受口状になる。182も下層出土。

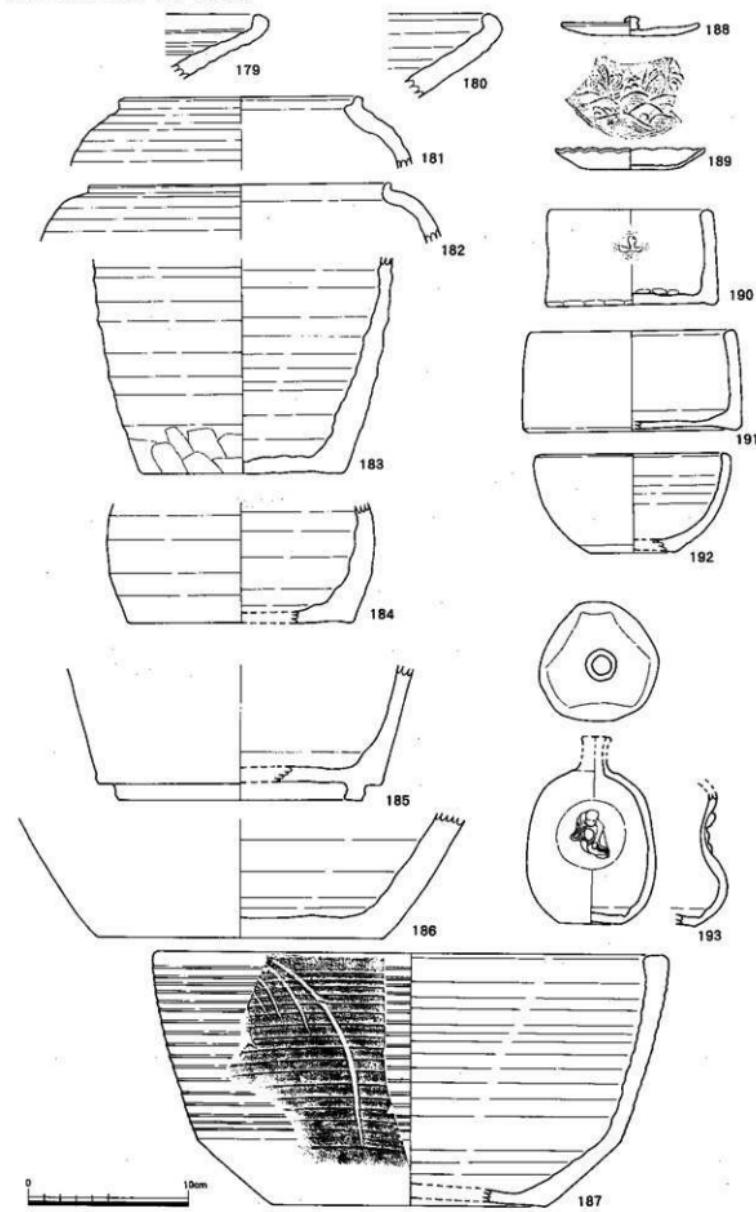
183は第I期の層位の壺の下半部で、底部は板起し。器面は淡灰色、断面暗褐色で、胎土の生地はきめが細かい。184は第II期の層位のもので、徳利の底部とみられる。胎土は183に近い。

185～193は、第V期でも中葉以降の備前である。185は、植木鉢とみられる底部で、近代の遺物の可能性もある。器面は暗褐色茶色、断面は赤褐色に発色し、胎土は砂粒が多い。高台は貼り付け。186は第V期の上層V区SK90出土で、甕の底部とみられる。外器面は暗褐色茶色、内面は塗土的で暗赤褐色、胎土は赤褐色で砂粒が多い。187は、鉢で、胴外面はカキメ状の意匠的な段があり、柳樹状の沈線文様が施される。器面の発色や胎土は186に近い。188は、つまみ部別作りの蓋で、底外面はヘラケズリ。1mm以下の砂粒を含み、上面は塗土的に暗赤褐色。189は、型作りの小皿で、見込には波文な

4. 備前焼およびその他の焼締陶



第120図 備前焼類1 (1/3)

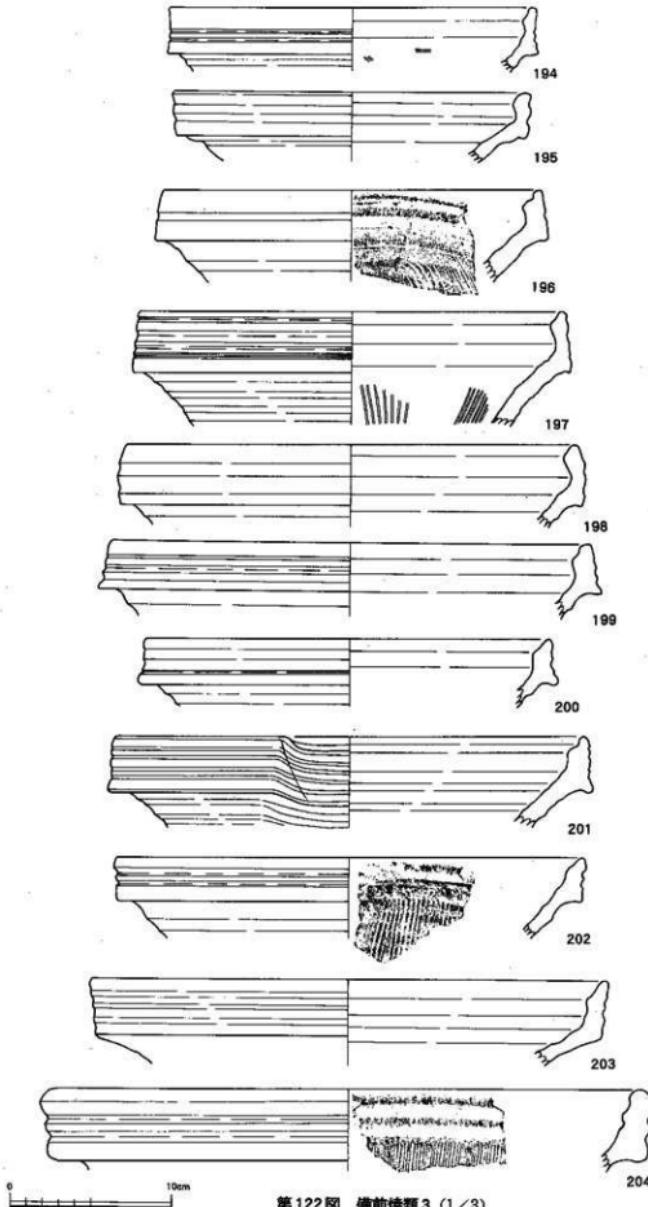


第121図 備前焼類 2 (1/3)

どが確認できるが、破片のため全体の意匠は不詳。全面に赤褐色の塗土を施す。188・189は共に上層7区SX51出土で、江戸後期の備前焼である。190・191は、サヤ形の鉢で、器面・断面とも明橙褐色で、3mm以下の黒色粒を含む。192は上層5区SK106出土の小鉢で、底部はイトキリ、器面は暗褐色で、見込には黄ゴマ。193は、小形の徳利で、胴部を三方から意匠的に窪ませ、うち一個所には型押しによる布袋像を張り付ける。器面は茶褐色、断面は暗灰色。

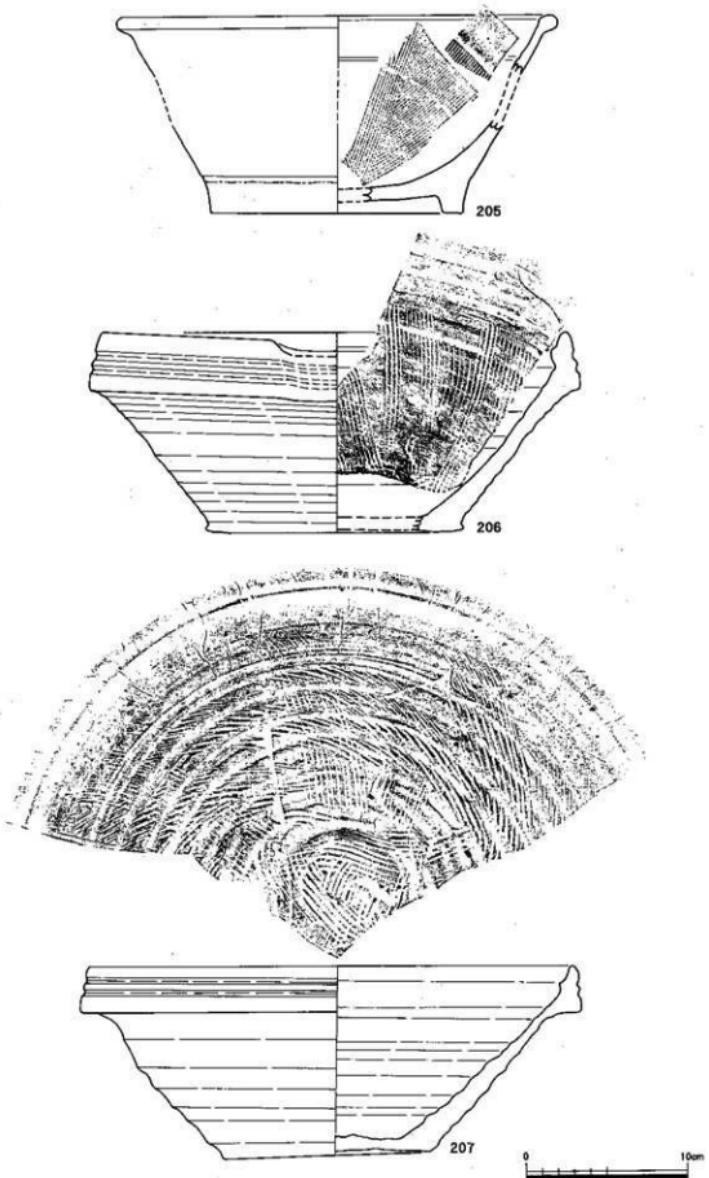
194~220は擂鉢である。197・198は第Ⅰ期の層位に伴うもので、口縁は内抱え気味に薄く高く立ち上がって、外面の凹線は浅く未発達で、口端内面は強いナデによる段をなさない。器面は暗褐色で、胎土はきめの細かくいわゆる田土。摺目は疎で、放射状に施されるのが主体の模様。195・215・216・217は第Ⅱ期の層位に伴うもので、195は口縁端内側が丸いが、外面の凹線は明瞭化し、断面芯部は暗褐色。216・217・219の摺目はいずれも放射線状で、見込面には施されない。いずれも使用痕があって、特に216はよく摩耗している。219は断面が赤褐色で砂分が多いのに対し、216・217は黒色鉱物粒を含む田土を用いてよく焼き締まっている。断面は216が暗赤褐色、217が灰色。194・196・199・203・215・218・220は第Ⅱ~Ⅳa期の層位に伴うものである。口縁は、やや短くなつて、厚みを増し、口端直下内面に強い横ナデで段状となり、194・199・203は外面の口縁帯直下が顎状に大きく張り出す。摺目は放射状だけのもののほか、斜め螺旋を付加するものもあり、215のように見込面にまで及んで全体としてかなり目が詰むものがある。220はよく使い込まれて摩耗している。200・201・206・207・208・212・213・221は、第Ⅳb期の層位に伴うもので、個体数が多く、また土師質皿などと同じくバリエーションに富む。208は古相を帶びて伝世品的存在である。212は口縁帯が直線的で凹線というより沈線的、摺目は口縁直下まで上がらず、かなり疎と見込み、火櫛が観察できる。201・213は、口縁帯の凹線が不明瞭で一見古相であるが、口縁帯は厚く、口端直下内面に段をもち、摺目はあまり上まで及ばないが、目は詰んでいる。206は口縁帯下の顎状張出しが顎著でなく、摺目は放射線のみであるが、かなり目が詰んで、底面にも及ぶ。200・207は口縁帯が萎縮して断面が三角形に近づく個体で、口縁下角の張り出しは顎著、第Ⅳb期の層位に伴う個体では最も新相感をかもします。207の摺目は放射線に斜めを付加し、見込面にもウールマーク状に施し、胎土は淡褐色に発色した田土である。202・204・209・210・211・214は第V期の層位に伴うものである。211は、最古相で江戸初期のものであろう。202・204・209は、口縁帯の二条の凹線と呼応するように内面も凹線が波打ち、摺目はかなり上まで施され、また詰んでいる。口縁帯は暗褐色に発色し、202では、重焼時に下の個体の口端が上の個体の顎部が接していた痕跡が未だ観察できるが、204・209では不明瞭化する。210・214は最新相品で、口縁の断面は三角形状、内面は口端直下に幅広沈線が一条あって、その下縁まで一旦施された摺目を強くナデ消している。外面の口縁下顎部には重焼痕を残さず、体部外面は回転ヘラケズリ、器面・断面は赤褐色で、5mm大の礫のほか1mm以下の白色砂粒を含み砂っぽい。堺や明石の擂鉢に似た要素をもつが、これは備前焼の可能性がある。205は、ハグ色の胎土にこげ茶色の鉄釉を施すもので、備前焼ではない。ケズリだしの高台部のみは露胎で、口縁は丸みをもって外折する。

222~238は小皿で、總てが第V期のものである。ほとんどの個体の口縁付近には煤が付着して、灯明皿であった事が判る。底部は回転ヘラケズリが施され、234・228などは回転イトキリ痕が部分的に残っている。法量的に223・225・226・234・235は口径7.5~10.0cm、その他は13.0cm内外と、二群に分かれる。内面は塗土的で、223・225・226・234・237は紫褐色、231・235・238は暗茶褐色、222・224・229は赤褐色、その他は暗赤褐色に発色する。

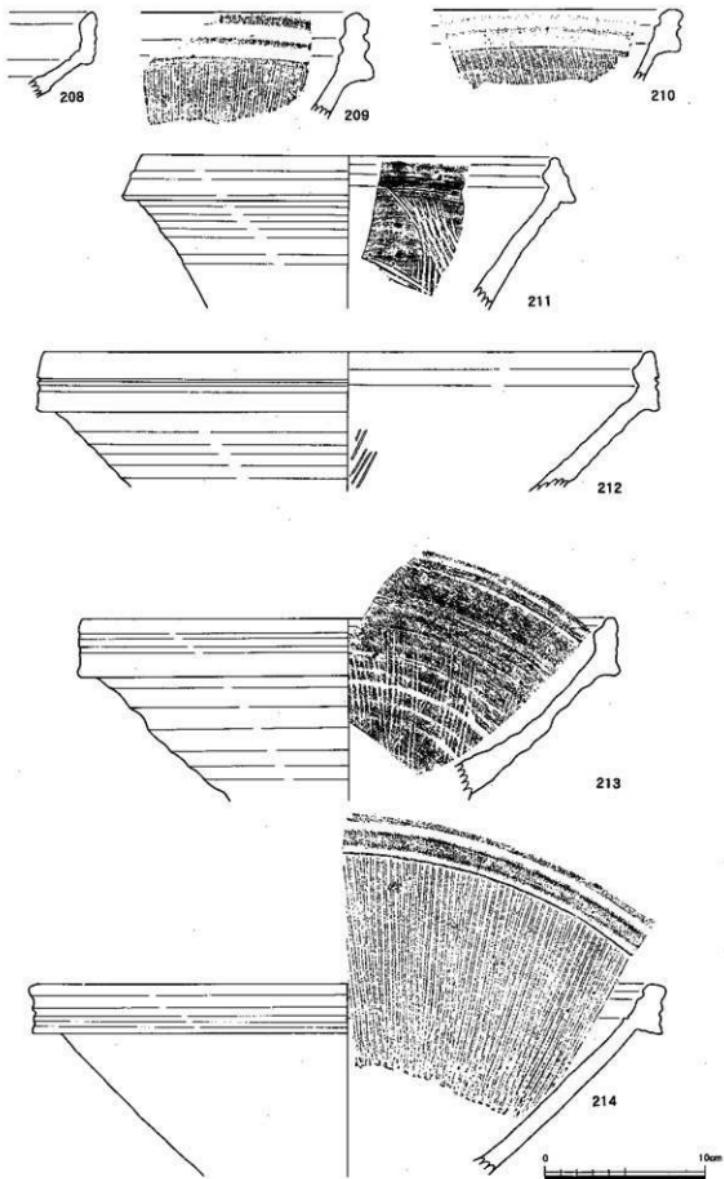


第122図 備前焼類3 (1/3)

4. 備前焼およびその他の焼締陶

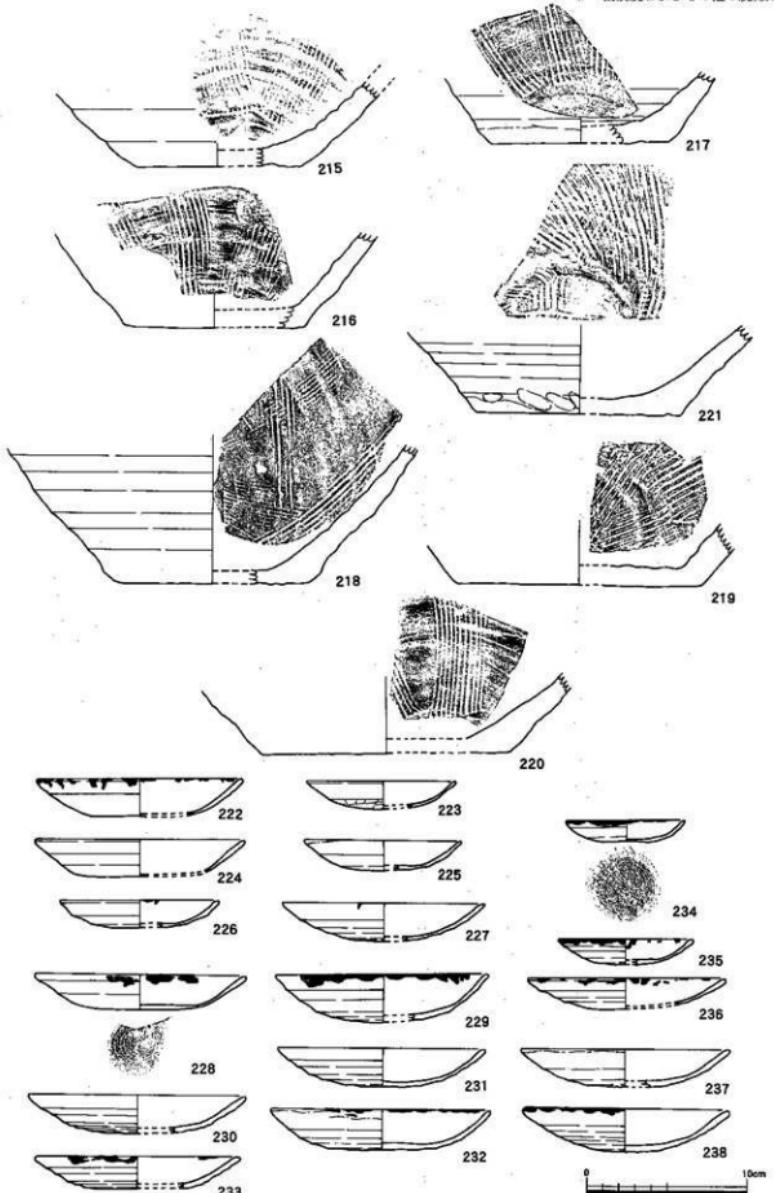


第123図 備前焼類4 (1/3)



第124図 備前焼類5 (1/3)

4. 備前焼およびその他の焼物



第125図 備前焼類 6 (1/3)

339・340・342～344は、内面口縁下に返りをもつ備前焼の灯明皿で、總て第V期、それも恐らく後半のものである。外面底部はやはり回転ヘラケズリ、器面は暗茶褐色に発色する。

5. 中国産磁器 (239～249)

240・241・243は第II期、242・244・245・246・248・249は第II～IVa期、247は第IVb期、239は第V期の層位に伴い、これが出土資料のほぼ總てである。少量のうちでの話ではあるが、施釉陶磁器の組成は、第I～IVa期では中国産9点が美濃・瀬戸の国産2点を凌駕する。第II期の240は口端が外反する白磁皿、241は基筒底の染付皿。第II～IVa期では、242・249は饅頭心形高台であるのに対し、248は高台内が平坦となるが疊付の釉ケズリは行う。245は碗F⁽³⁾によくある唐草文様の染付。第V期の239は型打ち、波状口縁で器壁の薄い皿。

6. 国産磁器 (250～263、265～284、293～309、311～320、356)

第V期の層位のみで出土した。ほとんどが染付で肥前産とみられるが、295は関西系、259・266は美濃・瀬戸系とみられる。高台無釉で焼成があまい280も產地未詳。概して江戸中期・後期のものが主体をなすが、高台に砂が付着する白磁の250、高台にやはり砂が付着して胴部外面に筋縫を施す瓶類とみられる268、それに260や高台無釉の青磁である356は17世紀前半。一本書きの網目の大皿で、焼き締めで補修している284、それに252・283・298なども17世紀後半とみられる。283は高台内にハリ痕、二次的に器面を削る刻字がある。18世紀代では、255・256は割り筆の網目、263・267・297はコンニャク印判を施す。また265・274～276は粗製の染付で、見込みを蛇目状に釉剥ぎし、疊付と同じく重焼時の砂を付着させる。279と型打ちの273は蛇目凹形高台。18世紀末から19世紀代では、高台をもって典型的な257・299・320のほか、253・254・259・270・308・313・314・318など数多い。

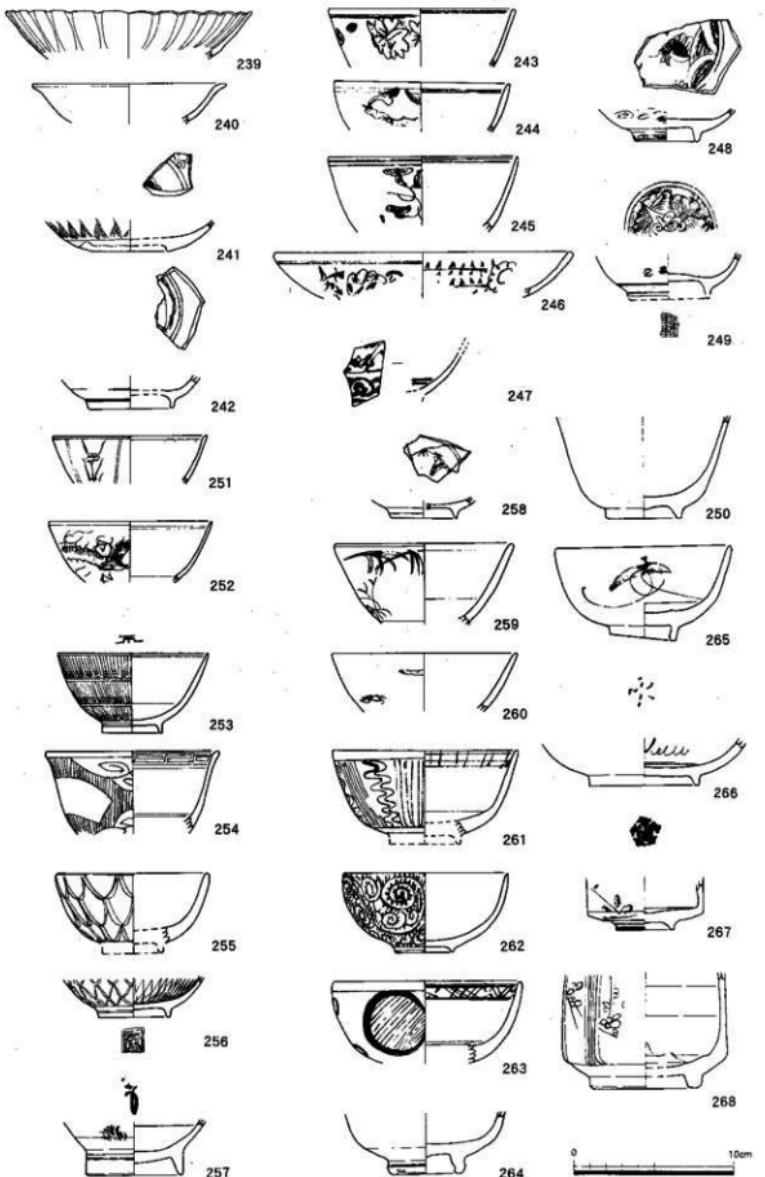
全体を通じて雑器主体といえ、飛び抜けた一級品はみうけられない。内では252・269・270・283・284・300・301・302・313・315・319などは比較的丁寧に繊細な文様を描き、生地も白く呉須の発色も良好である。色絵は281・282が稀有の存在であるが、A層出土で城郭期への共伴は問題がある。

7. 国産陶器 (264、285～292、321～338、341、345、347～355、357～370)

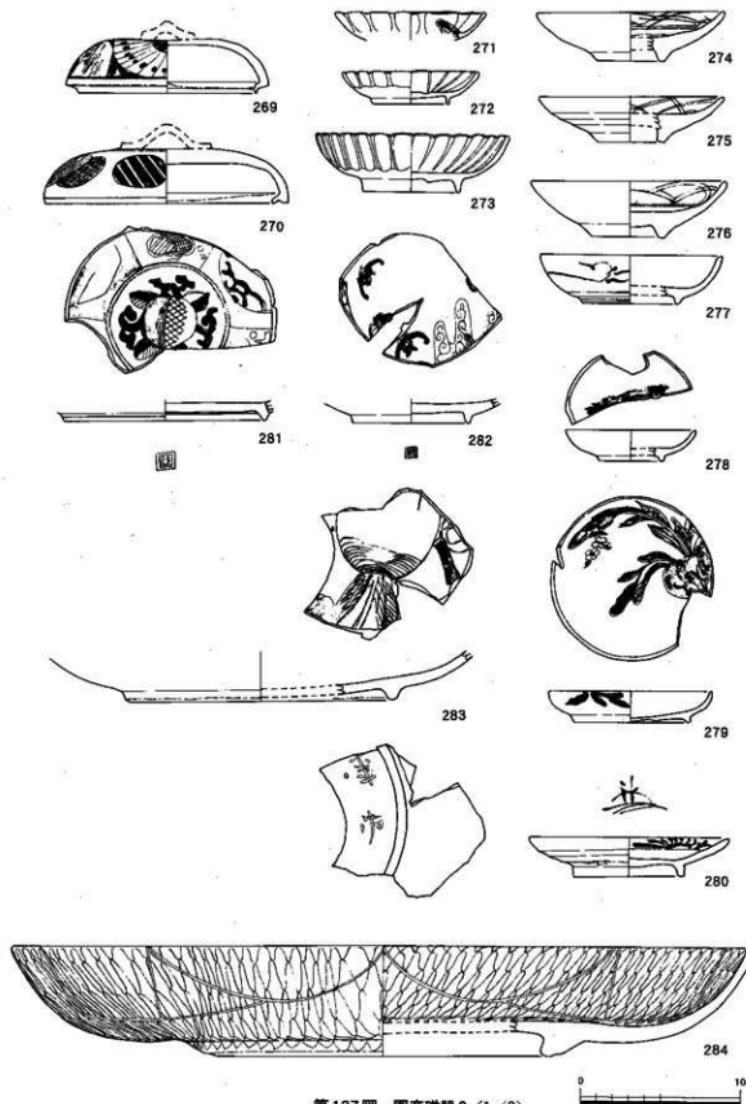
a. 唐津および北部九州系 (264、321～330、348、349)

第IVb期の層位からは322・324・(325)・328・329が出土し、残りは第V期の層位に伴う。第IVa期以前では唐津の確認例がないが、第IVb期では一挙5点となって、志野・織部類の美濃瀬戸3点とともに中国産の1点を圧倒する。324は口縁をくの字に内折、かつ平面を方形的に変形させたコップ状の碗ないしは向付類、325は胴部に深い屈曲部をもって口縁を波状に加工する深皿、328は口縁を外折して口縁下の一部を意匠的に窪ませる沓碗、329は口縁下に屈曲部をもつ鉢で、いずれも鉄絵を施している。325は見込みに重焼時の目を残さない。釉は324・325・329は透明度が高く、325・329は緑灰色系統に発色するのに対し、324・327はやや褐色気味であるが、いずれも明色調で、胎土の鉄分や含有鉄分粒は顕著ではない。322は無文の碗で、白緑色に発色する失透性の薺灰釉を施し、断面は灰色によく焼き締まっているが、元來の胎土は砂粒分が多い。第V期に伴う323は腰がさほど張らない無文の碗、326・327は見込みに砂目積み痕を残す皿、330は内面に浅い段をもつ鉢で、いずれも緑灰色系に発色する灰釉を施す。321は口縁を外反させて、体上部の一部を恐らく意匠的に窪ませる

5. 中国產磁器 6. 国産磁器

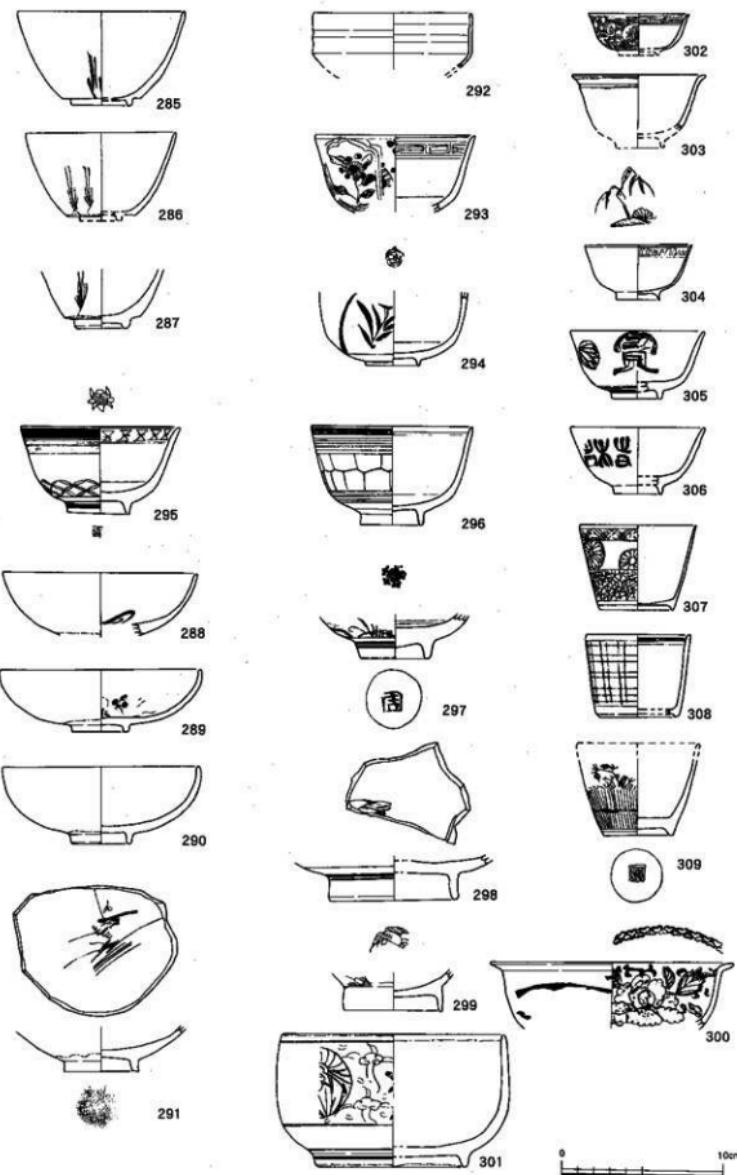


第126図 中国産磁器・国産磁器 1 (1/3)



第127図 国產磁器2 (1/3)

6. 国産磁器 7. 国産陶器



第128図 国産磁器3・国産施釉陶器1 (1/3)